明治三十六年一月一日發行（不許限）毎月二回五日發行
明治三十五年十二月廿五日第三種郵便物認可

女學世界

第三巻第一號

新年附錄

繪はがき（四君子）　女流四名家合作

口繪

兎　川端玉章筆

御題新年の海

雪の上野

舞姫

時雨　上村松園筆

紫式部　安宅海鳴筆

ロツキー山の雪景

雪路　女子美術學校製品

葛飾の夜景

シヤンチイ城

新年の海、鶴　野口小蘋筆

初日の出、姫小松　跡見花蹊筆




新年之御慶
芽出度
申納
候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋二丁目

女學世界第參卷第壹號目次

表紙　春鶯囀（彩色刷繡模様）　武内桂舟意匠

口繪（寫眞銅版アートペーパー共十二頁）
●兎（川端玉章筆）●時雨（上村松園筆）●紫式部（安宅鳴洋筆）●雪の上野●新年の海●葛飾の夜景●熊本の水前寺苑●雪路●加奈太ロッキー山●巴里の舞姫●シャンチイ城●遊戲（布の遊び）

書畫手本
●和歌　多田親愛筆
●消息文、單語　坂正臣筆
●初日の出、鶴　野口小蘋筆
●新年海、姫小松　跡見花蹊筆

巻中挿畫
▲歌留多遊び（鏑木清方）▲羽子もよひ（片山春帆）▲試筆（鏑崎英明）▲追羽子（大野靜方）▲通學はじめ（池田輝方）▲婦人の職業（武内桂舟）▲新年風俗（中江玉桂 中川蕉舟）▲巻頭讀書圖（山中古洞）

○○瓦斯の煮焼○○

注意!!!!

●使用は輕便マッチ一本にて焚付き火力加減自由なり●

●火災の危險なく晝夜何時にても即時に間に合ふべし●

●費用は新炭よりも低廉にして且つ大に人手を省く●

●二升の米は瓦斯代僅かに一錢八厘にて炊くを得べし●



▲當社構内陳列所又銀座二丁目南谷勧工場隣にて各種の瓦斯器を陳列し専ら縦覧に供す▼

兎



川端玉章翁筆

小川一眞製版印刷

姫　　　　　舞



名　優　オ　セ　ラ　嬢

紫式部



安宅海鳴氏筆

東京上野公園の雪景



（光村利藻氏撮影）

をんな

毎月一回十五日發行
毎號紙數菊版百四十頁
定價金拾五錢全國無遞送料

本誌の特色

●本誌の目的、婦人をして常識に富み、世態に通じ、以て其本分を完うせしめんことを期するに在り。されは其所說、新に流れず、舊に泥まず、一宗一派に偏らず、而も世に阿りて徒らに俗流の觀心を迎へず○本誌は輕佻浮華の弊風を避けむが爲に、表紙口繪など、不要の裝飾を省きて、專ら記事の精選に努む
○本誌に收錄する所は、普通の婦人雜誌に掲載する、文學上家政上の記事のみに止めずして(一)科學の大意を掲げて、學理の概念を得しめ(二)和漢洋名著の綱要を掲げて、讀書の涉獵に便せしめ(三)法制理財の事を平易にものして、世態に通せしむ○本誌は野卑なる言語及び劣等なる戀愛文字を避け、下品なる廣告を掲けず○本誌は節儉貯蓄の美風を奬勵せん爲に毎號慈善貯蓄金切手を附して、其模範を示す
○本誌讀者は、みやび會員となり、其歌、文を本會に送附して、名家の批評添削を受くることを得

第二卷第十二號目次

發行所 東京麴町區下二番町三七 大日本女學會

(甲の二)

（甲の四）

太陽

一月一日發行　第九卷第壹號　正價三拾錢　郵稅三錢

實業界の進歩は本誌の實業欄擴張となれり然れども其の盛大なる發達進歩に連れて是れが機關たらむことは本誌の克く盡し得る所にあらず此の故に明年よりは太平洋誌を改めて實業專門の大雜誌たらしめ本誌は依然として社會全般を代表する東洋唯一の大雜誌として材料を精選し時勢と共に進み世界的明星として光彩を放たむとす

―(內容目次)―

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

自治機關

公民之友

明治卅六年一月初刊
毎月一回十五日發行

第壹號

本號に限り
一月十日發兌

市町村制の實施以來既に十五年尋て郡制府縣制の法律實施され地方自治の權利益々鞏固なるを得たるも地方行政費の負担又年々に增加せり權利の增進は喜ぶべしと雖も其負担を顧みれば決して廉價なるものにあらず況んや黨爭の弊收賄の害地方行政紊亂の聲漸く全洲に反響し其改善は實に天下の輿論たり是れ皆全國公民の頭上に被むる最大痛切の問題なり自治の機關たる雜誌公民の友は此に於て生る且つ其目的とする所一に全國公民の友となり且地方行政に關する吏員の顧問となり自治制を利用して各人の權利幸福を增進せしむると同時に從來地方行政上に積める弊竇は全く之を芟除し未了の問題は盡く之を解決するにあり

口繪

●內務大臣男爵內海忠勝君●東京及大阪府知事●三府の市長●大阪築港●外國消防●倫敦市長及夫人●東京養育院各地市會議長等

定價

●一冊金貳拾錢●三冊三拾五錢●六冊六拾七錢●十二冊一圓三十錢●增刊一冊(價四冊分)●一ヶ年十三冊分一圓七十二錢●郵稅壹冊金壹錢五厘つゝ

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

(甲の七)

(甲の八)

春の海



（齋藤紫白氏撮影）

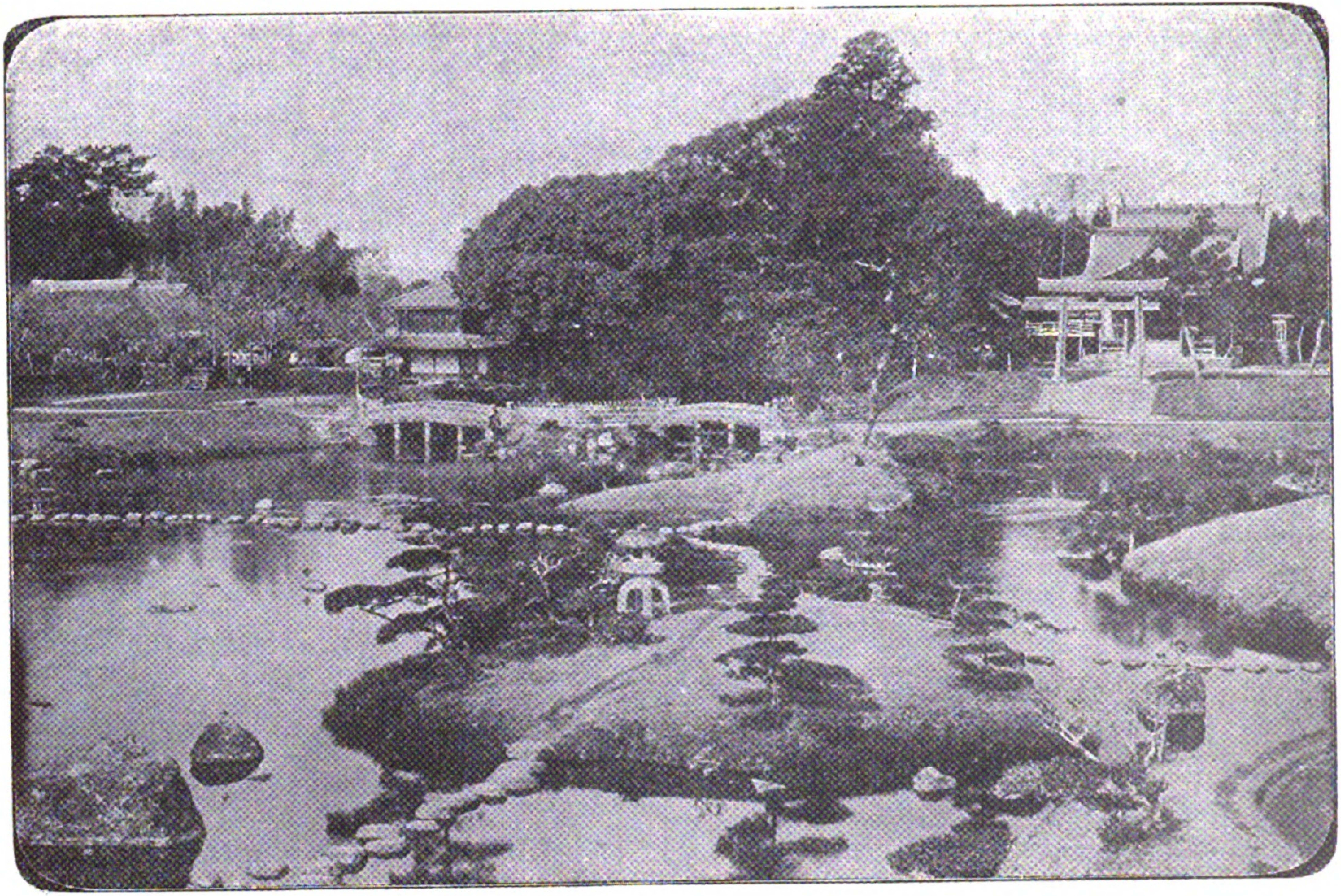
松島多聞山ヨリの眺望

冬野

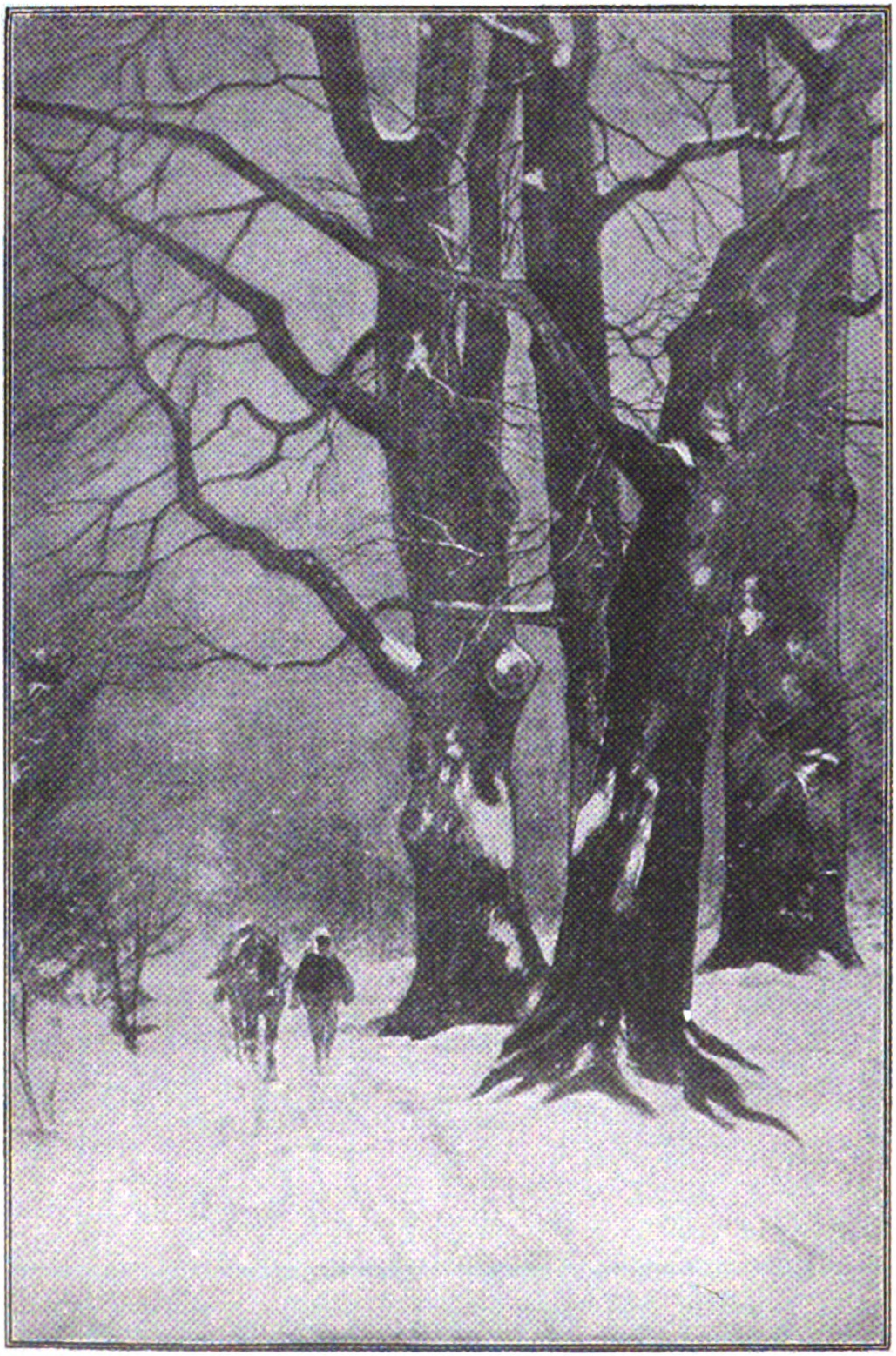


（今村梨軒氏撮影）

熊本成趣園の庭



雪路



太田ゑつ子筆

女子美術學校作品

早稻田大學文學部校外生募集

◉文學教育科、史學科とも毎月二回の講義録を發行す◉一回の講義紙數二百頁内外にして二ケ年卒業とす◉月謝各六十錢、三ケ月壹圓七十錢、半ケ年三圓卅錢、一ケ年六圓五十錢◉學術普及の趣旨に基き本年度より入學金を全廢す

文學教育科講義

▲十月上旬一號發行、此際申込に便なり▼

掲載科目　倫理學、和漢の倫理學史、憲法、教育學、日本西洋の教育史、心理學、哲學、美學、言語學、和漢の文學史、和漢の文典、作文法、西洋の文學思潮史、文學概論、文學批評法、國文國歌の評釋、有職故實、漢文漢詩の評釋、支那時文、漢字顛倒排置法、文部省試驗問題擬答（教育、倫理、國漢文）、參考書案内、其他

擔任講師　坪内、高田、木村、小杉、大塚、桑木の諸博士、赤堀、有馬、北村、中野、雀部、保科、和田、上田、久保、武島、長、高橋、桂、大橋、中島、綱島、高島、菊池、青柳、五十嵐、永井、廣池、梅澤、正宗等の諸講師

史學科講義

▲十月中旬一號發行、此際申込に便なり▼

掲載科目　日本史（古代、奈良朝、王朝、鎌倉時代、南北朝、室町時代、安土桃山時代、江戸時代、幕末史論、明治史）、西洋史（古代、埃及、古代西南亞細亞、希臘、羅馬、英吉利、佛蘭西、匈牙利、土耳古、獨逸、露西亞、南北亞米利加、殖民史、政治史）、東洋史、（匈奴、清國、中央亞細亞、印度、波斯、亞剌比亞、蒙古、朝鮮史）、傳記、解題、文部省試驗問題擬答（歴史全部）、其他

擔任講師　重野、星野、三宅、白鳥、有賀、那珂の諸博士、久米、福地、箕作、浮田、池田、渡邊、高桑、坂本、野々村、三輪、阿部、長瀬、河野、新見等の諸講師

本講義錄の講習者は掲載の講義に就て質問することを得べく其の他種々の特典あり細則を要する者は申込まるべし

東京牛込早稻田

早稻田大學出版部

日本女史

大學教授文學博士重野安繹先生序
大學講師文學博士小杉溫村先生序
華族女學校學監下田歌子先生序
帝國大學卒業 須藤求馬先生著

正價一圓廿錢 郵稅十四錢

今世女訓

鳩山春子、三輪田眞佐子
安井哲子、佐方鎮子
津田梅子、後閑菊野子
棚橋絢子、涵養社編纂
先生講述

正價二拾五錢 郵稅四錢

女子 日本小歷史

華族女學校學監 下田歌子先生新著

正價三拾錢 郵稅四錢

實用料理教本

大阪高等女學校長 大村忠二郎氏著

正價五拾錢 郵稅八錢

新案 裁縫教授書

大阪高等女學校長 大村忠二郎氏著

正價卅五錢 郵稅六錢

小學縫裁書

兵庫縣師範學校 眞能まさき
裁縫科專門教師 喜多にしゑ
先生合著

全三冊 正價五十六錢 郵稅六錢

校正標註 神皇正統記

皇典講究所副總裁久我建通公題字
前帝國大學教授内藤耻叟先生校閲
佐伯有義 三木五百枝先生標註

正價卅五錢 郵稅六錢

參考標註 徒然草讀本

文學博士黑川眞頼先生序文
東宮侍講本居豐穎先生序文
鈴木弘恭大人標註

正價二十錢 郵稅四錢

教科適用 徒然草

文學博士栗田寛先生校閲
長田致孝先生訂正

正價二十錢 郵稅四錢

校正首書 紫式部日記

鈴木弘恭大人校正

正價二十錢 郵稅四錢

校正首書 方丈記

鈴木弘恭大人校正

正價十錢 郵稅二錢

訂正增補 土佐日記考證

岸本由豆流翁著
鈴木弘恭大人增補

正價二十五錢 郵稅四錢

發兌元 東京市京橋區弓町 電話新橋三一七三 松邑三松堂

(乙の三)



每月一回 一日發行

第九卷第壹號

正價金貳拾五錢 郵税金貳錢五厘

本誌は幸に江湖諸君の愛讀を得て年に月に其發刊部數を倍加し今や實に文學雜誌中唯一の大雜誌として優に其牛耳を取るに至る是れ偏に愛讀者諸君の眷顧を賜はらずんばあるべからず然れども社會の風潮文學の嗜好は年々歳々發達するより本誌の如き多大の責任を擔ふもの此際大刷新大飛躍を實行し聊か吾文界に貢献せんとす讀者幸に倍舊の眷顧を賜はらんとを

(乙の五)

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館



毎月五日發行 本號に限り一日發行

第九卷第壹號

正價金拾錢 郵税金壹錢五厘

今から二年前獨乙伯林へ行きました漣山人が今度歸りて參りまして始めてのお正月から少年世界も第九卷となりますから新歸朝者としての山人がまた種々新らしい材料を今年の誌面から續々揭けることに致しますので全体の紙面の上から云ひましても從來にはない趣向が澤山あります少年讀者は尚一層御愛顧をなすつて下さいまし

(乙の六)

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

發兌元

文藝倶樂部第貳號春期增刊

諸國年中行事

本書目次

正價貳拾五錢

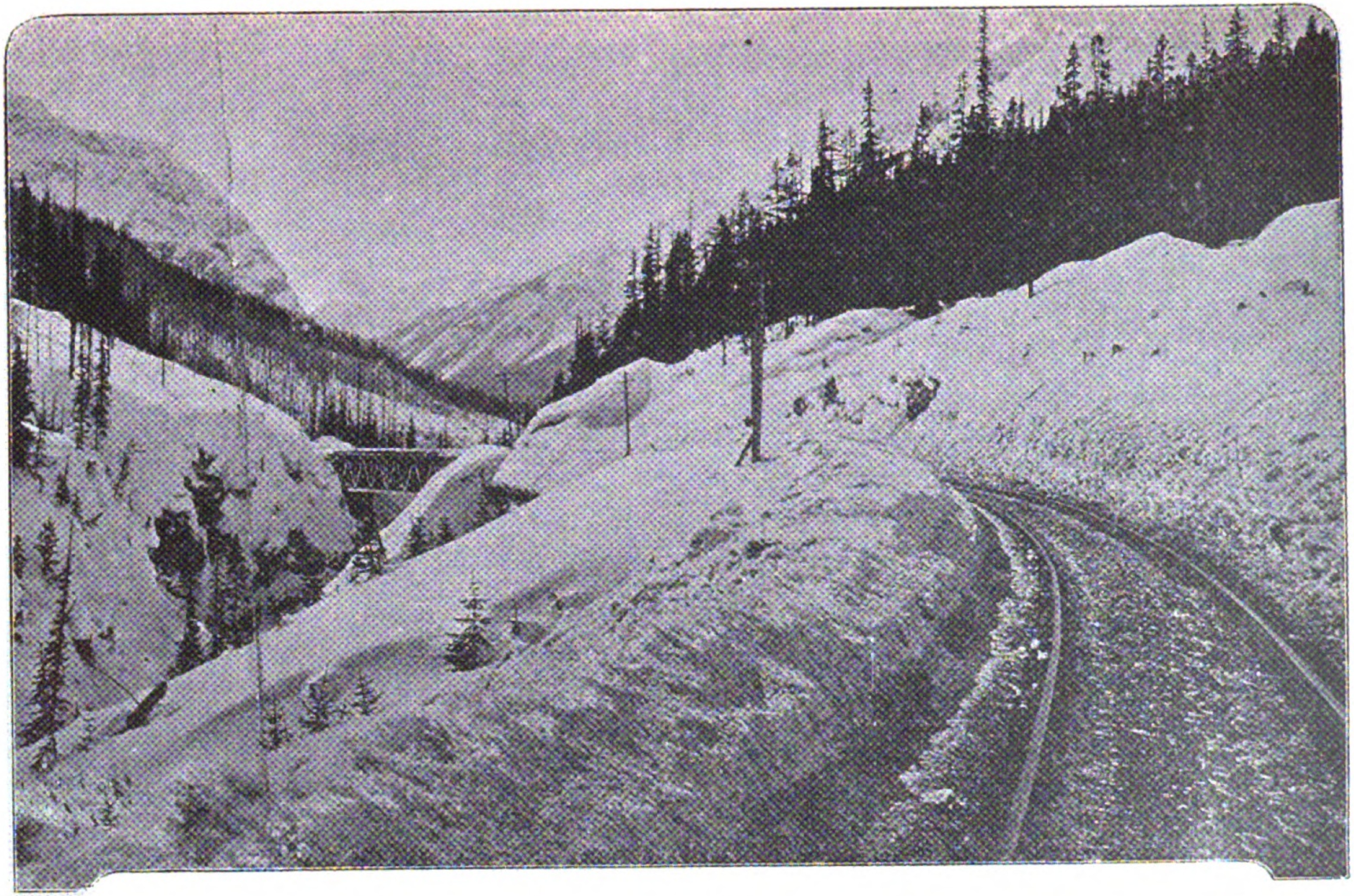
本書目次

郵稅貳錢五厘

博文館

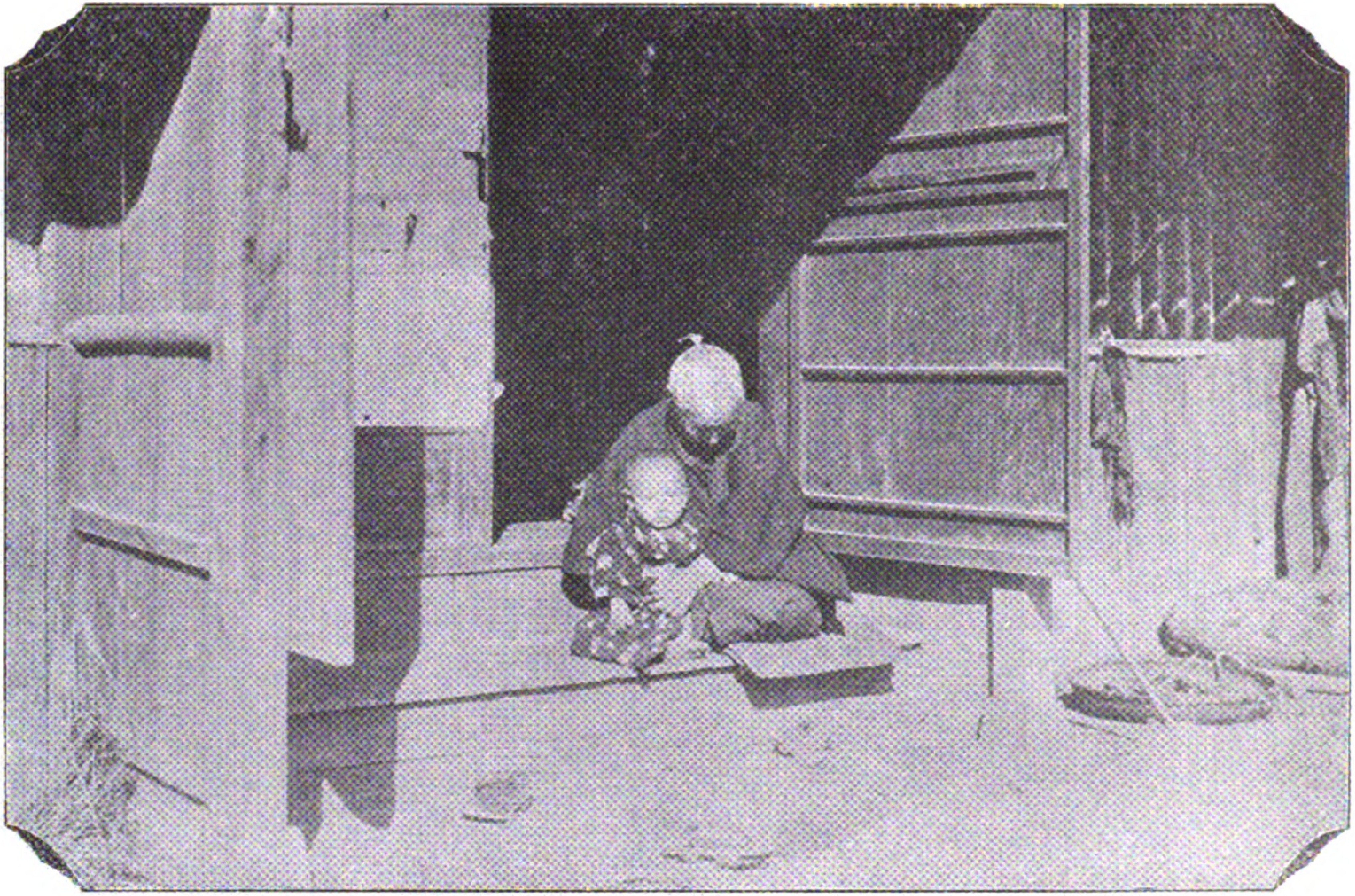
(乙の八)

ロッキの山の雪景



米國風景

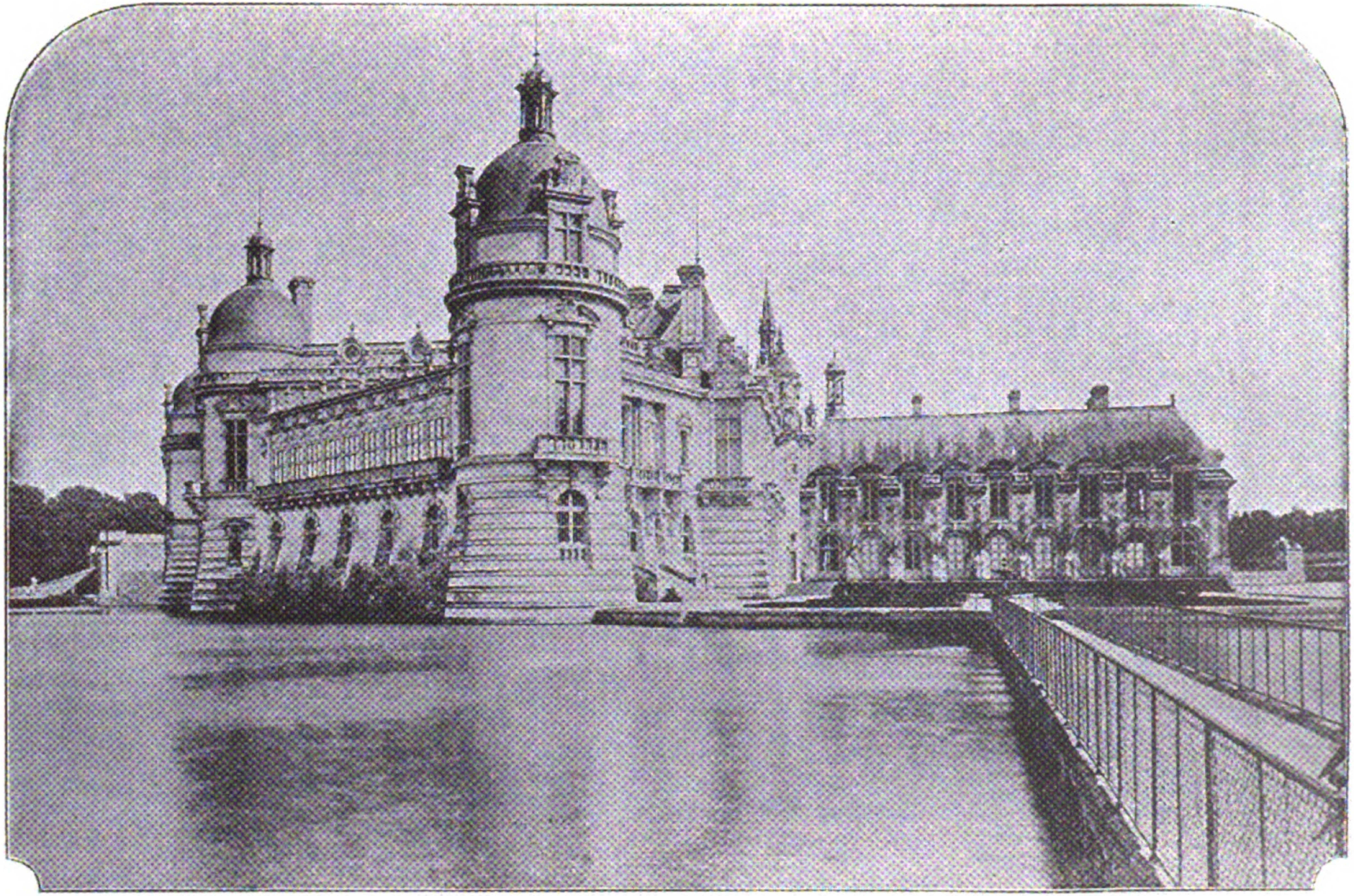
恩賜の菓子



（記事參照）

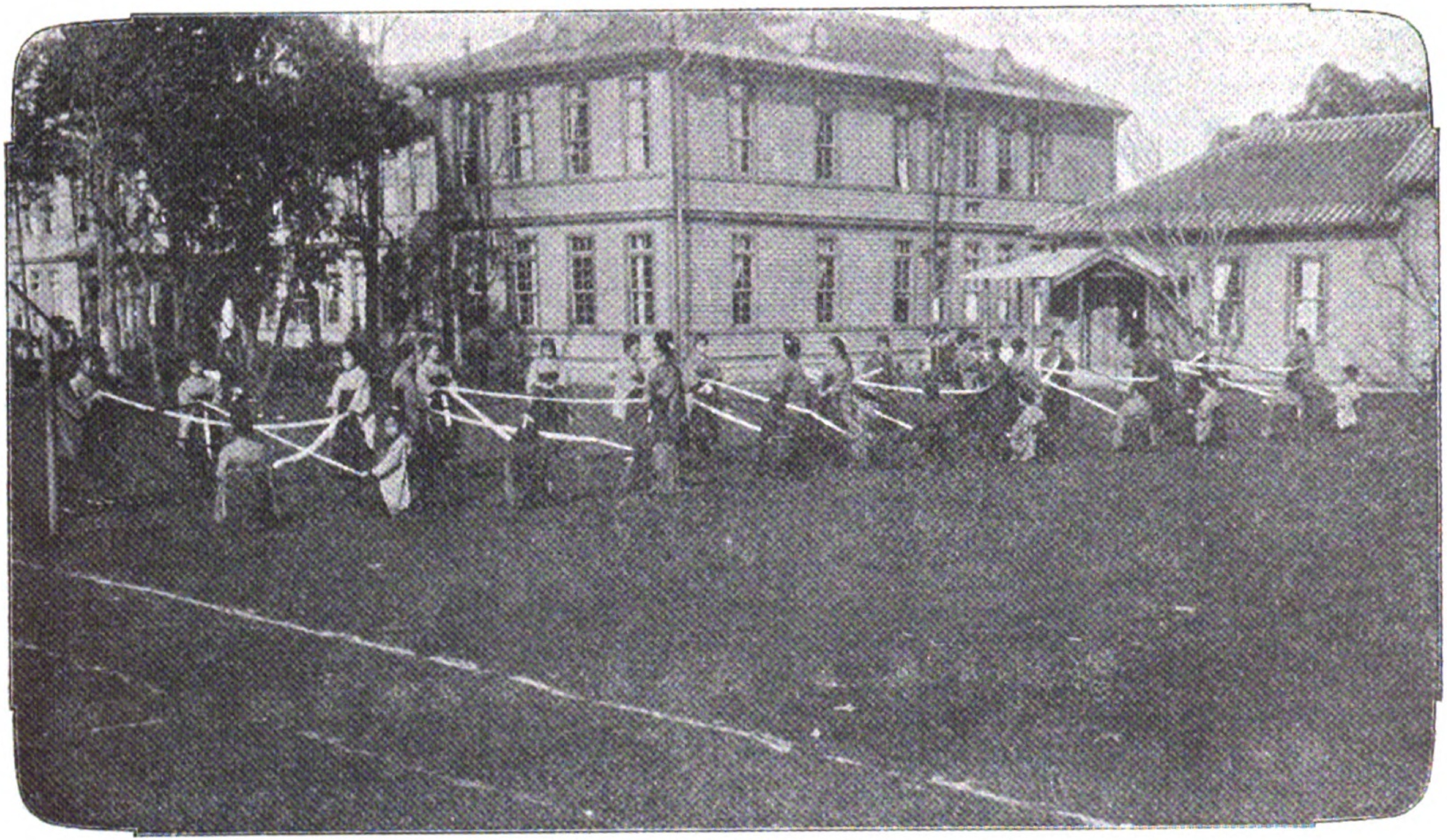
（坪谷水哉氏撮影）

シヤンナイ城



泰西建築

新式遊戯法



（齋藤紫白氏撮影）

日本女子大學校　　（布のあそび）

謹賀新年

諸新聞帶紙ハ本器ノ印刷ニシテ先年來引續キ御使用

●謄寫版

●賜進步賞牌 ●專賣特許



發明人 堀井新次郎

販賣元 謄寫堂

東京市神田區大通鍛治町三番地（特電話本局千八十四番）

●解說書（和英二種）及印刷見本御申越次第送呈す

内國特約（大坂●岡山●門司●名古屋●函館●仙臺●丸龜●福岡●飯田●横濱●松江●熊本●秋田●高知●富山其他）

轉居

石橋思案

麴町有樂町二丁目二番地（數寄屋橋見附內）

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵劵三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一

（電話本局二二五九番）

藥學得業士 金澤巖

恭賀新年

器械不要

簡易復寫インキ

蒟蒻版寒天版及其他の印類又は器械薬品等を要せず此インキ一品にて簡便迅速立どころに同一の文書圖畫數十百枚を印刷し得べし

本品は既に諸官衙及郡區町村役場等の御用品たり

定價 二オンス堅裝鑵入 送料共 金四拾錢（郵劵で割增）

發賣元 東京神田末廣町三八 中村屋商店

（四の一）

樞密顧問官子爵黑田清綱君
故楓内侍 税所敦子刀自 共撰

（新刊出來）

庵乃摘草

全壹冊 大和綴 寸珍形 極美本
定價 卅五錢
郵税 六錢

附り 歌德記

黑田子爵 寫眞銅版 肖像入

現代の歌聖を誰とかする。樞密顧問官たる黑田清綱子を推すならん。茲に同子爵の別墅に、年來つどへて詠しられたる人々の歌、將同子爵の玉詠中より税所敦子刀自が、よしと思ふを摘みとりて、庭の摘み草と名けおかれたるなり。滿天下の歌人よ。一度之を繙かば、自ら眞正なる和歌の價値を知るに足らん。殊に全子爵が年來種々の書中より。和歌の德によりて身を雲井にあげ將位を得、身命を助けられたる、其他種々の事柄を、數百擧げられて、歌德記と名けおかれたるをも切に請ひて、兩つながらかくは世に出すととせり、されは歌人にあらさる人といへども、和歌の德の大なるを知るを得ん、

發兌元 東京本町 博文館

巖谷小波山人作　武内桂舟畫伯密畫

明治お伽噺

全部拾貳册
洋裝菊版形
紙數一册百
五十頁以上
正價郵稅未定

日本昔噺以來、先には日本お伽噺を完成し、今又世界お伽噺の大篇を企て、斯道に多年の肝膽を碎ける、御馴染の小波山人、今度は更に歩を進めて、**明治お伽噺なる題目**の下に、**十數年の經營**に成れるの**自作お伽噺**を、美麗嶄新なる小册子として、順次世に公にせんとす。是れ啻に少年讀書界に於ける、無二の良籍たるのみならず、また以て**明治文壇に對する稀有の一大貢獻といふべし**

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

（丙の三）

大和田建樹先生著



能を舞ふ人はあれども能を知る人は少なく能を見る人はあれども能を解する人は少なし此書一度出なば知る事も審かに解するとも速かなるを得ん斯道の爲め舟筏とも燈火ともなるべきは獨り此書か

全部六册製本
和綴石版表紙
能舞精巧木版畵挿入
紙數一册二百頁以上
定價郵税――未定

▲第一の巻……一月下旬發行

第壹の巻 翁、高砂、八島、東北、盧州、船辨慶、三輪、兼平、羽衣、安宅、安達原、蟻通、田村、江口、百萬、猩々

第貳の巻 竹生島、清經、熊野、隅田川、融、邯鄲、鉢木、卷絹、俊寛、海人、小鍛冶、夜討曾我、杜若、花筐、鞍馬天狗

第參の巻 養老、忠度、松風、七騎落、山姥、橋辨慶、春榮、道成寺、富士大皷、土蜘蛛、西王母、籠、草紙洗、唐船、紅葉狩

第四の巻 加茂、巴、三井寺、葵上、烏帽子折、葛城、小袖曾我、櫻川、攝待、野守、花月、實盛、景清、放下僧、望月

第五の巻 嵐山、敦盛、二人靜、雲雀山、殺生石、小督、賴政、井筒、熊坂、善和鳥、項羽、盛久、住吉詣、柏崎、絃上

第六の巻 龍田、朝長、砧、阿漕、善界、國栖、弱法師、大原御幸、蟬丸、鵜飼、大佛供養、斑女、藤戸、大江山

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

(丙の四)

村井弦齋君著

酒を飲む者衆し、酒の効用と害毒とを知て而て飲む者幾人かある我小説を讀む者衆し我小説の精神を知て而て讀む者幾人かある、惟ふに知るは易く、悟るは難し、悟るは易く、行ふは尚ほ難し、千萬人中幸に、我精神を知悟して、而して行ふ者ありや否や――!!



全二冊上卷近日發行

本書目次

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(丙の五)

（其の六）

博文館雜誌廣告料

明治三十六年一月改正

太陽

五號活字十八字詰	特等	一等	二等	三等
一行		五十五錢	四十四錢	三十六錢
一段(卅八行)		二十圓九十錢	十六圓七十二錢	十三圓六十八錢
半頁(五十七行)		卅一圓卅五錢	廿五圓〇八錢	廿圓五十二錢
三段(七十六行)		四十一圓八十錢	卅三圓四十四錢	廿七圓卅六錢
一頁(百十四行)	割引金八十圓	同金六十圓	同金四十八圓	同金四十圓

實業世界太平洋

五號活字十八字詰	特等	一等	二等	三等
一行		三十錢	二十五錢	二十一錢
一段(三十八行)		十一圓四十錢	九圓五十錢	七圓九十八錢
半頁(五十七行)		十七圓十錢	十四圓廿五錢	十一圓九十七錢
三段(七十六行)		廿二圓八十錢	十九圓	十五圓九十六錢
一頁(百十四行)	割引金四十圓	同金三十三圓	同金二十七圓	同金二十三圓

文藝倶樂部 少年世界

五號活字廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行		五十四錢	四十四錢	三十七錢
半頁(三十二行)		十七圓二十八錢	十四圓〇八錢	十一圓八十四錢
一頁(六十四行)	割引金四十圓	同金卅三圓	同金廿七圓	同金廿三圓

女學世界

五號活字廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行		四十四錢	三十六錢	二十九錢
半頁(三十二行)		十四圓〇八錢	十一圓五十二錢	九圓廿八錢
一頁(六十四行)	割引金三十三圓	同金二十七圓	同金二十二圓	同金十八圓

中學世界

五號活字廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行		三十六錢	二十九錢	二十五錢
半頁(三十二行)		十一圓五十二錢	九圓二十八錢	八圓
一頁(六十四行)	割引金二十八圓	同金二十二圓	同金十八圓	同金十五圓

自治機關公民之友

五號活字廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行		二十六錢	二十一錢	十八錢
半頁(三十二行)		八圓三十二錢	六圓七十二錢	五圓七十六錢
一頁(六十四行)	割引金二十圓	同金十六圓	同金十三圓	同金十一圓

圖書世界

五號活字廿四字詰	上等	並等
一行	二十錢	十四錢
半頁(三十二行)	六圓四十錢	四圓四十八錢
一頁(六十四行)	割引金十二圓	同金八圓

(丙の八)

多田親愛先生筆

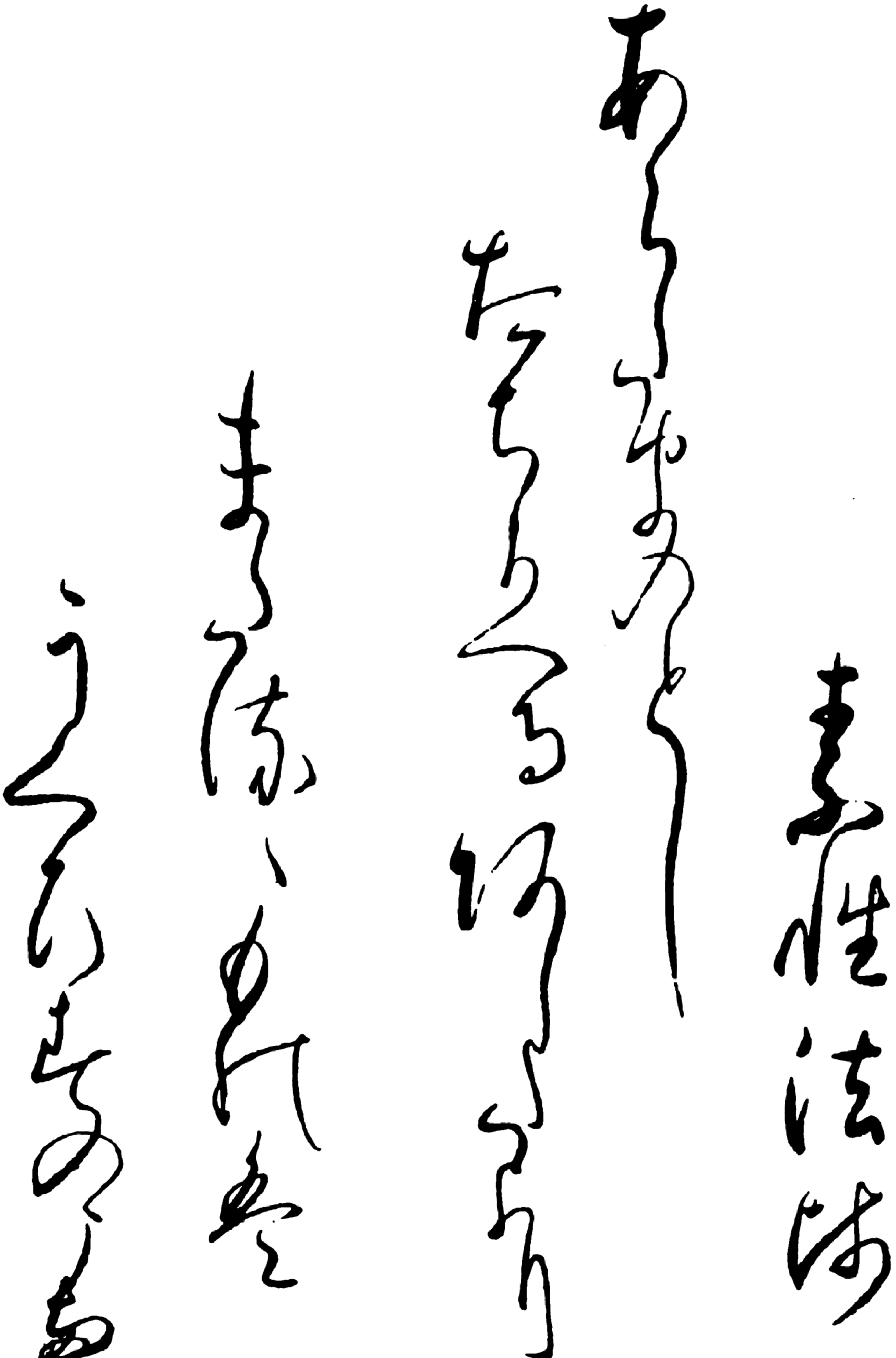
式子内親王

山ふかみ春とも知らぬ
松の戸に
たえだえかかる
雪の玉水

坂正臣先生筆

鎌倉へ御遊覧のよし
御うらやましく存上まゐらせ候
私事京都より帰りかけ
帰り候へまて都合よし
うかゝひて拝見し候
して

多田親愛先生筆



坂正臣先生筆

福壽草　寶船

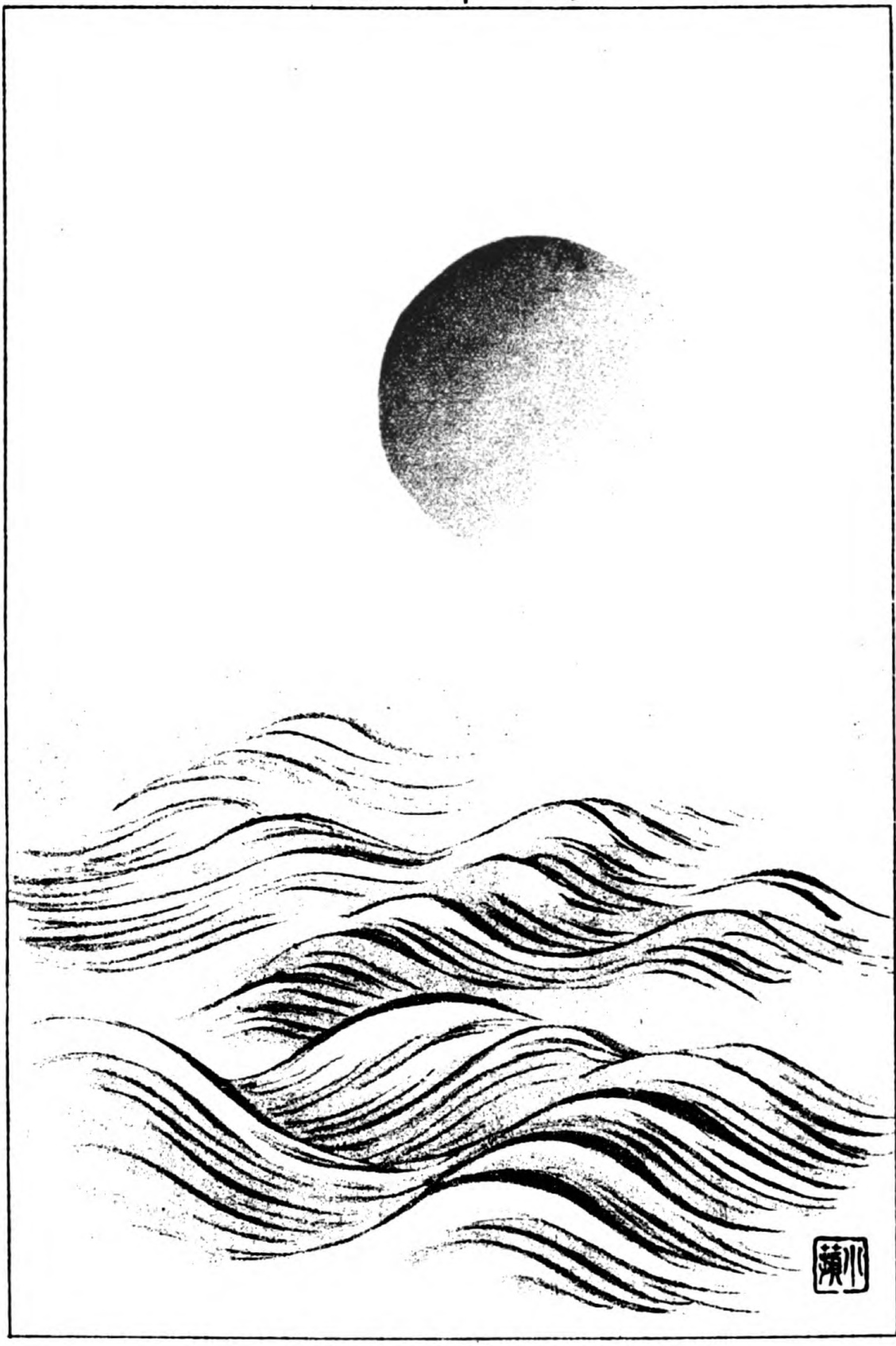
蓬萊　年玉　羽子

寒梅　若菜　蜜柑

白魚　雜煮餠

新年海

野口小蘋女史筆



鶴

野口小蘋女史筆



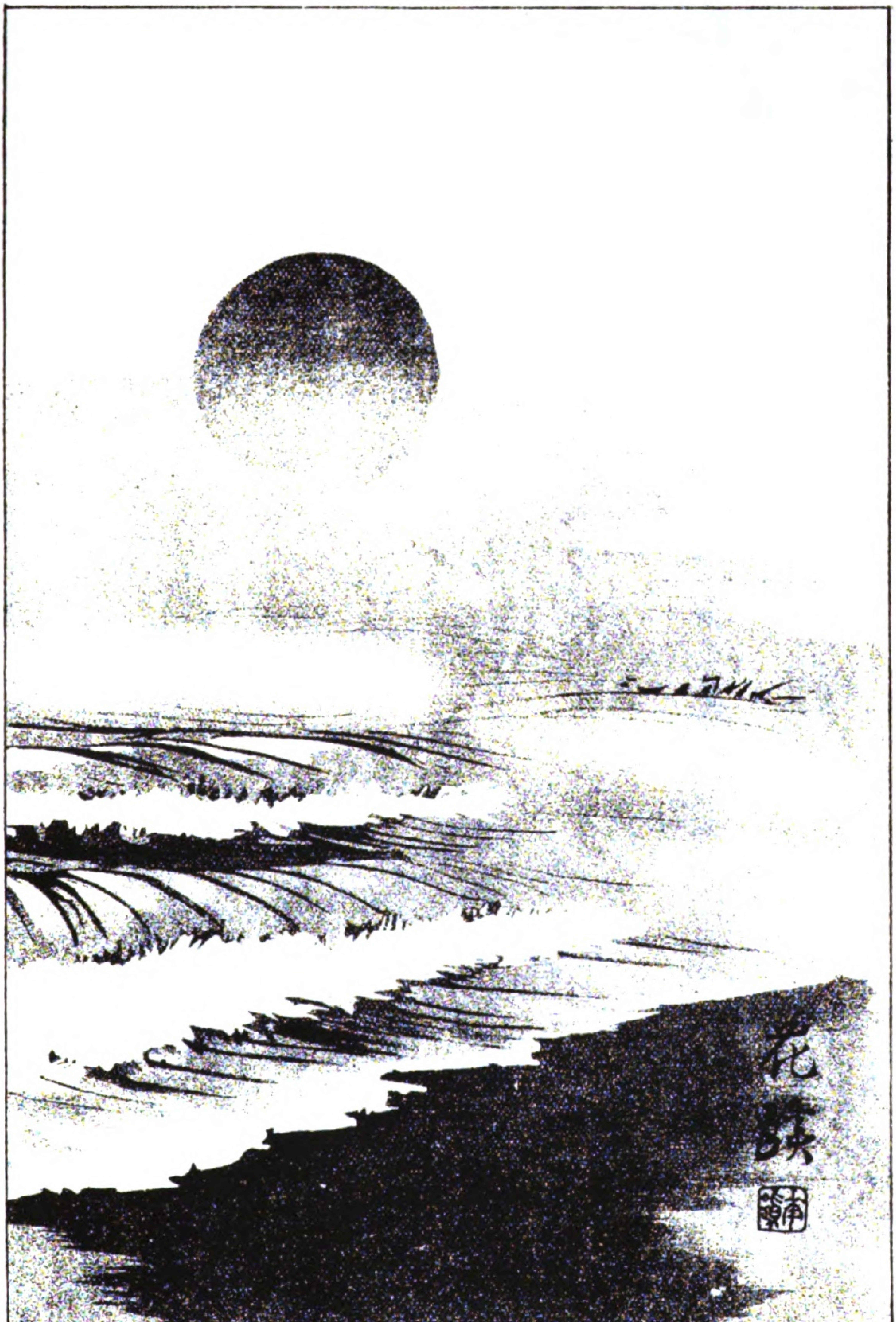
姫小松

跡見花蹊女史筆



初日の出

跡見花蹊女史筆



恭賀新年

●五方の新藥

●引風一切早なはし新藥
太陽散
定價五錢十錢二十錢五十錢郵送料各二錢

●酒席旅行懷中必携新藥
太陽丹
定價五錢十錢二十錢五十錢郵送料各二錢

●毒氣一切ねきり最新藥
太陽丸
定價七錢廿錢四十五錢八十五錢郵送料各二錢

●痳病消渴の根治最新藥
太陽劑
正價内用四十五錢外用三十錢郵送料各二錢

●腫物傷痛皮膚病の新藥
太陽膏
定價三錢五錢十錢五十錢郵送料各二錢

●寫眞新藥

左記五種の新藥は明治卅五年五月獨逸ブレスロ市にて開會せる「シレシャン」專門寫眞家協會展覽會にて金牌を受領したる最新優等品なり

●バイエルエヂノール
此新藥は迅速現象液を製するものにして沒食酸ハイドロヒの如きフエノル屬の性質を兼備す

●亞硫酸アセトーン
此新藥は寫眞上一般用の有効藥にして普通の亞硫酸曹達及び異性重亞硫酸加里の代用藥たり

●フイキシングサルト（定着鹽）
此新藥は水六乃至八倍に溶解せば直に弱酸性の無具定着液となり其拔く力速なり

●フラッシライト
此粉末は打擊摩擦等に感ぜず爆發の憂なく其燃燒速なり

●ウラニユム補力藥（閃粉）
此補力藥は水二十五乃至五十倍にて直に用ふるを得

●詳細之使用法及び說明書は御申込次第即送す

●新化粧品

目下佛國巴里を始め、歐米文明國流行の優等品なり其の他

◎髮發生增殖液
甲五圓乙三圓丙一圓十五錢郵送料各一瓶金八錢

◎美白光澤皮膚液
甲一圓乙五十錢丙三十錢丁十五錢郵送料一瓶金八錢

◎佛蘭西巴里香水
甲五圓乙三圓丙二圓丁一圓郵送料各一瓶金八錢

◎雲南產正眞麝香
甲一分金一圓乙一分金七十錢郵送料各一匁迄金二錢

◎透明石鹼洗髮液
甲一圓乙五十錢丙二十錢郵送料各一瓶八錢

◎清涼ふけ止め液
甲一圓乙五十錢丙三十錢丁十五錢郵送料各一瓶金八錢

◎面皰斑點整止液
甲一圓乙五十錢丙三十錢丁十五錢郵送料各一瓶金八錢

◎口中含嗽芳香液
甲一圓乙五十錢丙二十錢郵送料各一瓶金八錢

發賣元　内外藥種販賣品　直輸入卸小賣　**博愛堂本店**

東京日本橋大通り本石町角　電信畧號○ハク　（電話本局二八六番）

（丁の一）

續帝國文庫

發兌元 博文館

正價壹冊六拾錢 六冊金三圓五拾錢 拾二冊金六圓九拾錢 廿五冊拾三圓

(丁の二)

- 第壹編 眞田三代記
- 第貳編 近世說美少年錄
- 第參編 日本歌謠類聚(上)
- 第四編 日本歌謠類聚(下)
- 第五編 修紫田舍源氏
- 第六編 竹田出雲淨瑠璃集
- 第七編 朝夷巡島記
- 第八編 兒雷也豪傑譚
- 第九編 江戶作者淨瑠璃集
- 第拾編 前々太平記 附前太平記
- 第拾壹編 太平記
- 第拾貳編 紀海音淨瑠璃集
- 第拾三編 續近松淨瑠璃集
- 第拾四編 近松半二淨璃瑠集
- 第拾五編 後太平記
- 第拾六編 脚本傑作集 發賣禁止
- 第拾七編 京山全集
- 第拾八編 落語全集
- 第拾九第 並木宗輔淨瑠璃集
- 第二拾編 紀行文集
- 第廿一編 一九全集
- 第廿二編 漂流奇談全集
- 第廿三編 邯鄲諸國物語
- 第廿四編 續紀行文集
- 第廿五編 續水滸傳
- 第廿六編 傾城水滸傳

博文館編

第四拾四編

俊傑神稻水滸傳

全三冊……上卷中卷發刊

能く佶屈なる文字を避け、彼の聱牙なる章句を捨て、巧みに艶曲豐麗の辭を以て、婦女童蒙の一粲に資し、不知不識の間、其梗概を知るに便せしむるもの、是を稗史野乘の特色なりとす

正價壹冊

文庫

博文館

輯局校訂

第四拾五編

我國古來其類例尠なしとせず然り而して本書俊傑神稲水滸傳の如き、其尤を占むる者の一として、百五十の大巻、夙に識者の嘆服する處たり、特に本篇が變幻の脚色、警拔奇趣、冊一冊綿々滔々盡きず絶へず、清興湧き皮肉動き讀んで曉に徹するを覺えざるの珍書たるは、世既に定論のあるあり、然れども大冊の遺憾は机上に便ならず、本館之を慨し、今や刊して三となし、其上中巻既に發行せり、体裁優美、製本閑雅、況んや更下剪燈親書の秋、請一本を購ひて、吾人が言の誣ならざることを験せられん事を

▲第四十六編（本書下巻）……近日發賣

六十錢郵稅十六錢

- 第廿七編●文耕堂浄瑠璃集
- 第廿八編●白縫譚(上)
- 第廿九編●白縫譚(下)
- 第卅編●北雪美談時代鏡
- 第卅一編●常山紀談
- 第卅二編●萬物滑稽合戰記
- 第卅三編●續一九全集
- 第卅四編●黄表紙百種
- 第卅五編●俳優全集
- 第卅六編●俗曲大全
- 第卅七編●續々紀行文集
- 第卅八編●續馬琴傑作集
- 第卅九編●脚本傑作集(下)
- 第四拾編●釋迦八相倭文庫(上)
- 第四拾一編●續京傳三馬傑作集
- 第四拾二編●釋迦八相倭文庫(下)
- 第四拾三編●種彦短篇傑作集

續刊

- 第四拾七編●近世奇談全集
- 第四拾八編●名家短篇傑作集
- 第四拾九編●續高僧傳
- 第五拾編●名家漫筆集

●全部五十冊金貳拾五圓●郵稅壹冊金拾六錢○背皮金文字入頗美本

(丁の三)

武田櫻桃君木村小舟君共編

教訓繪ばなし

全部拾貳册
每月一回發行
定價郵稅未定

第壹編▲家庭の巻
第貳編▲お噺の巻
第參編▲海軍の巻
第四編▲陸軍の巻
第五編▲動物の巻
第六編▲植物の巻
第七編▲ポンチの巻
第八編▲遊戲の巻
第九編▲地理の巻
第拾編▲歷史の巻
第拾壹編▲立志の巻
第拾貳編▲冒險の巻

さア〳〵少年諸君面白い繪ばなしが出來ましたよ、菊版三十二頁が總色刷になつて讀んで爲になるお噺が十二册でるのです、今迄方々から隨分色々な繪ばなしの本が出て居ますがこの教訓繪ばなし位面白いのは他にはありませんごうぞ少年諸君賣切れにならない内に早く買て讀で御覽なさい、ちか〳〵の内に出來ますから!!

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

（丁の四）

（丁の六）

藝文庫

定價一冊十五錢十二冊金一圓六十錢郵税一冊金四錢宛

第五編　電話の巻
石井研堂君著

もし〳〵、電話の巻は子、少年が電話を作つたとから、電氣磁氣の研究と爲り、市内市外の電話交換の順序内部まで、一々圖解しましたのです。ハイ。附錄には、世界各國で注目してる無線電信の說明がございます。さようなら

第六編　硝子の巻
石井研堂君著

硅酸、鉛、硝石などが玲瓏瑩滑の硝子となるは、糯米が水飴となるに異るなし。此書硝子器一切の製造實況を紹介し特に簡易硝子製法を記して少年の實驗を促かしたる珍書なり。

第七編　紡績の巻
石井研堂君著

一の紡績社にて一日に紡ぐ所の絲の總長を延ぶれば地球を五十三回すべしと聞かば少しは驚く人あらん而も本書を讀て其奇異なるを知るべし

第八編　活版の巻
石井研堂君著

本書は幼稚なる印刷術より、大進步的輪轉機の、一時間二萬の新聞を摺り、自ら斷り自ら折る迄の工をなし遂ぐる精義を說き、國家文運の利益を活動せしめたり、挿畫精巧、行文平易、少年必讀の好品作なるべし

續刊

●第九編　滊船の巻

●第拾編　製紙の巻

●第拾壹編　銅山の巻

●第拾貳編　電燈の巻

區本町三丁目　博文館

(丁の七)

外交變遷事情

櫻痴居士福地源一郎先生著

長崎三百年間

正價四拾五錢　郵税六錢

長崎は歐洲文明を日本に輸入したる最先の門戸にして又實に絶へず外國文明を輸入する通路なりき長崎出身にして特に幕末外交に當りて文書に鞅掌せる櫻痴先生其歷史を編し歐洲文明輸入の次第變遷を叙したるものを本書とす其有益にして多くの趣味に富むを知るべし

發兌元　東京本町　博文館

學生の指南車

桂月　大町芳衛君著

續學生訓

正價廿五錢　郵税四錢

青年學生諸君の友となりて、學藝上、實行上誘導し、忠告し訓戒するもの、學生訓是なり、續學生訓出で更に一の益友增したり言ふ所氣が利きて穩當、文趣味ありて雄健、一讀たゞ終り易きを惜む、苟も志ある者の机上、この書を缺くべからず、乞ふ是非一讀あれ

發兌元　東京本町　博文館

博文館發兌圖書

特別割引券

●圖書御注文の節は此券を切取り添附あれ

●有効期限は明治三十六年二月十日限りなり

●期限中本券添附の御注文は一割引とす

●豫約募集中なる圖書類は五分引とす

●館友の此券を添へたるは五分引とす

●前金御注文の外は本券の効用あらず

特別割引券呈上

迎春の祝意を表する爲め例の通り圖書雜誌特別割引券を呈上す御注文の節は之を切り取り代金を添へて御申込を乞ふ我國の舊慣として年始の進物に無用の贅物を贈答せる今之を改良して有益なる圖書雜誌を以て之を代用せらるれば社交上其便益なること玩弄食品の比には無之候敬具

博文館發兌雜誌

特別割引券

●雜誌御注文の節は此券を切り取り添付あれ

●有効期限は明治三十六年二月十日限とす

●期限中本券添付の御注文は五分引とす

●館友にて此券を添ふ時は二分引とす

●前金御注文の外は本券の効用あらず

●御申込の節は博文館小賣係宛のこと

（丁の八）



第三巻第壹號

歳旦の辭

人生は恰も逆旅の如し、ゆうべの泊り今朝のふみだし、一年の始めおはりは一日一夜の旅やどりと同じい事である。三百六十五日の長い月日には悲しい事もあれば嬉しい事もあつた、困難もあれば昇達もありました。けれど觀じて見ればこれも又唯ゆうべの夢に過ぎないのである。そこで一夜あくれば東の空、紫の雲ひらけて日光がきらめき渡る。天然萬象も自然と新たになつて山も笑ひ、川も音樂を奏づる。霜にうたれた草木も、虫けらまでも又おのづから新らしい生活を帶ひてまいりますこうして人生はまたこゝに新らしい目出度い一年のふみだしをはじめてこの困難の横はつた趣味の多い世界に向つて進んで行かねばなりません。扨て人間が年一つ取れば經驗も增し、智識も開けて昨日は險しい山阪を登るのに躓づいて足を痛めた事もありましたが、今日は最早再びそれを繰返してはなりません。その代り又どんな難所に出會ふかも知れねばこの新らしい旅のふみ出しにはよく〳〵心せねばなりません

偉大なる國民たれ

日本女子大學校長 成瀬仁藏

自喜豪氣尚未摧、毎經一難一倍來といふ句は、年を取れば取る程困難に出逢へば出逢ふ程、豪氣て益々奮ひ進むといふのであります、此精神此活氣此元氣を缺きました時には、齢が幾ら若くとも、身体がどんなに强壯でも、もう役に立ちません、老朽望を屬するに足らない處の人であります、抑も偉大な人物の資格には樣樣ありませうが、兎にも角にも如何なる境遇に立ちましても、どんな難事に際會致しましても。如何なる失敗に出逢ましても、何ふ云ふ强敵に攻撃されましても、此精神、此氣象、此元氣を持續けて、何時々々迄も進み進んで、主義を貫ぬき理想を達せね限りは止まないと云ふ氣象をもて居る者が偉大な人物でわらふと思ひます、古今の俊傑と呼れ君子と云はれた人の事蹟を考へて見ますと頭髮は霜の如く、眞白になり、頰骨は巖の如く高く秀で、身体が自由に利ないといふ歳に成りましても、其精神は活氣に滿ち滿ちて奮勵勇進して止むことなく何時迄も向ふに進み往くといふ氣象に滿ちてをります。かゝる人こそ眞に仙人とも云ふべきもので、體は白髮心は童顔の有樣だと評するも差支はありません、併し之に反して齢は縱令春の青葉の如くて若くても、早やその精神は活氣なく、恰もその枯葉の萎縮して生命もなく光澤もないのと一般の人物があります。夫で如是年齢は若くとも、其精神は既に業に萎縮して仕舞つた活氣のない年若い老青年は、其生涯に於て見るべき程の成

蹟の擧らぬと云ふ事は分り切た話でありませぬ。是れは一個人に就て生理であるのみならず、亦國民の上に照しても同じく生理であらうと考へます。

吾日本國民は少壯有爲の國民でありませぬか、將た老成を氣取て居る年若い老人國民でありませぬか之れは今日吾々國民がよろしく考へねばならぬ問題であらうと思ひます。吾大和民族が呱々の聲を敷島の大和島根に揚げましてから實に數千年の長い歳月を過ぎ去てをります、決して若い國民とはいはれませぬ。併し乍ら我日本國民が世界列強の間に立て、獨立の躰面をもて待遇さるゝに至たのはつい近年の事でありますから、まだ〳〵若い國民であると云ふことが出來ます、此二千五百有餘年と云ふ山鳥の尾の長〳〵しい長年月は此日本國民が一大國民となり、世界に飛躍せんとする豫備時代に過ぎなかつたので、今や吾日本國民は少壯期に達した計りの國民であつて、遠大の志望を抱き元氣に滿ちて活氣に富んで是から進まねばならぬ故に、彼の國民的意識もなく統一の必要をも感せなかつた、支那に打ち勝つた位の事で、又歐米の制度文物を輸入消化した位な幼稚な事柄で、やれ文明ぢや開化ぢやと云つて鼻を蠢めかし、進み進んで止むべからざる氣象を鈍らす樣の事があつては、此日本國民も岌々乎として亦危いかなではありませぬか。

然して遠大の志望を抱き、活氣に滿ち滿ちて居るべき筈の吾日本國民たるものは、此後萬年を經るも、希望の後に希望を增し、何時までも進歩發達して止まない偉大の國民たるの覺悟を持たねばなりませぬ。此の精神が一般國民の内に滿ちてをらねばなりませぬ。

我が偉大な國民と云ふ字句を使て、富强な國民といふ言葉を使はぬのは少しく意味のあることであります。富

强の國民といへば物質的に偏して居る嫌ひがありますも、偉大の國民といへば此物質的發達に加るに精神的發達を以てしてをりますから、一方に偏しない國民の完全なる發達を表はす言葉であると思ひますから使つたのであります、どふか我日本國民をして、物質上にも精神上にも發達した偉大の國民となしたいものであります然り而して此日本國民は老成を氣取て小成に安せず何時も少壯の若い氣になつて大志を抱いて活潑々地に活動して進歩發達して往くなら、偉大になるまいと思ふても、必ず偉大の國民となります固より前に申しました様に此の國民を若くすると云ふことは、年齢を若くすると云ふ譯ではありませぬ、年齢の老若は一向にかまいませぬ、唯國民が高尚の理想を有ち、遠大の抱負を懐き、進み進んで往くならば、それが即ち少壯になる途であります、然らば我日本國民の精神内に、高尚の理想及び遠大の抱負を湧出せしむる源泉は何であるかと申せば即ち敎育であります、敎育は一方には國民をして高尚の理想を懐かしめ大志を樹立せしめ、又之れと同時に一方には其理想を實現し其大志を成就せしむる源泉であります。

而して此敎育の基礎は女子敎育及びそれより來る家庭敎育であります、此の根本基礎たる女子敎育を持たない敎育は、架空の敎育であります、女子敎育の缺いて居る敎育は、片輪の敎育たるのみでなく、實に効力薄弱なる敎育であります、故に古來女子敎育を顧みなかつた國は、亡國にあらざれば弱國であります、然らざれば野蠻國であります、然るに國民を偉大にするに缺く可らざる女子敎育に對する我國人の態度は如何であります近年稍やく女子敎育が頭を持ち上げ掛るや、やれ女子敎育の弊害ぢや、やれ女學生の墮落ぢやと申しまして周章狼狽を極め女子は遊學に出す可らず、宜く家庭に留め置くべしと唱へてひたすら消極的の態度を執るものある

やに聞えるが之は實に臭ひ物に蓋をするのと同一轍でありませう、勿論今日の女學生に弊害の無いといふではありませぬ隨分志操の卑劣なものもあるらしい實地の益々立たぬものもある、樣で論語讀の論語識らずも決して稀ではありますまい局部を誤解して全躰の見へない爲め判斷を誤り迷ひ易き者も多くあるやうでありますが之は女子教育其物の弊害ではない寧ろ教育法の罪であつて其道を誤てをるのでありますから之を改めさへすればよいのであります、然るに若しも吾國民否之が先驅た者にして此の如き區々たる困難に狼狽し此の如き些々たる弊害に避易し日々に弊を改め日々善に進むの忍耐勇氣無く常に風濤に動されて居る樣の有樣では決して偉大な國民といふ目的の港に到着することは出來ませぬ、古人も『斷して之を行へば鬼神も之を避く』と申したではありませぬか、社會の先導たるべき人々にして苟も女子教育の必要を確信するならば何故にその弊害と戰ひ、その困難に打勝つの方法を講ずるの英氣を奮ふことなく、意氣地なくも退嬰主義の古城に逃げ延んとはせらるゝぞ、噫吾國民は何んと根氣の弱きことではありませんか、我善良なる女學生諸子よ、諸子は他日賢母良妻となりて此の如き根氣弱き國民を一變して根氣强き國民たらしむべき大責任を負へるものなれば、世評に注意して之を以て他山の石となすは可なれども必ずしも之に迷ふことなく諸子の大責任の遂行に向て邁往勇進せられよ。而して之を爲すに當りては常々女性としての諸子の性格品位を高め女性としての職責を盡すに必要なる實力を增進するとに努力し、かりそめにも淺薄未熟なる學藝を人に誇らんが爲めに修むることなく只學藝は諸子の性格品位を高むるの基礎であつて且つ諸子の責務を果する方便に過ないものであることを忘れなかつたならば明治卅六年は我日本國民が偉大の國民たるの方向に第一步を轉じたる年となるとが出來ませう。

婦人と躰操

三輪田眞佐子

（六）

現今わが國に於ける女子教育上の形式は大に進歩せしが如き觀あるもその內容に至りては不十分不完全極まる點少からず、故に日に月にこれ等を改善するにあらざれば眞正の進歩を見んことは難し。

そもそも女子教育は精神及び身躰の圓滿なる發達を期するにあり、而るに目下の女子教育は智能の啓發に於て得るところなしとせず、されど德性の修養に於ては得るところありと言ふべからず、况んや身躰の養成に於ては最も怠るならん如何となれば妙齢の女子にしてこれより身躰の發育すべきものながら深窓に潜むものあり、偶々學校に行くものも單に形式上の遊戯のみを修むもこれを敎ふるもの亦學ぶもの共に必要の業なるを自識せざるものゝ如し甚しきは手藝を習ふ女生の如きは朝より夕まで殆ど坐して絶えて運動を試みざるは事實ならずや、今日世界各國對外上の競爭は頗る盛なり、而して國民の健全なる躰質を要求すること最も急なりこの太切なる時に當りて敎育家及び社會事業を主る者にして國民の母たるべき女子の躰育を忽にするは怪むべし。

勿論文部省高等女學校令に由ると每週三時間の躰操時間あるもその實行上の責任は各學校にありて存す、且つ亦都下の女學生の如きは躰操を課せざる高等女學校以外の學校にあるもの多數を占む、然るに世人はこの多數の女學生を繼子扱にするは一視同仁の人道に戻るものとこそ言ふべけれ、苟も敎育し敎育せらるゝ以上は日本國民を一團と見て成るべく平等の扱をせざるべからず、決して彼に厚くしてこれに薄き如き不平等の扱をなすべからず、おのれはつねに有ゆる若年の女生にして學校にあるものは必要の課程として躰操を加ふべきも

のと信せり、若し体操を缺くとせば、これに相當なる方法を以て躰育をつとめざるべからず、將に發達せんとする女生をば一室に閉ぢ込めて身躰を害する如きことあらば一を以て他を補ふ能はざる結果を來すべしあはれ國家の前途を憂ひ愛嬢の晩年及び子孫の幸運を希ふものは速にこゝに着眼して誤を久しくする勿れ。

更に躰育につきて考ふるに女子と躰操との關係は單に身躰の强大に影響するのみならずその他種々の點に於て直接若しくは間接に影響するものなり今左に其の例を示さん。

第一婦人と國家の生産力　人は男女を問はずほゞ丁年までは十分なる活動すること能はず故にこの間は先づ敎育時期とも稱すべきなり、斯くして敎育せられたるものは成るべく長く國家のため即ち家庭のためも大概より見れば亦國家のためなれば大に勤勞して其の恩に報いざるべからず若し假に四十歳にして老朽するものと六十歳にして老朽するものと或は八十歳にして老朽するものとあらば言はずして國家の生産力に關係すること少からざるを知るべし、無爲寄食するものゝ多きは國家の禍なり思ふべきことにてこそ、然らば婦人が身躰を健全にして長く人事を盡すは國家に忠なる所以なり。

第二死美及び活美の區別　これまで婦人の美と信ずる理想の婦人は顔色青白き纎弱なる躰軀の婦人なりしが如し從ひて人情美を好む婦人の常として身躰の肥大なるを忌み筋骨の强剛なるを惡むもの多し然れども人は繪畫彩色の如き死美を以て自ら任ずべきにあらず天眞爛熳の動作に伴ひて自然に起る活美こそ願はしけれ現に顔色蒼然として將に玉の緒の絶えんかと疑はるゝ婦人は美と言はんよりも哀れとも言ふべきなり反りて姿勢正しく一見健全無病の婦人こそ眞の美人なれおのれは斯る思想を顯はさんため死美と活美との語を作りき讀者諒焉、

第三活潑は外侮を妨ぐに足らん。凡そ因循痴鈍の行動は以て他の侮を招くに足れり。故に女子は威ありて猛からずと言ふ如き風采こそ望ましけれ元來男子は女子を玩弄視する傾きありこれ女子中には愛を賣るものありて勢ひ女子とし言はゞかゝるものかと億測して一般の女子を侮る習慣を助成することなしとせず、故に品行端正にして活潑の氣外に顯はるれば以て侮の乘ずべきなからん但し活潑と粗暴とは似て大に異るものなれば明に區別せざるべからず寧ろ粗野暴漫の女子は反りてこれに接するもの尊敬の念を缺き一層外侮を招くに足ん。

以上は唯女子の體育に附帶する効益の一、二を述べしのみ其他体育の必要は今更説明を待たじいざや新玉の年と共に女子の体育に心を用ひて大は國家の幸福を增進し、小は一身の福祉を增加せしめんため勤むるところなかるべからず亦當局者も直接に關係ある學校にのみ躰育を奬勵せずして一般女學校とし言はゞ悉く躰育の方法を實行せしめざるべからず、日本人民は皆同胞なり。日本社會は全く一家に異ならず、などか我が同胞の一部分が躰育を怠るを見て對岸の火災視すべけんや、あはれ女子たるもの老若を問はず躰育に注意して長く女事女藝を營めよこれ女子の國家に對する道に外ならず而かも女子教育の方針も亦こゝに向はざるべからず。

終に臨みて一言すべきは躰操を以て女子の姿勢を害し氣質に變動を及すものと信ずるものありとかや、これ固より女子の本性を知らず人類の目的を知らず、女性の如何なるかを解せざる舊式の考ならん、故にこれに對して辨明ずる要なし、反りておのれは婦人の躰操に於ける利は身躰の强壯規律の養成、活潑の動作等につきて著しきを知れり決して淑德とは因循の義にあらず、敬意を以て充つる活潑の動作なりあはれ靑年は女學生問題を以て君子の耳を汚せり、故に今年は女子の躰育を奬勵する聲を以て識者の注意をひかんこともがな。

婦女雜觀

文學士　大町桂月

媒介人

人、一生の中、一度は必ず媒介すべきものなりと云ひつたへたり。わが國むかしは自由結婚なりき。男、女の門にたちて、其名を呼べば、女、意あらむには、應と答へける也。結婚のことを、「呼ばふ」もしくは「呼ばひに行く」と云ふは、これより出でたり。然るに、いつの頃よりか、支那風になりて、必ず媒介ありて、結婚するやうになり、媒介なくして結婚するを野合といふやうになれり。かく我國の結婚、既に媒介人を要す。而して媒介人は、餘り難有き役に非ず。よく行けば、さつぱり難有く思はれざるが、よくゆかぬ時は、あの人の媒介ゆゑにこんな苦しい目にあへり、不仕合に陥れりと、兩方より恨まるゝもの也。されば、成るべくならば、斷りたけれど、どうか娘をよい所にと云れ、又どうかせがれによき嫁をと泣きつかれて見れば、人情として、いやとも云はれず、止むを得ず、媒介するが多かるべし。尤も中には、世話ずきな人もありて、交際のひろきまゝに、面白がりて媒介するもあるべし利慾づくにてするもあるべし。平素の恩義をとて、忠義立てしてするもあるべし。また我勢力扶殖のためにするもあるべし。

今の世、媒介口と云へば、新聞記者と共に、信用なきものとなりぬ。概して、媒介人は、一方のためのみを圖りて、よい加減な事を云ふもの多し。さていよいよ結婚して見れば、媒介人の言ひし所とは、大に異なり居りて、くやしや、だまされたと臍を噛む才子もあるべく、また佳人もあるべし。

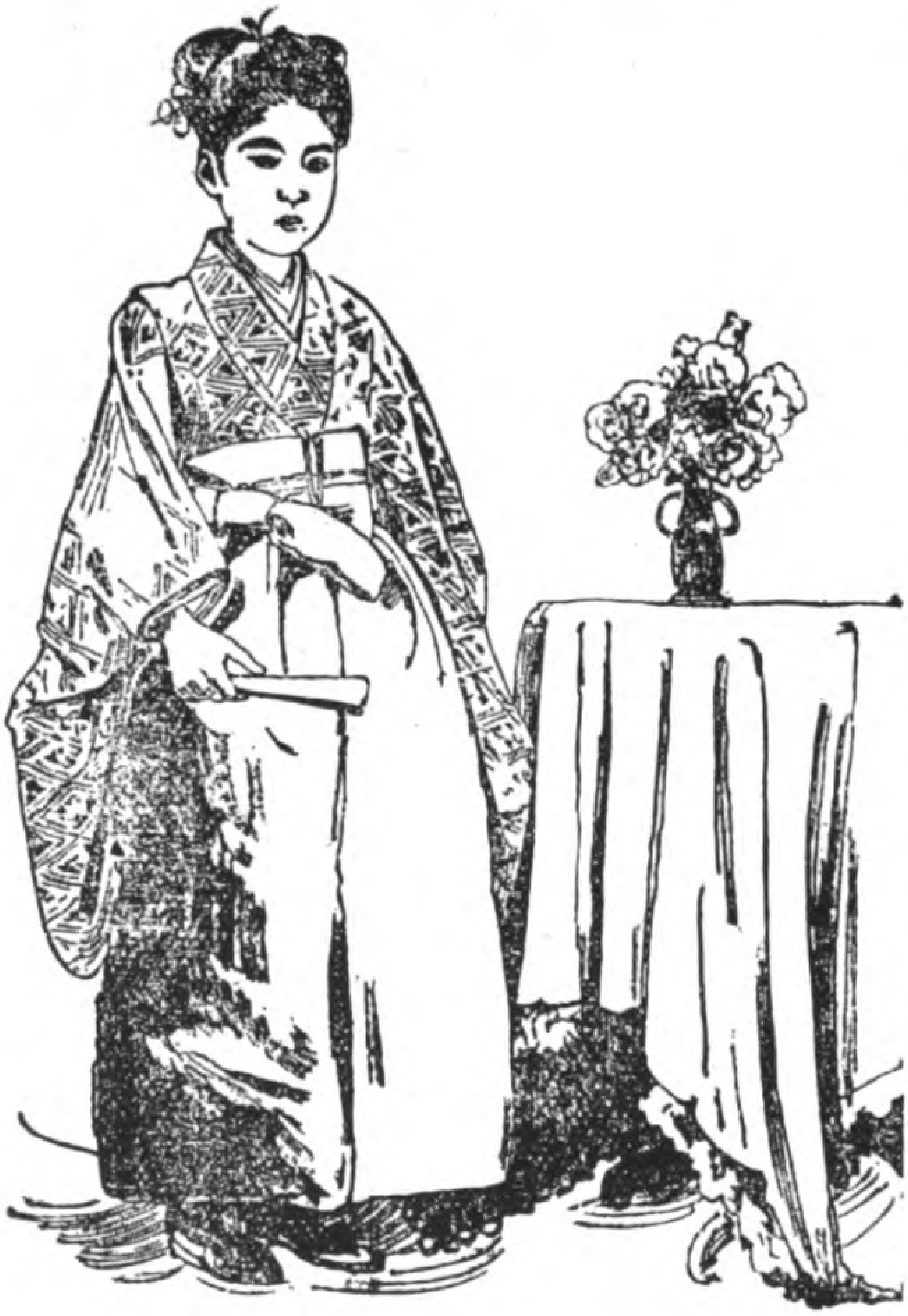
婚禮は、人間一生中、その人に取りては、最も重大

なる事件也。之れが媒介人たるものゝ役も、從つて重大也。然るに之を輕視して、よい加減なとして、駿馬に痴漢をのせ、才子をして醜婦に伴はしめ人の一生を誤らしむるは、その罪決して輕しとなさず。余は世の父兄に向つて、媒介口を信せざらむてとを勸告すると共に、世の媒介人に向つて、其役の重きとを自覺して、在來の弊風を一洗せむとを勸告せざるを得ず。

痴小人家の女

君が一日の恩の爲めに、妾が百年の身を誤る。語を寄す、痴小人家の女、かる〳〵しく身を將つてたやすく人に許すと莫れとは、白樂天が淫奔を戒めたるの句也。何人も分別盛りの年頃になれば、此の句の切なるを感ずべけれど、二十歲前後の情熱盛なる年頃には、之をさまでに感せざるべし。よしや之を感ずとも、意馬狂ひ、心猿躍る。われながら我を抑ふる能はず。わとは野となれ、山となれ君の爲めには命も惜しからず。萱の杜のわびずまい、手鍋さげても厭はじと、思ひ込みたる女の念力、冷かなる理を説いたればとて之をさとし得べくもあらず。かくて文君は臨卬に奔れり。政子は鏡を以て夢を買へり、香を竊むの男、壁をきるの女、世々に絕えず、危い哉、女生れて十六七、たびたび帶を結びかふるやうになり、男を見て、はぢらふやうになり、從つて古歌に所謂「世の中に戀しきものは父母の外にあらじと思ひしものを」の情も起るべし。而して世の父母は、女子教育の一方とて、之に歌を習はしむるものあり。誤れる哉、古今集以後の勅撰集をはじめとし、世々の歌集、その歌の中の十中二三は、戀の歌ならぬはなし、和泉式部をはじめとなし、古來の才女、何人か淫奔ならざる。又歌と共に、和文を學ばしむるものあり。誤れる哉、伊勢物語、源氏物語をはじめとし、和文の書は、多くは誨淫の書也。和歌和文の書は、一方には物のあはれを知らしむると共に、

一方には人を墮落せしむる也、今の世の賢母、良妻をつくるには、さまで必要のなきこと也。又琴を習はしむるものあり。誤れる哉、琴その物は、多少の雅致あれとも、琴の歌は、淫靡にして野卑なり。貴婦人令孃の口に上すべきものに非ず、もし新聞をよまむ乎、三面記事は、概して風俗壞亂の文字也。もし小説をよまむ乎、今の世の小説は、殆んどみな小説家のおのろけ筋也。危い哉、さればとて、之を室深くとざゝむ乎、その反動にて、男と見れば、車夫でも、馬丁でも、直に戀着するもの少からず。やかましやの道德先生の娘に、却て淫奔娘あるは、畢竟するに平生あまりやかましすぐる結果也。寧ろ思ひ切て、男女交際を自由にせむ乎、始のうちは、無論犧牲者多るべきも、習慣となれば、男も女も智惠がつきて、妄に戀たの、はれたのといふことはなきやうになるかも知べからず。嗚呼如何かすべき、品行に關することは、他より全く之を抑へつくべきに非ず、自ら知惠をつけて、自ら之を抑へざるべからず。むかし、白糸を見て泣しものありき。岐路を見て泣しものありき。余は二十歲前後の男女を見て泣かずんばあらず。



過失

人をそだつるもの、人を使ふものは、恩あると共にまた威なかるべからず。時には、うはべに怒つた顔もせざるべからず。されど、人は何人も思ひもかけぬしそこなひあるもの也。偶然の過失よりわが器物を損することもあるべし。かゝる時は、何人もわが惡きとは自覺し居る故に、むやみに叱るは宜しからず。たゞ氣の毒に思はするやうに小言云ふべし。一時の小憤に乘じて、かみつくやうに叱るは、敎育なき女が、小人かの事にして、紳士、貴婦人としては、自から大に品位をおとすべし。

あまり嚙みつくやうに叱れば、却つて氣の毒と思はずして、恨むべし、腹をたつべし、ひがみ根性にもなるべし、すねるやうにもなるべし、またうそつくやうにもなるべし。かくし事するやうになるべし。これ人をそだつる所以に非ず。人を使ふ所以に非ず。よく自から忍んで、人の過失を恕するは、紳士、貴婦人と小人、裏店の山神とのわかるゝ所也。

女房と疊

女房と疊とは、新しきがよしとは、何人か言ひはじめけむ。これ自然の人情也。如何に牡丹餅がすきなものとても、朝も、午も、晩も、今日も、明日も、之のみ食はゞ、必ずあくべし。目さきのかはるを好むは、活動する人間としては、尤も千萬なる事也。變化を好まねば、活動のなき老人にして、活動力の盛なるものほど、目さきのかはるを好む。子供の玩具に於けるが如き、その一例也。昨日好みし玩具を、今日忽ち破壞して顧みず。之を必ずしも輕薄と云ふべからず。英雄の美人に於けるも、亦之に類す。美食に飽ける人が、隣家の雜炊に舌打するとか。

夫婦の間には、幾分の敬意を要す。女つけあがりて、横着になり、我儘になり、本能的態度をほしいまゝにし、癪にさはるやうな事ばかりされては、如何に始めは目につきし女房とても、終に鼻につかざるを得ず。故に古人戒しめて曰く、お互の婚禮の晩の心持を忘るべからずと。

さらでだに、新しきを好む　人情の常なるに、敬意なくなりては、益いやにならざるを得ず。百年の戀もさめざるを得ず。よしや、外面にあらはして衝突せずとも、心にはいやなるべく、戀のさめたる形骸と形骸とが、かりに夫婦の外形をよそふもの、世には多かべし。

さは云へ、日本人は、年が年中、米をくらひてあかず。これ米のいやみなきによる也。夫婦間にも之に類するものあるべし。夫婦相愛して、狎れず、あなどらず、敬意を失はざらば、琴瑟長へに相和して、感情の衝突もなからむ。こは夫婦間最も注意して心得居るべきと也。

わけて。余は世の婦人に告ぐ。非常に熱するものは、又非常に又冷却するものぞかし。ばじめ非常の熱情をよするものを、一概に深切な、たのもしいお方と思はゞ、恐らくは、臍を噛むの悔あらむ。況んや愛になれて、之る侮るをや。

婦人は感情の爲めに左右せられ易く好惡の念最も切なれば人の母たるものは須らく猛省して子女の間に愛憎の差を生ぜさゞることに勉めざるべからす

プラシキー

初春の聲

澤宮すみ子

○初日出

自轉なしつゝ公轉ひまなかりし地球の、こゝに目出度う三百六十餘回を移りて、うらゝかなる初日の出の光景に接す、見渡せばつらなる七十二峰のそれ、雪に閉されて、冬の無情に戰くごとしといへども、而かも改りたる宇宙の現象に、けふよりはゆたかにほゝゑむのおもゝちありて、雪にかゞやく姿のうつくしや。

花より明くる春の曙、錦は錦なりといへども、けふ初日出の華麗に及ばん、紫だつ雲、美は美なりと雖も、けふ旭陽に映ずる雲の紅に及ばん、春はあけぼの、やう〳〵白くとつゞりし女詩人の、など新陽旭につゝめるオーソリチーをいはざりけん、今ぞ知りぬ、天地の美、或は夫れ春曉花にあけゆく折なるらん、蓋し宇宙の威嚴、元旦初日の出のおんすがたにこそ。

○日の御旗

世界新を迎へ、萬國祥を稱ふるのけふ、戶々にひるがへる國旗の、極彩色なるもありて、美術の點よりいはゞ或は我が國にまさるものもあるらん、嬉しきは我が日の本の御旗なれ、しみなくけがれなき白のまなかに、赤う、赤う、圓やかなる日の形ゑがゝれたる、天下ひろしといへども、是にすぐれたるがありや、論者或はいはん誇國の例、これを隣邦支那に觀ずや、已をほこるものは亡びのもとなり、國亦おなじと、これ一理ありといへども、けふ我等滿腔のよろこびを以て、いはひ壽ぐことの、ほこりはそれよ日章旗、ひら〳〵と、雲井の宮にも賤が軒にも、はたまた蒼海軍艦檣はるマストの上、ほこらん哉ほこらん哉、日本の國旗、日章旗。

○門松

[illegible]なるかな、目出度き元旦のはじめにあたり、門松や冥途の旅の一里塚とうたひつる人よ、我等はいひしらぬ歡樂に充されて、唯生あるのみ喜あるのみ、何ぞ必しも嬉しき元旦にあたりて、厭世の辭をつらぬるの要あらんやけふは死なし、涙なし、舞はんかな、うたはんかな。

見よや並ぶ軒に雙松、瑞をさゝげて、緑をこめつゝあり、神々しきしめ飾、竹をも添へたる風情の、變りなき預言をかたるがごとし、まして我等女性に、節操のたかきを敎へたる、こゝをくゞりて感いよゝ深し。

○若　水

日本はむかしより今も變りなき詩歌の國なり、風流國なり、若水をくみあげて齢をのぶる例優ならずや、歌人うたふて曰く

わかみづを今朝くみあげて結ぶ手にあまるや千代の雫なるらん

永遠を說くの民永遠をおもふの民なるを西より來ませる洋人諸氏猶且つ我等を迷信の民と誣るやいなや。

○新　年　山

税所篤子刀自は明治聖代の女詩人なりき、其うたふさころ實に高く、まことにすぐれ給ひし詩想の、むべなり皇后宮の御寵愛深かりしは、今やゆいて其人あらず、一葉をうしなひし女流界とは篤子刀自失ふて大なる損失を蒙りぬ。

新年望山の句にいさ目出度きがあり、借り來りて我がおもひうつさばや、曰く、

雲はれてあらたに見ゆる富士のねのみ雪やさしの光なるらむ

さ、たかき〳〵芙蓉峰に神代の雪かゞやくを以て、それが再び新しく見ゆる光景を示したる也、今年またこの高ねのおなじいろにやにほふらん、遙かにも〳〵おもほゆつ。

○むかしと今

大陰暦を用ひし昔は、新年にあたりて、梅をいひ鶯をいひ、霞をいひ、若草をいひたる、凡そ日本文學に現はれたる初春の光景一つとして長閑ならぬはなし、さらばなり、紫式部は源語初音の卷に於ける元旦の風景に曰く「年たちかへるあしたの空の景色、なごりなく曇らぬうらゝけさには……中畧……いつしかに景色だつ霞に木の芽も打ちけぶり」云々と、何ぞのごかなる現象にあらずや。

此の如くして我等が先人は、さしたつ日を迎へてたのしめり、今や大陽暦によろづの國とひさしきは嬉しけれどいはゆる過渡時代のかなしさは、文學のおもひで草、雪間のなかに、ましてこゝら信濃の山々、冬深く閉されて嚴寒肌を貫くばかり、手紙の上に初春の文字むかしのまゝなれども、こふりて解けぬ硯の水に生息ふきかくるそれすら氷りて、唯々新年こそほきを友なる人のあなたこなたへ。

○室咲

さすがに嬉しきは室咲の紅梅白梅、しほらしうかほりて、さゝやかなる春の面影このもとにぞかよひつ床の間に飾られて、福壽草と新年の床飾となるいとやさしき花のこゝろなりけり。

○福壽草

目出度きはこの花の名なれ、人生誰か福と壽をこひねがはぬものやある、夫れ甘泉殿の春の夜の夢、心を碎くはしきなり、驪山宮の秋の夜の月、をはりなきにしもあらずと詠じたる、すべての人間が、福と壽をこひ願ふて而かも捕へがたきをうれひたる反響にあらずや、こゝに於てか、此の初春の一草花にこの名を附して漸う心を慰めつゝ、飾れる人心卑しといふ勿れ、到底まぬがれ難き限りある世に、我等暫らく、この花をめでん、あはれ目出度き福壽草かな。

○うたがるた

近頃ものはづかしき教育を說く人いでゝ小倉百人首のとしわかき男女に害多きをいひ改良々々といひて是を改めんとす、まことに美妙なれ共、ひさしき年月、慣れむつみ來れる百人首のいかでか〳〵人心の記臆より取り去るを得ん、まことに勞して功すくなしといふべしきくならく西洋人はクリスマスを以て、一歲に於ける尤もたのしき期となし、エバーグリン室內に飾りて、いはひことぶくさま、大かたの人知り給ふらん、其際誕祭に對する想はむかし〳〵親父祖母の時代よりつたはり來りて、此の日の光景大人小人交りて喧々たるさま、多くは日本に見いだし難き歡樂とやかの國に多年もの學びし君の仰せられぬ。

然り、祭禮といふもホームを離れての歡樂なり、室內に行はるゝよろづのものゝ心よりたのしきは蓋し歌がるたのみならんか、男女七才席を同ふせずとのいかめしき隣邦支那の敎化深く行はれし我が國すら、特にこのまとゐのみはゆるされて、異性兩々技を戰かはしたる寧ろいぶかしき事なれども、このまとゐや甚しき害毒を流してわかき青春の男女をみだせしをきかず、そを今の教育家ものはづかしく論じ給ふ、あな心せまや。

まても〳〵うつくしき宮のこよひ、この加留多會にて黃金の尊きを知り初めあたゝかき貫一が愛より離れて富貴をおもふ種子を作りぬ、このまとゐだになくば熱海の悲痛ふたりが歎もなかりしにと、ふとおもひおこしつ。

我が愛する明治の姉妹よ、御身等まれ價三百圓といふダイヤモンドの光に眼くらみて、終生の悔をくりかへし給ふな、聖賢道を說くにあたりて、黃金これ最大のものとは敎へ給はざりき。「其中尤も大なるは愛なり」

家庭

東西の花と女

巖谷小波

花は、美しいものである。愛すべきものである。花は、實に自然界を彩る模様である。装飾である。女は、美しいものである、愛すべきものである。女は、實に人間界を彩る模様である、装飾である。花の最も愛せらるるところは何にあるかと言へば、其の美にある。女の最も愛せらるるところは、何にあるかと言へば、情の權化、若しくば愛の權化、即ち美なる點にある。

自然界に於ける花と、人間社會に於ける女とは、相對して殆んど同樣の地位に居り、また同樣の素質を有して居るものと言はなければならぬ。されば、洋の東西、各其の品こそ變れ、其の風俗こそ異れ、處として、花を愛せざるところもなければ、また女を愛しないところとては無い。

而して、此の相似たる花と女とは、國の風俗、處の習慣の上に、如何なる關係を持つて居るか、將た、此の花の培養と女の敎育が、時の思潮、時の流行の上に、如何なる關係を保ちつゝあるかといふやうな事は頗る興味ある問題で、また必らずしも、好奇の二字を以つて、評價し去らるべき問題では無からう。

で、余は、心づくまゝ、今茲に、余の淺い觀察を基礎として、東西――即ち日本と西洋――の花と女とを相對して、以つて一の比較研究を試みやうと思ふ。

まづ、東――日本の方から觀察すると、日本の花の愛され方は、唯だ花其のものゝみに止まらずして、或は其の枝ぶりだとか、或は其の葉なみだとか、又その香氣とかいふものと幷立つて、其の美を賞せられつゝある。是れを折つて床の間へ飾るにも、たま〳〵自然

のまゝに挿す、突込挿式などの類こそあれ、多くは石州だとか、遠州だとか池の坊とか、千家とかいふ式があつて、それに隨つて枝を矯め葉を揃へ、自然の趣によつた、人工の妙を加へて飾ることゝなつて居る。且つ、其の飾るのも、大抵は、床の間の隅の、薄暗い處へ引込めておいて、唯だ僅に家內のもの、若しくば此處へ入つてくる、少數の來客を喜ばしむるに過ぎ無いのだ。

　女に於いても同樣である。日本の女の愛され方は、自然のまゝに發現される趣に依つてでは無い。寧ろ此の自然の發現を抑壓することに依つて、却つて憚ばれつゝある傾がある。其の女らしい自然の儘を、充分に發揮した點に依つてでは無く、或は其の德であるとか、或は其の操であるとかいふものが、大に是れに與り加はることゝなつて居る。そして、社會の飾となる上に於いても、多くは、裏面に隱れて居て、唯だ僅に家人の飾となるに過ぎず、廣い社會の飾となるやうなことは極めて少い。つまり其の飾になるといふことが、社會的ではなく、個人的であるといふことができるのである。

　さて、西の方はと言ふと、西洋の花の愛され方は、專ら其の花の色香にある。自然のまゝに咲き滿ちた、其の花の色と香を愛するのである。是れを飾るにしても、唯だ所有者一個に私しないといふ風があつて、故更に他に見えるやうな處にならべ、庭ならば、成るべく他の見ることのできるところに植ゑ、進んでは、垣根などに、わざ〳〵他に見せるやうにと植ゑるものもある位。

　是れと同じやうに、女もまた、其の女らしいところを充分に發揮して、全く其の情の、包みなく、矯めるところなく發揮された、つまり、自然のまゝに表現された、其の美を愛する風になつて居る。そして、つとめて是れを廣い社交界へ連れ出し、美しいものであれば、唯だ一個人の裝飾とはせず、是れを社會の裝飾としやうとして居る。

　更に飜つて見るに、日本の花の王はと言へば、櫻で

ある。櫻といふ花は、誠にしとやかで、やさしくつて、温和しい花である。其の色に於いても、眞紅でもなければ、また眞白でも無い、淡泊な、あつさりした桃色である。是れと同じ調子で、日本では、唯だ々々しとやかな、やさしい、温和しい婦人を、其の理想として居る。

ところが、西洋の花の王はと言ふと、これは薔薇である。眞紅もあれば、眞白もあるが、すべて濃厚で、思ひつきり其の自然の趣を發揮して居る。充分濃い色もあれば、鋭い香もあり、また刺もあるといふ風である。婦人に於いても、また充分に其の自然の特性を發揮して、矯むるところなく、曲げるところなく、包むところなく、其の情をあらはし、其の美を表現し、其の代りに、また刺のやうなピンとしたところのあるのが、蓋しその理想となつて居るらしい。

見玉へ、日本の女は、たとへば、飛びあがる程嬉しいことがあつても、靜乎と抑へて居るやうに、突伏したい程悲しい事があつても、わざと涙を出さないやうに、常に修練されて、悲しい時にも泣かず、うれしい時にも笑は無いといふ風に、情を矯め、情を抑へることを以つて賞賛すべき事として居る。が、西洋の女は全く是れに反して、人を愛して居るなぞの場合にも、敢へて其の情を僞るなく、愛して居るから愛して居るといふし、悲しい時には、何處でもかまはず泣くし、嬉しい事があれば、何時でもかまはず笑ふといふ風で、其の情を自然に任して、無遠慮に表現するのである。

また西洋では、花が、すべて人の情の表現と同じ事になつて、花に依り、また花の色に依つて、特別の意味が附托されてゐるくらゐである。例へば人を訪るのに、日本ならばちよつと手土産を持つて行くといふ時にも、多くは花を持つて行く。夜會があるとか、御馳走になるとかして、日本ならば、お土産に折を持つて歸るといふ場合にも、先方の情を充分に受けた印として、其の場に飾られた花をもつて、襟に挿して歸るといふ風になつて居るが、日本では、葬式の時すら、生花御贈與は堅く御斷り申上候とか言つて、態々他が

情を籠めてくれた贈品をば、ひげに斷るやうに成つて、其間甚しく趣を異にして居る。

要するに、花にしても女にしても、日本ではあるもの丶爲めに、自然から起る情の表現を、故更抑へ曲げるのを以つて、大に感ずべき事とし、自然に任して、其の情を現すことを、却つて賤む傾があるが、西洋では、此の自然に依つて喚起された情の表現を以て、何等恥づべきこと丶せず、寧ろ、其の情のま丶を何處までも表現することを至當とし、又憚んで居るので、隨つて東西とも、各其の培養敎育を異にして居る。

唯だ一つ茲に面白い對比は、日本には、花見といふ特別な習慣があつて、櫻にしても、梅にしても、若しくば菊にしても、衆人一般に此の花のもとに集り、此の花のほとりに赴いて、相



共に是れを見て樂むことがあるが、それと同じやうな譯で、また女の方には、遊廓といふものがあつて、こゝは一般衆人の觀を買ふところとなつて居る。けれども、西洋には斯ういふ事は無い。花は、常に公園のやうな處にあつて、四時絶えず咲き、春秋相代謝して、其の芳を發しつゝあるので、花見といふやうな風に、一時に此處に集り、一時に此處で狂ひ遊ぶといふことは無く、いつも同じやうに、個人々々各〱氣にむいた時に、此處へ來て其花を見、以つて其の樂を受けつゝあるのである。が、其代り西洋では、日本などに絶えて見かけ無い辻の花賣と云ふものがある、街の辻で花を賣つて居るものが多い。これは丁度彼地では、賤むべき階級の女が、往來を徘徊して業を營むのと其趣を同して居る。



然し、日本では、まだ公德が發達しない結果、能く此の花を見に行つて、衆と共に樂むべき土堤の花を折つたり、公園の花をむしり取つたりするものが決して少くないと同時に、遊廓などに居る女を、態々廓外へ根引して、我一人の慰みにするのを、更に何とも思はず、また社會も是れを容認して置くやうであるが、西洋では、決して斯くの如きことはしない。是れは、衆と共に樂む花だ、是れは一個人の私すべきものでないと、公園などの花を、ひそかに折り取つて家へ持つて歸るやうな事をしない。女に於いても、斯くの如き處にある女は、決して、是れを我が家庭へ移し入れるやうな事をしないのである。もし斯くの如きことを敢へてする者があれば、他は是れを嗤ひ、社會は是れを爪彈きする。

東の花と女斯くの如く、西の花と女斯くの如く、同じ花といひ女と言つても、其の理想とするところ、其の特色とするところに、少からざる相違の點がある。が、次第に交通の道開けて、東西比隣の如くになつた今日、園藝術の進歩から、東の花のすべては、既に西の園に移し植ゑられ、西の花のすべては、即に東の庭に取り揃へて見ることができるやうになつた。女の風俗、特色に至つても亦然りである。

ひそかに情勢を察するに、此の頃日本に於いては、その特色の枝ぶり葉なみを顧ること少く、櫻若しくば梅的の美を捨てゝ、何うやら西洋の花的、西洋婦人の特性を習はんとして居るやうに見える。然るに、西洋では、此の頃に至つて、其の自然のまゝに表現される情の弊に追々堪へなくなつたか、段々其の枝ぶり葉なみなぞを、彼れ是れいふものが殖えて來て、何うやら東の花、日本婦人の特性に似んとする傾向があるやうに見える。

花を培養し愛するものとして、東の方がよいか西の方がよいか、女を教育し愛する上に於いて、西の方法がよいか東の方法がよいか、將た、斯くの如く變化の傾向を帶びつゝあることについて、西洋の特色を學ばうとして居る日本の傾向が可か、日本の特色に似んと

しはじめた西洋の傾向が不可か、是れは、茲で論斷する問題ではない。只余は、兎に角も目下の現象の、頗る奇である事を認めたから、試みに之を陳べて見た、此勢で双方から進んで行つて、遂に其特色を交換し、その地位を轉倒したならば、それこそ更に奇なものであらう。

良家風の紹介

羽仁もと子

今の若き婦人、殊に女學校出の人々が、家政に拙いと云ふことは、八釜しく申されるとでありますが、實際自ら省みて私共はじめ實に赤面することが多いので御坐います。之に反し西洋婦人は學問も出來、社交にも長けて居て、しかも家事の取締が實に巧みでありますゆゑ、何所でその樣なことを稽古するのかと、聞いて見ましても別に之と云ふことはないので御坐います。また日本の家庭は一体に、不秩序であるとは申しながら、私の平生見聞いたして居ります丈でも、隨分整つた家庭も御座います。その主婦方と雖、別に何所で家政をお習ひになつたといふことはないのです、唯不規律な家庭の主婦と異つて居るのは、その小事にも注意深く、眞面目に机帳面に物事を所置なさるといふ丈で御坐います。で、婦人天然の緻密なる性情を以て家事に當りましたなら、嫌でも家が修まらねばならぬ筈かと思ひます。

然るに昔の婦人の專心家內のことばかりを、思つて居りました時代にくらべて、今は追々世の有樣もうつり行き、殊に女學生は學校に於て、夫婦とか、家庭の理想とか、その他種々のことを聞き覺えまして、思想が復雜になつて居ますので、等閑にする積りでは決してないのでありますが、我しらず家庭の實務に注意の力の充分でない所が出來て來るのであらうと思ひます。家內のことは綿密な規律一つで修まるものでありますゆゑ、之より私の存じて居ります良家庭の御規律を伺ひまして、皆樣の御參考のために掲げやうと思ひます。

山脇家

山脇家と申せばみなさん御存じの山脇玄君の家庭であります、夫人は社交界に知られた房子夫人です、始終出入なさる方でも、恐らくその亂雜であつたことを見た方はないであらうと思ひます。獨り客室のみならず、部屋々々に塵一つ落ちては居ず、床の間や硝子戸はいつも鏡のやうに磨かれて御坐います。來客がありましても凡ての要意に何一つ手落なく、常に餘裕を示して居られますのは皆人の感服する所です。

殊に山脇夫人は今の名流婦人の中に於て、最も年若く、その關係せらるゝ婦人會も大層多いのでありまして、午後は大抵外出を餘儀なくされたといふ、多用のお方でありますゆゑ、その家政の整つて居ります事に向つて、私共は一層に感服の情を深くするので御坐います。

一日夫人に家庭の御規律幷に一週の献立等を伺ひした所と、

「内向のことで御坐いますゆゑ、公けにすることは少し迷惑の樣にも思ひますが、お互に家事を研究する一助で御坐いますゆゑ、お目に懸ることに致しませう」

と當日使をおよびになつて、取寄になりましたのは、女中名々に渡してお置きになります次の書附でありました。猶山脇家の御家族は、御主人玄氏、夫人房子氏と御親戚と御懇意さきから預つて居られます香蘭女學校と東京女學館に通學の令孃二人、此外に車夫一人、女中四人で御坐います。

▲中働き

一定時離床、口を嗽ぎ髮を梳り帶を假に結ぶ。
一雨戸開閉。七、六、三疊幷に廊下拭掃除。
一ランプ掃除。
一十五、四疊半、洋間ツヤブキン。
一扮裝。
一主人食事中挨拶。

一毎食事後洗物を清潔に拭き奥次の別を明かにし布巾は毎回洗淨乾かすべし。
一裁縫。
一十一時半晝食料理。
一一時より裁縫。
一四時半料理手傳。
一晝着始末、日沒前點燈。
一夕食かたつけ後隨意。
一奥ひけ後着物始末。
一夜十一時必ず消燈就床。

一會計受持、奥出入着衣の世話。
一來客の時は勿論取次、呼鈴等小間使手間のとき手傳ふべし。
一月曜日洗濯物扱、水金曜日二階雜巾掛。
一洗張物、解物、切地、綿等始末。
一月曜日西洋間、火金曜日十五、四半、六疊拭掃除。
一木曜日戸棚、棚、押入掃除。

一壹月一回ガラス拭。
其他臨時用は臨機所置すべし。
仕事中雜談大笑或は小歌す可らず。
食物扱中手放しにてクシヤミ、セキすべからず。

▲小間使

一定時離床、同上。
一火鉢掃除、十、六疊拭く。
一ランプ掃除。
一扮裝。
一六時半膳立給仕（目下は七時半）
一主人食事中挨拶。
一火鉢、新聞、郵便を備ふ（居間に）。
一毎食事後洗物を清潔に拭き奥次の別を明かにし毎回布巾を洗淨乾かすべし。
一十一時四十五分膳立給仕。
一晝食後裁縫（三時茶菓を居間に持參）。
一四時半風呂場に小物用意し奥へ報知す。

一五時四十五分膳立給仕。
一夕食形付後隨意(八時半茶要意、奥ひけ後新聞紙等始末)

一取次、呼鈴掛り。
一茶器、風呂敷始末。
一家人出入の時履物、帽子、傘、杖掛り。
一來客の時は叮嚀に取次、茶煙草盆を供し履物所持品等に注意、客去る時車夫を呼び外套帽子等を用意す。
一月一回ガラス拭)
其他臨時用は臨機所置すべし。以下同上。

縫　婢

一定時離床、同上。
一玄關明け雨戸開く。
一十、六、九疊掃除。
一緣側雜巾掛)

一辨當拵。
一扮裝。
一主人食事中挨拶。

一厠の水手拭注意。
一當日料理品用意。
一裁縫。
一四時半夜食料理。
一床拵、雨戸閉、翌日の辨當菜の用意)
一十時郵便の來否を見、玄關を閉ぢ、戸締火元注意。
一十一時には必ず消燈就床。
一女中頭の心得あるべし。
一日用品の有無に注意すべし。
一月曜日西洋間、火金曜日十五、四半、六疊拭掃除、木曜戸棚、棚、押入掃除、器具を改むべし。
其他臨時用は臨機所置すべし。以下同上)

飯　焚

一定時離床、同上。
一勝手口湯殿の戸を開け火を焚附け湯を鐵瓶に取り飯焚。
一味噌汁拵。
一前夜の茶器を洗ひ勝手元掃除。
一湯殿用意。
一飯を移し漬物毎食用意。
一湯殿形附。鍋釜洗し
一飯後洗物は大桶にて清潔に二度洗ひ笊にあげ次のものは必ず別に洗ふべし。
一竈、七輪、掃除油引く、戸棚板間雑巾掛け。
一日用品の有無注意し
一洗濯物或は仕事。
一十一時半晝食惣菜用意。
一二時風呂焚附く。
一四時半夜食用意。
一常に水甕に清水を充たし置くべし。
一漬物注意。
一勝手、湯殿戸締。
一十一時必ず消燈就床。

一火土曜日厠掃除、月曜日茶碗を磨き、水曜日戸棚大掃除、風呂後金盥みがき湯殿桶を清潔に始末。
一來客の車夫に火鉢茶を與ふ。
一流し元、井端、桶類、常に清潔にすべし。
其他臨時用は臨機所置すべし。以下同上。

以上の規則をよく注意して見ますなら、その仕事くばりの巧みと、綿密なるに驚かれるでありませう。殊に山脇夫人は充分の親切と威厳を以て召使に接して居られますゆゑ規律はすべて遺憾なく行はれて居るのです。夫人はかつて左の如く語られました。

『私は前から女中に運のよいものと見えまして、云ひつけを等閑に聞くやうな女は一度も宅に參つたことは御坐いません。唯仕事の出來ばえはどうしても新しい一二週間は充分でありませぬゆゑ、掃除にしても粗末で御坐いましたら必ず仕直させるので御坐

います。

雇入れには吟味致しますけれど、一旦此方の眼鏡で雇入れた上は、信じて使ふといふことは最も大切であると思ひます。外出の時なとよく箪笥に錠をおろして置くといふことをも聞きますが、私はどうもその様な事は嫌で御坐います、錠をおろして置くものは、出掛けに鍵を預けるので御坐います。凡て仕事の持場なともよくきめまして、召使にそれ〳〵責任をもたせるのが大切かと思ひます』

夫人の女中運の好いと云はれますのは、慥に御使様のよいのであると思ひます。女中の風儀のよいこと陰言のなきこともまた同家の特色で御坐います。

また夫人御自身の規律を伺ひますのに、朝は此頃六時半にお起きになり、寝室と西洋と日本の客室を手づから掃除し、湯殿に於て微温湯にて毎朝全身を拭き、髪を結ばれ(束髪)着物を着換へ八時食卓に就かるゝので御坐います。食事後新聞、御主人出勤後、手紙をしたため、次に讀書、午後外出の時は必ず髪をなほし、顔を洗はれます。御主人御歸り前には歸宅され入浴(隔日)六時に夜の食事を取られ、夜はその關係せらるゝ慈善會のために編物などせられます(御主人は此間大抵讀書されますので、夫人は側に聞いて居るのです)。十時就眠の前に夫人自身の日記と家計簿は屹度おつけになります。

土曜日の夜は、別居して居られます令孃方御夫婦や、親戚の若き方々などおいでになりまして、夫人はオルガンにかゝられ、御主人をはじめ種々の唱歌などありまして、誠に賑かで御座います。

日曜日午前は多く會堂に行かれ、午後日和よき日などは前の方達と連立つて散歩に出らるゝこともあります。下着は預かつて居らるゝ令孃方までも、是非一週一度のこらず着換へることになつて居ます。

風呂のなき夜は(即隔夜)一時間餘づゝ夫人自ら女中にやさしき讀書また心得になる事柄を話してお聞かせになります。

夫人はまたいつも健康なお方であります。ソシテ『始

持病氣になる方はどうもお弱いばかりでなく、不規律であつたり無性であつたりする爲かと思ひます』と申して居られます。

なほ同家の最近一週間の献立は左の如くであります。

▲晝

日	月	火	水	木	金	土
さしみ だいこん とうふ	さかな はうれんそう	たまご つくだに	さかな あぶらあげ	にく とうふ	たまご ひもの	さかな いも ふ

▲夜

日	月	火	水	木	金	土
びーふてーき つゆ すのもの うまに	はむ とうふ のわん かけ さといも	やきざかな ひたし つゆ	しちゆう はす になます つゆ	さしみ しらたき つゆ	ろうすびーふ ごぼう つゆ	にざかな つゆ まめ ごまよごし

山脇家にては預かつて居らるゝ令嬢たちも、また來客にても改らぬ向きは、皆主人御夫婦と同じ食卓に賑かにつかれます。

加納子爵の家庭（上）

加納子爵(久諟)は、上總一宮の舊藩主である、永い間官海に在て學校長・裁判官、縣知事等の職を奉じて居られたが、去る三十三年以來は民間に退き閑散の身と成られ、目下大日本軆育會長に推されて居る。豫て子爵家の家庭の整頓に就いては聞いて居たのであるから一度同家を見舞ふ可く望んで居た所、遂に會見の機を得たので、去る日の夕子爵を大森の邸に訪ふて家庭上の話を乞ふ事と成つた。導びかれて應接室に入ると和洋折衷の客間は極めて清楚な作り、立派に秩序立ッた處ろはそゞろに御主人の平常もしのばれて奥床しい感じがした、

子爵は寛濶な態度で、遠路の處ようこそ御運び下さいました、元より骸骨を乞た一地方官の非役官吏の隱家で御在ますから、態々御出を下すつても別段御聞に入れるやうな面白い話も御在ません、ハイ私共の家庭に就いて咄せとの仰言で御在ますか、是と申しても矢張

普通の事を行つて居る許で敢て申上る程のものは御在ません、が併し、折角の御出でありますから、私共一家内の有形の儘を御咄し申すことに致ませう

▲家庭衞生　支那の語にも親に事ふる醫を知ずんば有る可からずと言て御在ます通り、是は親を經として說いてあるが、親の爲許では無い、一家を取賄ふ上に於て醫療看護の一通りを心得て置く必要がある、私の家は子供が六人からも御在ますので、初中爪を剝したとか足を摺むいたとか、刺を立たとかいふやうなとも絕えず御在ますから、斯いふ時の用意として石炭酸、グリスリン、膏藥等を初め其他の藥品綳帶なぞをも備へて置きます、假し醫者に診て貰ふにしても、其迄の間の手當の仕方を心得て居ります」、子供の世話許で無く、第一下女を使ふ上などに於ても非常なる利益で御在ます、達者で克く立働いて與てこそ主人の利益になるのですが、一朝怪我でもして手當を怠つた爲め、十日も廿日も寢込んで日々の勤勞を廢するやうに成ては双方の損で御在ますから、此の救急手當の心得は家政上に大層役に立つのであります、家内は廿七八年の戰役の折特志看護婦として傷病兵を取扱つた御蔭で、藥名や綳帶術を覺えましたで、今では其を家庭に應用して居るので御在ます。

▲子女の敎育　大切な事で御在ますから親の義務として國民敎育は申すに及ばず、進んでは當人が望む所の學校へ入學致させ、留學の必要を認める年頃となれば、洋行をも致させます、私は子女の敎育に要する費用は決して惜しみません、其故私共では一家の經濟中敎育費の目を第一番に置きます、而して殘餘の僅少の額を以て私共の被服費やら交際費やら又は雜用に充るのである、惣領は十七に成りますが是は學習院に往きます、次男は海軍豫備校に入れて御在ます、女子三人は永田町の學校に通はせて在ます、是は後で御咄致すとして、何しろ惣領は年長丈に餘計に金も掛るのです、運動會の會費とか端艇競走の出前とか學友同士の交際費とかいろ〳〵の請求を申出ますが、是等の請求に就きましても制止がましい事は致ません、尤も一應は其

の理由を糺した上で奇麗に清く出して遣ります、つまり是等は敎育に伴ふ當然の入費で在つて見れば致方が御在ません、家内が此の金を保管して居りますが場合に依つては甲乙互に融通させる事も御在ます。

▲學校の往復　子供達が通ひます學校は御承知の通り遠方の事で御在ますから、大森から新橋まで滊車に乘せて遣りますが、切符は下等のを買はせます、世間では華族とか物持とか申す身分に成ると子供に迄得て贅澤をさせたがり滊車に乘るにも一等切符を持たせるやうな風も御在ますが、私共の子供には一切爾いふ奢侈は許しません、つゐ此先の某家では、矢張子供を東京へ通はせるのですが、是は何時も一等滊車で意氣揚々と押出ます、だから外觀は大層立派で、成程當人の心持は快いかも知れませんが、併し私は是等の子供を見ると誠に氣の毒に思ひます、萬事がこんな鹽梅では折角學校で敎育された事も側から打壞して了ふやうなもので、何も成たもので無い、元來國民敎育は四民一般平等に受けべきもので在て身分の上下に拘つたものでは無い、華族だからと言つて特別に敎授を親切にする筈は無いのであるから、滊車も亦た國民的の物に搭じて善かるべき筈で、上等の物を撰ぶ理由は毫も見出し得られ無い、其故私共では斷じて三等以上には乘せませぬ、尤も雨降りなぞの折は歩かせるのも如何ですから、此下から俥に乘せて遣りますが、其外は何時も新橋まで三等切符を買はせ、後は歩かせることにしてあります。

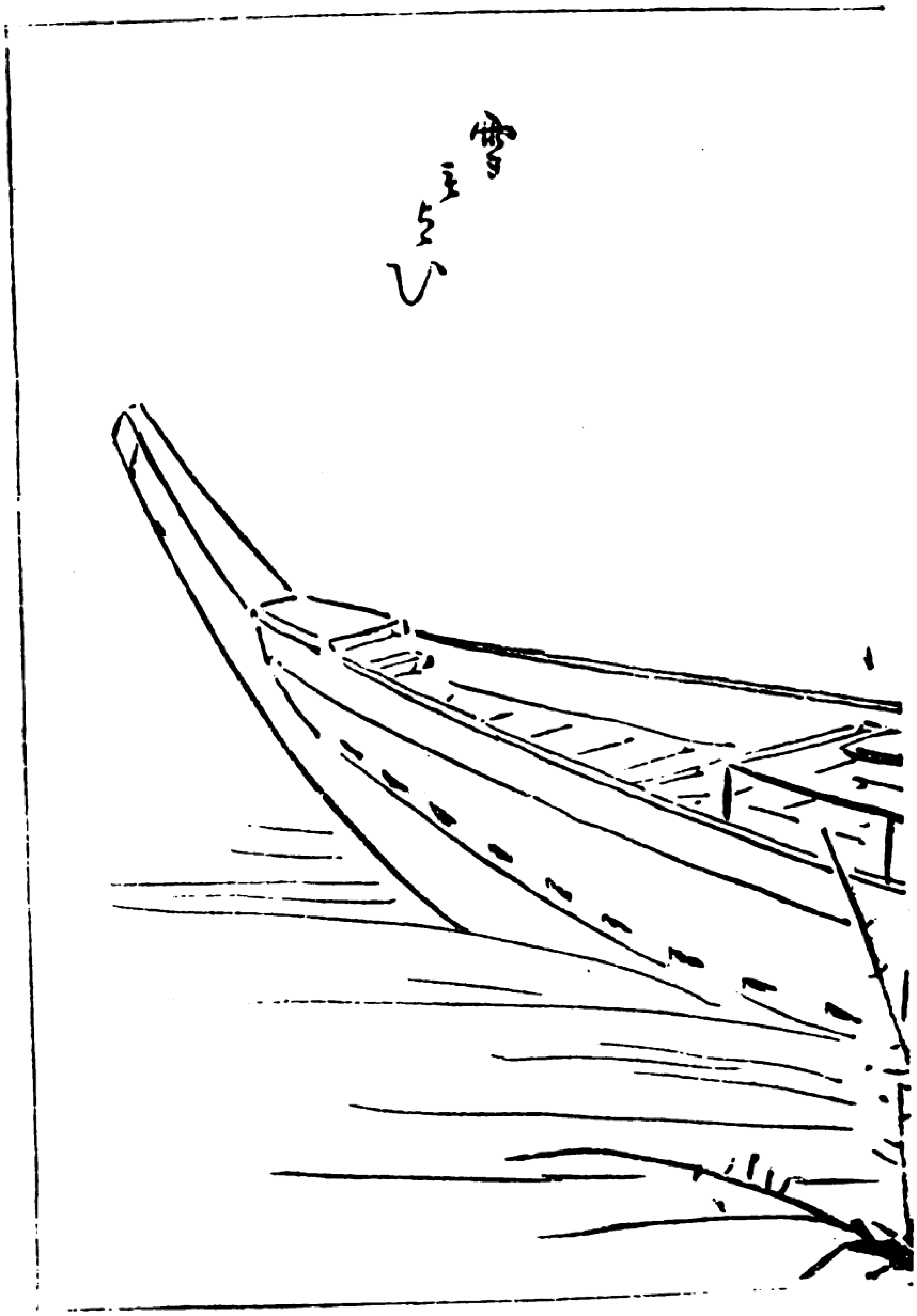
▲子供の體育　毎日食後には前庭で子供達に運動を致させます、軍歌なり唱歌なり歌はせていろ〳〵の遊戲運動を行ふので御在ます、惣領の男はサンダーの鐵啞鈴を頻に行つて居ります、併し何時も何時も、同じ事許り繰返すと飽きが來て、御勤めのやうに成て了ひますから、是を防ぐには運動に興味を持たせて調子付て遣らなければ不可い、でオルガンを購めまして、家内が之を彈く事に致しました、其柄は音樂の調子に合せて運動しますから大層面白味を感じたと見えて、毎日食後の遊戲を樂にする樣になりました、此の樂器に付

いて御咄致しますれば、昨年亡りました母で御在ます是は大變孫達を愛して呉ました、兼てより生命保險に掛けて在りましたが、歿します折の遺言にも孫達の敎育を心配して呉まして葬儀の費用は節しても宜いから保險金は何ぞ子供の爲に成る物にして呉ろとの遺言で御在ましたから、其厚意を無にせない爲め、其金でオルガンを求めましたので御在ます。



▲四季の遊山　其から年には凡そ四回程家族の惣遊山を致します、此時は子供六人に私共夫婦、下婢下男に至るまで家内擧つて惣出を致します、併し一人の留守番丈を殘して後は總体出掛るので御在ます、汐干時なら品川の海濱とか、紅葉時なら瀧川か王子とか、又は淺草の

観音とかへ詣つて、子供の言ふが儘に玉乘も見せる、花屋敷へも這入る、凌雲閣へも登る池の端へ立止つて子供と一緒に麩を投げたり致します、而して歸途は仲見世邊で散財して、御馳走も澤山に並べて、たらふく喰はせ充分に一日の歡を盡すので御在ます、而して喫べ切れない殘りの品は折にして貰つて、留守番の者への土産



として持て來て遣ります、ですから貧乏籤に當つた留守番といへど此の土産を樂みにして居るから、共に快樂を分つ事が出來るので有る、此時丈は往復共に上等滊車に乘せて遣ります、かうすれば僅か五六圓の散財で家族一統の快樂が買へるのですから、是程安いものは無い、若しも是が私許で往くとか、姉許を連れて出掛たと

かいふ事に成りますと、外の者は屹度面白く無い、だから自分一人愉快な思ひをしても他にはうかと咄す事も出來ない、一家は茲に忽ち秘密の雲を生じて遂には波瀾の基とも成る、けれど家内中揃つて出掛た塲合には決して恁んな心配は御在ません、遊は其日一日丈のもので在つても、其話は二日も三日も續いて、誰かゞ思出して話掛ると他の者も亦た思ひ浮べて其に答へる、問ふ者も話す者も共に其日の遊山に連つたのであるから、誰に遠慮も要らない、各々思ふまゝを談笑嬉語せられるのであるから、誠に愉快で御在ます。

▲家庭演說　子供には言葉の組立方を覺えさせる事が肝要であります、敢て饒舌を奬勵する譯では無いが、自分の思想感情を吐露して相手に其を適當に傳へるには、何うしても平生に於て話し方の練習を致して置かなければならぬ、設令へば茲に千斤の重量ある感情を畜ふるものとする、是を相手に語つて千斤丈の重量を感受せしめやうとするには、話術に待つより外は無いのだから、毎土曜日の晩には必ず子供演說會を開いて、話術の實習を致させます、會塲は六疊の室で、會員には宅の子供六人に隣家の子供が二人、尙は婢僕共も加はつて居る、而して會長には惣領の兄貴が成り、私も亦た名譽會員に推されて居ります、矢張演題を設けまして、輪番に一塲の演說談話を試らせます、子供に向つて六ヶ敷い雄辯學の理を說いた所が何の多足にも成りませんから、今は唯だ私が話し方の手本を示して、其に倣はせるやうに致して置きます、爾で無くてさへ子供は親の眞似はしたがるものですから、私が此會に出席しての演說は實に責任が重いので在る、縣會や國會で致します演說よりも、子供を前に置いた家庭の演說の方が遙かに困難であります、其柄又た私は此の會を利用して召使共の過失や落度を其と際立てずに事に假託けて遠廻しに諭し聞かすのである、關係者は勿論悟つて省みも致しませう、他の者も亦た此の爲に多少利する所が御在ませう、其故一人宛側に呼付て荒々しい小言を申すよりは遙に此の方が利目が在る事と思ひます。

▲子供の寢時　午後七時に成ると號鈴を鳴らして其と同時に娘三人を臥せます、兄達の方は年も長けて居りますから、妹共よりは一時間遲れて八時に寢せます、是も矢張り號鈴を用ゐるので御在ます、私共の家では寢るにも起るにも食事を致すのにも總て號鈴で知らせますが、這う爲ると無駄に費えべき時間を省いて、非常に時間上の經濟にもなり、且つ又た家事の萬端がキチンと極が付いて誠に工合よく參りますから、寢食共に此の號鈴を使つて居ります、尙又た家庭敎育の上から見ましても、此の爲に時間の觀念を嚴格ならしめ規律を守る習慣を養ふ事が出來るので御在ます。

▲子供の貯蓄心　子供の内から貯蓄思想を養ふのは頗る善い事で御在すまが、併し年もゆかない子供に夢闇に貯金を勸める事は大に考へ物であると思ふから、小さい娘達には未だ貯金と言ては致させません、來年あたりは其丈の設備も整ひますから、そろ〳〵貯金を始めさせやうと思ひます、往々小學校の生徒に敎師が干涉して貯金を厲行して居る所があるけれど、甚だ可くない事だ、未だ勞働も出來ない、金錢の何物たるをも解せない子供を捉らへて夢闇に貯金々々と言つた所、果して何程の利益が御在ませう、金錢は勞働に對する報酬として初めて獲らるゝものだといふ觀念も無い時代に貯金を促すといふと、其の子供は親に迫つて金錢を强請るに違い無い、中には橫着な子供に成ると途中で飴菓子を拈つて了ふやうな事もある、して見れば結局子供の心に親の金さい强請つて來れば善いのだから、貯金は容易く出來るものだと言ふ樣な考を持たして、惡い習慣を付るに過ぎない、だから貯金をさせるのならば相當の勞働をさせて、其から得た物を貯蓄させなければならない、例へば雞を飼ふとか豚を養ふとか靑物を作らせるとか、子供の腕に堪へ得られる丈の働をさせて置いて、而して後貯金をしたならば其の效果は善いに相違ない、其故私の所では二十羽の洋鷄が飼つて御在ますが、來年は此内の一番を村方の學校へ寄附して、試驗成績の優等の者に賞品として遣はす積である、之を貰つた子供は雞の面倒を見て產ませた

玉子から何分の利益を得て、貯金するのですから、是なれば利殖の道にも協ふのであります。

冬の育兒

ドクトル　川瀬元九郎

寒冷なる空氣は身軆の諸器官を刺戟して其の機能を旺盛にするもので、世界中に於て人間の發明した强壯藥の最上なるものであります、然るに小兒が冬になると風邪に罹り易いからといふて大に恐れて葉山や鎌倉なぞへ避寒に赴くものが仲々多くあることゝ思ひます、成る程土地を變じて休養することは勿論身軆に取りて効能はありますが、冬の空氣は恐るべきものでなくして寧ろ歡迎すべきものであります、風邪に罹るのは空氣の惡いのでなくして注意が足りないからであります、玆に一二の注意を述べて育兒者の參考の資と致したいと思ひます。

衣服に就て述ぶれば、衣服を以て全身各部を能く保護しなければなりませぬ、冬中は必ず足袋又は毛糸の靴下を穿がたせ、フランネルを以て製したる襯衣と股引を着せて胸や脚部などが冷氣に暴露されない樣に致さなければなりませぬ、胸部には心臟と肺臟といへる重要なる器官を收容してあります故に此部を冷氣にさらす時は容易ならぬ結果を來たします、又脚部を冷やす時は身軆の上部へ血液を追ひ遣るから自然に感冒や氣管枝加答兒其他の呼吸器病に侵され易くなるのであります、小兒は始終活動して居て一瞬間も靜止して居ることはないから通常の日本服丈けでは甚だ不充分であります、小學校や女學校へ通ふ女子に靴を穿つことが流行して來まして至極結構なことであります、佛蘭西流の高踵の靴だけは廢止して貰ひたい、又寒中着物を短く着て薄き靴下一重では脚部が冷却するから見惡くいけれども可成毛糸で編んだものを膕から膝迄達するものを靴下の上に着ける樣に致さなければなりませぬ、氣候の變化に應じて衣服を換へなければなりませぬ、子供は風の子などと申しますけれども大なる誤

で、小兒は寒暑に抵抗する力が甚だ弱くあります、諸器官の機能は實に活潑でありまするけれども成人よりも一層氣候の變化に感じ易いのであります、即ち小兒は大人よりも寒暑の變化から最も多く損害を蒙るものであります、故に小兒の監督者は此點に充分に注意して居なければなりませぬ。

子供は衣服を汚損し易いものでありますから時々洗濯の出來る樣にして置かねばなりませぬ、通常の綿入着物が不適當であると思ひます、可成フランネル其他毛織物を以て木綿や絹に代ふるが宜しい、毛織物は洗濯が出來んのみならず木綿や絹類よりも遙かに温かであります。

小兒は大人と同じく毎夜寢衣に着換へさするが宜しい、又寢衣の材料はフランネルが一番であります、又其調製法は通常の日本流の單衣では睡眠中に知らず識らず夜具を蹈出で丶胸や臂などで暴露するから宜しくありませぬ、可成大人の用ゆるシャツの仕立方にして寛く調製するが宜しいと思ひます。

寒さを恐れて無暗に小兒を室内に籠閉めるときは床下に發生せる植物の樣に顏色が蒼白になりて筋が薄弱となり全身の發達を害するのみならず精神的の發育を遲鈍にするものであります、適當に衣服を着用せしめて日々戸外に於て充分運動を行はせなければなりませぬ、充分に注意すれば決して戸外に出でたりとて病氣になるものでありませぬ、上等社會の兒童が多く虛弱であるのは心配し過ぎて小兒を室内に閉ぢ込めて運動を缺くからであります、是れに反して彼の貧乏人の小兒の如く不充分なる着物を着せて勝手に戸外にて遊ばせる時は冬中鼻加答兒に罹りて不潔な鼻汁を流がして居り且又抵抗力が弱いから重症に罹り易いのであります、此の點を充分斟酌して小兒の戸外運動を大に奬勵しなければなりませぬ。

小兒は大人よりも多くの睡眠時間を要します、初生兒を見るに最初の數週間は乳を飮むのと眠るのを仕事として居ります、是れは自然であります、醒覺時中は筋神經其他の器官の活動によりて身躰の勢力を消耗して

居るから睡眠中に其消耗を補ひ且發育を致すのであります、故に小兒には充分の睡眠を與へなければなりませぬ、睡眠を不足するときは健康を害し發育を殆ど中止致します、八歳乃至十歳の小兒に十時の睡眠は過度ではありませぬ、小兒は夜は可成早く就床せしむるが宜しい、毎朝一定時に離床せしむる樣にする注意が緊要であります、睡眠時間のみならず睡眠中の狀態も亦大切であります、小兒は大人よりも比較上器官の活動が激しいから從て睡眠中躰外へ排泄する有害物の量も多いのであります、故に小兒と大人とは同樣の大さの寢室を要します、又室内の空氣の交換に充分注意しなければなりませぬ、夜具が不足であつても過度に多く用ひても等しく感冒に罹る原因となるから常識を用ひて此點に注意するが宜しい。

食物も小兒の健康上大なる關係があります、食物に付て第一に注意することは食事時間を一定すること丶第二に間食を禁ずることであります、次には菓子類其他砂糖を多く含める飲食物を用ゆることなぞは宜しくないことであります、この三點に充分注意して是れを嚴守すれば小兒は活潑で愉快に生活する者であります、食物の不足から死するものより食物の過多より死するもの丶方が確かに多くあります、殊に母親は老婆心から無暗に愛して小兒を知りつ丶疾病に陷らしむるものが多くあります、充分に此邊に注意を願ひ度いのであります。

以上概略述べた諸點に注意して育兒の任に當らば此の冬中は先づ安全に無病で暮らすことが出來ることを保證致します。

正月の古儀

▲屠蘇　是れは藥として用ひたもので有ります三月に桃の酒を飲み、五月に菖蒲の酒を飲めば、壽を延ばすとか丈夫になるとか云ふ樣なこと丶同一の理由で飲むのでせう、藥方は固より支那から來たものですが、醫家に因て幾分か調劑の方にも違ふ所があるやうです是

れも隨分古く延喜の時分から行はれた事で延喜式にも屠蘇の事が載つて居ります

▲雜煮　正月雜煮を食べると云ふことは　是れも隨分古くからの風俗で、朝廷では後水尾天皇の時に第一（朝餐）やきがちんひし花びらむめぼしなど供して御さかづき參るふくさ牛房かず〳〵わさわさなど丶云ふことが記してあります、是れは後水尾天皇の頃より引續いて、元祿の後享保の頃までの天子樣の正月の朝の御祝であります、やきがちんとは。矢張餅を燒いて雜煮にすることで、ひしはなびらは、今日のはんぺんと菜で、即ち燒餅の御雜煮の中にはんぺんと菜とを入れたのでありませう、して見ますると、昔は天子樣の召上がるものも、我々の喰べまするものも、少しも違はなかつたので、其他のふくさ牛房だの、かず〳〵わさ〳〵など、何となくみやびやかな名が付けてありますから、一寸何か知らんと思ふ人もありませうが、ふくさ午房とは、牛房にふくさ味噌を付けたもの、かず〳〵は鯡の子、わさ〳〵は、菜のわさ漬で、實に麁末至極な物で、今日から思へば誠に勿體ない位で有ります、それのみならず、第二（晝餐）の御食事の御献立のうちに、雉子燒雉子酒など丶あります、是れは雉子燒を差上ぐべき處を朝廷のおまかないが少ないものですから、なか〳〵雉子燒など丶云ふ結構なものを差上ぐることは出來ませぬ「其實は鹽燒のおかべ豆腐なり」と記してあります、豆腐の鹽燒などは我々でさへも餘り感服の出來ないものを、古はうや〳〵しげに天子樣に差上げて居つたので御座います、又雉子酒と云ふのも酒へ雉子を入れべき處を、豆腐に酒をかけて上げたのであるさうです、總じて足利より德川氏に至ては、萬般の儀式等に規矩を立て丶、色々嚴に取行ひ、從て奢侈の風も盛になつて、遂に虛禮の弊をも生ずるに至つたのですが、夫に引換へ朝廷などの風は、質素と云はんよりは、寧ろ經費の點から出來なかつたので御座いませう其他鯡の子、田作などを用ひるのは、總て武家以來の風でありまして、是れは其物の性質及び文字などのめでたきものを集て取り用ひたと云ふに過ぎないので、

別に記す程のこともありませぬ、又其外古より仕來りたる正月の儀式などは、多くはまじない或は藥方などより起つたことですが、是れは又折を見て談話することに致します

▲喰摘の臺　俳諧の方では之を蓬萊と申して、喰ひ摘みとは云ひませぬ、又古くは手掛と申したので、出陣の時、吉事或は來客の前などに出したもので有ります、是れは家々の佳例に因て、多少違ひまして一樣ではありませぬが、古くは打鮑勝栗昆布の三種を三寶に載せたので其譯は敵に打勝つて喜ばしいと云ふ義理、敵を打鮑勝栗でよろこんぶと云ふので、めでたき名のものを集めて祝ひに用ひたのであります、併し昆布の上によろと付けるなどは、如何にもこじつけであつて、昆布を喜ぶとは何うしても言はれませぬ、又伊勢貞丈先生の說にこんぶは海藻で、わらめわかめなどの種類でひろめと呼ぶものである、ひろめと云ふことはめでたいことである、それ故に是れは敵を打わはび勝栗で國をひろめると云ふ處から、昆布を吉事に用ふることになつたのであらうと言はれましたが、成程其方が少しは理窟がある樣に思ひます

▲勝栗　と云ふことは、かたぐりの語が轉じてかちぐりとなつたと云ふ說と、かちと云ふのは搗と云ふので、かちは物を搗くことを云ふ、卽ちかちたぐりと云ふのであると云ふ說と、二つありますが、何れにしても勝つと云ふ義理には違ひありませぬ

又此蓬萊の臺に載せるものに就ては、前に申す通り一樣ではありませぬが、日次記事と云ふ書に「新年蓬萊の臺に海老のしこんぶ橙榧穗俵を置く」とありまして、先づ是れが主なる物で、此中を幾個かへらすとか、或は此外に一つ二つ加へるとか云ふのでありませう、そこで

▲穗俵　は海藻であつて冬採つて干して穗を、一握程の米俵のやうな形に拵らへる、それで穗俵と云ふので、それを後にはほんだはらと擬るやうになつたのです、此事は和漢三才圖繪又は俳諧の方にも出て居ります、此穗俵は神馬藻又はなのり藻と云ふ、なのり藻の名の起因は、

神の馬だに因て人は乗ることなかれの意、「な、のりぞ」の義理から出たものであると云ひます

▲海老　は矢張壽長うして海に棲息するめでたいものと云ふ處から用ひました、又一説に海老は腰の曲つたものですから、人間も長壽をして腰の曲るまで丈夫なるやう即ち海老にあやかれと云ふのであると云ふ説もありますが腰の曲るのにあやかるなどは、餘り感服の出來ないことで、結局海にいつまでも生きて居ると云ふ所から、之を用ひたと云ふ方が宜いやうに思ひます

▲橙　はつまり家を大、國を大、總で大なるは吉いてと故、用ふることになつたのでありませう、其外

▲野老　と云ふものを用ひる、是れは前の海老と相對して野に長く生えて居る、即ち野老と云ふ所から、山海の壽老を集める譯でありませう（井上頼圀翁談）

遊戯の一時間は對話の
一年よりも發見する所多し

正月のあそび

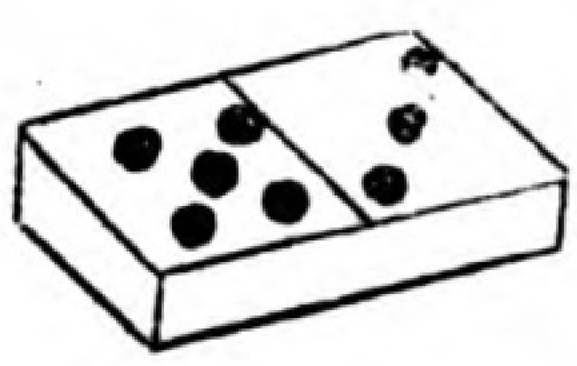
西川寒月

ドミノー

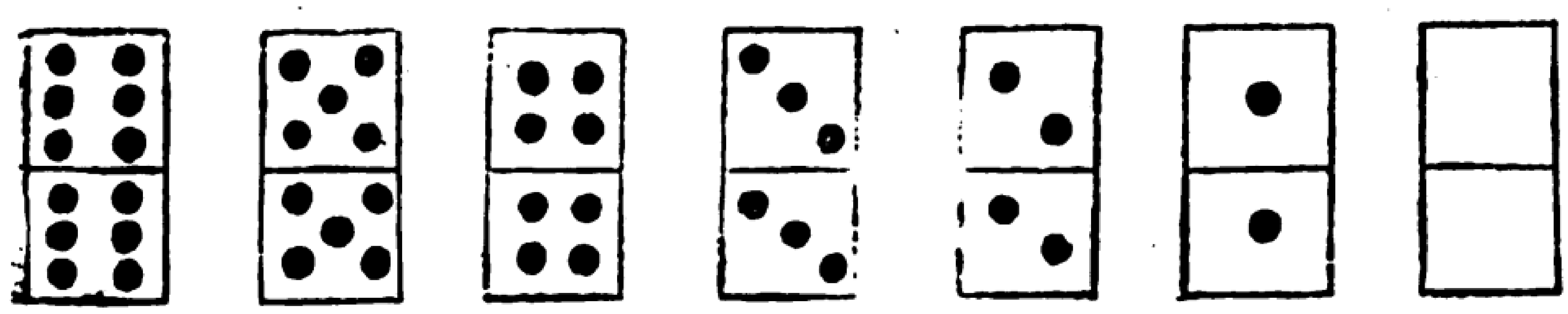
此の遊戯は目下英國の家庭にて盛んに行はる室内遊戯等にて無聊の節小供の遊びとして尤も適當のものなるべし。

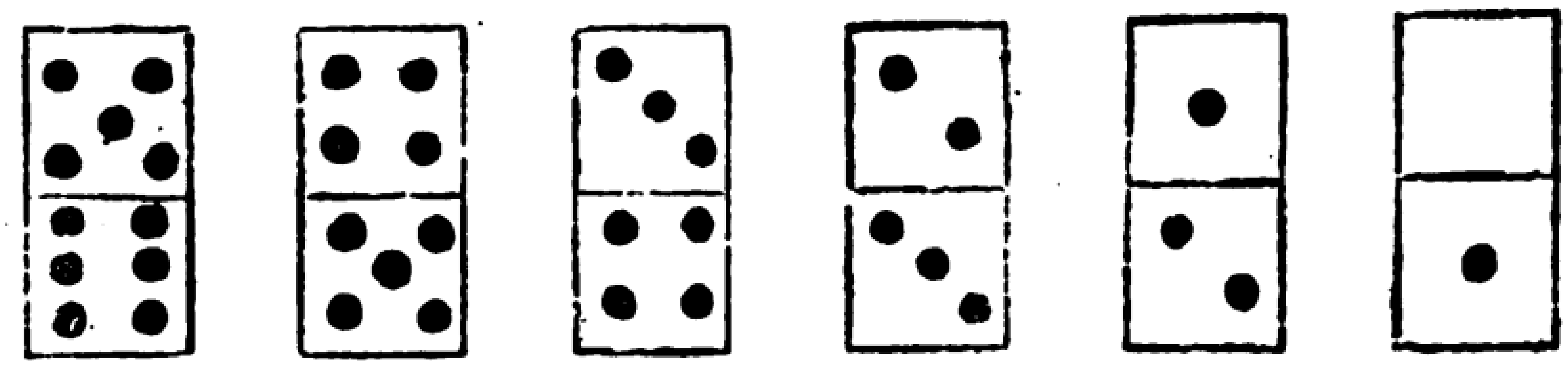
●遊戯用の器具

此の遊戯に用ふる器具は小さき長方形の木駒に一より六迄の數を配合して盛りたる圖の如きもの駒の中央に綿を入れ一個の駒に二つの數を盛れるものなり。

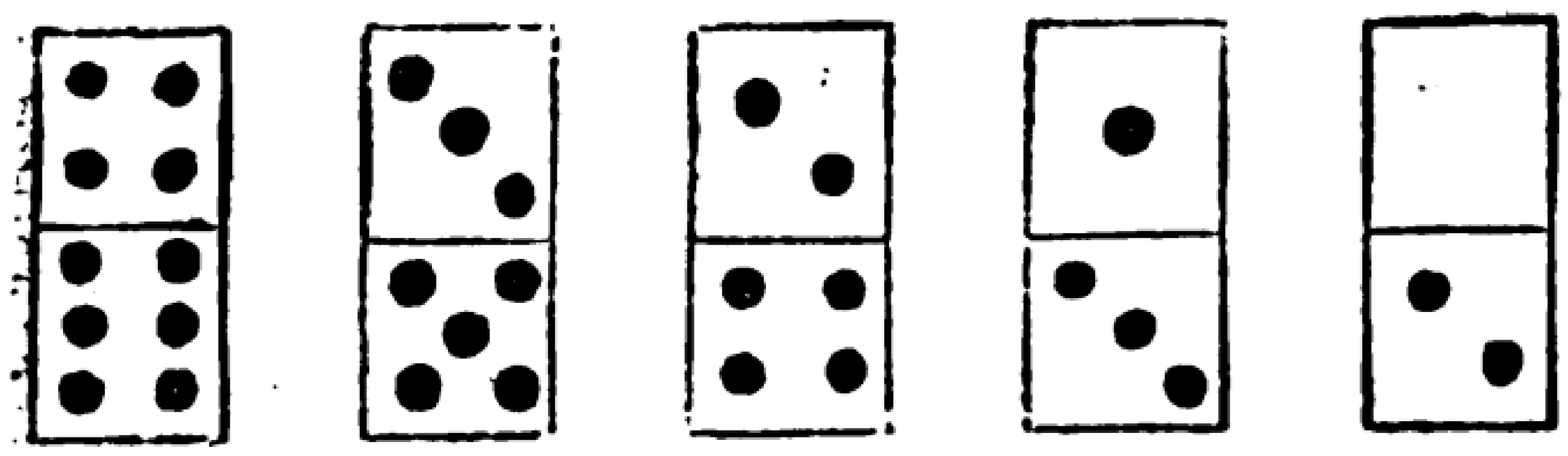


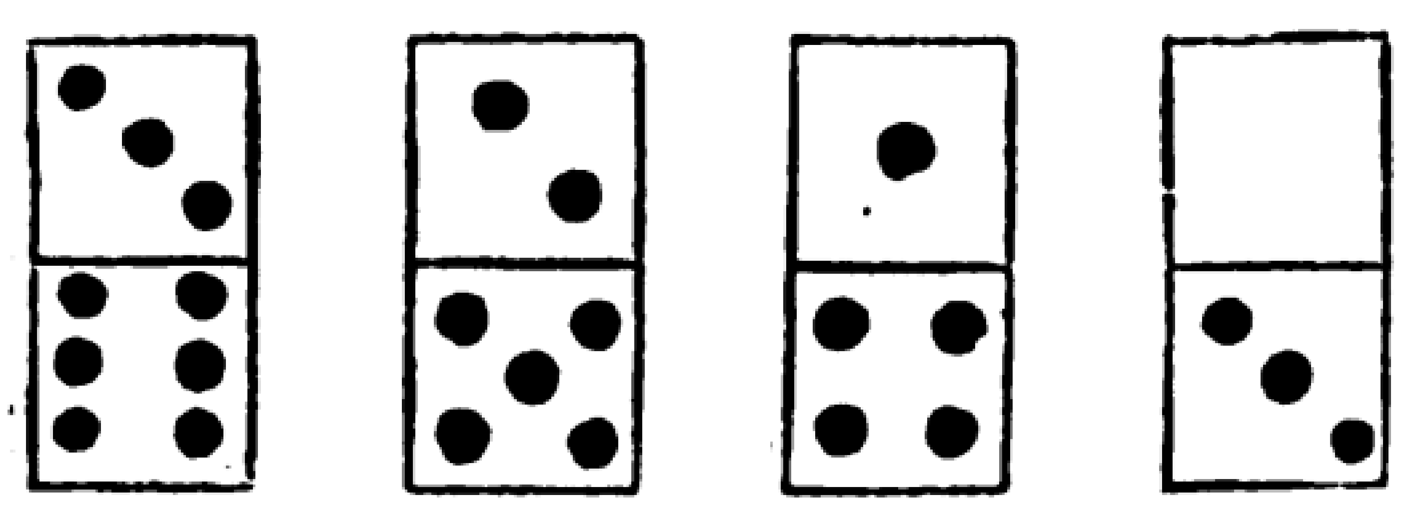
若し急場にて木製の備なき時は名刺形の厚紙に臨時數を盛りて代用するも差支なし、其數の盛り方は左の如くす。





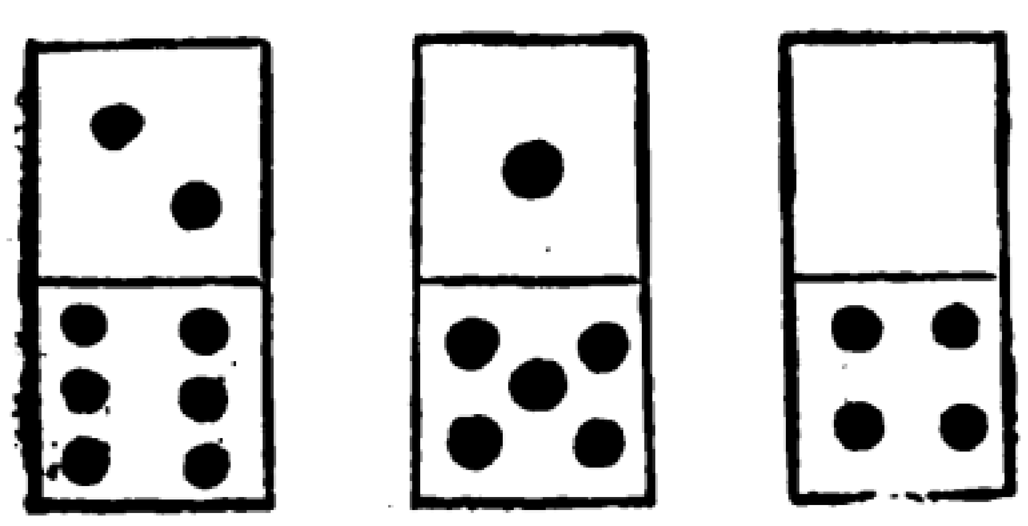
合計二十八個にして中に數の盛らざるものは零を意味するのにて矢張り二十八個の中に入れ置く

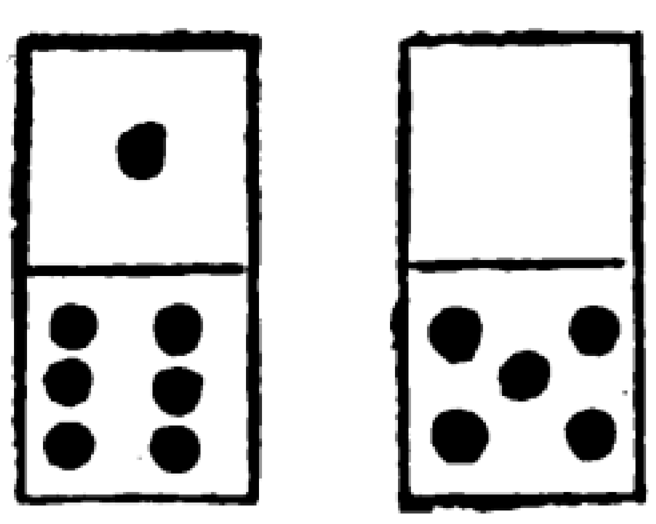


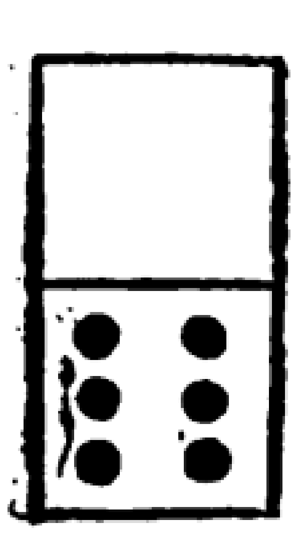


遊戯の方法

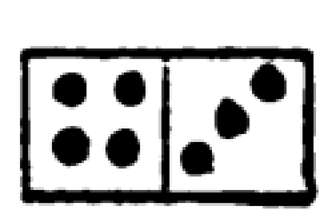
此の遊戯は六人以下の人員にあらざれば多くの人同時には行ひ難し。先づ人員を五人として其五人は圓くなりて座はり二十八個の駒を場に俯せ置き其内の一人は之を四個づゝ五人に分ける各自は分けられたる駒を手に取り他人に見られざる樣になす。一人四個づゝ都合二十個各自の手に取り殘る八個は俯せたる儘其場に置き遊戯を始める前に順序を定むる爲め五人は手拳を爲し其勝ちたるものより始む





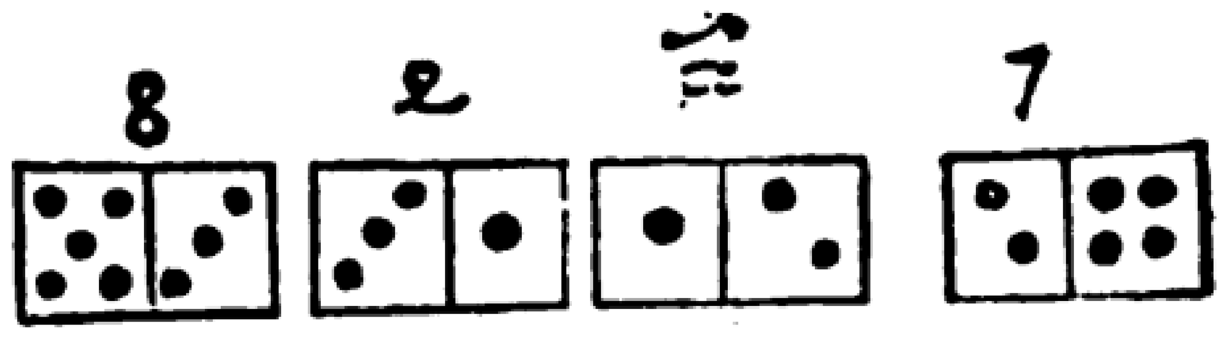


其方法は先づ第一に場にある中の一個を起す、假に起したる駒に三と四との數を盛りあると



きは自分の手の中にある駒の中より三若くば四の數のある駒を出して之れに接ぐ其接ぐのは左右何

れの方にても自己の都合の宜き夜に接ぐ
假ば圖の如く起したるもの一と二なるときは自分の手の中より二と四との駒を出して右方に接ぎ倘一と三の駒を出して左方に接ぐ若し倘は三若くは四の數ある時は１２の左右に接ぎ自己の手に符數のある丈け接ぎ行き、符數の合ふものなきに至りて次の者に移る次の者も之と同し事をなし順次に廻はり早く手にある駒を接ぎ終りたるものをよしとす。



家庭にて行ふときは勝ちたるものには賞を與へ最後になりたるものに罰を課すれば更に興味あるものなり此中自巳の番に廻はり來たるも手にある駒の中に場の駒に合する數なきときは最初場に殘しある八個の中より起して手に取り場にある駒に合する迄取る、取りたる駒の中に合ふ駒ありたる時は順に並べて手になきに至りて次の者に送る

和洋 折衷料理

共立女子職業學校割烹科

▲新年用重詰

新年用簡易の普通重詰は左の如し。

〔一〕煮豆、氷蒟蒻、干瓢、煮生姜。
〔二〕蒲鉾、梅花玉子、竹の子慈姑、
〔三〕美取椎茸、さゝれ梅。
〔四〕昆布卷、トクサニシジン、酢取ゴボウ。
數の子、花松魚。

〔煮豆〕は雁喰豆の上等をよしとす、水にてわらひ、鍋に入れ、火にかけて煮る。中途水をかへて煮るべし。砂糖を入れ煮つめ、最后に醤油を加へ五分時間煮るべし。豆一升につき砂糖二百目、水五合、この水の一合になるまで煮つめし上、醤油一合を加ふ。〔氷蒟蒻〕は水につけわらひ、ザット茹でゝ、煮汁、砂糖にて煮る。醤油少々、味醂少々加へ煮あげて切るべし。〔干瓢〕は水にて洗ひ、ザットゆで、煮汁にて煮る。味醂、醤油、

砂糖、少々入れ、醬油少々加へるなり。干瓢百目につき、煮汁一合、味醂五勺、砂糖三十目、醬油一合のわり。〔生姜〕はきりてゆで、水へつけ、蒸して煮る。味醂、酒、砂糖、醬油少々入れて煮るべし。

〔蒲鉾〕は普通のものにてよろし、蒸たるもよろし、燒きたるもよろし。〔玉子〕はゆで皮をむき、二色玉子の如く白と黄とをわかち、砂糖、鹽を加へ手にてませ、白身を裏漉にかけ、黄も同樣にして、美濃紙の上に黄身を二分ほどに熨し、白身をその上に置き、紙にとのしたる黄身に卷き、このまはりに箸五本を等分にめぐらし添へて糸にて結び蒸すなり。しかるのち箸と紙とをのぞき、小口より切れば丁度梅花形をなす。〔竹の子慈姑〕慈姑の皮を剝き、穗さきを切り、鹽水につけ、十分間にして薄く剝き、中の心まで剝き、又むきたる皮を卷き、竹の子形につくり、蒸籠に入れ横にして蒸すべし。さまして味醂、砂糖、鹽少々入れ、その汁につけて置き用ふ。〔美取椎茸〕は水へつけ、ゆでゝ、甘煮にして、芥子を煎りてかける、これをみとりといふ。

〔さゝれ梅〕小梅をむき落しにして水へつけ、ザットゆでゝ、砂糖にて煮るなり、そのつゆへ漬け置くべし。

〔昆布卷〕昆布卷は鮒を用ふ。この鮒は燒くがよろし、頭をつけて置き、腸をとり、串にさして燒き、青昆布につゝみて干瓢にて中を結び番茶を入れて煮るなり、この割合中鮒三十につき番茶二合にて十分間煮るなりさらに鰹汁三合、砂糖二十目、醬油五勺を加へ二十分間煮てよろし、昆布は何種にてもよろし、水にてひやかし用ゆ、又干瓢のなきときは揚子をさしてとめて煮てもよろし、竹の皮をさき結びてもよろし。「トクサニンジン」はほそく篠にむき、ゆでゝ、煮汁、味醂、鹽少々、醬油、砂糖少々加へて煮あげさます、青海苔を燒き、手にて揉み、水嚢にてふるひ置き、ニンジンをこれにてくるみ用ゐるがよろし。「酢取ゴボウ」は細ゴボウをゆでゝたゝき、酢、鹽へつけ置き、三十分にて酢より取り、アク引砂糖をかけ、切胡麻をかけて用ふ。

〔數の子〕數の子は一夜水にてひやかし、よくわらひ、又鹽水にてわらひ、笊へあげ、水を切り、醬油をかけて置く、直ちに用ゐてよろし、鰹節をかけて置く。

▲口取重詰

黄身かまぼこ、　小鳥つけ燒、　うに燒貝柱、
柚ねりあへ百合、　博多あらめ、

〔黄身かまぼこ〕玉子をゆで、黄身をとり、裏漉にかけ、魚の身をすりつぶし、鹽、煮切を加へ、生玉子の黄身をすり入れ、板へつけて蒸すなり。

〔貝柱燒〕柱貝を串にさし、鹽水をかけて燒き、ウニをつけて又燒くなり。ウニは酒と玉子の黄身にて解くべし。

〔百合の柚ねりわへ〕柚子を二ッ割にしてよくゆで、水につけ置き、蒸して摺り鉢にて摺り、裏漉にかけ鍋に入れ、砂糖、鹽、味醂にて練り置く、百合は一片づゝかきとり、木の葉形に庖刀さして、アク引砂糖、酒、鹽にて煮て、まへの柚ねりと交せて用ふ。

〔博多わらめ〕葉わらめをよく煮て、布巾にてよき、葛粉をふりかけ置き、魚の身を蒲鉾鹽梅にして、アラメ薄くのしつけ、何枚も〳〵重ねつけて蒸し、さまして小口切にして用ふ。

〔燒鳥〕普通何鳥にてもよろし、醬油、味淋、酒、各々同割にして、これを三度つけて燒くなり。

▲蕪むし

蕪の皮を剝き、山葵おろしにておろし、水の上にとり、水をしぼり、鉢へ入れ、玉子白身をませ、割したじにて解き、芝海老、シメシの類を具にして蕪にませ、茶椀へとり蒸しわげるなり。

割したじは椀盛の汁よりやゝからきがよろし、又葛掛けにしてもよろし、其ときは蕪へ割したじをして其儘茶碗へ入てひしわげ、葛は侑めるまへにかけるなり。

▲蛤折衷煮

まづ玉葱を細にきり、バタにていため、ジアガ薯をゆでゝ賽の目にきり、同様いため、さて蛤の水をきり、バタにていため、メリケン粉を水にて（鰹汁ならさらによろし）解き、まへの三種へ鹽、胡椒を加へ煮わはしたる鍋の中へわけ、一煮たてして、色のかはりしを度に盛りて侑む。

これは蛤にかぎらず、牡蠣にても、何の剝身にてもよろし。

▲鹽蒸蛤

貝の目を切り、鍋へ鹽、水、酒を入れて煮るなり、貝の目とは蛤貝の横に突出したる角狀のところをいふ、これをきれば口は自ら明くなり。

▲鳥の豚煮

鳥の肉をうすく切り、味淋、醬油にてザット煮るべし、蒟蒻はうでゝ二つに割り、小口よりうすく切り、油にてザットいため、鳥のつゆにて煮る、煮わがり引わげしあとへ、白味噌のうら漉しにかけしを加へて煉り、

汁の不足のときは煮汁にてのばし、煮あげし鳥と蒟蒻とを加へませべし。

▲鮭の酒づけ

生鮭に鹽をあて、鹽の利しとき水にてあらひ、味淋、生酒を割しなかにつけてむべし、この割合は味淋四分、酒六分とす、凡そ三時間ばかりつけ置きザット燒き、用ゐるとき皿へ入れ汁をかけて蒸して用ゐるなり。

▲大根切ぼし

大根の切りぼしは大根を適宜にきり、蒸籠に入れて蒸し、これを又日光にて乾かし置き、用ゆる時に水にて冷してすぐに煮るなり。

▲干葉の用ゐ方

大根の葉を干し置き、何時にても用ふる時には、ゆで、水にてよくあらひ、細々に切りて、水をしぼり、鍋に油をしきて其中へ入れ、煎りて煮汁、味淋、醬油、砂糖を入れ、よく煮て、ものにつけあはせに用ふ。又汁の實に用ゐるときは同じく細々に切り、煮汁、醬油少量に、味淋も少々加へ煮て置き、さらに本汁を別の鍋に分け、此中にてこれをザット煮て椀へもり、本汁をかけて出すなり。

▲大根そぼろ

大根のよきところを五分ぐらゐに切り、ザット湯出て水を替へ、鳥の骨を入れて煮る、煮上る前に味淋、醬油共に少量を加ふ。別に鳥のそぼろを作り、前の大根へ汁共々かけて用ゆ、胡椒をふりかくべし。

▲柚味噌

柚子のヘタの部をきりはなし、なかの實をくりとり、さて黒胡麻を煎り、よくすりて、味噌を加ふ(この分量　黒胡麻三合、味噌二百五十目、砂糖七十目)くりとりし中實十箇こまかにきりて加へ、よく摺りて裏漉にかけ、鍋にとりて火にかけ、味淋一合を加ふ、よく煉てしかるのち、これをまへのくりぬきし柚子の皮の中へつめ、きりはなしたるヘタの部を蓋として侑める。

▲氷蜜柑

中粒の蜜柑を皮を剝き、横にまんなかよりふたつにきり、重箱の類へきり口を下に伏せ置き、別に寒天を水にひやし、しぼりて、水二合五勺(寒天一本につき)を加へ火にかけとかし、砂糖(百五十目乃至二百目)を入れ煮つめ、しかるのち水嚢にてこれをまへの蜜柑の上に漉しこむ、かたまりしとき重箱よりぬきとり、蜜柑一個〳〵に角なり、六角なりに庖刀をして口取のまへ盛りにす、或は菓子として侑めるもよろし。

表情唱歌 國旗

作曲 白井規矩郎
作歌 旗野士郎

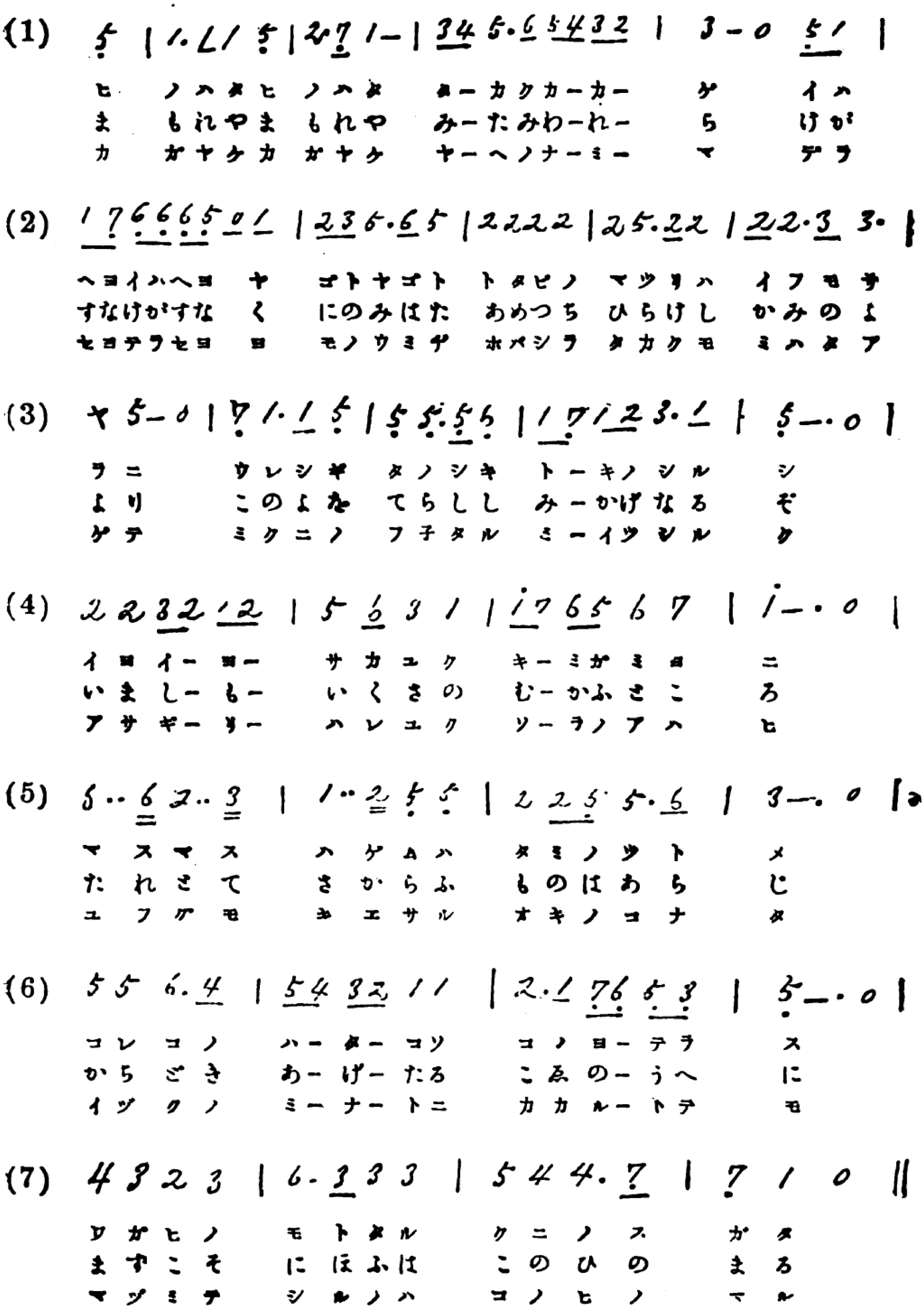
（一）日の旗日の旗、高く揭げ、祝へよ祝へよ、家毎やごと、
十回の大祭はいふもさらに、嬉しき樂しき時の表章、
いよ〱榮ゆく君が御代に、ます〱勵むは民の義務、
是れこの旗こそ世界照らす、我日の本たる國の體。

（二）守護れやまもれや御民われら、汚すなけがすな國の御旗、
天地開闢けし神の代より、世界を照しゝみ影なるぞ、
今しも軍旅の向ふところ、誰とて逆ふるものはあらじ、
勝鬨あげたる聲の上に、先づこそ咲ふはこの日の丸。

（三）輝けかゞやけ八重の波間、照せよてらせよ四方の海路、
帆檣高くも御旗擧げて、皇國の艦たる威光著明く、
朝霧晴行く空のあはひ、夕雲消去る沖のこなた、
何處の港にかゝるとても、先づ見て知るのはこの日の丸。

國　　旗

旗野士良作歌　　(ト)調　四拍子　　白井規矩郎作曲



文藝

支那第一戯曲の梗概

幸田露伴

支那の戯曲の作者は概して支那の小説の作者より立上つた際の人であるため、自然と支那戯曲は先づ支那小説よりも其性質ならびに形式に於て優れて居ります。さて其支那戯曲の中でも琵琶記なんとは先づ最も優れたもの丶一で、西廂記と共に支那戯曲中の第一位に置かる丶ものです。最も西廂記は其の艶麗富贍な點に於て勝り、琵琶記は其の樸茂敦厚の點に於て勝つて居りますが、畢竟するところ西廂記は、張生といふ男と鶯々といふ美人との間の纏綿の私情を叙したもので、琵琶記の方は、蔡生といふ男と其妻趙氏との上にかゝる孝義の談を描いたものですから、何様しても西廂記の方が人に悦ばれ易い譯で、琵琶記は些面白く無く思はれ勝でありさうな理由があります。併し戯曲としては眞面目くさり過ぎたやうな題目を把つて作り出したところの其琵琶記が、水の滴るやうな艶氣のある其西廂記にも負け切らないで、元の世の末、即ち今を距ること五百年ばかり前から今日に至るまで相對峙して傳はつて居りまして、支那戯曲の中の二大明珠として珍重されて居るところを見ますと、琵琶記其物の價値が決して侮るべからざるものであるといふ事は明らかでござります。わたくしは琵琶記を評し、併せて琵琶記の中に包含されて居るところの思想と支那の人民の抱いて居る普通の思想とが如何ほど相觸れあふて居りまする歟といふ點に就て批評し度く思つて居りますが、今は其は先づ姑く擱いて、こゝでは單に琵琶記は何樣いふものであるかといふ事だけを御話し致しませう。實は先日此雜誌の編輯長から、何か面白い昔話を寄せて呉れぬかとの御依囑に就きまして、それには烏有の

談ではあるが清淨無垢な此の琵琶記の梗概を御話し致したが宜からうとの考へから起つたことですから、北の評論めいたもの及び高則誠といふ作者が何故に琵琶記を作つた歟等の御話しは、これを他日に讓ることに致しませう。

琵琶記の主人公となつて居るのは蔡邕といふ人です。蔡邕といふ人は實在の人で、官は中郎にまで至つた後漢の末頃の人ですが、琵琶記中に書いてあるやうな事實は眞の蔡邕の身の上には無かつたのですから、琵琶記のはたゞ其名を假りたばかりの事として記臆して頂きたいので、これに就いても色々御話し致したい事が無いではありませぬが、今は煩はしきを厭ふて省いて置く事と致します。

琵琶記の梗概は先づ斯樣でござります。

こゝに都を去ること甚だ遠い土地に蔡邕といふ若い男がありまして、貰ひたての妻の趙氏といふのと、大分年老つた父母と、一家四人暮しで、別に財産があるといふのではありませんが、何樣か斯樣か日を送つて居りました。ところが此の蔡邕は、學問も大分に出來、詩文の才も人後には落ちないので、自分でも都へ出て人材登用のために定められてゐる試驗に應じさへすれば立身出世が出來ぬでは無いと思つて居る位ゐです。しかし蔡邕は心持のまことに優しい穩やかな男で、青雲の望みが有るにはあるけれども、沉吟して見れば父母も老いて居ることだし、それを振り棄てゝ功名富貴を取りに都へ出て行くのも不孝に當る譯だと、自分の功名心は自分で抑へつけて仕舞つて、たゞ一家の平穩康寧なのを悅んで、孝行を盡して居りまして、丁度時しも春の花の頃、夫婦して聊か酒肴を備へて父母の眉壽を祝して居ります。すると邕の父の方は、時節の變轉し歲月の流れ移るを見るにつけて、そこは男の事ですから、悴や、紅英はまた咲いて今年も春になつたがのう、白髮は愈々殖えて私は段々齡をとる、とうかまわ私は汝が早く立身出世をするのを見たいと、幾許か感慨の意で、悴の出世を望みますと、邕の母の方は母の方で、何樣も女の事ですから、一人子の邕を膝下

から手放したくないのが山々な故、なほに人世の眞の樂みは、むづかしい事の無い田や圃の間の氣樂な生活の中にあるので、何の詰らない公爵だとか侯爵だとかいふ其樣なものにならずとも、幸福はあるのである、といふので、爺さん媼さんの腹の中は少し違つて居りまする。そこで蔡邕はといふと、これは父の云ふやうに出世をして、家門を耀かしたい情も無いのではありませぬが、何にせよ父母も老いて居るので、大根人參を食ふて濟ますにせよ一家四人水入らずで睦じく父母の世話をして生活して居る方が差當り人の子たるの道にも背かない譯だと分別して居るので、其妻の趙氏といふのは又たゞ何事も無く幾久しく舅姑に仕へて居たいと念じて居るばかりなのです。

斯樣いふやうに一家四人それ〳〵の思はくはあるが、いづれも好い性質の人同士ですから美しく無事に日を送つて居ましたが、たま〳〵朝廷から賢者を招くの御布告が出て、才學のあるものは成るべく都へ出て試驗に應ずるやうに、との御諭しが下る、蔡邕の居るところの郡の小役人は、まあ此郡では汝などが試驗に出て呉れなくてはいかぬ、と勸める。蔡邕の隣家の張太公といふのも、何でも此處は一番奮發したが宜からう、といふ。爺も此事を聞いて、半生の學問は何のために爲たのだ、快く行李を整へて都へ上るがよい、といふ。たゞ邕の母ばかりは、妾等は年も八十に餘り、眼も耳も惡くなつて居り、伜は嫁を貰つてから纔に六十日しか經ぬ位のところを、都へ行け〳〵といふのは曲が無い、と止める。邕は前々からの分別通りに、私は御父樣御母樣の御世話を仕なければならぬ身ですから都へは行きますまい、といふと、父は大に不機嫌で、嫁の貰ひたてな爲に家を離れて旅の空に出るのが厭なのであらう、といふやうな酷い言をも出すやうになる。邕の母は聞き兼ねて、伜に其樣な事があるものですか、たゞ孝行の心から妾等の傍を離れたがらぬ眞に殊勝な料簡方、むかしの名高い曾參ぢやとて試驗に應じて及第したといふ話も無い、功名富貴は天道樣の御授けなさるもので、天道樣さへ御授けなさる段になれば求め

いでも來るものに相違無いから、何もわざ〳〵官員になるための試驗などを受るに行かずとも宜い譯だ、といふ。邕の父は中々承知しないで、孝行〳〵と云ふけれども、汝等の云ふのは小さなことで、立身して名を揚げて父母の好處を顯してこそ孝行も最底といふものだ、と云ひ張れば、張太公も、汝の不在中は十分に私が氣をつけて進せるから、後を按じずに出るがよい、と勸めたてる。そこで辭みきれないで蔡邕は旅支度をして都へ出やうとする。汝さへ錦を着て歸つて呉れゝば死んでも私は喜ぶ、と父はいふ、まあ曲も無い、老人を後にして旅に出るが萬一の事があつたらば縱へ錦



（五二）

を衣て歸らうとも濟むまいがや、と母は恨む、何でも一番出世をして名を天下に揚げて呉れ、と張太公は云ふ。短き春の夢斷えて別れに臨む憂き辛さ、鬢の亂れを掻く手さへ擧ぐるに力なよ〳〵と、夫の家を出るをば止て欲しきは山々ながら、それも心に任せねば、

涙ながらに旅支度、何彼と心を添へて爲つ、妻は夫に打對ひて、縦ひ妾は念はずとも年老ひ給へる御二方を必ず忘れ給はずに、都の眺めは多くとも、十里の紅樓美しき姫等なんとに氣を移さで少しも早う御歸りなされて下さりませ。と掻口説く。浮きたる心はゆめ〱無し、たゞ氣にかゝるは御二方、老いて嬰兒に還り居たまへば、寒き時には着せまゐらせ、時を測りて御膳をわげ、何彼と介抱賴み入る、と夫は囑む。猶くれ〱も親共の上に御心添を願ひまする、親共は年も老つて居りまするし、妻は孱弱き女の事でござりますれば、と隣家の張太公にも賴み置いて、蔡生は終に出立致しました。前途に立身出世の望みを懸けた目出度旅ではござりまするが、扨何と無く〱悲い情合で、これが抑々發端になつて後來幾多の悲い塲合に立到るのですから、蟲が知らすといふものか、萬里の關山萬里の愁、一般の心事一般の憂、十歩に九度も頭を回す、と



いふ工合で別れまするのです。

さて蔡生は家を離れましてから、路途千里日々親を思ひながら、段々と旅程を經てまゐりますが、何にせよ孝心の深いもの丶事ですから、高堂已に添ふ兩鬢の雪、客路空しく瞻る一片の雲、といふたやうな工合で、他の應試の書生等のやうに路途を面白く浮れながら歩いたり、或はまた雲梯月殿貴顯を圖る功名の念ばかりに水宿風餐の苦を忘れて居るといふやうな譯にはまゐりません。しかし道中も何事無く都へ着いて試驗に應じますと、果して狀元即ち第一番で及第しまして、花を簪し馬に跨つて街を練りあるき、杏園に宴を賜ふ結搆な身分となりました。御承知の通り支那で狀元となりますれば、言はゞ天下で第一流の人となつたといふやうな譯でございますから、其名譽は云ふまでもない事です。蔡邕もこれは嬉しくないことはありませんが、何にせよ親思ひの事ですから、それにつけても故鄕の事を思ひ出し、盃を持しても自から心の先づ痛むをおぼえて香醪も喉を下らぬ始末、他の人々のやうには悦び喜んで居りませぬ。けれども如是いふ事で任官でも仕て濟んで仕舞へば何の紛紜は無いのですが、蔡邕に取つて難有迷惑なのは牛太師といふものが媒婆をもつて蔡邕に吾が娘を婚せやうと云ひ出した事で、太師といへば此上も無い高官の事ですから、其威權もまた恐ろしいのです。それ故其の太師の方から婿にと望まれて謝絕でも仕て耻をかゝせた日には何樣な運命を攫まねばならぬか知れたものでは無いので、其代り又太師の氣に入つて贔負にされゝば前程の富貴發達は測り知られぬほどですから、そこを見越して牛太師の方ではよもや蔡邕が嫌とは云ふまい、二つ返辭で承知するだらう、と思つて、蔡邕の人物學問に見込を付けたので最愛の一人の姬を婚はせやうと媒婆をさし向けたので其また牛氏の女といふのは、素ばらしい美人で、素ばらしい才女で、年が若くて、身持が堅くて、何者の娘でもらうと强ひても男が娶りたがるべきお孃樣であるのに、加之天子さへ御斟酌が有らうといふ太師の唯一人の愛女といふのですから、蔡邕は俗にいふ牡丹餅で

頰邊をたゝかれるやうな目に會つたのです。さあ如是なれば大抵の男なら早速入婿になるのですが、蔡邕は親孝行で義が固い男ですから、媒婆に對つてぴつたりと謝絶ました。案の外なので媒婆は驚いて此由を復命じます。牛太師は蔡邕が家に老いたる父母あり少き妻あるの故をもて婚を辭するのみならず議郞の官をも辭して故鄕に歸らんとする由を聞いて、激怒いたします。併し思ひ立つて言ひ出した事を後へは引かぬが太師の氣象で、よし此上は聖旨を請ひ申して天子樣の御聲がゝりで無理往生にもせよ女を婚せやう、と考へついで、思つた通りに事を運ばせます。蔡邕の方は蔡邕の方で故山に歸りたいので、表を上つて議郞の官を辭し併せて牛公の女を妻に賜はる事を辭しますが、牛太師の方が先手で上手ですから敵ひません、天子も蔡邕の いふところは御取用ゐにならないで、却つて曲げて請に從つて桃天の化を成せといふ 詔 です。苦と驚き悲んで、再び陳情の表を上らうとしても、そこは帝王神聖の國の事ですから、取り次いで呉れる人も無く、終に何樣しても斯樣しても逃げきれない機會になつて心ならずも牛氏の女と花燭の典を擧ぐることになります。傍觀からは蔡邕位幸運なものはありませんが、當人になつて見れば此樣な迷惑なことはありません。牛氏の姬、即ち蔡邕の妻となつた人は極めて賢明善良な婦人で、蔡邕が一旦婚を辭したのを强て其父が縁を纒めやうとして居た頃は、詳しい仔細は分らないですがちら〳〵と其話が耳に入らぬでも無いので、其樣な押付がましい事は仕て下さらないでも宜らうものを、とは思ひながらも娘の分際として自分の婚姻に兎角を云ふ譯には行かぬ國俗ですから默つて過して來ましたが、扨婚禮を濟せて見れば、男の氣立も良く學問もあるといふのですから、其の出身の寒微なのを悔るやうな事も無く、まことに能く氣を付けて謹んで夫に事へて居りまする。此樣いふ貞淑な婦人を得たのもまた蔡邕に取つては其優しい心の惱みの一つです。

蔡邕の方は如是いふ思ひ掛無い始末になつて奥深な牛家の内に引入れられましたので困つては居りまするが

差當りは甚しい憂目を見て居るといふのではありませんが、それに引替へて、蔡邕の故郷の方では邕の妻の趙氏が盡く難儀を致すことになりました。それは第一には邕の出立の時からして不同意であつた老母が、邕の音信も無くて日數の積もるにつけ心細さを感ずる上に、地方一帶の饑饉に値つて困究するので、あゝ悴を都へ遣るのでは無かつたものを、と晝夜愚痴を溢しては其果は邕の父即ち吾夫に對つて、你が悴を無理に出したから惡い、といつて食つてかゝります。老父だつゝは思つて居なかつたのですから、何も惡い氣で仕た事では無い、出世させやうと思つて都へ遣つたばかりだのに、圖らず饑饉が起つたからとて左樣乃公ばかり惡いやうに云はれては困る、と云ひ返すと、老母の方は悴の戀しいのと今の悔しさとで胸が一杯になつて居ますから無茶苦茶になつて老父に食つてかゝるといふ始末です。これを困苦の中で宥め賺して、双方を暴ら立させずに、仕方がありませんから自分の身の飾りや髮のものなどを賣つて目下の急を救ふことに仕まして日を送つて參りますのが趙氏の務です。いやはや實に辛い悲しい役廻りです。其中に饑饉は愈々甚しいので、お上でも打棄つては置けませんから義倉を開いて民を濟ふといふ事になりますが、萬事が形式ばかりで實功の擧がらない官邊の事ですから、義倉を開いて見ると里正が疾に私して仕舞つて居て米は無いといふ樣な狀態です。趙氏も今は是非無く羞を含み涙を抑へて舅姑を養はんがために救ひ米を貰ひに出で、辛くも貰ひ得て歸らうと致しますと、又途中で里正に奪ひ返されて仕舞ひます。さあ二進も三進もゆかなくなりました、見す〳〵舅姑を干し殺さねばなりません、そこで一つの古井が目に付くと死神に誘はれて寧死んだが増と既の事に井の緣へまで參りましたが、いや待て須臾、夫の出立なさる時呉々も御兩親の事を妾に頼んで御發途になつたのに、妾が今こゝで死んで仕舞へば、後は老い耄けた御兩人限り、何樣して月日を御過しなさる事が出來やう、此處は死ねにも死なれぬところ、

と分別を仕替へてヂッと耐へたところへ、譯を知らぬ老父は嫁が出てから姑く歸つて來ぬのでそれを案じて搜しに出て來て、折角貰つた糧米をも奪ひ去られた始末を聞き、今度は舅が身を果敢なんで、生甲斐もなく長らへて終には餓死でも爲ようよりは死んだが增と井へ入らうとします。趙氏は驚いて之を止めます。そこへ折好く隣家の張太公が是も同じく糧米を貰ひ得て通り合はせ、自分の糧米を趙氏に與へて、まあ〳〵と云つて家へ歸らせます。眞にみじめな悲しい御話です。(未完)

平安朝時代の文學

文學士　尾上柴舟

去年一年かゝつた簡單な評釋で、讀者諸孃は、大抵、枕草紙は何時ごろ出來たものであるか、どんなことを書いたものであるか、また、誰れが作つたものであるか、猶其作者はどんな境遇に居つて、どんな生活をし、どんな考へを持つて居つたかは、御承知になつたことであらうと思ひます。が、その此外にどんな書物があり、どんな文學者があり、また、その書物には、どんな事が書いてあるか、その作者は、どんな人であつたかは、或は、まだ、御存じのない御方もあらうと思ひます。今年は、松原さんから、國文學の階梯といふやうなことを書いて異れとの御賴みでありましたから、まづ、枕草紙の出た時代、乃ちいはゆる王朝、または、平安朝時代の文學の有樣、其時代に出來た文學上の作物、それを作つた人の傳記、逸話などの御話しをして、進んでは、深く研究して行く人の便りともし、また、只、大体を知つて、參考とするといふ方々の爲めにもしようと思ふのであります。元來、この平安朝の文學は、枕草紙も、作者が清少納言であつた如く、主な作物は、學識ある女の手になつたものでありますからして、讀者諸孃の先祖の女子達が、どのやうな仕事を、文學上でやつたかを知るのも、面白いことであります。平安朝がすんだらば、また、他の時代に移つて、主な書物、作者の御話を致しませう。

さて、枕草紙の出た平安朝時代は、後の德川時代と並んで、我日本文學の花の最盛りに咲き匂つた時といはれてをります。德川時代にも、數多の詩人、文人が出た、と同じやうに、此時代にも、また、多くの文學者が出ました。德川時代に、澤山な詩歌、小說等の書物が出たやうに、此時代にも、また、餘程、多くの製作がありました。が、此時代は、德川時代のと比較しては、作者も、書物も、今傳はり、今殘つて居るものが、甚だ少ないのであります。又、其作物の種類も、また、多くはありませむ。其書かれた事柄も、廣くはありません。けれど、上品で、優美で、綺麗で、華車であることは、餘程、優つて居るやうに思はれます。これも、几帳などを立て籠めた御殿の中で、櫻重ねとか、藤重ねとかいふやうな美しい衣服を着た上﨟達、ゆつたりとした朗詠や催馬樂などを口ずさみにして、鹿の聲や、雁の聲に淚を流さうといふ殿上人達の、暇に任せて、書いたり、作つたりしたものであるからでせう。が、これも、今と言葉が違ひ、時代が違ひ、風俗習慣が違つてをるからして、殊に、左樣感ぜられることも多いと考へられます。それは、兎も角、高尙優美といふてとは、昔から言ひ來り、今も、多くの人の云つてをる事であります。この點から見ても、女子が、一應は知つて置く必要もあらうと思ひます。

さて、此平安朝と云ふのは、何時から何時までを指したかと云ふに、誰れも御存じの通り、桓武天皇が、延曆十三年、都を山城國葛野郡宇多村、乃ち、今の京都に奠められてから、後鳥羽天皇の文治二年、源賴朝が幕府を鎌倉に開いたまで、凡そ、三百餘年間を云うのであります。實は、明治二年、東京に御遷りの前までは、引き續いて御歷代京都に御出遊ばしたのであるから、此時までが、平安朝と云ふべきであるけれど、政治上、社會上の關係からして、歷史家が、此樣に定めたのであります。此時代は、まづ、天下泰平の時であつたからして、八省の役人ども、自然遊惰に流れて、詩の會、歌の會、管絃の遊び、歌舞の宴に、日の暮れるのも知らずに遊び戯れまし

たゞしかして、春の花、秋の月に、物の哀れを過さぬが能事とせられたからして、上代から打續いた、豪健勇武の氣象は、何處にか消え失せ、只、やさしい、物はかない、といふやうな柔弱な風が、一般に行き渡りました。猶、この時、この以前の時代、乃ち、奈良朝時代に、非常に盛んであつた佛教の考が、淺薄ながらも、人々の心に泌み渡つたからして、人は無常、世は火宅と考へて、いよ／＼、此風は増したやうに思はれます。のみならず、元來、この京都と云ふ處は、餘程、景色のよい處で、東に東山があり、北に鞍馬、西に愛宕といふ樣な山々があつて、霞の間から半面美人のやうに、麗しい顏を露して居る、加茂川の水が銀の波をうつて居る、朱雀大路には、柳や櫻が錦を織つて居る、其間に、朱の柱に碧の甍の美しい樓門、宮殿が見えて居るといふ、至極花やかな有樣であつたからして、いよ／＼、都人士の心は、優美一方に傾いたやうであります。この優美一方の人々が、前に云ふ通り、閑に任せて書いたり作つたりしたものですから、自然、文學は優艶華麗になつたのでありませう。

詳しい事は文學史に讓つて、今ざつと、此三百餘年間の文學の變遷を陳べて見ると、此時代の初め、嵯峨天皇の頃は、非常に、漢文漢詩が盛んで、天皇の御奬勵もあつたからして、皇族にも、臣下にも、これに堪能なる人が多く、幼年の皇子にも、皇女にも、漢詩を作つた方のあつた位でした。であるからして、學校も、大學國學の外に、主として漢學を敎へる私立學校も澤山出來、また、詩集の勅選さへありました。この頃の有名な學者は、僧では空海、俗人では小野篁であります。篁はことに詩に巧みで、其詩が、唐の白樂天の通りであつたといふ話もあります。この後、また漢學者詩人は數多くあつて、其中、紀長谷雄、菅原道眞などが有名です。が、矢張り舶來物より日本固有のものゝ方がいゝと見えて、和歌和文が、其間に、漸次起つて來ます。まづ、和歌を云へば、これは、嵯峨天皇の頃には、非常に衰へて居つたらしいが、淸和天皇の時分から、おひ／＼、秀才が出て、盛になるやうになりま

した。この頃の歌人は、世に六歌仙といふ人々、乃ち、僧正遍照、小野小町、文屋康秀、大伴黒主、在原業平、喜撰法師などであります。此中、業平は殊に天才で、尤も巧みでした。伊勢物語や、古今集などの中にある此人の歌は、實に縦横自在で、到底、他の人の及ぶ所ではありませむ。小野小町も、また、餘程の名人で、平安朝の、最初の女の歌人として擧ぐべきは、此人一人であります。和文の方を云へば、此頃、前の奈良朝の末頃に出來たかと思はれる平假名が、自在に使へるやうになつたからして、今の小説、その頃の物語が、ぼつ／＼、あらはれました。それは、よく御存じの、伊勢物語と竹取物語であります。伊勢物語は、世に、在原業平の書いたものだと謂はれてをるが、實際は、誰れが書いたものか判然し憎い。多分、後人が業平の歌に、いろ／＼の面白い、をかしい事實をつけて、實際のやうにしたものらしく見えます。竹取物語も作者不明で、普通に、源順の作だと云ふけれど、順以前のものたることは疑ありませむ。竹の中から、竹を切る翁が、少女を得て、これを養つたが、これに貴族連中が懸想して、大騒ぎをする、遂には、女も天上するといふ、諷刺らしい事を書いてあります。これまでが、先づ、平安朝文學の第一期と云ふべき時、乃ち和歌も、和文も、發達の時期であります。

六歌仙以後には、おひ／＼歌人が輩出して、醍醐天皇の時には、漢文漢詩が次第に衰へて、和歌は、これに換る勢をつくりました。乃ち、この時有名の歌人、紀貫之、凡河内躬恒など云ふ人達は、勅を承つて、古今和歌集廿巻を撰んで奉りました。これが、後世歌集勅選の基となり、また、歌の手本ともなつたのであります。これに續いで、村上天皇の時には、漢學は少しく復興したけれど、歌はいよ／＼盛んで、更に、後撰和歌集の勅選がありました。これに與つた歌人は、源順、紀時文、清原元輔、等であります。其後、また、花山院の頃、拾遺和歌集が選ばれました。これは藤原公任の選とも云はれ、また、花山院の御自撰とも云はれます。この古今以下の三集を、世に、三代集と云つ

て尊びます。前期には、詩の勅選集があつたけれど、歌のは無かつた。此時には、歌のは有るが、詩のは無い。和歌が急に頭を擡げて、詩を淩いだことは、これ丈けでよく、分ります。和文の方も、また起りました。乃ち、古今集の選者であつた其元は、文章にも巧みで、古今集序、大堰川行幸和歌序などを、漢文を骨にして、假名で書きました。また、土佐の國から京に歸る途中の日記に、土佐日記といふのをも書きました。これらは、いづれも、後の學者文人に和文の模範と云はれてをります。また、前の竹取などを受け續いで、宇津保物語など云ふのが出ました。これは、清原仲忠といふ殿上人、貴宮といふ姫君などを主人として、宮廷の生活を直寫したものらしい。これも、源順の作といふけれど、不明であります。其外前の伊勢を眞似た大和物語、繼母に繼子がいぢめられる事を書いた、落窪物語などが、續いて出ました。これ等が本になつて、おひ〳〵、大著述が出來るやうになります。この前後に出來たらしいと思はれる物語に、今は、名ばかり殘つて傳はらぬものが多いのは殘念なことであります。乃ち、住吉、とのうつり、月待女、井手中將、片野の少將、梅壺の少將、高麗野、芹川、からもり、はこやの刀自等は、これであります。其中に、わが國文中、最も有名で、殆んど平安朝の物語の代表者、我國第一等の小說とも考へられて居る源氏物語が出ます。これは、誰れも御存じの紫式部の作で、五十四帖より成つて、光源氏の榮華を主とした寫實小說であります。此筆力は、非常なもので、諸種の人物を、一々に書き分け、其情を精細に書き立てた所は、決して他人の模倣を許しませぬ。この紫式部の居つた時は、乃ち、藤原道長が、尤も榮華を極めた頃で、地方は亂れても、京都では獨り藤原氏の盛んな時代であります。此藤原氏は道長を頂點として衰へたが、これと同じく國文學の花も漸次凋落みます。猶、此紫式部と同時に、清少納言が居つて、枕草紙をつくりました。この書は、すでに、御承知ですから、爰では云ひません。紫清二女と同時に、赤染衛門、伊勢大輔、和泉式部等が居つて、

皆、和歌をよく詠みました。殊に、和泉式部には、當時有名の公任なども、或は劣りはせぬかと思はれます。これ等の人々は、また、文をもよく書いて、和泉式部日記などは、名の有るものです。赤染衛門も榮華物語を書いたと云はれて居ります。かく、和文も、和歌も、隆盛なものでありましたが、道長が薨じた後は、振はぬやうになります。紫式部の子の大貳三位が、狹衣物語を作りましたが、母のには及びませむ。藤原孝標の女は、更科日記、類は違へど、源隆國は、今昔物語等を作つたと云はれる。が、いづれも、物寂しい感じがします。以上が、まづ、第二期といふべきもの、和歌と、和文との最盛時期であります。

後三條天皇以後は、藤原氏が次第に勢を失ふやうになつて、文學も、花やかな所を失ひましたが、和歌は、猶盛んで、歌會、歌合が、しば〳〵あり、自然、これが競爭の種となつて、巧を闘はす風を生じました。而して、其結果、議論が始まるやうになり、遂にやかましい歌論が出來るやうになります。乃ち、當時名だゝる歌人、源俊頼の無名抄、藤原基俊の悦目抄、藤原清輔の奥儀抄、袋草紙などが、有名であります。勅選集には、前の拾遺集の後を受けて、白河天皇の時、藤原通俊が後拾遺集、崇徳天皇の時、源俊頼が金葉集、近衛天皇の時、藤原顯輔が詞花集を選びました。これらの三集と、以前の古今、後撰拾遺の三集と、この次の時代に藤原俊成の選んだ千載集、仝定家、家隆等の選んだ新古今集との二集を併せて、世に、八代集と云ひます。

此の時期には、和文には、まづ、大鏡があります。これは、支那の史記に倣つて作つたものらしく、和文の歴史としては有名なものです。藤原爲業の作といふけれど、判然しませむ。兎も角、この時に見るべきは和文でなくて、和歌の方であります。

これで、まづ、平安朝文學の極大体は終りました。來月からは、これ等の書物、其等の梗概、作者などについて、御話し致しませう。

源氏物語

文學士　中内蝶二

平安朝文學の隆盛を極めたことは、昨年末『物語の發達』といふ題で述べましたが源氏物語も勿論その內であるけれども、これは浩澣の書物であり、一代の文運を支配した大著述であるから、その內容に就て少しく伺ふ必要があらうとおもひます、扨てその時代に出でたる有名な文學者は、ひとり男子の方ばかりでなく、女流の方でも、淸少納言、和泉式部、大貳の三位、右大將道綱の母など、數多の才媛踵を接して輩出し、千紫萬紅咲き匂ひて、華を競ひ、妍を鬪はした中にも、嶄然一頭地を拔きて、絕代の才筆、燦爛として千載の下に輝き、日本文學史上に不朽の芳名を遺したものは、源氏物語の作者紫式部である。

紫式部は、閑院左大臣冬嗣の裔、越後守式部丞藤原爲時の女である。幼き時分からさがしかつた上に、父は當三品文時の高弟として、有名な學者であつたから、敎育も十分行きとゞいたと見え、いろ／＼諸子百家の說に涉り、深く朝廷の典故に通じて、才學操行、双つながら當代にすぐれてゐた。父爲時が常に嘆じて、あはれ此兒が男子であつたならばと曰つてゐたのを見ても、その才識の非凡であつたことを知るに足るであらう。長じてから、右衛門權佐藤原宣孝の許に嫁し、大貳三位、辨局と、二人の女を設けし間もなく、夫は早くも此世を去つたので、再嫁の念を絕つて、寡住居をしてゐるうち、時の帝、一條天皇の中宮、上東門院に召されて、宮中に仕へることゝなつた。彼の空前絕後の大作たる源氏物語は、式部が宮仕へをする前に出來たものであるか、或はまた、其後に出來たものであるかに就いては、色々に說が分れてゐるので、一般の俗說に隨へば、村上天皇の十の宮選子內親王が、或時上東門院に向ひて、何か珍らしい物語はあるまいかと仰せられたとき、上東門院は、かねて紫式部が才藻を知つて居るので、早速其旨を命せられたから、紫

式部は仰に從ひ、近江の石山寺に參籠して、金波銀波の躍る湖水の月を眺めながら書いたといふのであるが、これは畢竟附會の說で、彼の隆國の作と云ひ傳ふる今昔物語や、本居宣長の源氏物語玉の小櫛などによる時は、まだ上東門院に宮仕へをしない前に出來たといふ說が、眞に近いやうである。夫の世に在りし間は、勿論かゝる大著に從事すべき隙もないから、多分、宣孝が卒してから後、上東門院に仕へるまでの間、即ち紫式部が三十前後の時に出來たものと見える。

紫式部は、藤原氏であるから、初めは藤式部といつてゐたが、後改めて紫式部と呼ぶやうになつた。これに就いては、また二つの說があつて、一は「紫の一本」といふ古歌から出たといふ說と、また一つは、源氏物語一篇の中で、紫の上のことを、最も哀れげに書いてゐるので、紫式部と呼ばれるやうになつたといふ說とであるが、後の方が正しいといふ說が多いやうだ。また紫式部のことを呼で、日本紀局ともいふが、これは、源氏物語を一條帝の御覽に供した時、帝がいたく感嘆なされて、これはどの大作を成就した式部は、よく日本紀を暗熟じてゐるに違ひないと仰せられたので、始まつたといふことだ。

源氏物語は、一部五十四帖より成つて、卷每に名を題してゐる。

一　桐壺の卷　　二　帚木の卷
三　空蟬の卷　　四　夕顏の卷
五　若紫の卷　　六　末摘花の卷
七　紅葉賀の卷　　八　花の宴の卷
九　葵の卷　　十　榊の卷
十一　花散里の卷　　十二　須磨の卷
十三　明石の卷　　十四　澪標の卷
十五　蓬生の卷　　十六　關屋の卷
十七　繪合の卷　　十八　松風の卷
十九　薄雲の卷　　二十　朝顏の卷
二十一　乙女の卷　　二十二　玉蔓の卷
二十三　初音の卷　　二十四　蝴蝶の卷
二十五　螢の卷　　二十六　常夏の卷

二十七 篝火の卷　二十八 野分の卷
二十九 御幸の卷　三十 藤袴の卷
三十一 槙柱の卷　三十二 梅枝の卷
三十三 藤裏葉の卷　三十四 若菜の卷
三十五 柏木の卷　三十六 横笛の卷
三十七 鈴虫の卷　三十八 夕霧の卷
三十九 御法の卷　四十 幻の卷
四十一 雲隱の卷　四十二 匂宮の卷
四十三 紅梅の卷　四十四 竹川の卷
四十五 橋姫の卷　四十六 椎本の卷
四十七 總角の卷　四十八 早蕨の卷
四十九 宿木の卷　五十 東屋の卷
五十一 浮舟の卷　五十二 蜻蛉の卷
五十三 手習の卷　五十四 夢の浮橋

以上の題名は、いづれも其卷の中の歌文の詞によつて選ばれたのであるが、この中で、雲隱の卷ばかりは、題名のあるばかりで文がない。これは主人公たる源氏の薨去を、無言の裡に暗示したので、その筆を下さゝるところに無限の味があるのである。

五十四帖の中、桐壺の卷より竹川の卷まで四十四帖は、光源氏の生涯を寫したもので、これは前篇とも稱すべきものである。また、四十五帖橋姫の卷より、五十四帖夢の浮橋に至るまでは、源氏の子、薫大將の生涯を寫したもので、これは後篇とも稱せらるべきもの、普通宇治十帖と稱せられてゐる。

この物語は、固より非常の大部の書であるから、其筋の大畧と云つても、とても二三頁の紙上に述べつくすことは出來ない。で、そこ此處、主要なる處をかいつまむで述べて置かうと思ふ。

開卷先づ、源氏の母君桐壺の更衣が病死のことより說き起して、源氏が薄倖なる身の上に同情を表せしめ、やゝ生ひ立つまゝに、容姿世にすぐれて美はしく、諸の藝に通じ、きはめて情に深き事を說きて、未來に一道の光明を與へ、唐土より來りし相者、源氏を相して、此の人に天下の公事を後見せしめたなら、天下は必らず太平であらうといふに及びて、愈よ其尋常人

にあらぬことを知らしめた。

作者は、この主人公に配するに、紫の上といふ絶世の佳人を以てし、その履歴を本筋にして、之に數多の人物を加へ、さま〴〵の事局を添へて、巧に一篇の小説としたのである。源氏は、容姿才藝共にすぐれて、まことに氣高い君ではあつたが、たゞ好色のために、幾多の婦女に通じて、淫樂を放まゝにしたのは、大欠點である。併し、當時の風俗は、上下浮華に流れて、人倫全く地に落ちて居た世であるから、源氏の如き好色の所作は、別に怪しむべき點はない、寧ろ當然のことで、源氏は當時の理想男子であつたかも知れない。

源氏の情を通じた婦人は、先づ藤壺の女御を始めとして、葵の上、六條の御息所、夕顏、紫の上、常陸の宮の娘君、朧月夜の內侍、三の君、明石の上、女三の宮など、幾人といふことを知らず、一度思ひ初めたものは、何うあつても心に從はせねばやまないといふ風であつたが、世の常の輕薄男子のやうに、我思を遂げた上は、やがて忘れ疎むじて、他の女へ心を奪はれて了うといふやうな、無情な人ではなかつた。一度情を通じた女は、其美醜に拘らずいつ〳〵までも、情深く寵愛して、棄てるといふことがなかつたから、自然讀者の同情も、いつまでも失はれないのである。たゞ一つ、源氏の爲めに悲しむべきは、父の帝の後宮たる藤壺の女御と通じたことで、この藤壺の女御といふのは、源氏の母に頗る能く似て居たから、はやく孤兒となりたる身の、母を慕ふあまりに此女御になじみ、遂に情を通ずるに至つたのは、當時の風俗として、さまで深く咎むべきものではないが、因果應報の理は恐ろしいもので、藤壺の女御と、源氏との間に出來た子を、父の帝は知らずして皇子と思ひ給ひ、皇太子と定め給ふ、其因果がめぐり〳〵つて、源氏と女三の宮との間に出來た薰大將は、まこと源氏の子にあらずして、情夫たる柏木の子であるといふことがわかつた。これが前篇と後篇との聯關する處で、後篇宇治十帖は此薰大將が戀の失敗を寫し、源氏が生涯は、何事も己が思ふがまゝに仕遂げられて、頗る圓滿なる戀の歷史であるに引

きかへ、薫大將の生涯は、思ふ事常に齟齬して、不滿足なる失戀の歷史である。即ち、源氏物語一篇の中、前篇は、凡て華やかで、頗る賑かであるが、後篇は之に反して、凡て寂しく、うち沈むでゐる。前後兩篇を通じて、この物語を一貫する所は、愛の一字であるが、作者は結構を巧みにして、事局を複雜にし、毫も千篇一律の弊に陷らないやうに筆を揮した手際は、まことに感嘆の他なしだ。

其想は幽遠高妙で、其文は流麗優美、意の到るところ、情の赴くところ、縱横自在に筆を馳せて、しかも推敲に推敲を重ね、鍛錬に鍛錬を積みて、一字一句も苟もせず、風景情意、いづれも優麗に書きなした紫式部が文才は、今更事新しく評するまでもなく、古から誰れも彼れも皆賞嘆しないものはない。安藤爲章の評には、

この物語のうち、和歌並に言葉ともに、萬葉、古今、伊勢、宇津保、竹取などの古躰をはなれて、しかも、おほどかに、易らかに、優しく、凡そわが國の風流をつくしたれば、見る人をして、倦むことを知らざらしむ。まことに、日本文の上なきものなり。全篇は富貴温潤の氣象にして、宮樣の文章なれども、中に山林出世あり。市井田家あり。貧困哀傷あり。閨情風景は卷毎に見えて、情を寫し、景を語ること、まのあたり其人に向ひ、その所に遊ぶが如し。全躰口傳にして、またおのづから序の躰あり、跋あり、記あり、書ありて、諸体備はれり云々

と云つてある。また、帚木の卷の、雨夜の品さだめの條をあらためた處に序しては、

論破あり、論承あり、論腹あり、論尾あり、麁より細に入り、俗より雅に趣き、繁より簡に歸し、波瀾頓挫、照應伏案などいふ唐土の文法、おのづから具はり、その氣脉は悠暢として寛裕に、その文勢は圓活にして婉曲なり。これを漢文にて見侍らば、史記、莊子、韓、柳、歐、蘇にひとしかるべし

と云つてゐるが、これは決して賞め過ぎた言葉でない、其文例の一斑を擧ぐれば

限りあらむ道だにも、後れ先だゝじと契らせたまひけるを、さりとも、打棄てゝは、え行きやらじとのたまはするを、女もいといみじと見奉りて、

限りとてわかるゝ道のかなしきに
いかまほしきは命なりけり

いとかく思ふたまへましかばと、いきも絶えつゝ、聞えまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを、御らむじ果てむと思しめすに、今日始しむべき修法ども、さるべき人々うけたまはれる、今宵よりと聞えいそがせば、わりなくおぼしながら、まかでさせ給ひつ。御胸のみ、つとふたがりて、つゆまどろまれず、わかしかねさせ給ふ。御使のゆきかふほどもなきに、なほいぶせさを、かぎりなくのたまはせつるを、夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬるとて、泣きさわげば、御使も、いとあへなくて、かへりまゐりぬ。

これは、桐壺の更衣が病死の狀を寫したので、帝の寵愛いと深くて、相思の情きはめて濃かなる間を、病魔の爲めに割かるゝ哀別離苦の悲しみ、凄婉の辭句に、無量の情趣と、無限の愁意とがこもつて、筆痕寂寞、淚滴らむとするの觀がある。また明石の卷の一節、

三昧堂近くて、鐘の聲、松の風に響きあひて、ものかなしう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前栽どもに虫の聲をつくしたり。こゝかしこの有さまなど御覽ず。娘住ませたる方は、心ことに磨きて、月入れたる槙の戶口、けしきばかり押しわけたり。

これは、源氏物語全篇の中で、最も秀でたるところであると云つて、藤原定家が非常に賞嘆してゐた名文である。配所の月に對して都の空を懷ふ、これ既に凄怨の情に堪へがたいのである。しかも、三昧堂の幽寂なる光景に加ふるに、鐘の聲、松の風、虫の聲など、寂しいものゝ限りを出だして、簡潔の文字の裡に、無量の愁情をこめた手際は、まことに千古の靈筆と稱すべきである。また野分の卷の一節に、

中宮のおまへに、秋の花を植ゑさせたまへること、つねの年よりも見所多く、色草をつくして、由あるくろ木、赤木のませを結ひまぜつゝ、おなじき花の枝ざしすがた、朝露の光りも、よのつねならず。玉かとかゞやきて、つくりわたせる野邊の色を見るに、はた春の山も忘られて、涼しう面白く、こゝろもわくがるゝやうなり。春秋のあらそひに、昔より秋に心よする人は、數まさりけるを、名たゝる春のお前の花園に、心よせし人々、またひきかへしうつらふけしき、世のありさまに似たり。これを御覧じつきて、里居したまふほど、御遊びなどもあらまほしけれど、八月は、故前坊の御忌月なれば、心もとなくおぼしつゝ、あけ暮るゝに、この花の色まさる景色どもを御覧ずるに、野分例の年よりもおどろ〳〵しく、空の色かはりて吹きいづ。花どものしほるゝを、いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思ひさがるゝを、まして叢の玉の緒、亂るゝまゝに、御心まどひもしぬべくおぼしたり。覆ふばかりの袖は、秋の空にしもこそはしげなりけれ。暮れゆくまゝに、物も見えず吹き迷はして、いとむくつけゝれば、御格子など來りぬるに、後ろめたくいみじと、花の上を思し嘆く。南の御殿にも、前栽つくろはせける折りにしも、かく吹きいでゝ、もとあらの小萩はしたなく待ち得たる風のけしきなり。をりかへり、露もとまるまじう吹き散らすを、すこし端ちかうて見たまふ。

とある。艶麗といはうか、流暢といはうか、野分の悽愴なる景色を寫して、しかも陰鬱に流れず、情景兩つながら、よくあらはれて、たとへやうの無いまで巧に筆を動かしてゐるではないか。この他、名文妙句は、全篇に充ち滿ちてゐるが、一々列擧すべき餘白がないから、これくらゐにして置かう。

さて、紫式部が此物語を著はしたに就いては、古から種々の説があつて、或は勸善懲惡のためであるといふものもあり、或は好色の禁誡であると論ずるもの

もあり、或はまた、天臺の教義を俗衆の間に悟らしめむがために作られたものであるといふものもあり。甚しきに至りては、この物語全篇は、當時宮中にあつた事實を、諷諭の爲めに寫したので、この中にある帝といふのは、何某天皇のことである、これは何某の宮のことであるなど、附會の説を立てるものもあるが、是等は皆臆説に過ぎないので、本居宣長の玉の小櫛に、

大かた物語は、世の中にありとある、善きこと、惡しきこと、珍しきこと、面白きこと、哀れなることのさま〴〵を書きあらはして、その樣を繪にもかきまじへなどして、徒然なるほどの玩びにし、または心の結ぼれて、物思はしき折などの慰めにもし、世の中のあるやうをも心得て、心のあはれを知るものなり云々

とある通り、全く戀愛を骨子として、當時の社會の有樣を、ありのまゝに寫し出した小説に外ならぬのである。

當時の社會の風俗人情は、前にも述べた通り、文弱の弊、上下浮華驕奢に流れて、悖德亂倫、淫風は天下に充ち〳〵てゐたのであるから、隨つて、當時の世態人情を寫した源氏物語に、好色の文字、淫猥の記事の多いのは、自然の道理である。しかるに、この好色の文字から、直に紫式部の身の上にも推し及ぼして、淫行不貞の女性のやうに思ひなすは、大きな誤りである。紫式部が、たゞに才學のすぐれてゐたばかりでなく、その貞操の德の高かつたことは、一たび夫に別れて行ひ清く寡住居に世を送り、當時天下に肩を並ぶるものもなくして、勢ひ空飛ぶ鳥さへ落さむばかりの御堂關白に戀慕せられて、附けつ廻はしつ口説かれたけれども、遂に其意に從はざりしとや、また其他日常の言行を見ても明白なことで、滔々たる濁流の中に立ちて、毫も惡弊に感染しなかつた、其潔きことは、まことに泥中の白蓮と稱すべきである。安藤爲章が、紫式部の德行を論じた言葉の中に、

つら〳〵物語と紫日記とを讀みて、その氣象をば

かり、其事實を考ふるに、日本には似る人もなく、才德兼備の賢婦なり。先づ物語の上にて、一つ二つを云はゞ、紫の上のらう〳〵しく大どかなるものから、重りかにして用意深く、明石の上の心高きものから謙り、花散里の物ねたみせず、藤壺の后の過を悔いて、はやく入道したまへる、朝顔の齋院の、深く名を惜しみ給へる、玉蔓の上の、言よく人々の懸想をのがれ、總角の君の、父君の遺戒を守りたるなどさま〴〵の婦德をしるし、殊に品さだめに、あだなるを退けて、實なるを進め、しば〳〵警戒を示したるは、併しながら、式部が心おきてなりと雖も、皆昔物語に書きなして、自から賢だてをあらはさゞれば、讀む人もたゞ他の噂のやうに思へり云々と云つてゐるのは、よく紫式部の人となりを知つたものと謂ふべきである。

まだ〳〵、この物語に就ては、述べたいことは澤山あるけれども、餘白がないから、これくらゐにして置かう。まことに、源氏物語は、千古の妙文で、啻に當時の物語を代表してゐるばかりでなく、平安朝文學の精粹とも稱すべきものである。もとより、この前後に出た數多の物語も、一わたりは珍らしく、興味もあるやうではあるが、目前の世態人情を寫して、しかも、これ程まで人の心を感動せしむるものは一つもない。

（完）

大内の貴婦人

須藤求馬

◎後宮

我が國、後宮の設たるや員次一ならず、妃といひ、夫人といひ、嬪といひ、尙侍といひ、典侍といひ、掌侍といひ、みな大寶令の載する所なり、女御といひ、更衣といひ、御匣殿といふは、皆後に置きし所なり、而して女御最も寵貴の在る所なり、その皇后中宮並び立ちて別なきは、古の制にはあらじ、光仁帝の朝、始めて中宮職を置き給ひしは、桓武帝の皇母を尊び給ひ

て、皇太夫人となしけるに始り、後世の配匹の例の如きにはあらじ、故に清和帝踐祚したまひて、さきの中宮職を改め、皇太后宮職と爲したまへり、義解によれば、太皇太后とても中宮と稱すべし、そは文武帝藤原夫人は、聖武帝の皇太后にして、孝謙帝の太皇太后なればなり、舊史に中宮としるしゝは、この證ぞかし、されば、古の中宮といへるは、別に尊稱する所以にして、後世の中宮は、美を皇后に準へまつる所以なり、皇后中宮にして、門院の號あるは、徽號を上る意なり、亦二宮におはさずして院號を授くるもあり、大寶令の制は、妃は、内親王に限る規定なり、皇族を以て后と爲しゝは論なし、その後外戚擅權の世となりては、立后は必ず藤原氏の門より出で、他姓は與ることを得ず、かの建禮門院の如きは、一時の勢にして、通制にはあらず　されど多くは大臣の女にして、納言以下を以て異例とせり、女院は太上天皇に擬す、一條帝の朝に、皇太后藤原詮子を東三條院と稱しゝを以て女院の始めとす、また太皇太后藤原彰子あり、後朱雀帝の朝に女院となり、上東門院と稱す、門院の號此に始まりぬ。

◎三后

▲太皇太后　天皇の御祖母、后位に登るを太皇太后となし、妃位に居るを太皇太妃と爲し、夫人位に居るを太皇太夫人と爲す。

▲皇太后　天皇の御母、后位に登るを皇太后と爲し、妃位に居るを皇太妃と爲し、夫人位に居るを皇太夫人と爲す。

▲皇后　天皇の御嫡妻なり。

◎後宮職員及後閤等の事

▲妃　妃は、皇后の次位に在る御妻なり、位階は、四品以上なり。

▲夫人　夫人は、其の位妃に次げるものにして、三位以上なり、多くは大臣の女より出づ。

▲嬪　嬪は、其の位夫人に次げるものなり、五位以上。

後宮職員に十二司あり、妃夫人、嬪掌る所なし、而して職員に置くは、下に十二司あり、只其の多きものを擧げて、之を職員といふのみ、さてその第一を、内侍司といふ、今其の餘は略して省きぬ。

▲尚侍　掌侍、奏請、宣傳を供奉し、女孺を檢校し、兼ねて内外命婦の朝參を知り、及び禁裏禮式の事を掌る、從三位に當る也、執柄家の御女之に任じたまふ。

▲典侍　掌ること尚侍に同じ、唯奏請宣傳することを得ざるのみ、もし尚侍なくば、奏請宣傳することを得、從五位に當るなり。

▲掌侍　掌ること典侍に同じ、唯奏請宣傳することを得ざるのみ。

かくの如くにして、内侍に、かみ、すけ、せうあり、單に内侍といふ時は掌侍をさすなり、この内第一を勾當内侍といふ、また長橋局ともいふ、天子へ公方より内々の取次は、必ず、勾當内侍し給ふなり、次の四人は氏を名乘りて、たとへば、源氏ならば、源内侍なんといふ、次は國名をつけて、伊勢相模などいふが如し。

▲宮人　こは婦人仕官者の總號なり。

▲命婦　五位以上を帶ぶる官女及び五位以上の妻をいふなり。

▲女房　こは宮中に仕へ奉る女官の事なり、宮仕の各自曹司をあてられて、局住居する者の總稱なり、されと、こは上﨟中﨟下﨟の各官房を有する者をいふ、夫れより以下、相合曹司などは、女房とはいはじ。

因に記さむ、後世凡の人の妻を女房といふはひがごとなり、女房とは、禁中にて房を給はりて仕ふる者の號なり、女に限らず、男にても藏人などは、御側を勤めらる職、男房といふなり、男房といふ事は、侍中群要に見えたり、那須與一扇の的を射たる時、平家の舟より、女房も男房も、射たりや射たりと賞めたる由、盛衰記に載せたり、其他例なほ多し、女房といふも男房といふも、もとは男女に限らず、禁中にての御側近く房ある人の稱呼にして、平人の妻妾を呼ぶべき名にあらねども、末代流例と成りて、

今更に呼改めがたし、後世の大夫別當の類なるべし。

▲女御　御寢に侍することは妃夫人の如し、妃夫人の稱漸く絶えて、女御更衣之に代る、されど初めの程は、四位五位に過ぎずして、嬪の改稱の如くなりしかど、仁明帝以來數代を經て、宇多帝まで皇后を立て給はざりしかば、女御の位、漸く貴くなりもてゆきて、後宮に於きて、其の首位に居れり、而して攝家清花の娘參らることゝなれば、其の父勢力あり、其の所生の皇子皇太子と爲り給ふときは、下位にある者一躍して超え進み、皇太夫人となり、中宮と稱するに至れり、また中古以來の例、多くは御立坊の後は中宮に至り、御登位の後は門號を給はり、國母の尊號を受くるなり、

女御は殿を賜はりて置るゝによりて、或は弘徽殿の女御、或は麗景殿の女御など申し侍るなり

▲更衣　こは天皇の御衣を更えさせ給ふ便殿を主る官なり、遂に亦御寢にも侍せり、其の位は、女御より下れるものにして、四位以上の者は絶てなし、物語などに、更衣御息所を同じ樣に用ゐつれと、物語は寓言を本とする故に、格式の事にはなぞらへがたし、且つ御息所には、親王諸王大臣已下の女參られ侍れとも、更衣は大納言以下の庶流の女仕ふまつるなり。

▲御匣殿　此官も初の程は、櫛笥など納るゝ所の名なれと、後には其の所を司る官の名となり、一條帝以後より、猶天子の御寢に侍することと見ゆれば、時代によりて、名と實との遷り變りは、いづれの官にもまゝある例なり。

▲大上臈　亦上臈ともいへり、二位三位の典侍をいふ、大臣方の御娘孫をもいふ、赤また青色の制服を着て陪膳に候するなり、この服色は、禁色と稱して、聽許の上ならでは用ふべからず、大臣の娘孫等は聽され服することあり、これ等みな上臈と稱す、されと三位以上の婦人たりとも、禁色着用の聽しを得ざれば、上臈と稱する事を得ずとなり。

▲小上臈　公卿の御娘をいふ。

▲中臈　命婦は、みな中臈に當るなり。禁中に仕へざ

る婦人も、五位を帶るか、五位以上の妻は、皆中臈と稱することを得ればなり、侍臣の女已下、諸大夫良家の女、醫、陰陽道等の妻女も、猶中臈と稱するを得るなり。

▲下臈　諸侍賀茂日吉社司等の女なり、皆候名とて、女官の本名にはあらず、禁中に候ふ間の名なり。凡そ女房は、上臈小上臈内侍の外は、夜の御殿及び朝餉の内に入らず、只中臈は朝餉の緣を渡り、下臈は之を渡らず、只下臈は御服を取らず。

▲女藏人　下臈をいふ也。

▲采女　こは主として御饌に奉仕する者にて、羞膳給仕の役なり、上れる世には、郡の少領已上の姉妹及び子女の容儀端正なる者を諸國より進めらる。

▲刀自、女孺　これも侍の娘など參る、とじは内侍所のまほりなり、女孺なども、刀自が仕立てゝ出すなり。

▲東豎子　行幸の時姬松とて、おかしき馬に乗りて供奉する者なり、これこは三子を用う、三つ子は天子のまもり兒なるといふ。

▲半物　召つかふ下女を「はした」といふ事は、古きことにして臺記に見えたり、枕草子には「すまし女」とのせたり、下女を仲居といふも、御飯を女中の詞に「おなか」といふ　禁裏御臺所にては、「おなかたき」といふは、御飯をたく役なり。

▲北政所　攝政關白の御本妻なりと中右記に見えたり、さて攝政關白は、共に天子に代りて政道を執り行ふ人の妻なるゆゑ、政所といふとぞ、この號は執柄家にても、內裏より內々の宣旨ある由なり。

▲大政所　夫は隱居して太閤となる、執柄の母公は大政所と稱するなり。

御臺所　畧して御臺ともいふ、大方は北政所と同じ程の事なり、この號は宣下などなし、攝政關白の御妻をいふなり、公方大臣の御妻をも稱す、禁中に、御臺盤所といへり官舍あり、畧しては御臺所といふ、供御を調ふる所なり、文德帝仁壽の頃、御臺所の官女に、ならびなき美人おはせしを、時の大臣に賜はり妻となしゝより、この名始るとかや。

▲御簾中　公卿殿上人の御妻なり、亦簾内ともいふ、こは常に簾の内深く住みたまひて、専ら内を治め、地下人の如く、猥りに人にまみゆる事なく、簾の内深く御坐す故、御簾中と稱するなり。

▲北の方　大名の御妻なり、北は子の位にて陰の方なり、女も陰性なるもの故、之にかたどりて「北の方」といふ、北の方といふ名は、右大將頼朝の時より始まる、また公卿殿上人の室とも稱す、公卿とは三位已上の人をいふ、三位以上を月卿ともいふ、四位五位などの昇殿のゆるされたるを雲客とも殿上人ともいふなり。

女歌人望東尼

佐々木信綱

近世の女歌人

下河邊長流釋契仲が大坂に於て、戸田茂睡荷田在満が江戸に於て、荷田東麿が京都に於て、相ついで唱へ出した國文國歌革進の響き聲は、四方に行き渡つて、元祿復興の春が來た。文の林歌の園生には、共に美はしき言葉の花が咲き出た。同情の念に富み優美の情にみちて、物に感じ易き女流の間には、其思を吟詠にあらはして、芳ばしき名を永く傳へた閨秀の少なくない。まづ賀茂翁の門下には、年未だ二十歳に充たずして、麗はしき文布を殘して世を去つた弓矢倭文子。涼月遺草、佐保川、月波消息を著はした鵜殿餘野子、筑波子家集を殘した土岐筑波子が、縣門の三才女と世に稱へられて居る。香川翁の門下には柳原安子神方升子等がある。千種有功卿の門には太田垣蓮月尼高畑式部等がある。いづれも鬚眉の男子をして、後へに瞠若せしむる程の作家である。是等の人々が世に其名を知られ居るに反し、女歌人として以上の人々に勝るとも劣る事なきながら世の知られざる女歌人がある。それは野村望東尼である。

歌は人の感情を詞にいひあらはしたものであるから、作家の境遇が違へば其吟詠も隨つて相違がある。同じく夫に後れて歌詠を樂しんだのではあるが、蓮月尼と

望東尼との間には甚しい相違がある。蓮月の歌は清くやさしく女らしく、望東尼の歌は強く雄々しく力のある歌である。歌は廣いものであるから近世の歌人の如く單に優美のみを以て、歌の眞髓と心得て居るのは間違である。壯高なる作、豪壯なる作、はた可憐なる、輕妙なる、洒落なる、其他各自に各自の長所があるのである。かの蓮月尼を近世女歌人中の、優美なる作家の代表といふべくは、此望東尼を勇壯なる女歌人の、標本と稱へてよいのである。かの蓮月尼の家集海人の刈藻と、望東尼の家集向陵集、上京日記、夢かぞへ、防長日記等を比較し、讀み味ひ見るに、其甲乙は何れを姉、何れを妹と定め難いのである。然るに蓮月尼の名は人口に膾炙し、望東尼のは歌人としては更に知られざるは遺憾の至であるから、玆に聊か其略歷と其歌について述べやうと思ふ。

望東尼の略歷

望東尼の名は歌人としては、更に顯はれて居らぬが、勤王家としては、其功績世に知られて、明治廿四年正五位の御贈位があつた程の女丈夫である。野村望東は黑田家の世臣浦野勝幸の三女で、文化三年九月福岡に生れた。父は由緒正しき家筋で三百石を食んで居つた。資性淑雅、容貌又麗はしく、殊に手蹟が見事で、裁縫の業にも巧であつた。故に福岡の士人爭うて婚儀を求め、中には名家大身もあつたが、望東は總て拒んで聞入れなかつた。一日父は望東に云へらく、汝嫁ぐべき時も既に長けんとするに、斯く諸家の錦木を空しく斥けて、何處に往かんとするぞと問いしに、望東答へて、おのれは徒らに、其容貌其家產を選び望むには侍らず、只我身を寄せ我一生を托せんと思ふ人、未だ一人も侍らねばといひたりといふ。然るに同藩士に野村貞貫とて、食祿四百石を領し、家柄正しく其人物また勝れて居つた人がある。望東は貞貫が尋常人でないのを聞知つて、彼が妻を失ひて、三人の男子ありしにも拘はらず、其後妻にと嫁いだ。夫妻の間は頗ぶる睦じく、望東は彼三子を愛育すると我產みの子の如く、

三子も亦た望東を慕ふと產みの親のやうで、一家和合琴瑟を鼓するといふべき樣であつた。然るに夫貞貫はうき世の煩しきを厭ひ、弘化二年長男に其家を讓つて、福岡の町を去ること近き、平尾村に山莊を作り營み、そこに望東と共に住んで、靜に月花を樂み老を養ふて居るに、安政四年貞貫は六十六でみまかつた。時に望東は五十四であつたが、其菩提寺明光寺に參禪受戒し・薙髮入道して望東禪尼と稱した。それは俗名もとの名をしか書いたのであつた。

尼になる前から、望東は福岡の歌人大隈言道について歌を學び、其蘊奥に達したのである。言道の事は他日更にお話をする時があらうと思ふが、其歌は最も奇警の作に富んで、着想の新奇なる點に於ては、德川時代第一流の歌人に、肩を並べ得る作家である。望東尼が其當時の歌は、向陵集といふ中に集められてある。今花圃女史の著、もとのしづくの中に拔萃してある中から、更に拔萃しやうと思ふ。

望東尼の家集向陵集

梅の花散りしく庭の苔の上に
　今更めきてふる霰かな

これは春の霰を詠んだので、女らしい然も詞つかひの巧な歌である。

しばしだに物は思はじ其間にも
　柳はもえて梅はちりけり

くよ〳〵とつまらぬ事を思ひ居るひまに、月日の只過ぎに過ぎゆくを、おもしろく歌うてある。

窓近きまがきの椿花ごとに
　あなたむきても咲出づるかな

かの無名抄に、頼政はすぐれたる歌仙である。それは木葉が一葉ちり鳥が一聲なくにも、朝夕心をつけて居つたからといふ話が出て居るが、歌をよみ文を書く人は、常に朝夕の事にも深く心を注がねばならぬ。題によつてのみ歌をよみ、粉本によつてのみ繪を畫いて居つては、何時迄も古人の羈絆を脫することは出來ぬ。

觀察力を深くし、又想像力を養うて、さて自から新しき境に開かねばならぬのである。古人が椿をよんだ歌は、彼の萬葉なる巨勢山のつら〳〵椿といへるによつて詠み、然らずは落ちたる花を拾ふといへる想に止まつて居るので、よく椿の實際を畫き出したものは少ない。此歌の、窓近くある垣根の椿が、何れの花も皆生憎あなたを向きて咲きたりといふは、なんでもなき事のやうながら、其なんでもなき事が中々見出し得られず、常に見て居つても捕へ得にくいのである。前にいふた如く、歌は廣いもので、一讀涙の下るを覺えぬやうな悲壯の作も、深く胸にしみとほるやうな情の歌、自然のさまが眼前に髣髴と浮び出づるやうな景の作も、無論よいのであるが、又此椿の歌のやうな、微細な觀察の、なんでもない事の中にもすぐれた歌は含まつて居るのである。

　中々にたゞしき人ぞなつむしの
　　火にいるうき目見る世なりける

是は時事に感じての作である。又夫の病のおもりて、やう〳〵心細げになりゆくに、夢うつゝともわかで明しくらしける頃、

　はつ秋の風にふかるゝともし火の
　　かげも心もほそる夜半かな

軒にある楓の葉ひろきが散れるを見て、

　雨つゆをいとひがましく今更に
　　うらがへりても散るもみぢかな

かの小人の、まさかの時になりて、裏表反復する類を、寓しいふたのである。

大風のすさまじく吹きし日、

　我庵のなき世の後のしるしにと
　　思ひし松も折るあらしかな

安政二年十月江戸に、大地震ありける由傳へ聞きて、

　平らけき道うしなへる世の中を
　　ゆりあらためん天地のわざ

慷慨の詠、婦人の作とは思へぬやうである。

安政三年八月、師なる大隈言道翁都に上らんとせられける時、おくりに至りて、

たひらかに歸りきませといふまにも
　わが命さへかつおもふかな

師弟の情、言外にあふれて感深き歌である。

道遠くゆきて歸りて今朝の事
　思へば冬も日長かりけり

冬の日を詠んだ歌で、輕妙の作である。

霰ふる老の夜床はさゆれども
　心地よげなる板びさしかな

霰の音の冴ゆる、又消えやすきを詠んだ歌は多いが、音の心地よきを唄ふたのは、新しい着想と、いはねばならぬ。

山里も門のさむしろかげかへて
　さすがに春をまつけしきかな

山家の歳暮を詠んだのである。

月かげのうつるを見れば程もなき
　たらひの水もちひろなりけり

心ふかき歌である。又產みし子の　やがて身まかりし時そを歎き悲しんだ作がある。

只一夜よにあらんとて生出でし
　こは何事のむくいなるらん。

子はに、これはといふを、かけたのである。

川の瀨に洗ふ蕪の流れ菜を
　おひあらそひてゆくあひるかな

田舍まどにて、誰もよく見る景色ながら、誰も未だ唄ひ出でざるのを、詠出でし望東尼の技倆は、實にすぐれて居る。此歌などは、全く師なる大隈翁の感化で、是を言道翁家集草徑集の中にまじへても、何れを何れと、見分けにくいであらう。

海士少女かりほす磯の荒布にも
　いくたりつなぐ命なるらむ

あはれなる漁夫の生活、たくみに寫し出されて居る

山柿の花とも見えぬ花みれば
　みのほど〳〵にさかりありけり

貧家の少女などの、年頃になれるが、思ひよそへられておもしろい。

史傳

光榮ある露國皇帝の保姆

メレー、ヒユース夫人の事歷

エディシユ、ヲルフ著
丹下時子譯

夫人の貧窮時代（上）

メレーがその夫なるジョンヒユースと結婚しましたのは、西曆一千八百十六年の六月、彼の女の生國愛蘭の都ダブリンの片田舍で、極めて天氣のよい日でした。

メレーの家は極々貧しい暮しをして居つたので、父は其時より丁度一年前彼の有名なるウオータルローの戰爭の折、戰死してしまひました、それで母親はメレーが結婚すると、自分は一切の家具を若夫婦に渡して、自分の生國へ分れて行きました。

夫婦は別に十分の暮しが、出來ると云ふ譯ではありませんが、母親が所帶道具一切を、置いて行つてくれましたので、日々の事にもまず不自由もせず、都合よく樂しく、近所の人も羨むばかりに、其日〱を送つて居りました。

一躰メレーは心立のよい上に、母親のしつけがよく屆いて居りましたので、自分はあのやさしいジョンと、仲よく暮して樂しい家庭を作り、近所の手本になりたいものだと考へて、萬事に注意する上にも注意して、つとめて居りました。

誠や若い娘が結婚すると云ふものは、どんなに樂しい生涯を持つて來るものか、どれ程樂しいものかと思ふのも、無理はないであります。

ジョンも一から十迄、何でもメレーの願は、自分のよろこびだと云ふ調子に、自分を忘れて妻の思ふまゝに、家業には精を出し、萬事よくつとめて暮して居りました。

メレーは時々人の評に、ジョンはいけぬ、あんな怠惰者が何にならう、しかしまア今はよく辛抱して稼ぐが、あれが何時まで續くか知れぬなどゝ、寄るとさはると云つて居るのを、聞きましたけれども、それは皆が二人の仲よく暮して居るのを、羨んで嫉妬から惡口を云ふのだと、聞流して少しも信じませんでした。

所が彼是れ三月も經つてからの、或土曜日の事でありました。

メレーは其日の仕事を手早く仕舞つて、いつもの樣に今日も二人で運動に行かうと、ジョンの歸るのを今か今かと待つて居りました。

するとジョンは、歸る時間が來ても、一時間過ぎても、二時間經つても歸つて來ませぬ。何うしたのであらうかと、心配しながら待つて居りますと、やがて日の暮れ〴〵に、何だかそわ〳〵氣の落着かぬ樣な樣子で、歸つて來ました。

「ヲヤお歸りなさい、大さう遲う御座りましたね、モー明日のおかずを買ひに行く間もない位ですね」と編みかけて居つた、夫の靴下を見ながら、にこやかに申しますと、ジョンは、

「何！明日のおかずだと、お前は餘程無性者だよ。今まで行かずに居つたが、なぜもつと早く行かなかつたんだ。」

メレー「お金がないのですもの、行かれないのですよ、お金はありますか。」

と夫のけんどんな言葉に、少しく驚きながら云ひました。ジョンは片方のかくしを探して、又片方の方を探し、やつと十錢ばかり出して渡しますので、

メレー「これだけですか。」

と何となく物足りぬ様。ジョンはすかさず。

「それ丈さ。お前にやる金は一躰ありがたいと思はなけりやアならないよ。有り丈はたいてやつたのだもの。お前金を儲けるのはおれだよ。それによ、子供か何かの様に一文なしにさせてさ。舊い友だちのミカル、デレーが、丁度歸國したよ。」おれがお前を可愛がつてやれば、お前も飯の事は自分で仕末をつける筈だ。云ふ事はこれ丈だ。

と自分の云ひたい丈を云つて、さつさと出かけて行きました。可愛さうに若しも、ジョンがメレーの顔を一寸でも見たなら、いかにも氣の毒になつたでせうに、生憎ジョンは下を向いて居つたので、少しもメレーの様子が見えませんでした。それからといふものは、今迄の樂しかつたメレーの生涯も、黒雲がかゝる様になりました。

夏も過ぎ冬も來り、仕事も段々少なくなりました。そこでメレーはジョンが、豚の世話や鳥の世話でもして呉れるか、又畑のものでも片付て呉れゝばよいにと思つても、そんなとはジョン大嫌いで、只々ゐろりのそばで、烟草をふかして一日ぼんやり暮して居りますので、メレーは何から何迄自分でしなければならず、おまけにジ

ヨンの友達のミカエルは、そんな事は女のする事さ、わしの婦アは其爲に嫁に來たのだ、男はそんな面倒を知らないのがいゝのだ、只毎日新聞でも見る丈さなどゝ云ひますので、メレーはミカエルがよい友達でない事を悟りました。しかしまづ何も云はぬ方がよい、惡い顔して家を追出したの、惡口を云つたのと云はれてもならす、又春にでもなれば、ミカエルと酒屋遊をするよりも、家內に十倍の樂が出來るであらう。さうしたら自然なほるであらうと思つて、つとめて機嫌よくして居りました。

冬も過ぎ風もやゝ暖くなり、花もぼつ〳〵咲き初め、鳥も歌ふと云ふ時になりました。メレーの家にも、美しい可愛らしい女が生れました。さすがのジヨンも、これには餘念なく、片時も其側を離れられない程よろこびました。メレーはジヨンに勸めて、彼の母親の名を其まゝ、名をマーガレツトとつけさせました。

それからジヨンも、仕事に精を出す樣になり、追々夏にもなり、日も長くなつては仕事も早く片付き、夕方なとは夫婦で門口へ出て、メレーは赤兒の守りをしながら編物をすれば、ジヨンは赤兒が、母親の膝の上でかたつたり、又母親の編んで居る編針が、せわしさうに働くのを見て、キヤツ〳〵と笑つたりするのを見て、同じ樣にキヤツ〳〵と云つて樂しんで居ました。此樣子にメレーは、此樣な樂しい事は何處を尋ねてもありはしまい、嬉しい事だ。此上の願があらうか、有難い事である「幼兒に敎へられる」と云ふ句は、誠であるなとゝ喜ぶ樣になりました。

實にジヨンさへしつかりして居れば、此樂しい家庭も永遠に續く筈でありますのに、何を申すにもジヨンは、極々心の薄弱な男とて、人の云ふ儘に誘はれるので、こんな可愛いマーガレツトのあるのに、夏が段々過ぎて寒い冬の來ると共に、又折角のメレーの嬉しい喜ばしい希望も消えてしまひました。

メレーは時々胸の結ぼれて、愛の雲の晴れぬ時もありましたけれど、只々力一ぱい赤兒を幸福に、家を樂しく

整へる様にとつとめました。彼は仕事をする時々、美しいやさしい聲で、

　與へられにし事皆を、つとめよ勤め何にまれ、心をつくしなし遂げよ。はかなく見ゆるものとても、神の御
　前にわたひあり。

と歌ひました。

夫人の貧窮時代（下）

其年も暮れて、クリスマスも過ぎ、地上は霜白き冬の最中となりました。あはれやメレーは、母より讓られた家財道具も、一つへらし二つへらし、果は大切な寶と思ふもの迄も、手放してはパンの代となし、今では殘り少なくなりました。

彼是する内に、霜も消える様になり、ジョンも一つ仕事が見付かりました。それも全くメレーが可愛さうと云ふ所から、仕事をさして貰ふ事になつたのでした。メレーは此頃近所の物持の家で、洗濯女が病氣で、人が入ると云ふ事を聞きましたので、朝早くイヤ〳〵出て行く、ジョンの姿が見えなくなるかならぬに、マーガレットの衣服を着換へさせて、お隣のお内儀にお金をやつて守りを頼み、大急ぎで身仕度をして、其家へ出掛けて往きました。

そこでは他の下女がなほる迄、一週に三日づゝ、洗濯に來て呉れとの事でありましたので、まづ此洗濯賃で炭や何かの費用に充て、ジョンのお金で家賃が拂へると思ひました。

さて其日は天氣もよし、夫も仕事が出來たし、自分も仕事があり、誠に嬉しい事だ、有難い事だと、何となく氣も輕々となつて、頻りと感謝をしながら仕事をなし、一日の長い骨折も、何でもない様に思つて、夕方の六

時に小一里もある所を、いそ〳〵歸つて來ました。所が太陽もはや入切つて、今宵は星も少なく、雨摸樣で何となく厭に淋しい晩になりましたので、今朝嬉しく思つた程、今また何とも云はれぬ心持がして、胸一杯になりました。さも厭な事でも起つて來るかと云ふ樣な。

彼是七時十五分前ばかりに、小供の預けてある所へ往つて、受取るが早いか、七時にはジョンが歸る筈だから、それ迄に火を起して置うとて、大急ぎに歸つて來て、自分の家の戸口まで來ると、驚きました。臺所口から燈がさすし、人聲は聞えるし、之は確かに盜賊が入つたに違ひないと思つて、大急ぎで戸を明けて又もう一つ驚きました。餘りの事に側の椅子をしつかりと捉まへました。若しさうしなければ慥に倒れたでありましたらう。

部屋にはジョンとミカエルとが、向ひ合せに坐つて居りましたが、其邊のとりちらした樣子と云ひ、二人の顏の赤い事と云ひ、確か今迄二人が何をして居つたかといふ事が判りました。メレーの顏を見ると、ミカエルはそうつと立つて、一言も云はずに、ひよろ〳〵足で出て行きました。

可愛さうにメレーは、自分が骨折の仕事をして歸つて見れば、こんな有樣ですもの、ほんとに切ないつらい事だと思ひました。しかしそれよりも猶つらかつたのは、ジョンの話でありました。

切れ〴〵の話ではあれど、何でもジョンは晝飯に歸つて來て、ミカエルと酒を飲んだものらしく見える。ミカエルの話があまり面白かつたので、時の經つのも知らずに、遲くなつてから赤い鼻をして仕事に戻つて見ると、先きではもう入らぬと云ふて、朝丈の賃金を呉れて斷わられたと云ふ事である。それから今迄又二人で、飮んで居つたのだと云ふ事が判つた。メレーは少し何か云つて見ましたが、ミカエルと一所に居る間は、迚もジョンが眞面目になる事は出來ぬ。今の樣な心がけでは雇主も出來ない。一層二人で知らぬ所へ行つて、新しい人

達と交つて、ミカエルから離れたら、又よくなるかもしれぬと決心して、其夜は夜一夜、云ふに云はれぬ心持で明しました。

春は相變らず來ました。一年前には人も羨んだ程樂しかつた二人の、小さい美しかつた夜も、今は荒れ果てゝ、住む人もなくなりました。それは二人がロンドンへ、仕事を探しに行きましたので。

さてメレーがロンドンへ行つてからの、夫の怠惰や食物の不足や、子供の病氣や、種々雜多の心配や苦勞、色々の悲しい目に遇つた事は、お話し致しますまいが、もし其時にメレーは國王の宮殿で死ぬ、又其屍骸は其國の大公爵に荷はれて、墓に納められるのだなど、云ふものがあつたら、其人は發狂人だと、誰も取合はぬでしたらうが、實にメレーは、宮殿で其生を終り、しかも其死骸は大公爵に送られて、墓に入つたのでありました。

或朝メレーは、朝食と云ふも名ばかりの食事を終へて、茶碗を片付けながら、ジョンに一時間か二時間、赤兒の守りをして下さいと云ひました。ジョンは、

「メレーお前は是から先き、どんなになるのだ。自分の子さへ自分で始末が出來ぬとは。」

メレー「仕事を探しに行くのです。」

ジョン「お前の爲にだらうね。おれは仕事なんか入らないのだからね。何の事だ。妻があつても自分の事をしてくれなければ何の役に立つ。」

といひました。メレーはじつと夫の樣子を見ますと、衣服といへばぼろ〱、髮といへば何時刈たのか、鬚は生へ放題、顏も手も垢まぶれの姿、これがマア三年前に、自分の若い美しい愛を捧げた、彼の紅顏の若者であらうか、憎らしい飲酒が、男らしかつた性質や、やさしかつた心情を、彼から奪ひ取つた樣子に見えました。

ジョンは又、妻は自分の樣な者の爲めに、奴隷となつて働くべき者であると心得て居りました。此樣子にメレーは、自分の父がかつて、どの樣に母を取り扱つたか、父は何事でも母のよろこぶ樣に、樂しむ樣にとつとめられたのにと思ひましたが、一躰克己心の強い婦人でしたので、一生懸命に堪へて居りました。

ところが、ジョンの言葉があまり無情なので、大變心にさはり、どふ仕樣かとまだ半分迷つて居つた心を、固く決めてしまひました。そこで、

メレー「イヽエ仕事をいやがる人の爲めに、何もせつ〳〵とさがして歩くよりは、時間の費し方は外にあります」

といひながら、帽子を被つて肩かけ片手に、出かけて行きました。

それは隣家の内儀が、親切にあまり遠くないところの家で、下働の水女が入るといふ事を敎へてくれたので、先づ行つて見樣とて行きました。

其家の主婦は、メレーのきちんとした、小さつぱりした樣子が、大變氣に入つて、明日から一ケ月丈、目見えに來てくれといふ事で、約束して歸りました。

さてまた、メレーは明日から彼の家へ、雇はれて行くこととなつたが、それにしてもまア、驚いたのは自分の最愛の夫、しかも己を忘れて滿腔の愛を擧げて、自分を愛してくれた彼の夫と、別れなければならないのであるのに、その事に付てはあまりつらいとも悲しいとも思はなかつた。どふして其樣になつたかと、實に不思儀に堪へられない程でありました。

（以下次號）

科學

兎(卯)の話

藤堂梅軒

「女學世界」が産聲を擧げたのは丑の歳であつた、それで梅軒は其の初號に牛の話を揭げた。それから次の歳が寅であつたから、亦虎の話を揭げた。數へ來ると「女學世界」は二ヶ年の間に益々發達して、今度の卯の歳を迎へるこことになつた。で又候梅軒は、例によりて兎の話を揭げねばならぬこと、「女學世界」から催された。何だか今更のように、年の代り目に逃れぬ義務であるかの如く感じられる。するこ責任が重いやうで、そうはお茶濁し的の話も書けぬやうな氣もする。兎も角も、責任の盡せるや否やは別として、一つ口を、否、筆を走らせて見やう。

兎は優しい姿で、毛肌は絹の如く、顏圓く、耳長く、一見目出度いやうな、又愛らしい動物である。それで卯の年に生れた人は氣が優しいとか俗說にいふやうだ、それは當にもなるまいが、兎に角、掛物、屏風などには花の下に兎の戯れる所や、白浪の湧く上に兎の跳る所などを顯して、愛づるものも多いやうであり、殊に月の中に兎の宿るとかいつて、一種詩的の感想を起させるのもある。何しろ人には愛でらるゝとも、惡まるゝ動物でないことは確かであらう。

さて此のように愛で美しまれる兎は、通常家畜の品で、これは本元の種よりは餘程に變化したものである。本元の種といふは、野山に居るもので、一口にこれを野兎といふがこれには二種ある、一は英語で Hare といふもの、他の一は Rabbit といふものである。ヘアーといふのは身の長が凡そ二尺ばかりあつて、尾は三寸程もあり、耳は隨分長くて、顏の長さよりも猶一寸ほども長い、さうして後足は甚だ長くある。ラビットになると、之れとは稍々體が小くあるが、大躰よく似て、只だ耳が幾分か短く、さうして足も亦少々短くある。色合は、ヘアーの方は背が灰褐で腹が白く、尾の上面は黑いが下面は白くある。これに付いて面白い話があ

る、此の動物は體の色が自然に枯草や土の色に似て、それで敵の眼を晦すが、走るときに態々其の尾を上げて白い所を見せるは何故であらうかといふ議論が湧いて、詰まる所、それは互の間に危險のあることを知らせる爲にするのであることが分つた。して見れば動物に具はる天然の色の如きも、皆決して偶然のものでなく、それこそ意味のあることが確められたのである。

ラビットの毛は一樣に褐色で、ヘアーのやうに耳の先に黒い斑のあることはない。そこで家兎は、此のどちらから變化したであらうかといふと、一寸、ヘアーからかと思は



れる。ところが、ラビットの方である、成る程耳の長い所と體の色が一樣ならぬ所なんかは、ヘアーの方が確からしいやうだが、實際に、其の系統を尋ねて見ると、どうしても、ラビットの流を汲んで居る。家に畜はれると段々に變はつて、耳は長くなり純白も出來るし眞黒も出來るし、時としては、斑も、鳶も、灰色も樣々に顯はれて、面白い程變物が出來るのである。だから時代によりては、投機師が、盛んにこれを畜つて、高い價を付

けて賣買した例がある。丁度萬年青や蘭が此の投機師によりて取り扱はれたと同じことである。

世間でいふ兎の話には、右のヘアーとラビットとを混じて居るやうである。此處には、先づヘアーの話をして、それから後にラビットに及ぶやうにするであらう。一躰兎ほど臆病なものはあるまいと申して、何でもそれを臆病物の標本としてある。併し、よく考へても御覽、人が來て逼るからとて、それを臆病物といつて了ふは餘り酷い譯ではないか。世界で、人に出逢つて滅多に逃げたことのないものは象と獅子と位で、外の物は隨分虎でも熊でも逃ることがある。すると、逃るものは、皆臆病物であるといはれやうか。

兎が獨り臆病物でない辨解は、これで立つたとして、それよりも、彼は却つて、大に勇しく、大膽なことが、間々見受けられて居る。或る時人が子兎を捕つて、其の耳に刻を付けやうとして居る所へ、卒然側から一匹の親兎が現はれて、跳びさま、其の人の手を甚く打ちつけて、引き裂いた。それで別段に逃げもせずに、其の人が子兎を離すまでは、傍を去らなかつたといふ一の話がある。動物には、得て此のやうな事實があるもので、親は子のために非常に勇氣を生ずるものである。人間でも矢張り此のやうな例が屢々あるもので、世に其の奇談が傳はつて居る。兎は、其の同類の間柄の中で、劇しい鬪爭をするもので、これも亦彼れが臆病物でない一證である。

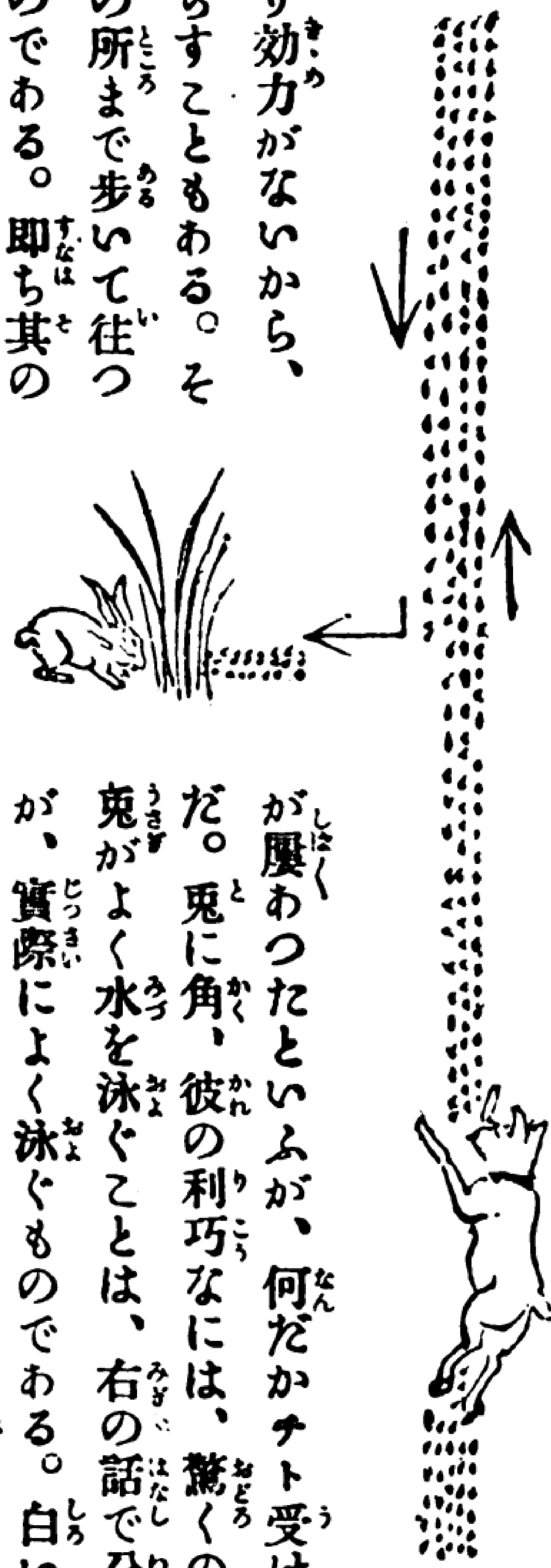
後脚の長いことは、前にも述べた通り、それで長い距離を跳ぶことが極めて妙である。文章にも『始ハ處女ノ如ク終ハ脫兎ノ如シ』といふが、跳び出す彼れの逸早さを譬へたのであらう。此處に一つ天然の配劑がある。それは、彼れがどんなに、食物を豐に取つても、決して肥え太らぬのである。如何に早く走れる道具を所持して居つても、體の目方を重くしては何の効もない。それが即ち天の配劑といふのである。能く考へて見ると、それも常に盛んに跳んで運動するから、肥らぬのでもあらう。双方相俟つて往くのである。人間でも樂隱居樣か何かのやうに、旨いものばかり食つて、

運動が不足すると、段々肥え太つて來て、どうにもこうにも始末に終へぬことがある。よく西洋のポンチ畫にもそのやうなものあり、又實物にも決して少くはない。そんなのは、一種の病身といはなければならぬ。即ち天の配劑の恩澤を受けなかつたのであらうか、否々、運動不足の結果である。チト、兎のように跳び出せばよいに、呵々、兎の足が長い所から話がエライ方向へ跳んで了つた。兎の跳び出すは長さばかりではない、高さまでも實に巧なものであると、或る動物園の中に畜放してあつた兎が高さ八尺ある浴直の壁を跳び超えて逃げたといふ實際の話がいひ傳へられて居る程である。



人は狐を以て最も狡猾の動物と思つて居るが、兎といへども、をさ〳〵これには劣らぬといつても、宜しからう。否これよりも寧ろ優つて居るといはれる程である。彼は獵犬に追跡せられることを、何よりも恐れる。犬は彼れの臭を鼻にして、幾里といへども、尋ね出して來るから、そこで彼が犬に對する防禦の方法といつたら、實に至つたもので、それには先づ自分の殘す臭を晦ますのである。犬よりも眞先に驅けて、ズン〳〵と遠く跳び出し

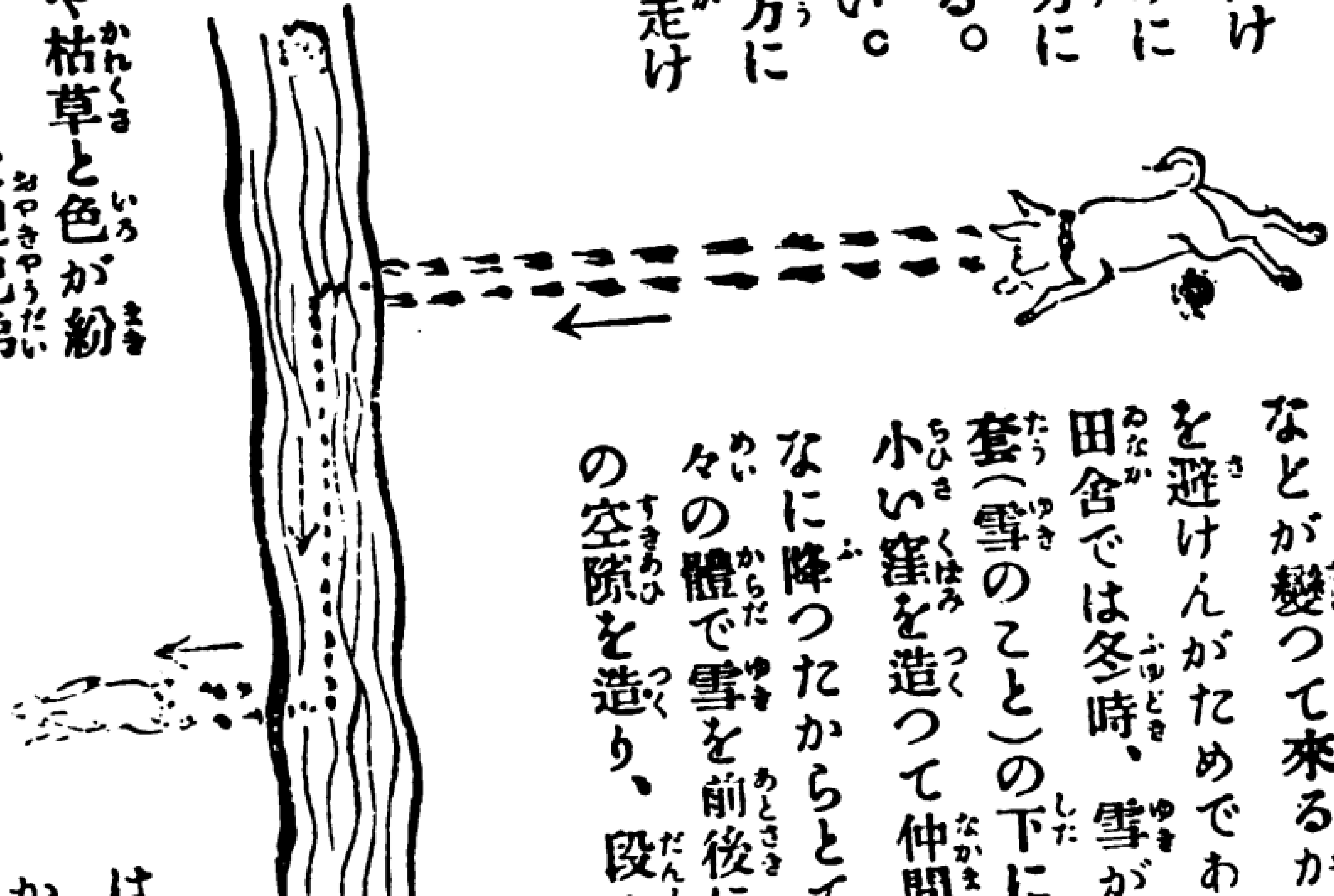
て、成るべく一直線に進んで、良い程の點に達すれば、其の道を返して來て、凡そ中程まで來ると其の道傍と直角の方向に、出來るだけ大きく跳びて、脇へ反れ都合の善い所に身を隱すのである。すると犬は專ら其の臭ばかりを辿つて、一直線に進んで往つて了ふ。兎はそれを見濟まして犬の後の方向へ急ぎ去つて行くのである。ナント旨い法ではないか。若しも其の足跡が、雪の上などに着くときは。此の法は餘り効力がないから、別に又一の工夫を廻らすこともある。それは、必ず池か川かの所まで歩いて往つて、それから晦ますのである。即ち其の水に跳び込んで、どれだけかを泳いで、然る後に、元の方向線よりも餘程遠ざかつた所に上陸する。追つて行つた犬は、其水邊に達してから、其の足跡の見えぬに當惑して、それ切りに追跡は止めて了うのである。却々に考へたものではないか。それで若しも、犬に追ひ詰められたときは、海の上をも、跳び込んで行くのだから、犬は到底閉口して了ふ。或る老兎になると、幾日幾月かの間、其の獵人の知己であるかの如く見せて、犬を瞞かすことがある。たとひ犬が後にこれを發見するとしても、自分が眼の利かなかつたを耻ぢて別に其の兎に喰つてかゝらぬことが屢あつたといふが、何だかチト受け取れぬ話のやうだ。兎に角、彼の利巧なには、驚くの外はない。



兎がよく水を泳ぐことは、右の話で分かつたであらうが、實際によく泳ぐものである。白い浪が湧き立つ海に、兎の跳び行く様は、よく畵にもあるが、それは跳ぶと泳ぐとを混じたのであらう。隨分一里程離れた島へ、泳ぎ渉ることもある。それから返るには、水の柔ぎるのを待つ、それで濱邊へ寄せて來る浪の卷き立つ

樣子を測つて、丁度と思ふ頃に、ザブンと身を躍らせて最も近い點に泳ぎ着く。

此處に面白いことがある、兎は耳の長いだけに聽くことが鋭い、それに目の大きいだけに視ることが敏いが、しかし其れを、前の方に用ふよりも、奇妙にも後の方へ多く用ひる。だから頓だ間違の起ることがないとしない。後の方へばかり注意して居る間に、前の方に獵犬どもが居るとも知らずに、其の中へ走け込んで了ふやうなことがあるのである。



野兎は一般に穴を掘て、それに住ふといふが、それはラビットのことで、此にいふヘアーの種類は、只々、一寸とした窪を土の上に壓して造り、其の上に平たく身を横たへるから、周りの土や枯草と色が紛つて、見とめられ難くなるのである。定まつた親兄弟といふ家族は造らないが、仲間同志の愛情は、隨分强いもので、たとひ獵犬に依りて、遠ざけられても、熱心に元の仲間の處へ歸つて來る。氣候の變り目には、其の都度に仲間が引越をする、それは寒さや天氣模樣などが變つて來るから、自然に嫌な霜や雪や日射などを避けんがためである。

田舍では冬時、雪が厚く積ると、兎は其の白い土の外套（雪のこと）の下に、靜かに横はつて居つて、其處に小い窪を造つて仲間共は潜れて居る。彼等は雪がそんなに降つたからとて、別々に離れ去ることはない。銘々の體で雪を前後に押して、自分と雪との間に、些かの空隙を造り、段々に天井の圓い洞窟が出來て、恰好に良い巣穴となる。其の巣穴は全く閉ぢて居るが、只一つの小い穴を穿けて、それから空氣を通す用に立てる。それは彼れの温い呼氣で、一部分の雪を解かしたのである。此の小穴が、それだけ、彼等に必用であるだけ、亦それだけ、彼等を自滅させる方便となるのが、實に彼等に取

つては傷しい限りである。即ち其の小穴から洩れ出づる彼の臭氣が、忽ち鼻の鋭敏なる犬に嗅ぎ付けられて、其の犬は主人なる獵人が來るまで、其處に見守りて、何の雜作もなく捕へさせるのである。何の道割の合はぬは、彼等兎でこそある。

農家の貯藏時になると、兎は中々の曲物で、最も厄介物と見做される。色々の收獲物を害ひ、麥の芽が漸と地から萠えたばかりを食ひ荒らし、又畑や園に入り込みては散々に暴れ、若い樹の綠皮を嚙つて痛める。此の侵害は中々に防ぎ切れない。晝の間には靜かに潜んで居つて、夜になると、どんな遠方へでも出稼をするのであるから、園主や畑の翁が、其を探る手掛の得られないに困じ果てゝ居る。泥棒でも、晝の間には大人しく潜んで、夜にばかり働いたり逃げたりすると、どうも捕らないことが多くつて御役人樣は困つて居るやうだ。しかし泥棒も横着になると、白晝に公然、大盡顏をして遊興をしたりなんかするものだから、到頭捕まつて了ふのである。

隨分多くの兒を產んで、速く殖えて來る動物で、一ヶ年も經てば、出產し、產每に四五頭の兒を擧げる。兒は生れて、眼を開いて、全身に毛を被り居り、四五週間は親の注意の下に居るが、その後は各々に分れて自分勝手に生活をする。併しラビットになると、產每に七八頭を擧げて、毛もなく、眼も閉ぢて、眼を開くまでには、十日も十二日間もかゝる。

以上は主としてヘアー種の話であつたが、これからは主としてラビット種の話に移るのである。此の種はヘアーとは違つて、餘り土地を轉ずることはなく、それに前に述べたやうに、多くの兒を產むものだから、非常に數が增して來る。だから年々大狩を遣らなければ限りなく繁殖して、始末に終へぬやうになるであらう。人に狎れ易くて、家に畜はれ易い、畜はれて手入をすればする程、態が變つて來て、原種の面影を留ぬほどになつて了ふ。こんな小さな短い褐色の毛を持つた野獸が、どうして長い、ふさ〳〵とした、絹のような毛を持つた、品のよい、耳の長い、喉下の肉の垂れ

た、家兎に變ることが出來やうか、殆ど不思議であるといはねばならぬ。

兎が野生の時のやうに、自由に氣兼なしの場合にあつては、どうも利巧で面白いものである。兎圃に置けば、其の中を躍り回つて、妙な古風な舞をする。其の愉快らしさが、止度もない程である。一番善い所を見るには、ソツト近寄つて盗み見するが宜しい。それも極早朝か、若しくは夕方遲くかが最も良いのである。一度も未だ其れを見なかつた者は、決して其の面白い感念を造り得られない、若しも一番これを見たら、最一度見度いとの念が起つて、止らない程であるさうだ。今此處で其の面白い事實を一々述べやうものなら、殆ど『女學世界』の半分以上を割愛しなければならぬ。さればとてそれも不都合である。兎に角、其の奇々妙々なること抱腹絶倒するほとで、ソツト瞰く人の眞面目さが、どれだけ支へられるかを試驗するやうなといふばかり、餘りことで、時とすると、其の人の眞面目の綱が切れて、我知らず噴き出させることがあるから、兎

先生自らも、痛くそれに驚く程であるといふこと。少々其の樣子を話さうに。

或る時は彼の地中の家の戸の傍に、眞面目にパラ〳〵と雨が降るかのような音を立てゝ居ること、ツト起つて、四方を眺め回すこと、何か一つの愕き怖れに打たれた如く、而も最も眞面目を以てするのである。忽ち或るものは、怒つたらしく、荒々しく地を踏むこと、恰も角力取る力士が、土俵踏をするやうである。見る見る中に、全群が全速力を以て走け出して、少くも一里ほども走るかのやうに見せて、卒かに飼草のある所に立ち止まり、平氣に靜かにこれを嚙る樣、まるで一尺も走らなかつたやうである。さうかと思ふと、全群又もや走け出し、一頭づゝ巣穴に跳び込みて影を留めないこと、全く魔神のやうである。今までは、生々として賑はしくあつた場所が、遽かに寂しく靜まつて、其處に何物も永く居なかつたやうに變つて了ふ。する中に一の小い鼻がソート巣穴の上に現れる。やがて、頭と耳も現れる、今度は怖はそうに、全躰が明かに現

はれて、又もや中止して
わつた滑稽を賑かに演じ
るやうになる。
兎ほど驚くものは外に餘
りあるまいと思はれる。
それには仔細がある。何
分に、彼の敵が、あらゆ
る方面に見とめられ、又
色々な假裝の下に見とめ
られる。それだから、安
全を計るために、出來る
だけの用心を固めるので
ある。鷲や鷹が兎の兒を
好み食るものから、不意
に天の一方から現れて、
而も其の危險を知りつゝ、
ある不運の動物を一攫に
する。鼬鼠や黄貂までも



兎圃を荒らし、家猫さへ
も、其の近傍に善い兎圃
のあるを見出さば、劫略
者となるのである。狐は
最も甚しく巧なる追捕
者で、都合よき道に依り
て、彼等を地の外へ堀り
出してまで、巧に盜み往
くことをする。
兎が住む巣穴は、銘々不
規則に造られ、それがと
こまでも廣がつて、互に
連ぎ續くやうになつて居
る。大抵の敵は、自分で
水を潜つて、巣穴に達し
それで危難を逃れる。と
ころが、鼬鼠や黄貂など
は、其の地中の住家に追

跡して、達しないまでに、捕り殺して了ふ。どう見ても、兎は薄命なものといはなければならぬ。人間でも實際兎の肉を食べれば、柔くて旨いものだから、八方から敵の攻め寄せるも致方があるまい。兎こそトンダ迷惑な話である。さりながら此處に幾分の彼に意を強くするに足ることがある。それは獵犬が屢々兎の巣穴を見付け出して、其の中に這入り往つた跡を見濟まして、兎が靜かに其の入口を塞いで、無殘にも獵犬を地の下に葬つて了ふことがある。

牝兎が母とならば、尋常の巣穴を去りて、特別のトンネルを掘りて、兒供の最初の一週間を此處に匿ひ置く、其のトンネル穴の奥に、乾いたる草を詰め、これに自分の躰から採つた毛を混せて、其の兒のために、柔かな且温かな寢床を造つて遣るのである。

兎は恐ろしく破壞的動物である。兎園の近くに居る人は、よくこれを知つて居る。野や園や林に於てのわらゆる掠略者である。好んで幼い樹を痛めて、足の達く限り、樹の柔かな皮を剝ぐことを事として居る。時としては樹の皮を食ふが、併し多くは、地上に其を殘し置く、それといふは、只々。齒を鍛ふためで、恰も猫が爪を疊や柱の面に掻き立て、又鼠が齒を堅い木製品に嚙みつけると同じ樣な譯である。兎が樹を荒しかけると、其れが枯れるまで遣り續ける。それで此のやうな樹を助けるには、二つの法がある。一は兎の全躰を打ち滅すまでである。他の一は樹の下より凡そ三尺程の高さまで、煙草の粉を粘土に混せたものを塗りつけて、其の樹の皮肌を見せぬやうにするのである。

野生自由の狀態にわらば、專ら植物のみを食物とするが、家に畜はれると、樣々のものを雜食する、菓子を好み、堅パンを喜ぶ。併しそれが齒に粘り着くようならば、離さうとして、首を左右へ劇しく振る。よく豚の脂鯨の脂などで造つた蠟燭を食ふもので、提燈の外に、その端片が落ち轉つて居ることを認める。こんな事は別に問ふまでもないことで、詰まり、彼が何でも食するからである。又一定の間、蔬菜園に入るを許されると、其處に造りわる萵苣や胡蘿蔔などを食ひ荒す

ので困りものである。
一般にラビット種はヘアー種と相容れない間柄で、兩性を混血せざることは六づかしくある。近年までは、兩方の間に雜種を認めることは、全く無いものと定められて居つた。併しそれも、偶然の例はないでもないやうだ。即ち父がラビットで母がヘアーのことがある。どうかすると、幼いラビットが、ヘアーのやうな色合や、容貌を持つて居ることなのを見ることのあるので、それは、併し、家兎の兒孫である。
さても兎の話が斯くまでも長くならうとは思はなかつた。何がな卯の年に因んで賑かに、景氣よく話さうと思ふから、自然長引いたのである。併し、長くはあつたが、別段これぞといふ取り所もないやうだ。只此のやうな愛らしい又滑稽な小動物として、讀者が目出度く卯の年を迎へられ丶ば、宜しいのであることを祈る。マサカ、此の文章の終りが脱兎の如くあると咎め給ふな。

（完）

耳の効用

山形縣女子師範學校長　津田元德

本年は卯の年だから兎に緣のある耳の話を致しませう
凡そ、口ほど人の働きを奪つて、己れの功とするものはない、假へば、物の味なども、其大半は、色取りの配合目に叶ひ、其香氣の馥郁得も言はれぬ所があるせいで、眞に口の味ふ領分は誠に僅かであるに拘はらず、誰も、色が甘ひとか、香ひがよひとか言はずして、只管味がよいと云ふ、然し、目と、鼻との爲に、口が大なる助を得て居る事は、十中五六の人が承知してる事は、此三者が顔面に互に接近せる位置を保つてるからでもあらうが、少し遠くにある耳などは、丸で、其功を口に奪はれて、誰人として、辯護するものがないから、玆に此題目を揭げて、耳の功を述べ、大人にも兒童にも、適切の注意をしたいと思ふのである、
元來、目は利口な質で、以前は、口や鼻と其位地も

餘程遠ざかつて居たに違いないが、則其證據は、下等の動物ほど、眼は頭の兩側又は後部にあるが、段々進んで、牛となり馬となるに及んで、其兩眼が近より、遂に猿となると、其兩眼は益々接近し、人類に至つては、全く顔面中央の位置を占めて、鼻口を眼下に使ふと云ふ有様に立至つて、

所が、耳はおとなしいから、十年一日の如しで、舊位地に安んじた爲に、眼と口と鼻とは段々接近したに拘はらず、獨り取り殘されて、頭の兩側に漸く位置を占めてるばかりで、誰人にも、わるかなしかに取扱はれ、口にすら馬鹿にされて、其功を奪はれる樣になつたのである、

但し此おとなしい耳も、只一つ、人の功を奪つてる事がある、則ち、「香を聞く」と云ふ事で、鼻の金鵄勳章を奪つたのであるが、然し例のおとなしやだから、只名前丈奪つたので、名實共に奪つたのではない、所が、

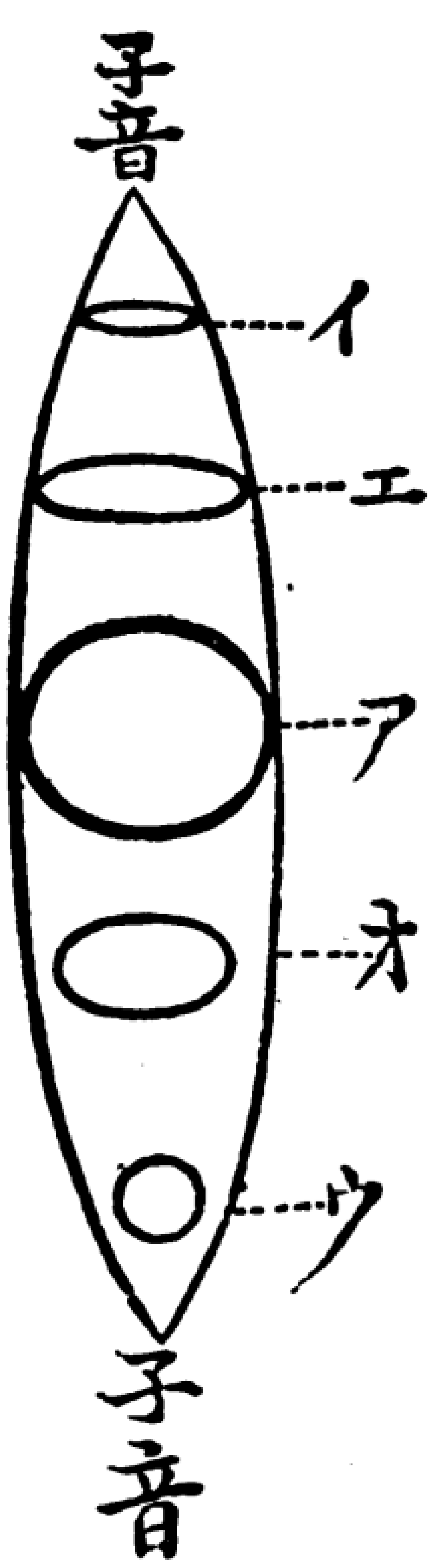
口などは、耳の功を名實共に奪つてるので、やれ彼の人は、唱歌が上手なの、やれ此人は演説が甘いの、喉がわるい爲に聲が出ないの、齒が缺けた爲に詞がわからぬのと云ふけれども、耳がわるい爲に談話が出來ぬ、耳がいゝ爲に唱歌演説が上手で、音調が亮かだと云ふ人は一人もない、

其も其筈である、佛蘭西の大先生方でさへ、物の言へぬ啞は、獨り、其喉頭、聲帶、口唇等、所謂口の機關がわるい爲であると唱へて、否そうではない、全く耳のわるい爲に啞となるのだと云つた獨逸の學者達と久しい間爭つた位だ、

而し、耳がいくら無口だからつて、眞理には勝てないで、とう〳〵口ばかりが物を言ふではなくて、其大根本は、耳が物を言ふ事と極つた、從つて聾啞の教育上にも、大なる變革を來し、遂に啞も物を言ふ事が出來る樣に爲つた。

實に其筈で、口が幾ら威張つても、音聲の變化、緩急、强弱の調聲は、とても簡單なる口の機關ばかりで出來るものでない、

通例母音は、「アイウエオ」の五つと云ふが、中々そんな簡單なものではない、元來「アイウエオ」は順序がわるいので、音聲の順から云へば「イエアオウ」で、上圖の如く「ア」は尤も大きく且圓く口を開いた時の音聲で、それから段々狹くなつて、今や齒をくひしばると云ふ境が「イ」であるから、此より進めば、子音になるのである、又口を段々に丸く小さくして、今や唇が閉づと云ふ境が「ウ」で其より進めば、子音になるのである、故に我國の猫の鳴聲でも「ニイエアオウ」で、獨乙の猫も、英佛の猫も、大抵ミイエアオウと云ふ樣である。即ち自然の發音の狀は爭はれぬものである、



されば、此「イ」と「ウ」との間は、幾變化にもなるので、通例は只五つに分けてゐるが、精密に云へば、倘幾十種幾百種にも分つ事が出來るので、或學者は、七十餘種に分ち、或學者は、三百餘種に分つたのであるから、して、此幾百種ある母音幾千種にも分つ事を得べき子音と云ふ風に、緻密徵細なる變化は、とても、口丈では眞似る事が出來るものでない、必ずや、耳の如き、おとなしい緻密家でなければならぬ、

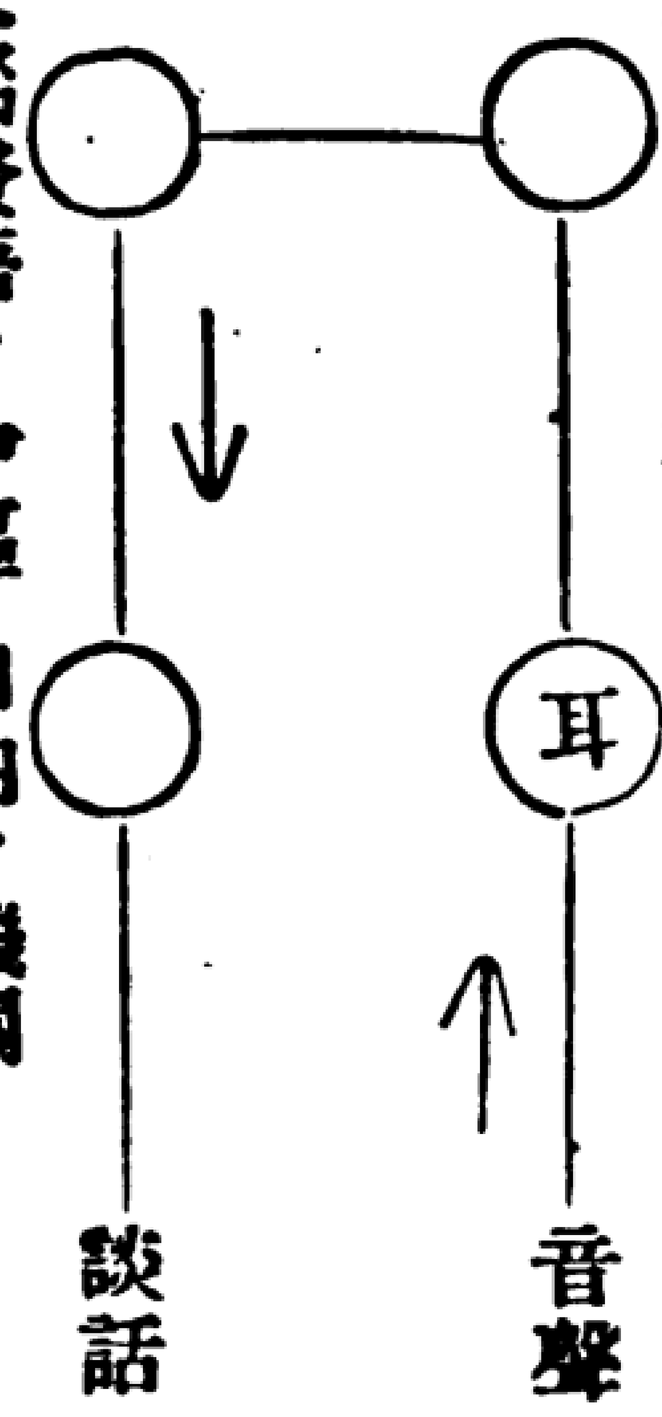
其反證は、どうして、啞が出來るかを研究するが一番の近道である、其は、前にも言つた通り、獨乙學者の研究によつて、左の二大原因に歸する事となつた、

一、聽神經及び其中樞の障礙

一、大腦發語の中樞及び其發語の諸筋（特に舌の運動を宰る舌下神經）の障礙

だから、第一に、耳の機關、耳の中樞に損じがあつたならば、決して話しが出來るものでない、吾々が談話を爲すに至る順序を圖に示せば上圖の如しで、倘之を

詳說すれば、左表の如くなる、



一、輸入的損傷　耳又は聽神經に損傷ある時
- (甲)言語を聞き違ふこと(難聽)(幼兒に多し)
- (乙)全く聽く事能はざる事(聾)(初生兒の如し)
- (丙)生れない前より此損傷あらば全く語る事能はざる事(啞)

されば、人生最大不幸の聾啞は、全く耳の損傷によるので、從つて耳がよければ、談話演說等最もよく出來る道理である、大腦中樞の損傷が假令あるにしても幾分か發音する事を得、又幾分か詞語を聽く事を得、又他人の語を解し搆音する事を得、よほど聾啞よりは上等である、又口內諸機關の損傷のみならば、他人の語を理解し、記憶する事などは容易く出來るので、只自ら談話する事が出來ぬ丈である、之を表にすれば、

二、中樞的損傷
- 耳と大腦中樞との中間に損傷ある時
  - (丁)詞を聞く事は出來るが解解する事が出來ぬ(語聾)
  - (戊)音は發するが他人は何たるを解し得ない
- 聽中樞と發語中樞との間に損傷ある時
  - (巳)他人の詞を解し音丈は發すとも言語の体にならぬ
- 發語の中樞に損傷ある時
  - (庚)(巳)と畧ゝ同一たれども音を發する事が出來ない

三、輸出的損傷
- 發語中樞より口內機に至る間に損傷ある時
- 口內機關に損傷ある時
  - (辛)(巳)と畧ゝ同一たり

尙一層耳が一番に大切な事が明かである、從て、耳の形狀構造及び耳の養成が、言語、談話、演說、唱歌等を上達させる大根本で記憶想像等の知力にも、大關係があるから、幼き時から、耳に關する諸疾病(耳漏等の類)は餘程注意し、又之を臥せしむるにも、耳の外形のつぶれぬ注意なども必要である、

彼の、大國樣(大國主尊)惠比須樣(少名彥名尊)の外耳に、豐肥なる、十人の訴訟をも一時に了解せられたと稱する豐聰耳尊即ち聖德太子の如き、皆其英明聰智の大人物たるを表する所以で、古代の列聖の御名前には、耳の字が澤山付いてる事は、天照大神の御子、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊を始めとして、綏靖天皇の御諱神渟名川耳尊の如き、又同天皇の庶兄、手研耳尊、研耳尊の如き、安寧天皇の御子、息石耳尊の如き、皆何れも耳を尊んだ事が證明せられる、近くは、神童田村嚴の如きも、非常に耳の發達がよいとの事である、

斯くの如く、古代は、耳を尊んだものであるが、例の耳の性質がおとなしい爲にや、段々と其尊敬の度を減じられ、今日では、其非常の功績をも、口に奪はれて、只漸くに、「耳株が强い」(運の强き事を意味す)「福耳を持つ」位の諺がある丈で、非常に粗末にされて居る、

福島少將の三男三郎氏は、中學の年代に、何となく耳の奧が痛み學問が出來なかつたが、矢張耳は例外にして、全く腦病だとて郷里に暫く靜遊し、學問の事は斷念して農夫になる覺悟であつたが、ふと非常に耳が痛み出し賀古鶴所氏に診察を受けしに、全く耳の中に一物があるとの事で治療の上これを取り出した所、腦病もなほり、學問も進む樣になり、高等の學校に入る事を得たとの話しがある、これも、幼時より耳を大切にし、早く耳に氣が付いたならば、數年間苦む事もなく、農夫にまでならなくてもよかつたのである、されば、世の人は、今よりは非常に、耳に注意してほしいのである、

やれ彼の人は、鼻が低いとか、此娘は口が大きいとか、結婚の條件中にも、第一に、眼、鼻、口などを數へるが、耳が小さいとて不緣になつた話も、耳朶が大きいから、能い所に貰はれたと云ふ話も聞かぬが、實際は、此耳の形狀も、第一の條件にせねばならぬのである、英國の兒童研究家ツーナー氏も、耳の外形によりて、性質がわかると言つて居ます、

從て言語の改良、方言の矯正、談話の巧妙、音樂の熟練、能辯、達辯、雄辯等、大凡世人が、口の功、口の練習に屬するもの丶、大根本は、耳に歸せなければならぬ事を注意し、耳に代つて、其功績を表明したので、此外に、耳自身固有に屬する功績などは、云はずともの事である。

（完結）

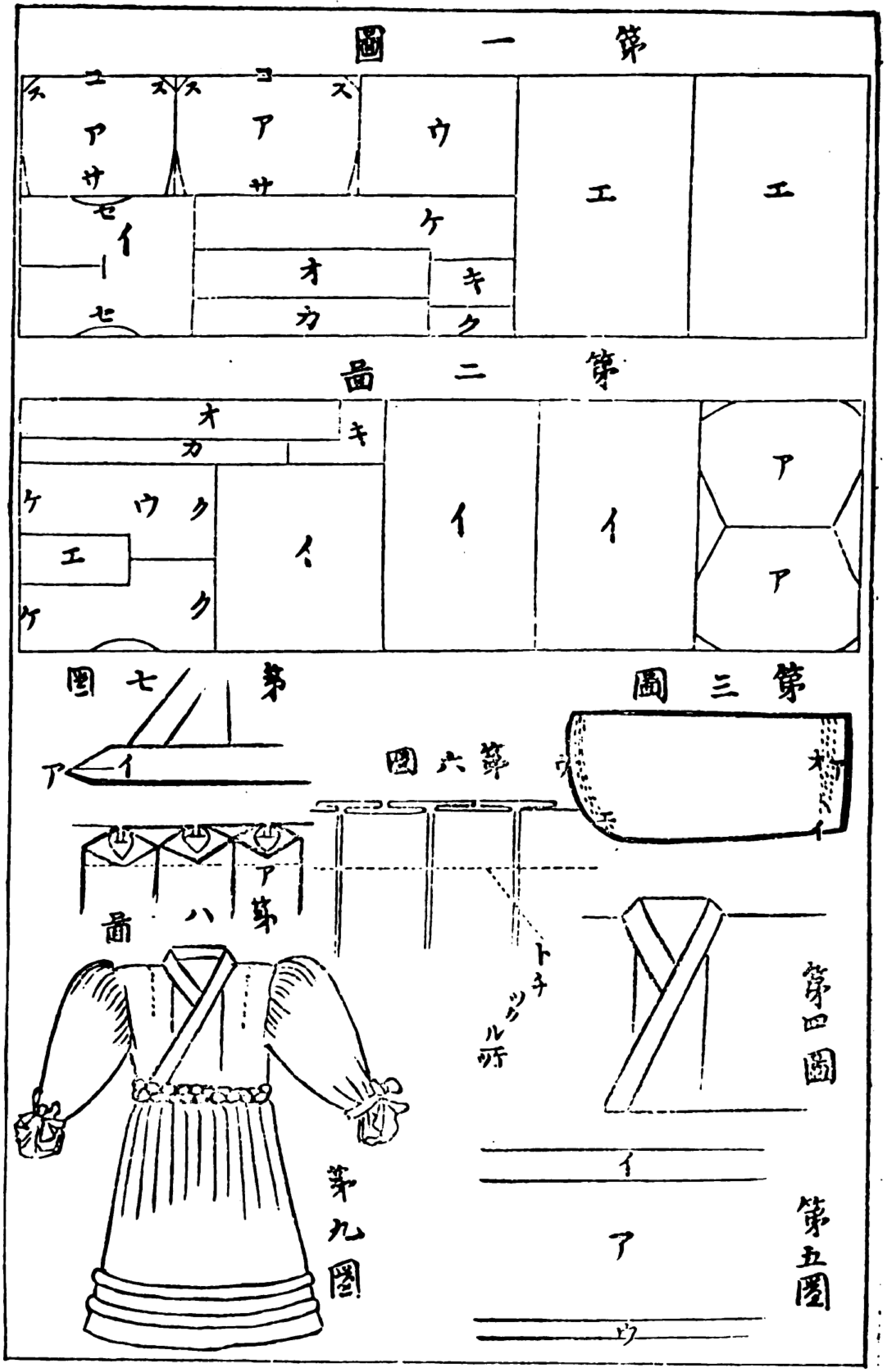
裁縫實習

新案 改良服の仕立方

共立女子職業學校教授　金子銅子

●此改良服は友人など丶相談して種々考へた末に出來上つたものですが、主に小兒用ので之を小兒に着用させて見た所が存外好評でありましたから一寸御紹介しませうこれは上も下も續てをりますから小兒自身人手を借りずにたやすく着用することができるのと、着用した格好の愛らしきこと、袴を用ゐずにすむこと、などの便利があります、しかし又上と下とを離してをいて上ばかりを着て袴をつけても宜しく此服の下に着ますものは襦袢は勿論冬期なれば綿入の筒袖胴着、これは長短は隨意です、又ネル製のズロース、ペチコートの如きものを着けます、又並の長襦袢でも時によりて種々にいたしてよろしい、

改良服を仕立る前には豫め其着用する小兒の寸法を一寸とりました方が仕立上てから着用した工合がよろしい、其寸法は並の着物の衿のつけ（背のところ）より帯をしめる所までの長さ、胴廻り、總丈、肩巾（これは出來上りてから肩上げをするから不用のやうなれどもまた肩上の巾など斟酌を要するからとりてをく）行き、等をとります、用布は大概メリンス、フランネル（こ丶で御話しするのは冬もの丶つもりゆえ其つもりで御覧）で巾二尺のものに就ての裁ち方を申しませう（夏服なればチッミ或は眞岡、サラシ等を用ゆ）裁方は並巾ものでも裁つことはたやすくできる、第一圖（ア）


第一圖
ス コ ス ス コ ス
ア ア ウ
サ サ
セ イ ケ エ エ
オ キ
セ カ ク
第二圖
オ キ
カ
ケ ウ ク
エ イ イ イ ア
ケ ク ア
第三圖
オ イ エ
第七圖
ア イ
第六圖
第八圖
ア
トヂツケル所
第四圖
第九圖
イ
ア
第五圖

袖、(イ)身頃、(ウ)(エ)は袴、(オ)衿、(カ)帶(キ)及(ク)は衽で(ケ)は餘り切です。寸法は袖巾九寸五分、(コ)は一尺三寸、(サ)一尺一寸として(シ)を斜に切り(ス)の所を格好よく弓なりに切りとります、身頃は七寸の丈であるから總尺が一尺四寸、巾が一尺五分、衿肩は一寸六分、(セ)のくり方は、深き所五分、長さ四寸位丁度袖付丈をくります、帶及衿は巾三寸、長さ二尺、衽は長七寸、巾二寸五分と致します、(ウ)の袴は巾が袖と同樣で丈が一尺五寸、(エ)の袴は全躰の巾で丈は一尺五寸とする、それ故積り方は(エ)一尺五寸、(ウ)もまた一尺五寸でありますから一尺五寸の三倍に袖丈一尺三寸の二倍を加へましたもの即ち用布丈で七尺一寸です、もしまた裁方で身頃の巾が狹き樣に御考があれば第二圖の樣に裁ちましてもよろしい、圖中(ア)袖で巾が一尺になります、其他は第一圖と同樣(イ)袴、(ウ)身頃で丈は第一圖と同樣、前身の巾(ク)八寸五分、(コ)はソラ衽になります、後巾(ケ)五寸五分、衿肩は第一圖のと同樣(キ)及(エ)は餘り切れ(オ)衿、巾が三寸五分丈が二尺前後、(カ)帶、長さが二尺四寸、巾一寸五分といたします、積り方は一尺五寸袴丈の三倍に身の總尺一尺四寸と袖丈一尺三寸とを加へたものを用布丈といたします、それで總尺數が七尺二寸となります、第一圖の分とさほど差もないが身頃の巾の廣くなりましたかはりに帶は裏に他の切を用ゐねばならぬ、これは冬期用のつもりですから裏をつけます、(第一圖のも第二圖のも同樣)それゆへ裏になる切は別の布で裁ちまして之につける、縫方は初に袖をとりて袖口の方第一圖の(サ)の方を裏表合せて縫ひ第一圖の(シ)の所を裏表四ッ縫ひに致します、それより第三圖の如く(ア)は二寸位はなして小針に三度ぬふ、此三本小針に縫ひます間は一分位はなします、(イ)は八分ほど縫はずに置く、(ウ)の所は極そばを三本小針にぬひまして、(エ)は二寸五分位のこします、そして(オ)の小針の縫ひ糸をシメて袖口を二寸七分位にしてツボンか又は縫口取りテップをつけます、リボンなどなれば袖口山の所で花結びにすると猶見た所が美しい、身

頸は背をぬひ後巾を四寸八九分より五寸位までとし、袖付わきを五寸として脇をぬひ、衽をつける、第二圖の方なればツラ縫ひに致します、衽下りが二寸、衽巾二寸として衿をつけます、其衿をつけます前に裏になるものをやはり表同様に縫、表と合せて衿をつけます衿は衽の先きまで第四圖の通りにつけます、衿巾は普通の衿巾と同様にしてくける、次に袖を付けます、袖は山の所にギャダを二寸五分か又は三寸位の間によせて身頃の表裏二枚と袖の表一枚とを縫ひ合せ次に裏袖を身頃に綴ぢ付けます、か様にして袖をつける方が肩が立て見えがよい様です、ヤックチは殘してをきまして並の袖で申せば、フリと申す所をくけます、(袖を縫ふ折に申殘しましたが袖を四つ縫ひしたとき一寸ばかりは表裏別々に縫てをくと絎るのに都合がよし) 袖を皆付けてしまひますと手の上げ下げが工合が惡るいからヤックチをのこす様にしました、袴はギャダなれば二布もあれば宜しくありますがヒダになりますと胴廻りの三倍と五寸位多く致しますそれ故第一圖及第二圖の三布位は縫がなければなりませぬ、縫ぎ目は兩開きにして一ヶ所は上部を五寸位縫ぎ殘します、裏は矢張同じ大さに三布縫ぎまして、木線巾のものなれば表に適する丈幾布を縫ぎ合せます) 第五圖の様に(ア)裏(イ)は上部の表の切の返りました所で七分位、(ウ)は下の裾口の方の表の切の返りで一分位と致します、か様に裏表を合せます、又上部は表を裏にかへさずとも甲斐絹、色絹其他の切類があれば上部を表とケヌキ合セにして表のかへり丈即ち七分位の巾につけてもよろし、此袴の上げは直に下りる様にするには裏と共に上げますがこれは少し見た様が不細工であります、手ぎわよくするには表のみに上げをして後ち裏をつけますヒダは見計ひまして七八分か一寸位つまり袴の巾に都合のよい様に折て丁度第六圖の様に折ります、次に第四圖にある様な形の上に着るものをとり帶をつけます帶は裏をつけるときは帶にてはさみて付け帶の下をくけ、帶の巾が廣くして裏表續きてをるときは表をつけをきまして、裏帶をくけつけます、下まへは端を角に

くけ、上前は第七圖の(ア)の樣に劒狀にくけて(イ)の樣に穴をあけ、穴かゞりをいたします、後は背縫ひの兩端はギヤダをよせます、(此總帶の長サ即ち胴廻りが初めに寸法をとりました胴廻りの大さと其半分とにいたします、次にヒダを取た袴をとりまして、帶の上につけます、袴の上は帶より五厘位上に出る樣にいたします、そして第六圖の點線の所丁度上より六分位下りました所をとぢつけ其後第八圖(ア)をとめてまゐります、もし初の色どりでもよければ同じ色よりもよほど美しく見えます、付け終りましたら第七圖の(イ)の穴に適合する場所に美しいボタンを付けて合ふ、樣に致します、此ボタンも一種の飾となります、下まへは衿の先きに合ふ所にひもを付けて結びます、もし袴がギヤダであれば帶の下に入れてつけてみます、又上まへは兩方にリボンをつけて之をきるときに結び合せて飾の一つといたしてもよろしうございます、第九圖に示したものは此改良服の出來上りましたものでございます。

（完）

●高知の雜煮　僕の家では、每年味噌雜煮を食るが、ソレハ先つ塗椀へ田芋(呉たろ)さ豆腐(五分角位に切りて)を入れ、夫へ味噌汁さ餅(二寸角位のもの)の呉たろのを二ッ切レ入れて、ソシテ野菜のユデたるを入れ、其上に鰹節の細かく削りたるのをかけて食るのだが、當地で一般に行はれて居るのは、澄まし汁に、今云ふ雜物を入れたのを食するが多いやうだ。而して又山奥の村へでも行くさ、田芋の大きなの二つ位入れて汁さいへは殆んご無いさいつてもよき位、殊に餅なごは極小サキのを入れ、夫れへ鰹ぶしの削りたるのをかけて食るのもある、覺へて居るが、僕が先年病監保養の爲め、山中で年を迎へた事がある、其時に隣家の婆サンから、所謂深母の惠を受けたのは、全くソレデあつたのだ。夫だから當地では、格別一定して居るさ云ふ事は無い樣だ。

●筑前宗像地方の雜煮　當地方の雜煮は重に貝雜煮に御座候、汁は澄ましにて、餅の形は大く圓く候(農家なれば餅は張り込みて太く一升を四十餘りにチギリ候)雜物に必ず入るゝは第一昆布、鮎、青菜にて、其他に里芋、牛蒡、胡羅蔔。味じ出しに鹽鰤の切味を入れ候、鹽鰤の代りに鹽鯛を用ゆるは勝手に候、贅澤の向は椎茸及蒲鉾を入れ候。之は上戶も舌鼓みを打ち候、正月廿日は小豆入のセンザイ雜煮戶々調理して食ふ事はキマリの樣に候。

英語實習

藤生眞子

CONVERSATION. 會話

FEMALE STUDENTS QUESTION. 女學生問題

Hana—Well, Miss Kiyo, what are you reading?

花子—チヨイト、おきよさん、あなた何を讀で入らつしやるの。

Kiyo—Oh, I am reading a news-paper about female students miss conduct.

清子—アノネー私は今女學生のふしまつに付て新聞を讀んでいるのよ。

H.—Why, who have committed such bad conduct this time?

花子—マアーこんどは誰れが其んな惡ひ事をしたの。

K.—Have you not seen this paper yet?

清子—あなたわまだ此新聞を御らんなさらないの？

H.—No, because I do not believe all what they write.

花子—いゝへ、なせなら私わ新聞の事は皆なほんとふと思ひませんもの。

K.—That is true, but some girls are truely very bat.

清子—其れはそふですよ、然し或る方は全くわるいんですもの。

H.—Yes indeed, so we must not have bad friends.

花子—エー、眞個に私たちは惡い朋友を持ない樣にしなければなりません。

K.—Especially we must be very careful when we acociate with men.

清子—べつだんに男子と交際するのに注意しなければなりません。

H.—Of course, we must re-member Chinese sayng: "Boys and girls when they are seven years old should not sit to-gether in the same room."	花子—勿論『男女七歳にして席を同じふせず』と云ふ事ををぼへてをらなければなりません。
K.—Yes, and the news-paper tell us almost every day some words of advice.	清子—エーそをして新聞に毎日私共への忠告が、かいてありますわ。
H.—It is a serious question for the educators and for our selves.	花子—其れは教育者と私共にとつて大事な事ですからねー。
K.—When one girl does bad thing, why, people think that we all girls are bad.	清子—一人悪るいと私共は皆悪るいと思われますからねー。
H.—Indeed, it is ourgreat regret, but we could not help for it.	花子—ほんとうにくやしい事ですけれとしかたがないわ。
K.—Now I must go home.	清子—さあ私はうちへゆかなければなりません。
H.—I am sorry, I have detaind you so long.	花子—をきの毒様、をひきとめ申して。
K.—Oh! never mind I will see you again.	清子—とふいたしまして、又御目にかゝりましよう。
H.—Yes, we will talk about it, when we have time.	花子—エー又時があつたらお話し致しましよう。
K.—Now, good by.	清子—其れでワさようなら。
H.—Good-by.	花子—さようなら。

WIT AND HUMOUR. 一口噺

Mamie: "She is trying to keep her marriage a secret."
Maud: "How do you know?"
"She told me so.

メリー、"わの方は自分の結婚を秘密にしやうと思つてお居でるのですよ、"
マテイルダ、"わなたとうして、それを御存知なの?"
"わの方が、さう言ていらつしたもの"

((註)) 自ら秘密にすと言ひながら、其事を既に自ら語り居るなり。婦女の饒舌を諷したる所に滑稽の意あり。

Mamie は *Mary* の親愛語、*Maud* は *Matilda* 或は *Magdalene* の畧にして、共に西洋婦人に普通なる *Christian name* なり。

Willie (at his lessons): "Say, pa, what's a fortification?"
Pa: "A fortification, my son, is a large fort."
Willie: "Then is a ratification a large rat?"

ウ井リアム、(課業中に): "チイ、お父さん、砲臺といふ者は何なの?
父: "そらア砦の大きなのさ"
ウ井リアム: "それぢや「認定」といふのは鼠の大きい奴ですか?"

((註)) *fortification* さいふ語さ *fort* さいふ語さ意味相通ずるを以て、同様に *ratification* (批准確定の義)さ *rat* 鼠さいふ語さも、關係あるやうに小供の思ひたるなり。此滑稽の意は譯出するの法なし。

Say は斯る場合には "あのれい" なご言ふ日本語に當れり、*Pa* は *Papa* の畧語なり。

A Man with an unusually large mouth has the habit of opening it on some occasions very wide.

His dentist the other day administered a mild rebuke:

"Not so wide, please; I prefer to stand outside and work."

方外に口の大きな或る男が居りましたが、時々それを又非常に廣く開けるのが癖でした。

此間その人の歯醫者が、穏かに小言を申しました。それは

"とうか、わなた此やうに廣く口をお開けなさらないで。口の外に立て。療治を致しまする方が私にはいゝのです" (口の中へ這入つて行かなくてもよろしいです)。

Mr. Moper (ending a very uninteresting story about himself)—And all that long, dreary time you cannot possibly imagine how much I bore.

She (wearily)—"Oh, yes; I can, indeed!"

男、(面白くもない自分の身の上話をなし終て) "ものうい此長い間、どんなにまァ僕は辛抱したゞらう、とてもお前さんにはわかるまいさ"

女、(長談義に疲れはてゝ) "はァいやもう能うつく分つて居ります"。

名句集

Her voice was ever soft, Gentle and low,—an excellent thing in woman.—*Shakspere.*

彼女の聲いつも柔に、またしとやかにして低かりき—女にありてはこよなき事なり。(シェクスピーア)

To bear is to conquer our fate.—*Campbell.*

事に堪ゆるは、われ等が運命に打ち勝つなり。(カメル)

"They say so," is half a liar.—*Proverb.*

『何々だそうです』といふは既になかば僞るものなり。(諺)

On life's vast ocean diversely we sail, Reason the card, but passion is the gale.—*Pope.*

われ等皆さまざまなる道をとりて人生の航路に上る。理性は方位を示す標なり、されど、欲情こそは嵐なれ。

(人は理性によりて事をなすべし、情にからるゝは身をあやまるの基なり。航海中の暴風の如し)(ポープ)

In man's most dark extremity Oft succour dawns from Heaven.—*Scott.*

人が暗黑の極みに在るとき、往々にして天より曉の光明きたりて救ふ。(スコット)

Words are like leaves, and where they most abound, Much fruit of sense beneath is rarely found.—*Pope.*

言葉は木の葉の如し。その最も繁れるところには、其したに、意味深長なる菓實を見る事稀なり。(ポープ)

He might do well to far fiction less than three years old.

—*Andrew Carnegie.*

發行の後、三年を經ざる小說は排するに若かず。(カーネギー)

Virtue is true happiness, Excellence true beauty.—*James Montgomery.*

德こそはまことの幸、秀でたるこそまことの美なれ。

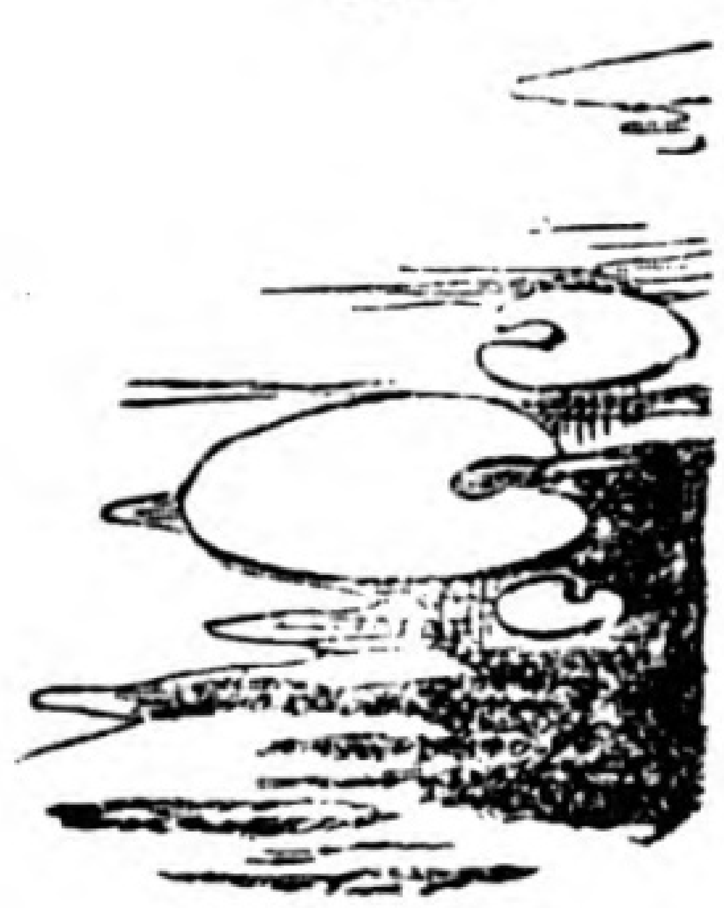
(モントゴメリー)

Every person has two educations,—one which he receives from others, and one, more important, which he gives himself.—*Gibbon.*

人は皆二種の敎育を持てり——一は他人より受くるもの、他は、尙は重要なるものにして、自ら、おのれの身に與ふる敎育なり。(ギッボン)



小說



むかし氣質

内田魯庵

去年の春（上）

今がた年始の廻禮から戻つて、次の間で禮服を着更へたばかり。設けの茵に眞四角に座つたる野武穆齋。昔し氣質の行義正しく居汚なく寛座がねども、初春の微醺に斜めならざる機嫌。

ツイ二三年前までは或る縣の郡長とかであつたさうなが、今では恩給と多年の心掛けの貯蓄とで浮世を餘所に謠曲三昧の氣樂な身の上なり。

勿論まだ還暦には二三年間がある年配ださうだが、公務の心配を離れて以來、殊に總領の智一が去年大學の學士となつて、秘藏娘のお藤が仝時に高等女學校を卒業してからは、俄に滅切りと老爺臭くなつて、胡摩鹽髯が何時の間にか眞白になつて了つた。

『何方をお廻りでムいますと、』茶を汲みながら尋ぬる妻のお崎。年老けても良人持つ女の身嗜を忘れず、殊

に昔し氣質の物堅く、早や黄昏近く、大方の年始客を濟ましても猶は五ッ紋の羽織に威儀を粧つてゐた。
『今日はナ、例年の通り正午まで邸へ詰めて午後はお暇を戴かうとした處が、正四位公が是非話したい事があるから殘れといふ仰でノウ、御別席で子爵夫人御列座の上で御馳走を賜はつた。』
『それは先ァ結構でムいました。殿樣も奥樣も御機嫌よく御重歳遊ばしましたか？』
『イヤモウ御機嫌斜めならず。殊に子爵夫人は一年增しに段々お若くなるやうだ……はッはッ、』と穆齋は湯呑を取つて一と口咽喉を濕はしつゝ、包切れぬ喜悦を面に現して、『時にお崎、今日はナ、正四位公から誠に忝けない仰を蒙つた。』
『奈何いふ仰を——正四位樣からでムいますか？』
『ひゝ、正四位公と子爵夫人と御列座の上でノウ。俺はナア、餘り忝けなくて夢ぢやないかと思つてノウ……』
『奈何いふ仰でムいます、』とお崎も理由解らずに忝けなくなつて來た。
『あの、何だ、あの、お藤は奈何した——お藤の緣談に就てぢや。』
『お藤は正午から教會の牧師の桑島さんの許へ年始に參りましたが……あの、何でムいますか、お藤の緣談を殿樣がお世話下さるのでムいますか？』
『お世話下さる處ぢやない。何だ、牧師の桑島の家へ年始に行つた。困つた奴。耶蘇敎どころぢやない。耶蘇敎は好い加減に止めさせて了へと、』穆齋は嬉しさが籠上げてシドロモドロになつて續けざまに煙草を煙管に捻り込んではパッ〳〵と吹かし立てた。
『奈何いふ仰なのでムいます？』
『奈何いふも斯ういふも處ぢやない。俺は這般な忝けない事は今まで覺えない。お崎、斯ういふ仰なんだ。

先達て獨逸から御歸朝になつた若樣――從五位樣ナ、あの若樣の夫人にお藤を欲しいと仰しやるのだ。』
『えッ、あの乙麿樣の？』とお崎は我が耳の信じられぬやうに膝を乘出した。
『ひヽ、乙麿樣の夫人にお藤を呉れいといふ仰だ。』
『先ア、乙麿樣の……奈何してと？』お崎は呆氣に取られて了つた。
『俺もナア、寢耳に水の仰で夢のやうな氣持がした。併し先ア段々と正四位公のお思召を伺つて見ると、誠に何とも云ひやうもない冥加至極な次第でノウ、』と穆齋は一服吸つて煙管をポンと叩き『あの乙麿樣はナ、御幼少から中々御聰明で氣が捌けて在らしつたが、暫らく洋行なすつてからは益々寛濶な御氣象になつて古風な大名風が極お嫌ひださうでノウ、夫人も御同族のお姫樣育ちよりは浮世の鹽を試めてる相當の身分敎育ある士族の娘をといふ豫てのお思召だつたさうナ。處で小藩でこそあれ御內福の聞えある子爵家、殊に御當人は長らく歐羅巴に御留學なすつた華族中での新人物といふのだから、隨分大藩の御同族から雨の降るやうに御申込があつたさうだが、肝腎の御當人がお姫樣育ちは忌だと仰しやつてノウ、夫で今だに御緣が定らんのださうだ。處で、』と穆齋は湯呑の殘湯をグッと飮み、『去年の秋、お藤の學校の慈善音樂會で――あの時正四位公御夫婦と從五位公にお目に掛つたノウ――あの時お藤のピヤノが大層從五位公のお氣に召してノウあれなら穆齋の娘、幼少の時の學友智一の妹、夫人にして恥かしくないと父君にお話しになつたのださうだ。』
『へエ……』とお崎は何だか薄雲に包まれたやうな氣がして眼が曇んで了つた。
『正四位公の仰しやるには、舊藩の中でも家老格の門閥、殊に維新の際には先代からの功勞もあり、今日では位階勳章をも賜はつてる身分。お前の家からなら同族から娶うも同じ事、殊にお藤は容貌から學問諸藝まで同族の姬達に勝るとも劣らないあれなら、乙麿の嫁としても恥かしからぬから、何分何卒承諾して呉れい

といふ忝けない仰だ………』

『先ア、先ア〳〵、』とお崎は吻と息を吐くと共に忝けなさが身に浸染つて來た。

『俺もナ、お思召は誠に忝けないが、縱令今日の社會は奈何あらうとも、三百年來祿を頂戴した君侯の若君の夫人に娘を差上げるといふは餘り冥加過ぎて却て恐多いから、一應は御辭退申上げた。處が正四位公も子爵夫人も中々御承諾にならない。他に約束でもあるなら據ないが、左もなくば是非にといふ達ての御所望で、俺も此上御辭退申上げる事は出來ず、難有くお受けをして來た。』

お崎はツイ今の今まで夢にだも思設けぬ娘の幸運、一家の面目に忝けなさが餘つて暫らく茫然として了つた。

『お崎、難有い事ではないか。齋條家の御祖先憲德公以來御代々家臣の娘を側室に徴された事は珍らしく無いが夫人に御所望になつたは我が藩では三百年來之が初めてだらう。今日の時勢のお庇とは云ひながら身に餘る面目、俺も先祖へ鼻が高いわけだ、』と穆齋は感激して聲を迫らして了つた。『お崎、明日は墓參をして御先祖へ此お咄をして來やう。』

『眞箇に先ア、』とお崎も漸く疑念が晴れると仝時に嬉しさが滿面に漲つて來た。『恰で夢のやうでムいますノウ。』

『夢だつて這般な名譽な事は無い。齋條家は小藩でこそあれ御内證は伯爵家以上だ。相當の御緣組と云つたら三十萬石以上の姫君でなければ釣合はぬ。それがお前、我々風情の娘をお望みになるといふは夢と云はうか幻と云はうか、俺ア、お前、狐に魅まれたやうな心持がしておる。』

『お藤に咄したら肝を潰しませう。』

『肝を潰すところの騷ぎかい。餘り途方も無い咄だから眼を廻すかも知れない。俺だつて今だに胸がドキ〳〵しておる……はッはッはッ、』と穆齋は俄に笑止しくなつたかのやうに呵然として笑出した。『お藤が子爵夫人になる……はッはッはッ！』

『オホヽヽヽッ、眞箇に夢にだつて聞きませんノウ。那樣な氣格の高い娘でも子爵夫人にならうとは思ひませんかつたでせう。』

『當然とも。苟めにも大名華族だ。成上りの新華族や出來星の大臣とは違う。』

『爾うでムいますとも。何しろ太閤樣以來のお家柄でムいますもの、』とお崎は頷きつゝ、『それで貴夫、お藤を差上げる準備は奈何するのでムいます？』

『む、其事。其事と、』穆齋は急に憶出したやうに合點しつゝ、『正四位公はあの通り磊落で在らつしやるから、なに見合などはするに及ばぬ、兩方とも知つてる顏だと仰しやつてノウ。夫から媒介人は練馬男爵と粕壁氏と正四位公からお賴みになるといふ事で、善は急げだから結納だけは松の內に取換したいといふお思召でノウ……』

『それぢやア貴夫、大變ぢやアムいませぬか？』

『大變とも、大變とも、併し正四位公はあの通り御性急だから此方から彼是申上げる事は出來ぬ。其代りには總て手輕に濟ませと仰しやつてノウ……』

『ヽ、ヽ、イクラ手輕だつて貴夫、今日は二日でムいますもの、松の內と云つたら最う四日歟五日……』

『そんな理窟を云つてもお受けをして來たから不可ぬ。娘の出世になる咄だ……』

『それだつても貴夫……』と言爭ふ時、何時の間にか歸りけん、サラリと襖を明けて、『唯今、』と云ひつゝド

ツかと座に就く新裁のフロックコートの金縁眼鏡の若紳士、穆齋の子の智一學士である。

『呀、お歸りかい、』と母親は笑ましげに會釋した。

『イヤ草臥れた、草臥れた。年始廻りなんて馬鹿げたもんだナ。名刺の配達に傭はれたやうなもんだ。』

『それがお前、浮世の義理といふもんだチエ。』

『這般な馬鹿げた浮世の義理は好い加減に廢めた方が好い。奈何しても文明的で無い、二十世紀的で無い。お父さんの御名代は來年からは御免を蒙むる事にしやう。』

『智一！』と穆齋は微笑を含みつ我が子を犒うやうに見た『へッ、』と答へつ母親が汲んで呉れた茶を甘さうに一と息にぐいつと飲んで下へ置き『最う一杯……非常に咽喉が渴いた。』

『さッ、』と母親は汲んで出しながら『お前、お藤に會ひましたかい？』

『會ひましたよ、桑島の許で。』

『まだ桑島の許に在るのかい？』

『桑島の家で骨牌が初まつてるから根が生へたんでせう。日が暮れたら腕車で送らせるから桑島の妻君が云つてました。』

『困りもんだノウ。』

『困つた奴だ。』

『はッはッ、骨牌ぐらゐ寛大に見てやるサ。お父さんのやうにシヤチコバルと却て害がある……』

『だが、智さん、お藤の事でお前さんにも喜こばせる事があるんだよ、』とお崎は微笑みつゝ『お前、先ア衣物を着更へておいで。お父さんからお咄があるから……』

『さう、僕もお藤の事でお父さんお母さんに喜ばせる事があるんだが、』と云ひつゝ智一は訝かしげに双親の顔を見較べたが、突と起上りつ、『兎に角着物を着更へやう。洋服は窮屈だナア。僕は嫌ひだ。

去年の春（下）

『僕の咄を先にしやう、』と夕飯を濟ました臺ランプの傍に、智一は紙莨を燻かしながら笑ましげに双親の顔を見つ、『お藤の縁談が定りました。』

『えッ、』と母親お崎は呆れたやうに聲を上げた。父穆齋も思はず眼を睜つた。

『今日桑島から聞いて來たんですが、』と智一は双親の容子に一向氣が付かずに微笑を含みつゝ、『桑島の教會の信者に瀧川殿といふ、評判の文學士がある。此男とお藤と當人同士の間に約束が出來たさうで、瀧川から桑島がお父さんに咄して呉れるやうに頼まれたさうです。何れ桑島が公然きに來る筈だが、物堅いお父さんの事だから、約束したからつて極潔白で野合したわけぢやアないといふ事を何卒誤解のないやうにお父さんに下咄しをして置いて呉れといふ桑島から僕への咄です……』穆齋は俄に顔色を變へて了つた。で、苦り切つて妻のお崎と顔見合はした。

『瀧川ならお父さん、立派な文學士です。博士論文が呈出してあるさうだから、最う近々には博士になるだらうし、留學生の候補者にもなつてる。那樣いふ學者と約束したのはお藤は大手柄です。お父さん、褒めてやつて下さい。』

『智一、汝は解らぬ事をいふ。親の目を掠めて男を拵へたのが何故手柄だ。怪しからぬ事をいふ。』と穆齋は顔色變へて聲を慄はしながら、『白痴め、親を何と思つてる。』

『お父さん、其樣なに腹を立てる事は無い、』と智一は冷やかに父親を見やりつ、『お父さんは昔し氣質だから一圖に怒つて了うが、何も野合したわけぢやなし……』

『白痴云ふ勿、野合と同樣だ。親に相談しないで氣儘に男を定めるなら野合だ。』

『其樣な無法な事を……併しお父さんと議論したつて仕方がないから、野合なら野合として置いて、對手が立派な學者だから許してやつたら奈何です、出來たもんなら仕方が無いとして。』

『出來たもんなら仕方が無いとは何だ、』と穆齋は益々威丈高になつて、『汝も法學士なら法律を心得てるだらう。法律を犯したものなら仕方が無いとして罪を免すか……』

『犯罪と一緒にして了つては困る。若い者の事だもの。心得違なら心得違として置いて、寛大に見てやるが人情ぢやアないか。お父さんのやうに頭から腹を立て丶了つては……』

『コレ、智一、』と穆齋は漸と慄へる唇を噛占めて故と沈着拂ひつ、『汝達は親を何と思つてる。親の心にもなつて見ろ。汝達の身を心配して、好い嫁を娶はう、好い婿を持たせやうと片時だつて思はぬ事は無い。其親の心配を少しだも察したなら苟めにも親に一言の相談なく勝手氣儘に女房なり亭主なり定めるわけには行くまいがノウ。若し自分の氣に入つた男なり女なりがあつたら、何故先づ第一に親へ咄さないのだ。親を何と心得てる。區役所の戸籍吏と心得てるか。不所存者奴』と穆齋は再び慄へ聲になつて、『出來たものなら仕方が無いの、男が學者だから許して呉れのと、お藤の不埒は云ふまでも無いが、兄貴の汝までが一緒になつて揃ひも揃つて親を蹂躙けるとは何事だ。其了簡では汝も追つけ藝者か女郎を引摺込む意だらう。』

『親を蹂躙けるの何のと其樣なわけぢやアない。併しお父さんのやうに腹を立て丶了つては咄が出來ぬから僕は最う何にも云ひますまい。併し、お母さんも能く聞いて下さい、お藤が可哀相だから、約束といふのは

子。極潔白なもので、野合したわけぢやアありませんからネ。對手の瀧川といふのは、立派な紳士で、世間の信用もあり相當の位置もあるもんです。お父さんのやうに我武者らに腹を立てゝは瀧川に對しても失禮です……』

『止め〳〵ッ！煩さい。他人の肩を持つて親に反抗う奴があるか。不孝者奴。』

と稷齋は打ちも掛らん見幕で、拳を握りつ眼を睜つて叱咤した。智一は仕方なさゝうに口を緘んで、他方を向いて竊と嘆息を吐いた。

『何です智さん、一月早々からお父さんに口返答するといふ事がありますか、』とお崎はオロ〳〵と二人の間に割つて入りつ、『貴夫も先ア其様なにお腹をお立てなさらずとも、靜かに仰しやつても解ります……』

『默んなさい、』と稷齋は險しい眼を据えて妻を睨みつ、『元來汝の躾が惡いから斯様な事になる。妙齡の娘を靑書生や墮落女學生の集つてる教會へ氣儘に遣るといふ事が抑〳〵有るか。耶蘇教なんてものは日本の大切な忠孝を蔑らにして淫奔懦弱を奬勵する所謂淫祠であるから俺は平生から娘は勿論智一をも決して出入さしてはならぬと幾度も言聞かした。然るに汝は兒供の勝手氣儘に甘やかして、到頭親の面に泥を塗るやうな不躾裁を出來させるとは何事だ。お崎、汝は陳謝は出來るか……』

『御道理で厶ります。』

『智一は奈何いふ了簡でおる。大學まで卒業したなら人間の道といふものを知らぬ事は有るまい。縱令潔白にしろ、親に隱して爲る事なら不義野合と同様だ。然るに斯る不躾裁を出來したお藤を叱らうとはしないでお藤は大功名をしたから褒めてやれとは何處まで親を蚤愚にしてゐる……』

『智さんだつて爾うい積りぢやないんでせう。畢竟お藤の行末宜かれと思つたんでせうから、』とお崎は徐

ろに周旋しつ微笑を含んで、『ねエ貴夫、智さんは猶だ先刻の咄を知らないから瀧川さんとかの縁談を二つとないやうに思つてるんでせうが、貴夫から能くお咄しなすつたら、智さんだつて家の利益、お藤の利益、必と喜こんで氣が變るに違ひありません。』

『イヤ俺や最う口を利かぬ。』と穆齋は頑として首を掉つた。『お藤のやうな不心得者を最う願うわけには行かぬ。俺や明日お斷りを申上げる。』

『そんな貴夫、氣の短い事を。何も瑕瑾者になつたわけぢやなし。唯の魔が魅したんでムいますよ。』と云ひつゝ、訝かしげに母を見る智一に向つて、『お前、先ア、夫れところぢやアない。お藤の縁談に就ちやア家へも大變な結構な咄が降つて湧いたんだよと。（云ひつゝ睨ッと我が子の顔を見ながら物靜かに）、今日お父さんは齋條樣へ御年始に行らしつた處が、大層御叮嚀なお款待があつてノウ、正四位樣と夫人と御列座の上で、家のお藤を從五位樣の嫁に欲しいといふ御沙汰があつたとよ……』

『えッ、何ッ、お藤を從五位さんの嫁に――ふッふッふッ、』と智一は何と思つたか笑ひ出した。

穆齋の眼は怪しくも光つて、智一を睨み付けた。

『お前、先ア、夢のやうな咄ぢやないか。我々の娘が舊殿樣の夫人になるといふは、今日の御時勢と云ひながら、這般な難有い咄がありますかい。殊に子爵家でこそあれ、齋條のお家は昔しからの御內福で、今日御勝手許は伯爵以上だといふぢやアないか。お父さんも妾も這般な結構な咄があるかと喜んでた處なんだよ。』

『然う、道理で、』と智一は冷やかに嘲るやうな微笑を含みつ、『從五位さんとは餘り心易くしなかつたが、先日鎌倉からお藤を伴れて別莊へ遊びに來いと云つて來たつけ。』

『爾う。そんならお前、一兩日内御別莊へ御機嫌伺ひに行くが宜からう。』
『眞平御免だ。僕は明日ッから松戸へ鐵砲を打ちに行く。』
『お前、先ア、何ていふ言草だい？』とお崎は呆れて我が子を眤ッと凝視めた。
『僕は華族は嫌ひだからね。』
『お前、齋條樣を何と思つてるんだエ。以前の御主人樣だよ。』
『齋條家の事を云ふんぢやないよ。僕は全體に華族といふものが蟲が好かないといふんだよ。』智一は一向膠もなく、『併しお母さん、結婚はお互ひ本人同士の意思一つだから、お藤さへ承知なら從五位さんの處へ遣るのも宜からう……』
『お藤も承知も不承知も無い。親や兄が宜いと定めたものを忌だといふ筋は無い。』
『其樣な無理を云つたつて、お母さんやお父さんが嫁に行くんぢやあるまいし……』
『お前、先ア、能くも屁理窟を陳べられる……』とお崎は勃然となつて了つた。『外ならぬ齋條樣の御沙汰ぢやないか。難有くお受けをしなければ今日樣へ濟むまいがノウ。お母さんが云ふまでもないが、御先祖から以來三百年來食祿を頂戴した御恩を忘れて人の道が立ちますか。なんぼ時勢が違うからッて昔も今も忠孝の道に變つた事は無い。學士とも言はれるお前が舊殿樣の御恩を疎かにしお父さんのお言葉にも背いて夫で濟みますか。普通の華族方に緣組しても家の名譽です。況してお前、舊殿樣ぢやアないか。それを難有いとも勿躰ないとも思はず、華族は嫌ひだの何だのと、能く先ア口が出りませんノウ……』とお崎は曇み聲で口惜しさうに疊を叩いて辨じた。で、復た袖口で淚を押へながら、
『お前が爾ういふ了簡だから、お藤までがお前を見習つてお邸を疎畧にする。此前も夫人がお藤を遣せ、行

儀を仕込んでやると御親切に仰しやつた時も、お前が下女奉公して奈何する、行儀を覺えるなら學校があると、餘計な容喙をしたばッかりに、お藤も忌だと剛情を張つて、妾は奈何なに夫人に面目なかつたらう。夫だのに夫人は御立腹もなく、今度は又嫁に欲しいと仰しやるのに、よく〳〵お藤がお氣に召したからで、先ア何ていふ難有いお思召だらう、妾達は餘り冥加過ぎて果報燒けがして罰が中りやアしないかと、其位に喜んでるのに、お前は先ア、華族は嫌いだなんて、何處を押したら其樣な失禮千萬な……』

『お母さん、お母さん、其樣なに喧ましく云はれると返答が出來ない。宜いかチ、お母さん、僕の好き嫌ひはお藤の緣談には關係しないよ。僕が嫁に行くんぢやないからチ、はッはッ、宜いかチ。お藤に聞いて見たら宜からう、お藤が從五位さんの許へ適かうと云つたら無論遣るのサ。僕の知つた事ッちやアない。敢て故障は云はないサ。』

『否エ、そんな事は云はせません。お藤はお前の妹ぢやないか。お藤の身の利益にならぬ事なら何處までも故障を仰しやい、何故華族方が蟲が好かない？三百年來の御恩を無にしてもお藤を從五位樣に上げたくないのは何故だい？瀧川さんとかは如何程豪い方だか知らないが、赤裸にしても從五位樣は五年も洋行遊ばした立派な方です。況して大恩のある舊殿樣ぢやァないか……』

『困るナア、お母さん、僕は干涉しないと云つてるぢやないか。お藤の了簡一つで瀧川へ行かうと從五位さんへ行かうと、僕の關つた事ぢやアない。』

『お前に相談するンぢやないか。其樣な木で鼻をくゝッた挨拶がありますか……』

『お崎、最う默んなさい』と今まで苦り切つて默つてゐた穆齋は堪りかねて、『智一は耶蘇教で腸が腐れてるから日本の忠孝の道を忘れたんだらう。俺や最う口を利かぬ。お藤なんぞは奈何ならうと關はぬ。所詮腐つ

た性根では俺の云ふ事などは解るまいから、親の承諾が無くて關はぬといふなら瀧川なりと誰なりと勝手に婚禮するが宜い。俺や最う娘を棄てたと斷念るから……』

『貴夫、其樣な氣短かな事を——夫ぢやア貴夫、お邸へ濟まないぢやアありませんか。』

『馬鹿を云へ。』と穆齋は毅然として、『親に秘して男と約束するやうな其樣な不品行者を差上げられるか。憲德公以來血統正しい齋條のお家を汚しては此穆齋爪腹切つても申譯が立たぬ。お崎、奈何いふ因緣だらう。今の今まで家の譽れ先祖への面目と喜んでたのが、兒供等の不心得で這般な事になるとは、お崎、俺は殘念だぞ、』と穆齋は唇嚙占めて、苦しさうな息を吐き、『お斷り申上げて正四位公の寬仁の御沙汰を仰ぐは難くは無いが、有躰に申上げては如何にも家事不取締のやうでナ……』

お崎は良人の苦衷を見て胸一杯に溢るゝ悲しさを凝と堪へつゝ無言で俯向いてゐた。穆齋は瞑目して何にも云はず、堅く緘ぢたる唇から深い歎息を洩らしてゐた。

理義一遍の心冷やかなる智一も有繋に双親の打沈んだる容子に引込まれて何とも云へぬ感情に打勝たれて手に持つ紙莨の空しく灰となるをも知らずに沈吟して了つた。

春は二日、町家離れし邸町も戶每に骨牌取る聲の聞ゆる夜る、柱時計の時を刻む音ばかり我が物顏に家中に傳はりて寂寞としたる時、臺所の隅の女部屋に忍び音に泣く娘お藤、牧師桑嶋の家から送られて歸つて來たが、親と兄との論爭を洩れ聞いて入るにも入られず、今日着初めした琥珀の吾妻コートを脫ぐ方角もなく女部屋に泣頽れて了つた。

『お孃樣、お泣かる事は厶いませぬ。お兄樣が附いてらッしやいます、』と甲斐々々しく低音で慰むる中年增の婢。之も身に迫されて聲を曇ましてゐた。

今年の春（上）

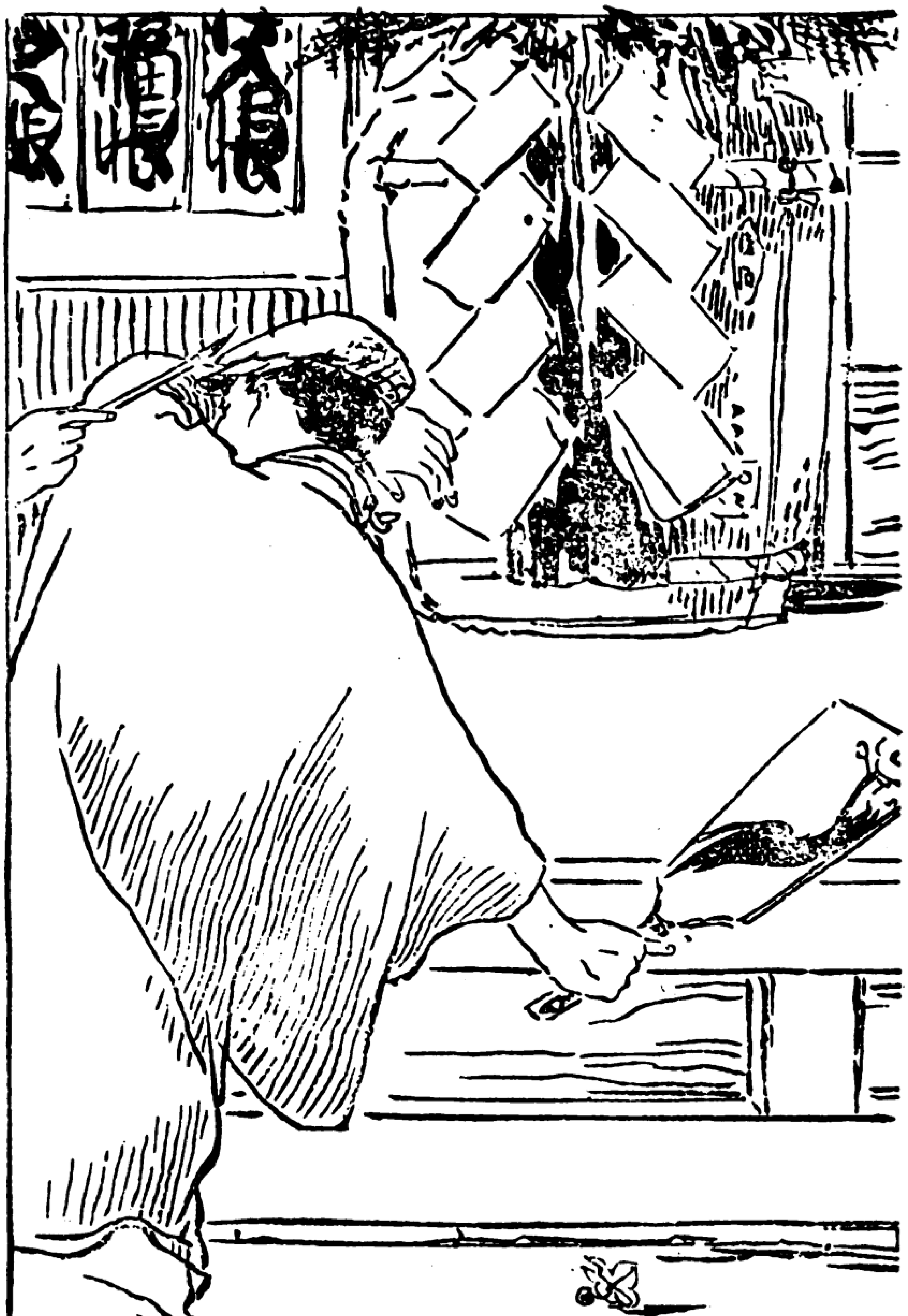
去年とは引替へて野武の家は淋しく、智一が年暮に一級昇進したるにも關らず、稽齋の滿面の皺は愈々深く刻みて、唯つた一年の間に十年ばかり一度に歳が寄つて了つた。

去年よりは引續いて謡曲の聲も聞えず、其處此處の美術會骨董會に必ず見ゆる稽齋の姿も見えず垂籠めて悟道の法語を繙く折々は苦しさうな歎息を洩らしてゐた。で、氣ばかり焦々と荒くなつて、動やともすると悴の智一と衝突して震へ聲を搾つた。年よりは若やい



で見えた妻のお崎も滅切りと肉が落て、近頃は良人の腹立を和る氣力もなく、兎もすれば病に臥り勝でゐつた。

理義一遍の冷やかな頭腦で、殊に物に拘せざる磊落肌の智一も近來は滅入つて己が書齋に閉籠つたぎり。事に觸れて父穆齋に噛付く如く罵られても昔のやうに爭はなかつた。



目出度き松の内を陰氣に暮して初めての日曜日の朝、朝餐を濟ましてから親子三人が鼻突き合はして無言で睨み合つてゐた。

『お父さん、』と新聞を手に持つ智一は俄に晴れ〲した微笑を浮べつ、『瀧川が博士になりましたよ。』

『えッ、何、瀧川さんが博士に、』と父よりは母のお崎が思はず膝を乘出つ、偶と氣が付て良人の顏を竊と見た。

『大變褒めて書いてある……』

『どんな事が掲てゐます？』

『お母さん、大變に褒めてありますよ。瀧川の論文は獨逸文で五百枚、空前の大論文であるから大學は特に印刷して歐米各大學へ配るといふ事ッてす。』

『先ア爾うかい、』と母は心底嬉しさうに良人の思はくも忘れて、『嘸・お藤が喜んでませう。』

『夫から大學敎授に任じて在官のまゝ獨逸に三ヶ年間留學を命せられました。』

『大學敎授に――洋行を――』とお崎は包切れぬ滿足の色を面に現して、『どんなにお藤は喜んでるだらう。』

『お母さん、』と智一は新聞を抛出して吻と息を吐き、『僕が云つた通り、瀧川は學生時代から評判の秀才でしたからナ、斯ういふ名譽は當然です。まだ〳〵之から如何程豪くなるか解らぬ。ねヱお母さん、お藤だつて何も罪を犯したわけぢやなし、斯ういふ立派な學者を見立てゝ嫁に行つたンだから、之を機會に瀧川と更ためて面會してお藤の出入も出來るやうにしちやア奈何です？』

『妾も爾う思ふがノ、』とお崎は氣遣はしげに良人の顏を見つゝ、竊と淚を拭ひて、『考へればお藤も可哀相だよ斯ういふお目出度い事があつて喜ぶにつけても親を思ふだらうと思つてノウ……』

『實はお母さん、先日僕は年始に行きました處が、お藤は泣いて僕に賴むんです、何卒お父さんの御機嫌を直して呉れッてチエ。瀧川も氣の毒なほと萎れてました。お父さんの御機嫌が直らずに何時までも出入が協はないやうでは人の師として社會に立つ事が出來ない、自分夫婦の不德は幾重にもお詫をするが二人の間の小兒を何卒不便と思つて御勘辨を願ひたいて呉々も賴みました……』

『爾うだらうとも、爾うだらうとも、』とお崎は幾度も袖口で淚を拭きつ、『今考へると瀧川さんにもお氣の毒だ。元來なら如何程立派にお藤の支度をして上げても宜かつたのだが、那樣いふ破目で何一つ關ひつけず。

勘當するの、婿とは思はぬのと、嘸親たちは解らぬものと思召しだらうと思つて……』
『そんな事は大丈夫だ。瀧川は何も彼も事情を知拔いて、あの時も爾ういふ事情があるならお父さんに濟まぬから約束を解かうと云つたのを、僕が強にお藤が可哀相だから娶つて呉れと頼んだのだからネ。そんな心配は大丈夫だよ。』
『そりやア最う那樣云ふ豪い方だからノウ、何も彼も察して下さるだらうが、あの時は妾までが一緒になつて頑固を云つたんだから、今更面目なくて、斯うしたお目出度があつても、人に自慢して吹聽する事も出來ず……』とお崎は吻と息を吐き、『お藤も嘸怨んでませうネ。』
『何しろお母さん、過去つた事は水に流して、瀧川とも更めて婿姑の盃をしてお藤を出入さしちやア奈何です。瀧川が洋行したらお藤も頼りがなくて心細いでせう。』
『爾うとも、爾うとも。場合が場合だから那樣云ふ破目になつたが、生涯出入をさせないといふ罪があるわけぢやなし、之が好い機會です。ねエ貴夫……』と瞑目沈思して聞かざる如き良人を瞥と見た。
『お父さん、奈何です、免してやつちやア……』
『最うお前、免すも何も無いサ。妾は最う兒供が產れたと聞いた時免してやりたかつたのだが……』と云ひつゝ、俄にイソ〳〵と嬉しさうな笑顏を作りつ、『あの何かい。坊は最う餘程長きくなりましたかい？』
『長くなりましたとも。色の白いクリ〳〵と肥た可愛らしい子です。お藤がお母さんに見たいと云てました。』
『爾うだらうとも。妾も初孫だもの、會ひたくなくッてサ。』とお崎は頻りに眼を瞬たいた。
『中々好い子です。最う僕の顏を見て軒渠〳〵笑ひます。何しろ百ケ日を過ぎましたからナ。』
『何を云ふンだよ、百日とお云ひな。飛んでも無い……オホヽヽヽ。』

「爾うか、百日と云ふンですか……はッはッ、何方でも同じだ。」と野武の家に珍らしい笑聲が聞えた。其間穆齋は冷然として木石の如く、眼を閉つたまゝ一言も云はなかつた。

「夫でもお藤は産後の肥立も能く、煩ひませんかネ？」

「兒供が出來てからは却つて紛れて、一時は痩せましたが此頃は又少し肥つたやうです。併しお母さん、兒供が壯健に一日増しに智惠が附いて來る度にお父さんにお目に掛けたいと泣いてましたッけ。」

「爾うだらうとも。」とお崎は再び眼を瞬たいて、「なんぼ昔し氣質が好いからッてお父さんのやうでも一徹過ぎる、普通勝れた立派な良人を持つて兒供まで出來たものを出入させないなんて、其樣な無慈悲な親が世間に有りますか……」

「お母さん、愚痴は最うお止めなさい。其樣な事を今更云つたッて仕樣が無いから、更めてお藤と瀧川を呼んで和睦しやうぢやないか。」

「爾うしてお呉れ。思立つたら早い方が好いから今から直ぐ、お前、御苦勞だけれども。ねエお父さんだつて最う御不承知な事は無いサ。ねエ貴夫……」

「爾うしませう。お父さん、」と智一は父に向て、「僕は呼んで來ますからネ、お父さん、會てやつて下さい。」

「默んなさい、」と今まで瞑目してゐた穆齋は眠れる獅子の覺めたる如く忽ち大喝一聲した。母と子とは其凄まじき權幕に躊躇ぎて言句もなく眼と眼と見合はした。

「白癡め、汝達は義理の人情のと云つて君公を何と心得てる。此野武の家はナ、關ヶ原以來代々格別の君恩を忝けなうして君の爲には生命を鴻毛の輕きに比してをる。我が家に家法なし唯だ忠孝の道を重んずとは野武の祖先の遺言である。俺は無學文盲で今日の事は知らぬが、忠孝の道は日本の國躰として陛下の詔にも

明かである。然るに汝達は日本の國躰と容れざる耶蘇敎に心醉して親を疎そかにし主人を等閑にし忠孝を蔑しろにし勝手氣儘に振舞う。此穆齋人の親たる德なくして汝達を敎ゆる事出來なかつたは返す〲も殘念である。祖先に對しても相濟まぬ。面目次第も無い、』と穆齋は感激して怒れる眼より涙をポロ〲と溢しつ、『汝達はお藤を免して呉れといふが勘辨する廉があるか。正四位公へ何と陳謝する。博士とか大學敎授とか、謝罪の種子になるか。白痴奴！』

『そんな貴夫、』とお崎も涙聲を慄はしつゝ、『そんな一徹な事を仰しやつて、貴夫は孫が可愛くは厶いませんか？』

『汝は孫が可愛くて君侯の御恩を忘れたか。ヤイ親の許諾もなく勝手に嫁に行つた不孝娘が何故可愛い。三百年來忠勤を抽んでゝ藩中の龜鑑と云はれた野武の家はお藤一人の不心得の爲に祖先以來の譽れを水の泡として了つたぞ。憎い奴だ。俺はお藤が憎くてならぬ……』と穆齋はボロ〲と落つる涙を握拳にて拂ひながら聲を慄はしつ、『年々新年の御祝義も此齢になるまで一度も缺かした事は無いが、三百年來例の無い彼程な難有い御沙汰をお斷り申上げたる穆齋何の面目があつて君公初め一藩の人に見ゆる事が出來る。俺の胸中も察して呉れ、心外に思ふぞ。』

お崎は兩袖を顔に押當てゝ涙に搔暮れて了つた。智一も父の一徹を和むる術もなく俯向いたまゝ暫らくは言句も無かつた。

『併しお父さん、』と智一は徐ろに口を開いた。『お父さんの御立腹は無理も無いが、何も車夫や馬丁と駈落したぢやなし。對手が立派な學者ぢやないか。』

『白痴め、天子將軍へなりとも親の許諾を得ないで嫁するといふ法があるか。況してや君公の難有い御思召

に許いた罪は奈何する。良人が博士となり大學教授となれば償ふ事が出來ると思ふか……』
『爾ういふわけぢやア無いが、最初齋條家へ嫁入る筈に定つてたのをお藤が破つたといふなら仕方が無いが云はゞ瀧川の談の方が先口だ。それを何でも彼でも齋條家の方へ定めて了はうといふのは……』
『白癡め、君臣の道を忘れたか、』と穆齋は烈火の如く憤つた。『汝達からして了簡が腐つてる。何と云つても此穆齋の眼の黒い内はお藤の出入は協はぬぞ。』
智一は此上何とも云ひかねて口を緘んで了つた。お崎は良人の一徹に泣頽れて突俯してゐた。すると恰も襖がスウッと開いて、中年増の下女が顔を出しつゝ、憚るやうな低音で、
『奥様！』
お崎は涙に染む顔を上げて眴きつゝ、『何だい？』
『あの、一寸つとお顔を。』
『アイよ。』と云ひつゝ起つて襖の陰へ行くと、憚るやうな低音で竊と耳打した、
『お嬢様が入來しやいました。』
『えッ、』と思はず聲を高くしたが、忽ち低音で『あの、お藤がかい？』
『ヘエ、あの赤さまをお伴れ遊ばして、唯今妾の部屋へお通し申して置きました。』
『爾うかい、先ア、』とお崎は俄にソヽクサと先へ立つて女部屋へと行つた。

今年の春（下）

三疊の狭苦しき女部屋に、ブラシ天の肩掛の上に東コートを疊んで枕とし寐かしたる孫兒の傍に悄然と座

りたる娘お藤、黒ッぽい質素なお召の二枚小袖に黒縮緬の五ッ紋の羽織、不興蒙むりたる親の家とて婚禮の指環の寶石の光るも影護く哀れにも小さくなつてゐた。

『お藤、お前先ァ、能く來てお呉れだノゥ、』と母のお崎は早や一杯に涙を浮べて懐かしさうに娘を見上げ見下した。

『お母様、申譯が厶いませぬ、』とお藤は忍泣に泣伏した。

『それでもお前もお變りが無くて、』と云ひつゝ孩兒を見つ、涙に暮るゝ顔に忽ち嬉しげな微笑を泛べて、『坊かい、能く先ァ肥つて、』と餘念なく眠れる顔の上に乗掛るやうに暫らくは看惚れた。

『お父様は御機嫌能くて……』とお藤は漸と涙を拂ひつ尋ねた。

『別段お變りは無いが、われから後はお氣難かしくなつて……』

『悉皆妾の不心得で申譯が厶いませぬ。』とお藤は手巾を顔に當てた。

『お前の不心得といふわけも無いが、あの通り一徹な昔し氣質で在らッしやるから、今もお前の事で兄さんと妾と種々お父様をお和め申したんだけれどもノゥ……』と云ひつゝ母親は涙に聲を途切らして了つた。お藤も手巾を顔へ當てゝ涙に咽んで聲を慄はしてゐた。

『先ァ最少し時節をお待ち、』とお崎は漸と涙を拭ひつ、『お父様だつて齋條の殿様への義理で、お前が心から憎いわけぢやァ決して無いから、心配しないで最う少しお待ち、兄さんも附いてるし、妾も奈何にかお詫びをするから、決して心配おしでないよ。』

『ハイ……全く妾の不心得で厶いますからお父様の御立腹は御道理で厶いますが、瀧川が心配致しますんで……』

『爾うだらうとも、瀧川さんにもお氣の毒でノウ、』とお崎は頻りに頷きつゝ、『嘸道理の解らぬ親達だとお思召すだらうノウ。』

『否エ、其樣な事はムいませんが、瀧川も今度は大學教授となりましたので……』

『爾う〳〵、』とお崎は憶出したやうに滿足の色を泛べつ、『今日の新聞に博士となつて大學教授となつて洋行を命せられたと載てゐますッて、兄さんから聞きました。誠に結構でしたノウ。嘸お前が喜んでるだらうと噂してゐたんですが、夫につけて人に自慢して吹聽する事も出來ないやうなわけで……』

『お母樣、妾は奈何なに辛なうムいませう。昨日も辭令を頂戴いて歸りましてから、苟りにも大學教授と云はれるものが妻の實家に出入を禁められてると云つては世間に顏向けが出來ないと歎息致すんでムいます。』

『道理とも、道理とも。お前からも宜しく云つてお呉れ。妾が何とか其内にはお父樣のお心の柔らぐやうにするから、お父樣だつて口にこそ頑固な事を仰しやるが、日本に何人といふ學者を婿に取つた事が嬉しくなくて奈何しやう。お前も間へ立つて辛なからうが、最う暫らく辛抱おし。』

『難有うムいます、何卒子エお母樣、』と云ひつゝお藤は鼻を拭んだ。『あのお母樣、瀧川の洋行は四月頃でムいますが、夫までにお父樣の御機嫌の直るやうに子エ。』

『あア、何とか心配するからノウ……』

『夫までに御機嫌が直らないで矢張妾が出入が出來ないやうですと、妾も一人ぼッちで心細うムいますし瀧川も彼國へ行きましても安心致しますまいから……』

『爾うとも、良人に別れて實家へも來られないンではノウ――妾は同情して上げるよ、』と云つて偶つと氣が附くと、孩兒は何時の間に眼が覺めて、物珍らしさうに天井を眺めつ莞爾〳〵と笑つて可愛らしい握拳を

掉つてバタ〳〵〳〵足を動かしてゐた。

『オヽお眼醒かい、温和だノウ。ドレ、お祖母ちやんが抱つこしませう、』とお崎は可愛げに膝に抱上げた。

『お母樣、小尿すると不可ませんよ。』

『いゝよ、先ア抱かしてお置き、お祖母ちやんのお膝なら小尿しても宜いノウ、』とお崎は緊と抱きしめて頰に口を接け、『能く肥つてる。中々重たいノウ。坊や、坊やのお祖母ちやんだよ。お祖母ちやんが解るかい。夫でも奇態なもんで、泣きもしないでニコ〳〵してゐる……オヽオヽ、そんな難かしい顔をして、泣いちやア不可ないよ。オヽヽ、母ちやんが見えましたかい、お乳が戀しくなつたかい。オヽオヽ、さツ泣かずに温和しく、』とアワヤ泣出しさうなる孩兒を母親に渡しつ、『さツ、おつぱいを澤山お喫んなさい。』

お藤は孩兒を請取りて胸開げつ乳房を含ましながら、

『最う徐々お暇致しませう。お父樣に發見かると復た御機嫌を損ねますから……』

『なんのお前、爰に居れば知れる事は無い。最う少と緩平しておいで。』

『妾も緩平して在たうムいますが、孩兒が泣きでもしてお父樣のお耳に入りまして御不興を重ねるやうでは……』

といふ其途端に座敷の方で、『お崎〳〵、』と呼ぶ稷齋の聲が聞えると共に、智一が臺所へ飛んで來た。

『やア、お藤さん、來てゐるのか。能く來た、と云ひつゝ母親に向つて、『お母さん、邸の殿樣が來た。』

『えッ、正四位樣が？』

『庭口の方から竊そつと忍んで入來でだ。』

『呀、夫ぢやア女部屋の前を通つて行らしッたんだよ。少とも知らなかつた。』

「お母さん、先ア彼方へ行らッしやい。お藤さん、最少し遊んで行くが宜い。大丈夫、解る氣遣ひなし……」

お崎は、「先アお前、最う少とおいで——何だ話したい事もあるから、」と言葉を殘しつ座敷へと行つた。

表座敷の椽端近く八丈の座蒲團に寛座したるは四十七八の大兵の紳士、五ッ紋の黒縮緬の羽織に茶苧の袴自づからなる威儀を作つて太い葉巻を燻らしてゐた。で、下手から恐る〳〵座を進むるお崎を見るより、

「ヤア、暫らく無沙汰をした、」と鷹揚に輕く頭を下げつ、無髯の豐やかなる顏に微笑を泛べつ、「今日はナ、餘り天氣が好いからブラ〳〵ッと散歩に出た序に穆齋を驚かさうと思つて、故と庭口から搦手を不意打をやつたんぢや——はッはッ——時に穆齋、」と疊二タひらも隔てゝ、恐入つて頭を下げて畏まる穆齋に向つて、

「今日は貴公、大いに驕らんけりやならぬぞ。婿殿は愈々博士となり大學教授となり留學を命せられたさうぢやナ。」

「はッ……」と穆齋は恐縮して平蜘蛛の如く頭を下げて了つた。

「どうも目出度いの。拙者も昵近の舊藩士の聟に彼樣な名譽ある學者の出來たのは何よりも滿足に思ふぞ。」

「恐れながら御前、」と穆齋は恐る〳〵蒼醒めたる顏を擧げ、「下拙には婿と申すものはござりませぬ。」

「何ぢや、婿は無い——はッはッ——穆齋、何を申す？貴公大分年を老つたが、何だ婿を忘れるほど老耄もしまい。貴公の娘の藤が瀧川殿と婚禮したは、瀧川が知名の學士ぢやから新聞にも載てをつたぞ。」

「御前、」と穆齋は言葉靜かに遲疑する躰もなく、「下拙娘藤は御前の難有いお思召をも疎そかにし父の申す事を背きました不心得者でござりますに由て、昨年一月勘當致しました。其後瀧川殿とか申すものと結婚致したとか風の便りに承まはりましたが、下拙は棄てたものでムりますから婿とも思ひませぬ。」

「何ぢや、娘を勘當した、」と齊條子爵は昵ッと穆齋の顏を凝視めたが、力なげに憮然として歎息を吐いた。

『穆齋、』と更めて言葉を繼ぎ、『貴公の昔し氣質には痛入る。貴公は拙者へ義理を立てたのぢやらうが、夫では餘り一徹過ぎる。却て拙者へ面當のやうで甚だ宜しくない。』

『イヤ中々持ちまして、君へ面當てなと〻は……』

『イヤ、貴公の心持は能く解つた。實に當今獲難い尊い心掛で拙者も忝けなく思ふ。併し貴公、其樣な義理立は封建時代の事で、今日四民同權の時勢に貴公のやうに餘り昔しの君臣の關係を不相當に重んじるやうでは何か拙者が何時までも舊藩主の威光を振廻すやうで世間の思はくも宜しくない。今日では君臣の關係は上御一人に對してだけで貴公も拙者も同じ臣民で其間に少しも區別は無い。貴公のやうに何時までも昔しの君臣の誼を重んじるは拙者は忝けなく思ふが、拙者が擅に四民同權の御政道を亂るやうに聞えては上に對しても畏多い。穆齋、貴公の心持は能く解つたが、拙者に對しての遠慮は無用にしなさい。ノウお崎、餘り頑固過ぎるも困るノウ。』

お崎も穆齋も君の難有き仰に恐入つて膝に置く手に涙のポロ〱落つるをも知らなかつた。

『實はアノ緣談に就てはナ、』と子爵は再び語を繼ぎ、『その後藤の行く敎會の牧師の桑島といふが乙麿の許へ尋ねて參つた。この桑島といふ男はナ、一昨年伯林へ行つたやうでノ、乙麿とは至極懇意にした。乙麿は矢張基督敎信者なのでナ……』

『ヘッ、』と穆齋は面を擧げた。此基督敎信者といふが穆齋の耳には異樣に聞えたので。が、子爵の微笑を含む眼を衝突ると急いで復た頭を下げた。

『處で段々と藤の咄をしたが、藤と瀧川との交は二三年も前からださうでノ、乙麿の方の破談は止むを得んのだから惡く思つて呉れる勿と云ふ事つてノ、乙麿は全く爾ういふ深い事情のあるを知らずに貴公へ緣談を

申込んだのぢやから、貴公に對しても藤に對しても誠に相濟まぬ事をした、更めて拙者から貴公に能く詫して吳れと云ふ事ッた。然るに貴公は其後全然邸へ來んので拙者もトンと忘れて了つたが、貴公が左程に堅苦しく義理立をしてをるとは夢にも知らなかつた。拙者は本より乙麿に於ても更に介意する處は無い。殊に貴公、喜こんで吳れ、』と子爵は莞爾として、『乙麿の緣談も愈々定つた。貴公も存じてをる分家分の笠岡男爵の娘を娶う事にした。』

『はッ、笠岡男爵家の姫君と……』と穆齋は溢る丶如き感涙を拭ひもあへず、滿面に笑を含みつ、恭やしく頭を下げ、妻お崎諸共に聲を揃へて、『恐悅に存じ上げ升。』

『貴公も何卒祝して吳れ。夫につけてもナ、』と子爵は寬濶な言葉穩かに、『拙者一家の爲に餘り偏屈な義理立をして唯ッた一人の娘を何時までも勘當同樣にして置くやうではナ、拙者は勿論乙麿も安んずる事は出來ない。殊に瀧川のやうな立派な婿を些さかの間違で疎外するといふは貴公の爲にも取らぬ。穆齋、奈何ぢや。拙者の理屈は間違つてをるか？』

『恐入りまして厶います、』と穆齋は瀧の如く溢れ落つる感涙に聲を迫らして鮮伏して了つた。

お崎も餘り忝けなき君公の仰せ聲を呑んで咽び入つた。

『イヤ貴公珍らしい、武士氣質ぢや。當今獲難い人物ぢや。拙者も一人なりとも貴公のやうな人物を舊藩士の中に持つてるのは同族に對しても鼻が高い。夫に就て貴公、又無理な相談をするやうぢやが、貴公の義理堅い昔し氣質に惚れて相談するのぢやが、貴公の子息の智一は尙だ無妻ぢやッたの？』

『はッ、尙だ獨身でをりまする。』

『當今の若い者の事ぢやから萬一約束した女でもあると又面倒ぢやが、左もなくば拙者は一人肝煎らうか？』

『誠に難有き仕合でムりまする。君のお鑑定を持ちましてお世話下し置かるれば家の面目……』

『イヤ、貴公一人早呑點で忝けなかつて了つては困るが、智一は今日在宿か。在宿なら面會致さう。』

『はッ、在宿仕り升、唯今拜謁致させます……』と云ひつゝ穆齋はお崎に目喋をした。暫らくして智一は母に誘はれて末座に禮をした。

『イヤ、暫らく會はんノ、』と子爵は莞爾と微笑しつゝ『舊冬は昇給したさうで、誠に目出度い。之からは貴公ら若い者の時代ぢや。拙者どもは穆齋同樣老込ぢやは――はッはッはッ！』

『はッ……』と云つたまゝ常は華族は罵詈する智一も子爵の大腹中に呑込まれて言句が無かつた。

『貴公の事は乙麿から度々聞いてをるが華族が嫌ひださうぢやノウ……』

穆齋夫婦は此一言にヒヤリとして思はず子爵の氣色を伺つた。

『華族は貴公の説通り馬鹿ぢやからノウ、』と子爵は一向無頓着に冷々淡々として、『拙者のやうな無學文盲の者が見てさへ馬鹿華族が多いからノウ、貴公のやうな若い學者が見たらば殆んど馬鹿揃ひぢやらうノ――はッはッはッ――それで皇室の藩屏と云ひをるのぢやから、憚り乍ら上も苦々しく思召す事と恐察し奉る。拙者も祖先の餘錄で子爵の榮爵を賜つてるが、顧みれば尺寸の功勞もなく、誠に慚愧に堪へない。併し貴公貴公稀だ眞の華族の味を知るまいが、奈何ぢや。拙者が肝煎つて進せるが、華族の娘を妻に娶つて見ちやア奈何ぢや？』

『はッ。』と智一は思はずドギマギして言淀んだ。穆齋もお崎も君の仰が何とも辨きかねて訝かしげに子爵を見た。

『藤の時は穆齋へ談じて失敗したから今度は智一、貴公へ直談ぢや。貴公、約束した婦人でもあるなら明か

さまに話して呉れ。左もなくば一つ拙者の相談に乘つて見んか。智一、奈何ぢや。猶だ定つてをらんかナ。それでは斯ういふ華族の娘があるが、貴公娶つて見る氣は無いか。拙者が肝煎らうてのは華族の娘には違ひ無いが、着物を丹精する事も知つてる、飯を炊く事も知つてる、雜巾掛けする事も知つてる、干魚を買う事も大根を買う事も知つてる。一つ平民に出來ない藝は威張る事を知つてる——はッはッ——貴公は華族の威張る藝を知るまい。之が平民には中々出來ん藝ぢや。拙者は無學ぢやから何も知らぬが、華族の長處は此威張る藝ぢやと思ふナ。貴公は華族嫌ひぢやと云ふから平民主義ぢやらうが、亞米利加の平民の尊いのは矢張此威張る藝を心得てるからぢやと思ふナ。まだ〳〵日本の平民は叩頭する三百年來の習慣が拔けぬから駄目ぢや。奈何ぢや、貴公、此威張る藝を心得てる平民的華族の娘を娶つて見ちやア奈何ぢや——はッはッ、即答は出來まい。緣談は熟考を要するから急ぐ事は無い。宜いか、篤と熟考して見ろ、何も彼も十人並で烈女でも賢女でも無いが、臺所で襷掛で働く事と禮服を着て馬車へ乘る事と兩方心得てる女ぢや。拙者は媒妁口を利くやうぢやが、貰つて得は無からうが損は無いと保證する。穆齊、奈何ぢや、斯ういふ嫁は？』

『誠に忝けない仕合で……併し我々風情の家へ中々華族方の……』

『それ、それが不可い。貴公の昔し氣質は誠に尊いが、其のヘタクタ謙下る了簡が低い。貴公、其了簡ぢやから田舍の郡長で老耄して了つたのぢや……はッはッ……智一は見上げたものぢや。華族を罵詈する心持に拙者は惚れて了つた。そこで華族を喰はず嫌ひの智一に眞の華族の味を賞翫さしたいのぢや。』

『何分とも、』と穆齊は前額に汗を流して恐入つた。『智一。御前に御禮を申上げろ。』

『イヤ又何れ更めて相談しやうがノ、平たく打破つて云へば乙麿の妹の辰代を娶つて呉れぬかと云のぢや。』

『えッ、辰代樣を、』と穆齊夫婦は今更に君恩の忝けなさが滿身に浸染つてハヽッとばかりに鰭伏した。

『智一の了簡もあるぢやから追て相談する。實はナ、貴公の三百年來の恩誼を忘れない昔し氣質と智一の爵位を輕んずる意氣とに悉く感服した。且又乙麿の今度縁組する笠岡の娘は藤の學友ぢやさうでノ、其兄の笠岡の子息は瀧川の同窓ぢやさうで、段々詮索すると不測な縁ぢやから、乙麿の妹を智一に遣はしたら猶は〳〵縁が深うなる道理と、夫人とも相談して參つたのぢや。不束の娘ぢやが、臺所を預けても大事ないだけは保證する。稷齋も智一も能く熟考して吳れい。』

親子三人は重ね〳〵忝けなき君恩を畏みて何と答へ奉つる術もなく唯だ感涙に咽び入つた。折から臺所の方に赤子の泣入る聲するを子爵は偶と耳を傾けて、

『小兒の聲がするやうぢやノ？』

『恐入りましてムいます、』とお崎は皤伏しつゝ、『お耳觸りは藤の小兒で、實は先刻から父の眼を忍んで參つてをります。』

『何ッ？藤が……』と稷齋は俄に氣色ばんだ。

『稷齋、コレ、咎める事は無い。子が親の家へ來るに不思議は無い。』と子爵は手を擧げて稷齋を制しつ、滿面に微笑を浮べて『崎、何か、藤には既う小兒が出來たのか。どうも目出度いの。好い機會だ。久し振で藤に會つて祝辭を陳べやう。』と云ひつゝ恐入つて俯向く稷齋を顧向きて、『稷齋、貴公も幸福ぢやノウ。大いに驕らんけりやならぬぞ。智一は昇給する、婿は博士となる、孫は出來る、重ね〳〵目出度いづくめぢやノウどうも羨ましい事ッた。拙者も少と肖似りたく思ふぞ。』

寬濶大量なる殿の周旋に夫婦は唯だ感涙に咽んでゐたが、淋しかりし野武の家の春は俄に賑しく陽氣附いて、此日直ちに瀧川殿を迎へて、更めて子爵の媒妁で婿舅の杯を擧げた。

「間もなく野武の家へ子爵の令孃が輿入をした。續いて又齋條子爵家で千秋萬歳の聲がさゝめき渡つた。穆齋は浮世を外に子爵の舊領へ隱居して智一の華族嫌ひは、、、バッタリ豹變して了つた。瀧川博士の洋行の首途に目に立つたは玉の如き子を抱へたる美くしき夫人と、花の如く靚裝せる初々しき二夫婦。知る者は皆齋條子爵家、瀧川野武兩家の萬歳を目出度し目出度しと壽ぎけり。

（完）

▲仁　愛▼

人と生れては貴きも賤しきも富めるも貧しきも、身にあつく善事を行ひて人のうれいをあはれみめぐみ人の苦みを助け救ふについて、願ふことは心に深く陰德をたもちて常に之を以て志といたしたいもので御在ます、陰德とは心の中に善をたもちて人に知られんことは求めないことをいふのであります、善を行ふ道は反覆申す如く飢こゞゆる人、病人、畸人、乞丐、貧人、鰥寡、孤獨、のたよりなきものなどで、是等の人は養ふべき人なくて飢寒ゆるものですから困窮する民です、人をすくふには先是等の人をさきにせねばなりませぬ、是等の人はたとひ賤しいといつても我々と同じく天地の子であるから、我同胞の内で不幸な人でありますから最もあはれまねばなりませぬ、すべて人のため利あることをなして害あることを除くやうにしたいものです、人の害になることは心によく愼ふてかりにもしないやうに、自分が樂まんとて人を苦しめないやうにありたい、歴史などで見ると昔から道なき人は自分一人の心を樂しまんとて多くの人を苦ましめたことなどがありますが是等は大なる不仁です、只自分一人樂しむといふはそも〳〵間違であつて、家人と共に樂しみ世と共に樂しむやうにありたいもので、即ち人のうれへをうれひ人の樂みを樂しむやうに致したいもので御在ます。」

およそ眞實に心に仁をたもち身に善を行ふて人のしらんことは求めず、善を行ふたむくひのさひはいあらんことを願はないのが即ち陰德でありまして、箇樣にして久しく陰德を行へば善は次第につもりてきはまりはありませぬ、實に樂しいわけでは御在ませぬか、此樂は貧富の別なくうけらるゝのであります、斯の如く善を行へば求めなくとも自から天道神明のめぐみがありてわざはひなくしてさひはいがあります、其しるしは古今天下の書を見てもわかることで必ずうたがひありませぬ、（野中千代子）

やちくさ

新年

わら玉の年たつ空にあふぐかな
雲もかゝらぬ不二の神山

東久世通禧

てまりつきはねつきかはす處女子を
翁もかとに出てみるかな

わたの原かすむとまではなけれとも
年たつけさは浪しづか也

甲斐紀行中に

山を越え湖を越え來て湖ぎはに
やせ畑つくる賤の男あはれ

佐々木信綱

いく千本天そゝり立つ神杉の
中にいませり淺間大神

燕ひとつ果なき空に消ゆきて
物音もなし水海のうへ

折にふれて

うす日さす村のはづれの檜林
朝露おちて小鳥とびかふ

小原頼之

つくづくと打あふぎをれば大空の
月影われにちかづくが如

世の人の見るも見ざるもよそにして
高嶺のもみぢ獨かゞやく

印東昌綱

縫ものを片へによせて伯母君を
迎ふる窓にかなりやの鳴

夜船いづる濱のやみ夜のひとさわぎ
更け靜まりて雨は降來ぬ

水車めぐるわらやの軒さきに
つられて寒きからす瓜哉

松寺久雄

業もならてかへり來し身をたらちねの
笑みて迎へます見れば悲しも

箕面にて

情ある御敎うけてかへりくれば
夜風川風さむくしもわらず

かへり見れば故郷の町霧に消えて
鐘の音遠し有明のつき

末松生子

瀧の糸にうつるもみぢ葉薄くこく
誰が織りなせる錦なるらん

有馬紅葉谷にて
山々の梢さながらもみぢして
錦の中のにしきなりけり

天の橋立にて
打かこむ内外の海は空とみえて
一筋わさし天のはしだて

元箱根に物すとて
馬の上と山かごの内と語り合て
雨の山路をこえつゝぞ行

樺山常子

雲助が箱根八里の歌たえて
古き驛路たゞ秋の雨

離宮を拜觀して
御幸まして見まさばと思ふ湖添(みぎは)の
玉のみぎりの夕月のかげ

折にふれて
心なき嵐の聲よふる雨よ
おもひに曇る身を如何にせん

小幡　八重子

何事も心の底にひめおかん
我身一つのすくせと思ひて

沈みゆく心を又もはげまして
乳子を相手に鬼遊びする

ひな鳥をはぐゝむ親のさま見ては
吾身もさらにおやをしぞ思ふ

大村　八代子

花の上の紫の露きらめきて
夕日まばゆし眞野の萩原

朝夕に花を友なる花園の
あるじにしばしなる由もがな

熱海にて
つくづくと病める身なげく雨の夜を
湯女(ゆな)のもてこし古里の文

中村　文子

文もあきぬ海もみあきぬ旅やかた
雨のふる日のつれづれにして

やむ床に枕もたげてつくづくと
今日もきゝぬる入相の鐘

二葉草

武島となこ

○日の出の歌

くだかけの　なくなべに
やみの子は　にげうせぬ
ひんがしの　くれなゐは
日の大御神いでましの
みさきをおへる影ならむ

山の端に　いとわかく
大明は　あらはれぬ
あゝたふと　見るがうち
雲に打のりけだかくも
中天たかくかゝります

靈光の　さすところ
群陰に　打ふして
海山も　はゝゑみぬ
よろづの國は御めぐみの
あまねきかげをあふぐなり
日の御影　をろがみて

今日のさち　多かれと
海人どもは　いさみたつ
さつや手ばさむますらをも
皆うたふなり大御いづ

よもすがら　くるしみし
病人も　打ねふり
小供らは　群あそぶ
よのもろ〳〵のよき事は
光のまへにきたるなり

公明の　心もて
今日のわざ　いそしまむ
御光は　くまもなし
あはれくすしき大御影
あふげたふとき大みいづ

あゝたふと　日の御影
あふげ人　其光り
たらちねの　御めぐみ
限りもしらむ御こゝろよ
たへなる御德歌へ人

天地もゆるぐはかりにうたふなり
　日の大御神いでましの時

○久能山

連峯左右につらなりて
東にとほき伊豆の山
西は遠參かすかにて
前には廣し青海原

あふぐ御空にそびえたつ
山をきざみてたゝみなす
其石だんの幾百千
數しられぬは人わざか

嵬々たる山のこの宮居
三百年のいしずゑを
すえにし君が雄魂を
まつるときくも尊しや

思へば昔麻いとの
みだれ〱しよの中を
堅忍不抜の君が手に
をさめて歌ふ太平や

げに山を抜く英雄も
死すればかへるもとの土
浪華の城に鳥なき
千載の下只名のみ

夕日をあらふ海原や
かすみにきゆる伊豆の山
いづれ昔のまゝながら
かはるは夢のよの習ひ

青葉しげれる山かげに
をちこちもるゝ鳥の聲
君が宮居をまもりつゝ
むかし語るにさもにたり

こゝろもあらぬ賤の男が
ゆきゝみゆれど心ありて
たづぬる人や今いくら
絶えぬは松の嵐のみ

●兎之辭

翠香女史

兎よ〳〵汝猫の鼠を捕る能もなく犬の夜を守る勤をも知らず只いたづらに人家に飼はれて主人が心を盡して培養せる艸木の芽をくひ畑を荒すはいと憎けれど其姿のをかしくて猫の如獰惡なるさまなく犬の如人咬たりといふことも聞こえず其耳の長やかに聰げなる其眼の赤く光りて透明なる馳走るさまの疾きなどすべて愛すべき形になんある神代の昔因幡の白兎はいかに奇靈かりけむ鰐のともを欺きて氣多が崎を渡りけむは智ありといふべくかちかち山のお伽ばなしは寓言なりもと主に忠ありそれにもまさりて眼前に毛色の異なれる子を生みては忽ちに百千の金となりて其飼主を富ましむるは犬も猫も遠く及ばぬ處也之に依てこそ投機好む人の汝を飼たてゝ捨がたう愛するなれ抑兎はよく孕むものにして牡なき兎も滿月の光をみて孕むとか昔よりいふ事なれど物理の開けたる今日にてはいかゞわらむそはともあれ一夏にても牝牡交攝すれば即はらむを定とす此故に毛色よき牡兎をもてる家には常に他より牝兎を携へ來りて交攝を望む者絶ず一度のかけ料に高金を貪れども敢ていとはず是その種を得て兒を生すれば忽ちに數十倍の利をみるが故なりとぞかゝる生質ある故にや中昔の物語などにも正月の始に卯杖とて飾りたる杖をもて人の腰を打つ戲ぶれあり打たれたる人は必兒を擧ぐとかやいひ習はして上つ方の女房達各々卯杖を引かくしもちて近頃通はする聟の君又は男したる女房などを覘ひよりて打たむとすれば又うたれじと常にうしろを氣づかひするをそこの物とり候はむなどいひつゝふとよりて打て迯るをねたがりて逐て打かへすなどあざれ狂ふも兎の子澤山なるにあやからむ爲なるべし何の因緣ありてか月世界の形には似たる、ながむれば實餅搗さまのみゆるもをかし水に映じては玉兎波を走ると形容し文學ぶとて株を守ると笑はるゝ身は其疾く迯うせけむ敏捷にこそあやからまほしけれうべなり新聞社の探訪が聽耳敲つるを兎耳とかくをや卯の花の名も其色の白兎の白妙なるによりてぞいふめる死してのゝちも其毛の和らかにして美なるが爲にまゆはけとなりて美人の頬上に登り筆に結はれては文人墨士が揮毫の具と愛せられ鼠の髭狸の毛など筆の種類ありといへども猶兎毛の佳なるにはしかず今年は卯のとし兎の跳るとしなるべし扨新としのよごとには千秋萬歳も言ふりにたり少しく流氣を變更て彼太郎冠者の詞を假りて謠て曰

わんの山こんの山迄朧氣にちやんと推した卯の初霜

恩賜の御菓子(口繪參照)

坪谷水哉

新年初刊の女學世界に於て、我が 天皇陛下の御聖德と稀有の長壽を保つ老媼とに就て親しく余が目擊したる事蹟を述べて江湖の讀者に見ゆるは、年頭の挨拶に代る絕好の題目たるを信ず。

去年十一月九州に於て陸軍の特別大演習擧行せらるゝや、 陛下には車駕親しく筑紫の邊陲に行幸し給ひ、熊本行在所に御着輦の翌る日より、連日早朝に行在所を出で、汽車にて演習地に臨み、侵入軍と國防軍との進退動作を統監あらせ給ふや。鐵道の停車場より暫らくは御馬車に召させらるゝも、戰鬪地附近にては、畏こくも 玉體を田圃の間に徒步にて運ばせ給ひ、朔風龍顏を冒し、塵沙空に舞ふ中にも、數時間は御椅子にも倚らせ給ふこと無く、常に雙眼鏡を御手にし、時に紙捲煙草を摘みて燻らせ給ふのみにて、御氣色最も麗はしく演習を御覽はせ給ひ、戰鬪激しく間あれば、或は御野立地近くに在る兵卒を召して兵役勤務の疾苦を問はせ給ひ、或は士官を招きて現在兩軍の位地と之に對する決心等を尋ね給ひ、また陸軍地方幼年學校の生徒には特に前方に出でゝ充分に陪觀せしむべき 恩命を下し給ふなど、御聖德に就ての美談は一々數へ擧るに堪へざる中に、玆には特に當時路傍に行幸を拜みつゝありし老媼に、辱くも御料の御菓子を賜はりし事蹟を語らんと欲するなり。

十一月十三日大演習最後の日なりき。 陛下には熊本近郊なる託摩原の平野に於て、南北兩軍最終の決戰を統監し給はんとて、肥後國飽託郡部田村小字山田堀の村道を御愛馬初來に召されて御通過あらせらるゝ際、圖らずも路傍に八十有餘と覺しき一老媼の、五十歲許りなる婦人に背負はれて、恭やしく拜觀しつゝあるを御覽せられ、傍はらの侍臣に對つて、彼れは何人なるかと御下向ありければ、直ちに之を調べしに、此人は同郡部田村大字西

無田の士族農田中茂二太の母ヤヲとて、八十八歳といふ長壽の老媼にて、之を負へるは其の二女ジユミとて、既に五十歳の婦人なりしかば、其旨御答へ申上げしに、いとも目出度き老媼よ、御料の御菓子を賜はるべし、地方官を召せとの勅諚に、折節德久熊本縣知事は、演習地に在らざりし故、六角警部長代りて西無田の所在所に參り、仰の旨を承はりて、直ちて西無田の村役場に命じ、老媼一家の戶籍を調べしめ、頓がて演習了り、熊本行在所へ御還幸の後、德久知事は之を携へて參内せしに、老媼へ賜はるべき御菓子を御下附ありしかば、知事は　聖慮の辱なきに感激し、自ら之を奉持して縣廳の屬官を伴ひ、即日西無田に赴き、先づ村役場に臨み、出張の次第を傳へ、助役を先導として老婆の宅に赴き、家族一同を呼び出したれば、家族は既に本日演習地に於て老婆が　陛下の御目に留まり、優渥なる御沙汰を蒙りたると承はり、且つ喜び且つ畏てみて爲す所を知らざるに、今また圖らずも知事自ら車を飛ばして來り臨まれたる嚴かなる樣を見て、何事ならんかと恐る々々承はれば、知事は恭やしく恩賜の御菓子を捧げ主上には、老母の健康と娘の孝順を喜みし給ひ、辱くも御料の御菓子を賜はりたれば、之を傳へん爲に出張せるにて、此御菓子は臣下より獻上せしものにわらず、全く御召の料にと大膳職にて調進せられたるものなる旨を申傳へたれば、老媼を首として家族は何れも　聖恩の辱きを拜して唯だ感泣する計りなり。老媼は當年八十八歳といふも、尙は健康にして其の起居に兒孫を煩はさず、平生自ら養蠶して糸を紬ぎ居たるを聞き、知事も感賞して其紬糸の一部を請ひ、之を携へて再び行在所に參り、獻納致したき由宮内大臣を經て申し請ひしに、大臣にも深く同感を表せられ、物品は規則により消毒すべきものながら、八十餘歳の老媼が、自ら製作して獻納する物なれば、直ちに受領して傳獻すべき旨を傳へられ、田中一家は益す面目を施しける。其事は翌十四日の朝には、既に熊本全縣下に傳はり、老媼の名譽を稱せざる者無れば、余は此日午前の大觀兵を拜觀したる後、特に寫眞機械を携へ、熊本市より一里餘を隔つる西無田まで、車を走らせて田中茂二太氏の家を

訪ふ。萱葺屋根の百姓家に、瓦屋根の廡を前にし、先づ村內にて中等の資產と覺しく、庭先は一面に莚を廣げて、近ごろ苅り收めたる稻の籾を乾したるが、余は名刺を通じて祝意を述べ、老嫗を撮影して普ねく天下に紹介したき旨を說けば、會たま老嫗も茂二太氏も家に在り、喜んで內に導き、老嫗は余が問に對へて、長生した御陰で、天子樣を拜む事が出來るといふが嬉しく、一人で家を出て、ソロ〳〵村端れの方へ步いて居ると、人の通りが多いので捗どらないのを、丁度此れが見附てと、傍らのジユミ氏を見返り、おつ母さん危ないとて飛で來て、手を曳て、御通りの路傍まで背負ふ樣にして往て居ました。それが、幸ひに天子樣の御目に留つた相で、種々と皆樣の御厄介になりますと、喜び泣きに泣いて語れど、元來士族の家に生れ、白髮を茶筌に結び、言語正しく風采も立派なる老嫗なり。茂二太氏は立て拜領の御菓子の折を、恭やしく高脚の膳に載せて捧げ來り示さるゝを見れば杉柾の折の深サ一寸、縱一尺、幅六寸許なる中には、小倉羊羹に松葉形と串柿の形したる菓子を滿たし、折りの下手の橫に、「松の雪」と墨にて書し、蓋の上にも左右にも、他には何の裝飾なく、如何にも御召料の爲に特に調進せられたるものと察せらる。

此等の話を聞き、御菓子を拜見したる後、余は老嫗に請ふて、玄關口の日當りよき所に立たしめ、單身の圖、ジユミ氏と並びし圖、及老嫗と其の曾孫と並び坐する圖など數枚撮影し、辭して歸らんとするとき、老嫗は暫時と留め、余が遠く來りて撮影したるを謝し、昨日德久知事を經て、陛下へ傳獻を請ひたる紬糸の殘れるを取出さしめ、此れは余が自ら紬ぎしなればとて親しく余に贈られたり。余また同家の戶籍を尋ねしに、老嫗は田中ヤヲ(八十八才)長男は現戶主にて田中茂二太(六十七才)二男は田中軍紀(五十九才)とて別に一家を爲し、三女は田中ジユミ(五十才)とて近所なる同姓の家に嫁し、今回母を背負ふて行幸を拜したる婦人、茂二太氏の長男は直熊(三十才)其の嫡男記內(二才)は實にヤヲの曾孫なり、斯くして一族盡とく此日は一堂の中に會し、和氣靄々として掬すべく、いとも目出度き好家庭の模範を示しぬ、思ふに老嫗は今年健康に八十九歲の春を迎へしなるや必せり。豈賀すべき家にあらずや。

正月の聲

つばくろ女史

○大晦日

門松〆飾の立ち揃ふて今宵大晦日の市中。酒屋呉服屋の積荷、懸けたる提灯はそらの星よりも多し。賣出しの珠燈は屋の棟高く入方に引き延ねられ、人足左往右往に渦巻いて。町の隈々まで賑い立つのである。勝栗、黒豆、ごまめの用意が濟で、雑煮の具まで落なく刻み了られ。出前は致しませぬ、と云ふが蕎麦屋の定まりなき今夜の定め。老人は留守して若いものは下女まで連れて更紗に行つてから、丁度蕎麦の湯を飲む時に十二時のドンが鳴り。新年舊年の打ち分けで、寺院の鐘も此の合圖に次第に打ち掛かるのだ。

掛乞は夕刻までに濟し、店賣も代り合ふて今ま湯に入つて來た歸路のすゞびに、何も道樂、十枚許り分けて買ふた寳船、濡手拭を打ち拂ふて其まゝ引冠り。お寳〳〵と軒提灯の下に呼ぶは、道化の年納であらう。

○元旦

「目を明いて聞て居るなり四方の春」。メメ〳〵鳥の羽音がしたかと思ふと、チユ〳〵と雀の囀へづる聲がしげくなつて來る。遠い處で雨戸を繰る響がしてから暫時たつと、裏の方でうがいをする音が高らかに聞ねる。雨戸の上の欄間障子が、薄闇かつたのが次第に白んで來て、正四角な骨が黒くはつきりうつる。雨戸の間の隙が一すぢ鴨居から椽の上まで引延されて、食指の入る程の穴から、メツと障子の上に明かさし込んで、庭木の枝の摸様が薄すり幻燈繪のやうに寫つて居る。

旭日が差すのであらう、雨戸の東の隅の一枚の板が一すと透て見へる。次第に擴がつて、五寸許の處が鼈甲のやうに透つて赤く輝いて來た。今日流石に隣の騒々しい味噌摺る音が聞ねぬ、鐵瞰聲の納豆屋も來ぬやうだ。

○羽子突

また曾とも分かぬ椿の大な木立の下に、紫縮緬の被布を着た、色の皙いふつくりした、眼の大きい稚兒輪が居て。未あたらしい牛若丸を押繪した羽子板を擧げ、探袖重げに切りに酒屋お染を繰返して居る。手水鉢の袖垣には、南天の實がわつかに輝いて。暖かさうな床の高い椽には、早咲の梅に福壽草をあしらつた鉢が、支那水仙の青々した鉢と並んで居て。根好く拭い付けられた鏡のやうな椽に逆に映つて居る。

稚兒輪は息を吹き懸けては扇で羽子を挽め、連りに突て居たのであるが、生憎傍の寒椿の枝に羽子が飛び乘つた。暫時は其の傍をぐろ〳〵と見廻つて居たが、見當らぬので愈よ椿の枝に奪られたと覺つた。横なぐりに射る日光を片手で翳して梢を見上げて居たが、思付たやうに羽子板を上げて二

三度暫く静を敲いた。然し其は無効で羽子は落ちて来ないのである。焦れつたさうに又た二三度、前のよりは激しく敲いた、が蜜に落ちて来ない。で雅見輪は風切つたやうに、勝手へ轉ふやうにして驅つて行つた。

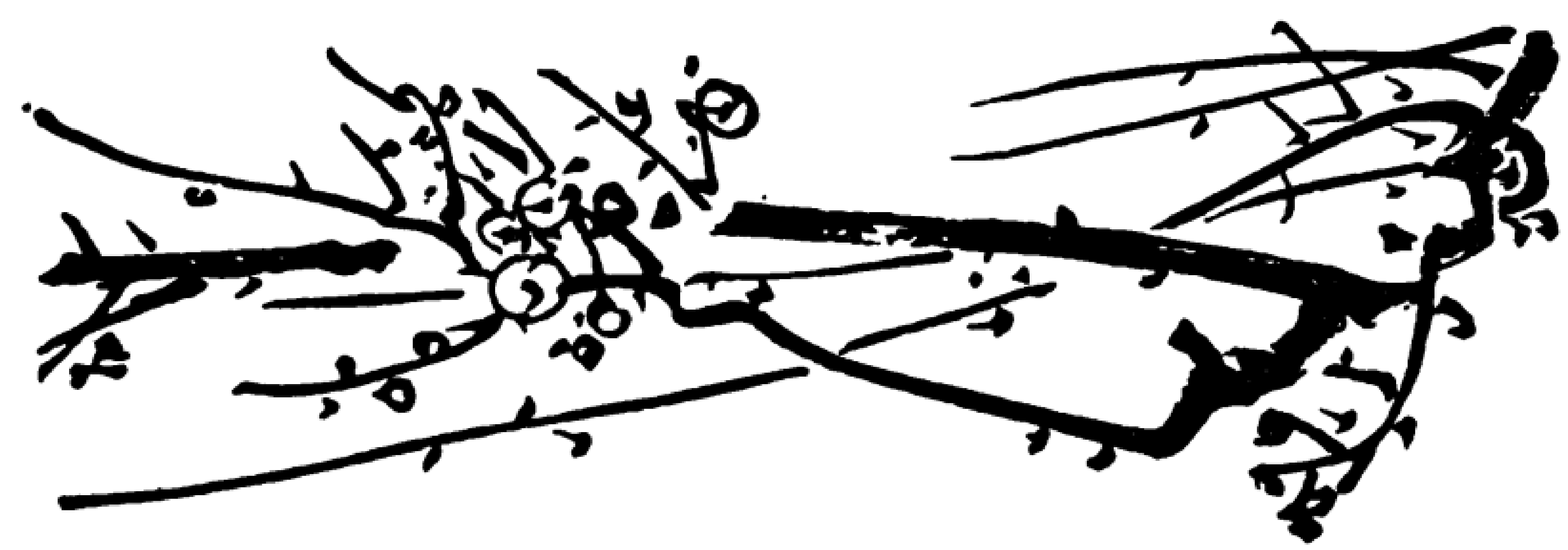
間なく雅見輪は再び庭へ現はれたが、此の時は連が外に二人あつた。一人は黒縮緬の紋付着た三十少し上の奥様、一人は縞秩父の縞入羽織着た、顔も手も真赤な大夫作り、流石に髪は結立の高島田である。三人とも手に羽子板を持つて居る。雅見輪は高島田の袖を引張つて椽の下に行つて。

「松や一寸見て御覧、此だよ見へるかへ」と待遠そうに其の顔を眺さ見上げる。松といはれたのは一寸木を見上げたれど。此も見付からぬかして。「此の枝には無いやうでムいます」と又熱心に見る。奥様は待ち娯れて。「松や其はさうして御置き、此處に外の羽子があるから此で始めやう、春ちやんも早くお来で」。「ぢやれ御嬢様後で又見ませう。阿母様が待つて居らつしやりますから」。

三人は三方に陣取つて、奥様は先づ。「右邊だから松や、なまへの方へ遣るよ」。と二ツ三ツ突て羽子を、トンと力を入れて打ち遣る。松は兼矢と受止めて。「サア御嬢様上げますよ」。春子も首尾よく受けて一つ突て母の方へと打つ、奥様は調子よく来た其羽子を受流しに丁と次へ打ち遣つたが。其が餘り早かつたので、松は目の上に来た羽子を受け損じて、羽子は力を失ふて顛々さして地上に落ちた。

母子の敵は左右から一齊に迫つて、譲けさまに一つ宛つ松か臀を打つて、オホヽアハヽとけたゝましく笑ひ出す。松は赤い顔を一入赤ふして。「アつ御嬢様、甚うござんすもれね。どうも此處は日に向つて眩しいもんだから」。

其から又三四度遣つて笑いさんざめいて居たが、折から水兵服を着た坊ちんが、遊び疲ぐんだものか凧を引摺つて走つて来た。



雜錄

上代の婦人風俗

水谷幻花

上代の風俗を知るは頗る難くして殊に太古の時代に至つては漠として考ふ可らずとしたものだが、學問の進歩と丶もに専門の研究がだん／＼にとゝいた結果、古代の墳墓の周圍に建てた埴輪土偶或は其内部にながく埋藏されてゐた種々の遺物によつて、略ぼ當時の有樣をうかゞひ知る事の出來るはまことに欣ばしいことである。

主として今實物に徴して當時に於ける女子風俗の一斑を叙せんに、土偶によつて看ると太古は男女とも等しく筒袖で下には寛い袴を穿いてゐる。此の袴は古書の所謂る褌といふもので、伊弉諾尊が御褌を投棄し給ひしも此の袴のことである。其の上へはまた帶を結んでゐるが女子は男子よりも裾の長い方で、襟の合せかたは判然とは知れないが數ある土偶のうちに左衽の風を示したものも無いではない。最も太古の時代には左衽であつた事は古書にも記してあるから、之れは恐らく一般の風習であつたものらしい。

上衣に伴つては襷だとか領巾だとかいふものもある。襷は大神が窟戸隱れのとき天鈿女命が蘿の手襁をかけたとか、天孫降臨の際太玉命が弱肩に太手襁をかけたといふことがあるから、當時はこれまた一般に行はれたものらしい。上代斯く盛んに行はれた襷は何ういふもので製つたかといふに、蘿であるとか蒲であるとか、或ひは木綿などでも製り、中には珠玉を貫いた

珠襷といふやうな立派なものもあつたであらう。領巾は萬葉の歌中などにもありて當時の婦女子は矢張り一般に用ひたものである。

▲結髪

仍で太古女子の結髪の摸樣は何うであつたかといふに埴輪の示す所によると現今の島田髷形と銀杏返形に似た二樣の結び方がある。元來我國の古風は垂髪であるが、右の二樣の結び方の外にまた斷髪の風もあつたものらしい、これに髪押への布帛を纏つたり或ひは半開きの扇の形をした櫛を挿したのもある、布帛を額に纏つた樣子は丁度巴御前の有樣に好う似てゐる。これは嬉遊笑覽にも『賤の婦は手巾にてかつら包みをなすかつら包は室町甲陽軍艦などにもみえたれども昔は賤女のなべて頭を包みたるが後に桂卷と云は桂女にのみ其風殘りたれば然いひけるなれどかつらは長き意にて髪をいふなり桂女のとにはあらず萬治寛文の頃までも下女など頭を桂包はしたるさま其頃の繪に見ゆ』また女重寶記を引て『むかし女は髪澤を用ゆること少なければ髪亂れ易き故包みもし鉢卷もせしなり』とある、骨董集にも『職人盡歌合の繪にすべて匠人商人みな小素襖を着女は頭を布にて卷云々能の狂言室町殿の御代其時にのぞみてめづらかにをかしき事を作りいそせしなりと古老の説あれば其出立も當時の風体なるべしされば女にいでたつに白き布にて頭をつゝみ兩のはしを左右に結たれてこれをゆぼうしといふ云々今よりをよそ四百年ほど前の民の風体は能狂言のいでたちを見ておほむねを知るべし南留列志卷の二に云田舍の女は木綿のひとくたなる帶びしたる上へにきるを禮服とす云々又たはち卷きするを禮儀とす云々』。府下伊豆の大島の婦人は現今でも一般に頭部へ布帛を纏つてゐるが、尙はよく探して見たなら諸國にも斯ういふ古風が澤山に殘つてゐやうと想はれる。それに先年下總國千葉郡椎名村の古墳から發見した櫛は、矢張り半開きの扇の形をした櫛であつたといふ。岩瀨百樹の女裝考にも觀古雜帳を引て神代の櫛の圖が出てゐるが、埴輪の

頭部に戴ける櫛によく似てゐる。また此の半開きの扇の形をした櫛が、現今南洋マルシャル群島の土人が用ゐてゐるから餘程面白い。上代にはまた加豆羅といつて蔓草を頭にまとひ、尊き人は玉を糸でつないで頭の飾にしたといふことがある併しこれは今日の實物では判然しないが、僅に珠の飾を頭髪の一部に止めたものはある。其に古墳中に頭部の所に珠の落散てゐる實例も少なくない。して見ると古代珠類を頭部に飾つた風が行はれたものであらふと想はれる、尚ほ古代に耳環のあつたことは從來の學者は知らなかつたが、埴輪土



偶に耳飾を附したのなどが現はれた所から、其の存在を認むるに至つた。先年芝公園圓山の古墳を發掘したときも、此の耳輪と覺しいものが二三箇現はれたが、其他各所の古墳からもそれと思はれるものを數次發見したことがある。最も此の耳輪は當時男女を問わず用ゐたものらしい。

▲化粧

装飾としては頸飾、腕飾の外に頬紅などといふ風習もあつた。此の飾は珠を連ねたもので、土偶の示す所にするに丸珠を主として、曲玉は少ないやうではあるが此れは曲玉の形を摸すのが

面倒だから、大概は丸珠を現はしたのだといふ説もある。兎もかく其の球の配置は曲玉管玉小玉といふやうな順序に繋いで頸部へ纏つたものらしい、最も肥後國には其の實例が存じて居たといふ話である。腕飾は古書に記すところの手纏或ひは釧の種類で、球飾りの外にまた銅環や貝輪もあつたものらしい、銅環は芝公園圓山の古墳からも二三箇發見されてゐる。頰紅は當時盛んに行はれるものと見えて、男女を通じて目の下から頰の邊へかけて太く塗り、或ひは額や眉の邊を塗つたのもあり、變つたのになると三角形や楕圓形を畫いたのがある、斯んな風に顏を玩弄にしたのも、當時にあつては立派な裝飾であつたから面白い。併し赤色の貝を以て身体の諸部分を塗つたことは古書にも記してあるが、其の有樣は何んなであつたか、うかゞひ知ることの出來なかつたものが、今日實物研究の結果として詳らかに知ることが出來て來た。

此の頰紅はまた近い頃まで、其の遺風の存じたものと見えて諸書に記してあるが、嬉遊笑覽にも『べには和漢とも古へ面の色を粧ふ具にして今の如く唇に塗ことはなかりしと見ゆされはこそ粉をそくわへんために源氏(常夏)近江の君のことをいふ處べにといふものいとあからかにつけてかみけづりつくろひ給へりと有も顏を粧ひしなり道興准后の廻國雜記べにが谷をとほり、けはひ坂をこゆとて、顏にぬるべにが谷よりうつりきて早くもこゆるけはひ坂かなと、此等は遠く埴輪時代の風の遺つたもので、また種彥の用捨箱に『今の何にもあれ花のちりたるを取て頰あるひは顏へ唾にて押戯れをする事なり是は頰紅をつけし頃そのまなびをなしけるが頰紅廢れて後も童あそびに殘りしにて茄子の皮を口に含で鐵漿をつけたるまなびをする類なり』と記した頗る興味ある考へである。また『後院別當の卷を引て予が弱年の時享保の頃までは婦人の顏を粧ふに頰紅といひて白粉をぬりて後紅と白粉を重て薄紅色にしてそれを頰につけて端を散したり如此すれば顏色麗しく見ゆ元文の初めより貴賤共に頰紅を止て白粉ばかりを薄くぬり或は白粉をぬらぬもあり何故如此するぞと

人に問たれば遊女の粧ひを似するなりといふとあれば當時の遊女の素顔をだてとしたるより此事の絶たるなるべし今乙御前といふものを書きても假面につくりても頬を赤く隈どるは此餘風なり」といふ断案を下した所が生川春明の近世女風俗考に據ると『女重寶記に云紅など頬さき唇爪先に塗事うすく有べし濃赤きは賤しく茶屋の女にたとへたり云々とあり高貴のうへはしらず爪紅などする人きゝも及ばず頬紅も頬先に塗るが故此名もあり今は眼縁に點ずる故名義の叶はず如此變じきたれるは天明寛政の頃とをぼし」と記してゐる。元文と寛政とは丁度五十年の差がある、惟ふにこれは地方の異つた爲めであらうか、何にしても此の頬紅が近い頃まで行はれてゐたのは事實である。

▲鏡

装飾に次でまた鏡のことを少しばかり記して見やう。鏡は既に天孫降臨時代からあつたもので、其の濫觴は随分久しいものである。鏡は俗言にも女の守りとか或は女の魂とかいつたもので、古代にあつても化粧用具の一であつたことは爭そはれないが、併し其の用途は一二にして止まらなかつたと想はれる。古書にも軍船の檣頭に掲げて敵を驚かしたり、又は眞賢木にかけて祭神の具となし或は神躰となして殿内に祭つた事などが記してある。當時は中々得がたき品であつたといふが、其後段々三韓支那印度等と交通が殷んになつて貿易品にも此品が舶來するやうになり、やうやく一般の人民が使用するやうな運に至つたものであらう。また鏡に數種あり大小を以て分てば尺餘の品もあれば寸許のものもある、物質は古墳から現はれたもので見ると金屬と石製の二種類だが、石製の分は摸造して副葬品に使つたものらしい。鑄造の式は圓鏡と鈴鏡の二種で、圓形の方は大概漢鏡であるが、鈴の付いた分は韓地であらうといふ説もある。鏡に就ては尚は記す可きこともあれど繁を厭ひて省いておく。

▲珠玉

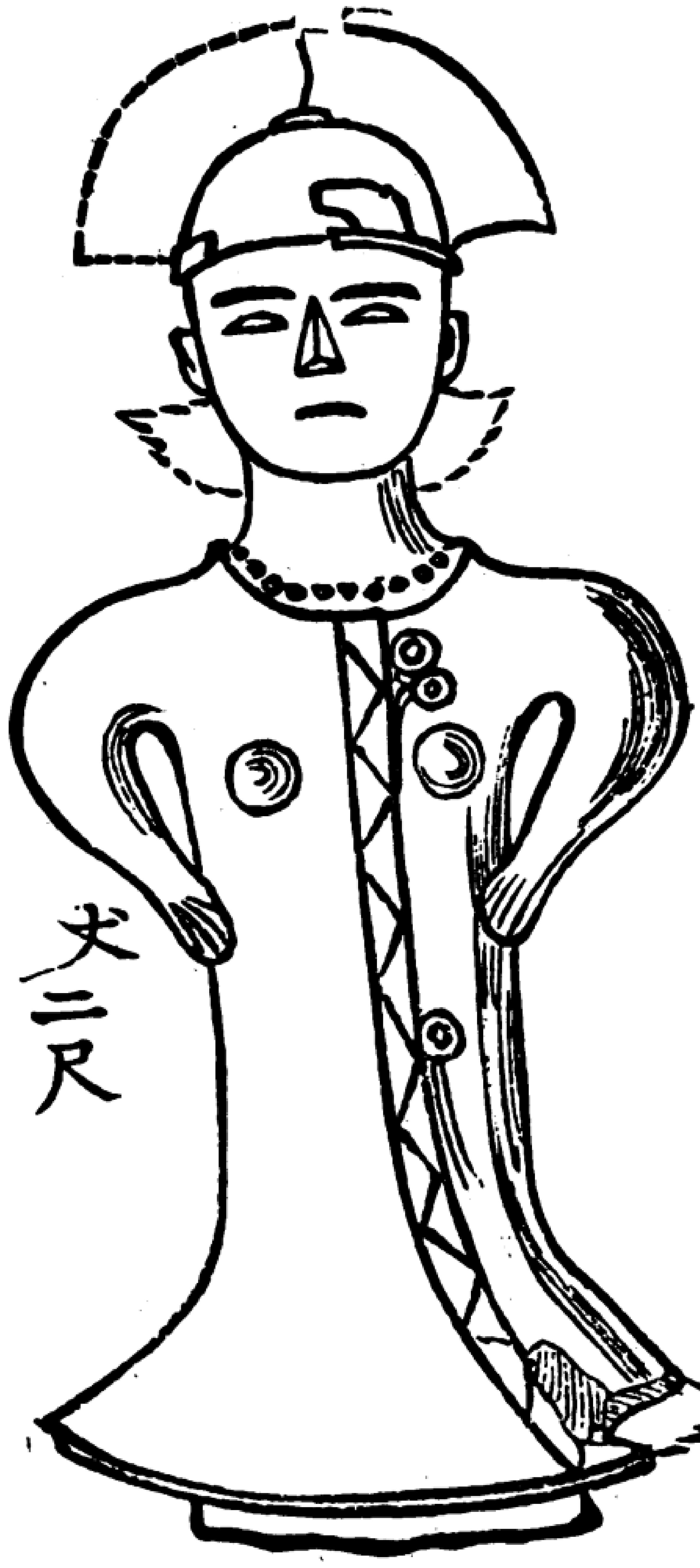
珠の用法は前に記す通りだが、物質や形狀はどんな風であつたかといふに、實物研究の結果によると凡そ左の種類に分たれる。曲玉、管玉、切子玉、三輪玉、臼玉、珠數玉、算盤玉、緒締玉、棗玉、瓢簞玉また物質に別ては金石木土玻璃まづ此の位に過ない。古書にも曲玉とか竹玉とかいふ外は餘り名稱が見えない所を見ると、ソウ大して種類があつたとも想はれない。最も神代の古歌に『あなだま』といふ言葉があるが、之れは管玉であるかまた別種の玉であるかも解らない、現にかく今日までに古墳から現はれた玉は以上に過ないのであらう。此ほか伊弉諾尊の持ち給へる天瓊矛及び大神の掛け給へる八坂瓊の玉などは昔からいろ〳〵の說もあるが赤玉であるらしく、其上に本邦諸地方には此等の赤玉即ち瑪瑙質の最も赤色なるもの丶出づる例が古來から往々あり、且つ豐玉姫の御歌にも『赤玉の緒さへ光れど』云々とあれば旁々以て赤と解するのが適當であらうと或人も言はれた。以上記し來つた所は建國當初より佩玉時代を通じての女子風俗の一斑であります。

▲變遷

仍で中古の有樣はどういふ風に變遷して來たかといふに、神功皇后三韓征討以來日韓の交通は益々繁くなつて、百濟からは阿直岐が使者に來る、夫からして彼土の博士王仁に徵するといふやうなことになり、續いて韓漢人士の歸化する者も多く、從がつて風俗にも影響を及ぼすやうになつて來たが、其後また佛教傳來して滔々たる新潮は風俗の上にも一轉機を促した。其のうち最も著しき進歩をなしたものは衣服にて、彼土からは機織の法が傳來する、引續いて綾を織るに巧みなる者が多く歸化する、殊に雄略天皇は皇后と共に親しく其業を執らしめ給ひ、呉國からは漢織呉織などいふものを召し寄せたまふなど頗る盛んなる有樣であつた。

斯くて唐韓の風が漸次移つて來て大化の大改革を來したが、寧樂朝時代とは此の大化の孝德天皇御即位から

平安京奠都の間、我邦の美術工藝が高潮に達した時を總稱したものである。當時の風俗を實物に徴して看るには寧樂の寶庫即ち正倉院に現存せる品々に如くものはないが、惜しむべし女服と覺しき全きものは今寶庫に一つも存してゐない。併し錦綾などの寸斷になつたものが隨分澤山ある所を看ると、懸衣や敷物の類のみならず必らず女服なども多くあつたものだらうと想像されるが、彼の法隆寺に傳ふる某姫の衣服などゝいふ類も今は寸斷になつてしまつて、更に當時の摸樣をうかゞふ事が出來ないさうである。古記に據ると上衣も下袴も共に幅狹く、襟は上頸垂頸ともに左合せであつたを、推古天皇以來上流の人々が唐風を慕ひて右袵に改めたが、民間ではまだ舊風を存する者が多かつた爲め、養老三年にいたつて悉く右袵に改むべしとの令が下つた。これを見ても當時さかんに左袵の行はれてゐた事が解るのである。寧樂朝時代に於ける左袵の風俗を知參考品は讃岐國多度郡富良津神社の舊藏女躰の木像を始めとして、山城國淨瑠璃吉祥寺天女の鑄像、大和藥師寺吉祥天女の鑄像、阿波國那賀郡答島村八幡神社女躰其躰正藏院の御物の



繪畫などは服装研究上もつとも得がたき好材料である。こゝに掲げしは讃岐國富良津神社女神の木像にして、當時に於ける女子左衽の服装に見るべき珍品なれば、此れに就て少しく記す所あらん、此品は現今松岡調氏の所藏となつたもので、氏の説明によると元明天皇の御代のものだといふ、髪の垂れてゐるのだ、さうでないと疑ふ人もあるが、天武天皇十一年男女結髪の詔も朱鳥元年に至りて故の如しと改められ、此後慶雲二年に至り神部の宮人及び老嫗にあらざるよりは皆な結髪を合せられたも此制はついに行はれなかつた、然れば此の像を神部の宮人と見れば差支へのない事で、此の木像の左衽にして衽の相過の深いのは、和銅五年衽の相過甚だ淺く行趍のとき開き易く如此の服を大に無禮となす宜しく所司をして嚴しく禁止せしむべしとある、これはオクミの無きゆゑ衽の合ふことが淺く、歩くときにおのづから衽が開いて不都合だといふ事である。其後狹襟細領は改められたが、左衽といふものは矢張り其まゝで行はれた。仍で此の木像の衽の相過の深いのは、和銅五年の利に從がつてオクミを添へたものだが、扨左衽の禁止は前にも記した通り養老三年であるから、此の像は凡そ元明天皇の御代のものだらうと言はれてゐる。又垂髪の上を覆つてる。服は太古の意須比といふ服の遺風で、後世の所謂かつぎであらう古事記傳にも此名は意曾比に通ひて襲覆を約めたり、其は上代に男女共に人の誰と知れじと面貌を隱す爲の服と見えたり、扨女は常にも人に見ゆることを恥て面を隱すものだから何時とても着たものであらう、夫が寧樂朝の頃になつては男の着る事が廢れて、女の古の禮服のやうになつて神を祭る時などにのみ着けるやうになつたのであらうと言はれたが、左衽の風俗を看るべきものは猶は今日に現存せるもの數体あるが左のみはとて畧すことにした。

▲髪の風

髪の風は正倉院御物の御屏風に結髪と垂髪の兩様の女子を描いてある此を看ると、當時女子の結髪にもまた

種々の場合があるやうにも想はれる。岩瀨百樹は女裝考に『髮わけといふ事古書どもにわまぞ見ゆ結髮に兩義あり一つは男をさだむるとき彼の振分髮を一つに結集擧てその末は背後へながしおくその義は男の元服と同然なり是上代よりの風儀なり』とある景雲三年二度目に結髮の令が下つたところ、中々行はれずに寧樂朝を通じて遂に女子は垂髮となつてしまつたが、倂し遺物に徵して看ると決して結髮の風がなかつたのではない。

以上は實物を主として建國當初よりの女子風俗に於ける管見を摘記したもので、寧樂朝時代に至つては百般の制度文物も完備し、宴樂に遊戲に歌垣に尙は記すべきことも數われど、數項のよく盡すところにあらざれば、再び筆をあらためて見ゆることにした。(完)

諸能力中年齡の爲めに
毀はるゝは記臆を第一とす

洋人の目に映する日本の田舍

林 天然

田舍は廣々しいばかりで、家屋が疎で、唯到る所が草や木でモヤ〳〵して、人通りが僅かであるから、道路は狹く凹凸である。大きな製造場や會社の樣もなのは勿論、商家さへほんの日用の雜品を商なふだけであるから、實に不便である。多くは田畑へ出て、作物を相手に日を暮らして居る輩で、がや〳〵と人間の渦く都會で生活してる者とは、大に其氣質風俗が違つてる。田舍の生活にも、種々雜多な等級があるから、一途にいふことは出來ないが、槪していへば、田舍の人は質朴である、衣服や器具は、華美なものより、寧ろ丈夫なものを撰び、色彩の淡りしたものより、多くは濃いのを喜んでる、美術思想はないではないが、不潔なのも氣にかけない、衞生には殆んど無頓着である、常に粗食に甘んじ食物よりは衣服を注意し、衣服よりは家屋の外觀に注意し、子孫の爲め百年の後を計り、

能く業務を勉强し、手をわけて、無駄話をするものは尠い、婦人は大概裁縫と結髪が出來る。能く食つて能く働くから、體は壯健で力强く、長く歩行に堪へられる、男子は一日に五里位を往復し、女子といへども、二三里位を往いて還へることが出來、人力車に乘ることは容易にない。結婚は早く、男子は徴兵檢査を終るをまつて娶れと、往々二十歳以下で妻をもつものがある、女子は十七歳から十八九歳までの内には大概人の妻となり、學校などへ通ふものは少し後れるが、普通のもので二十三歳になつても嫁にゆかないと、人も疑ひ、自らも愧づる位で、二十四五歳になると、もはや繼妻の候補者に認められる狀態である。婦人は大概四五人乃至六七人、多きは八九人の子を産み、能く生育し、子の無いものは殆んど稀である、敎育は中流以上のものは高等の學校に入らせるものあれども、下流の者は漸く小學校を終るに過ぎない、殊に女子は中流といへども十五六歳になれば、裁縫を學ばせ或は農事に使ふが普通である。一般に學藝より實業を重んじ、中にも農業（海邊の者は漁業）に從事するもの多く、商業工業は其次で、敎員醫師は、ほんの僅しかない。商業の多くは荒物屋とて、砂糖、煙草、麻、マッチ、蠟燭、半紙、下駄、傘、手拭、瀨戸物、絲、笊、蓆、簑、笠、草履等日用品を賣る店と、駄菓子や果物を賣る小店である、で大きい商業で數の尠ないのは、酒屋と醤油屋で、何れも少からぬ資本が要るのである。工業で多いのは土方、大工で、屋根屋、木挽などは其次ぎで、左官、疊屋、傘屋、鍛冶屋、建具屋、臼屋などは僅かである。

觀世物は手踊、角力、煙火や下等の芝居位で、それも稀に見られるばかりである。男子（重に中下流）の娯樂は飲食物で、其他將棊、凧、角力、煙火、カルタなど好むものが多く、書畫や詩歌や音樂などを娯むものは、最も僅かである、女子の娯樂にはこれぞといふものなく、强いていへば、唯小供を飾らせて、樂み見るといふ位である、彼の生花や茶の湯や、琴三味線などを玩ぶものは殆んどない、下流の者は芝居、手踊、神

等、鍛冶屋、サイモンなどに熱心すれとも、中流以上のものは頗る冷淡である。さて田舎に於ける生活を更に上中下の三段に別けて、順次述べてみませう。

同じく田舎といふても宿場(市井)と在郷(村)では、尠からざる相違があるが、今こゝに述べんとする所は、東京より餘り程遠からぬ在郷で、田舎としてはやゝ開けた地方である。で上中下三段とはいふものゝ、其間に劃然たる區別あるので無く、唯便宜上大躰のシキリで、下流とは貧民即ち少し位資産あるども、働かざれば直に顎がひあがるといふ社會。中流とはさう齷齪とせずとも、奢侈さへしなければ、充分生活しられるといふもの、上流とは年々多額の收入あり、豐かな生活の出來るものをいふのである。で田舎では十の中、一分が上流、三分が中流、六分が下流といふが如き比例であらう。

●上流社會

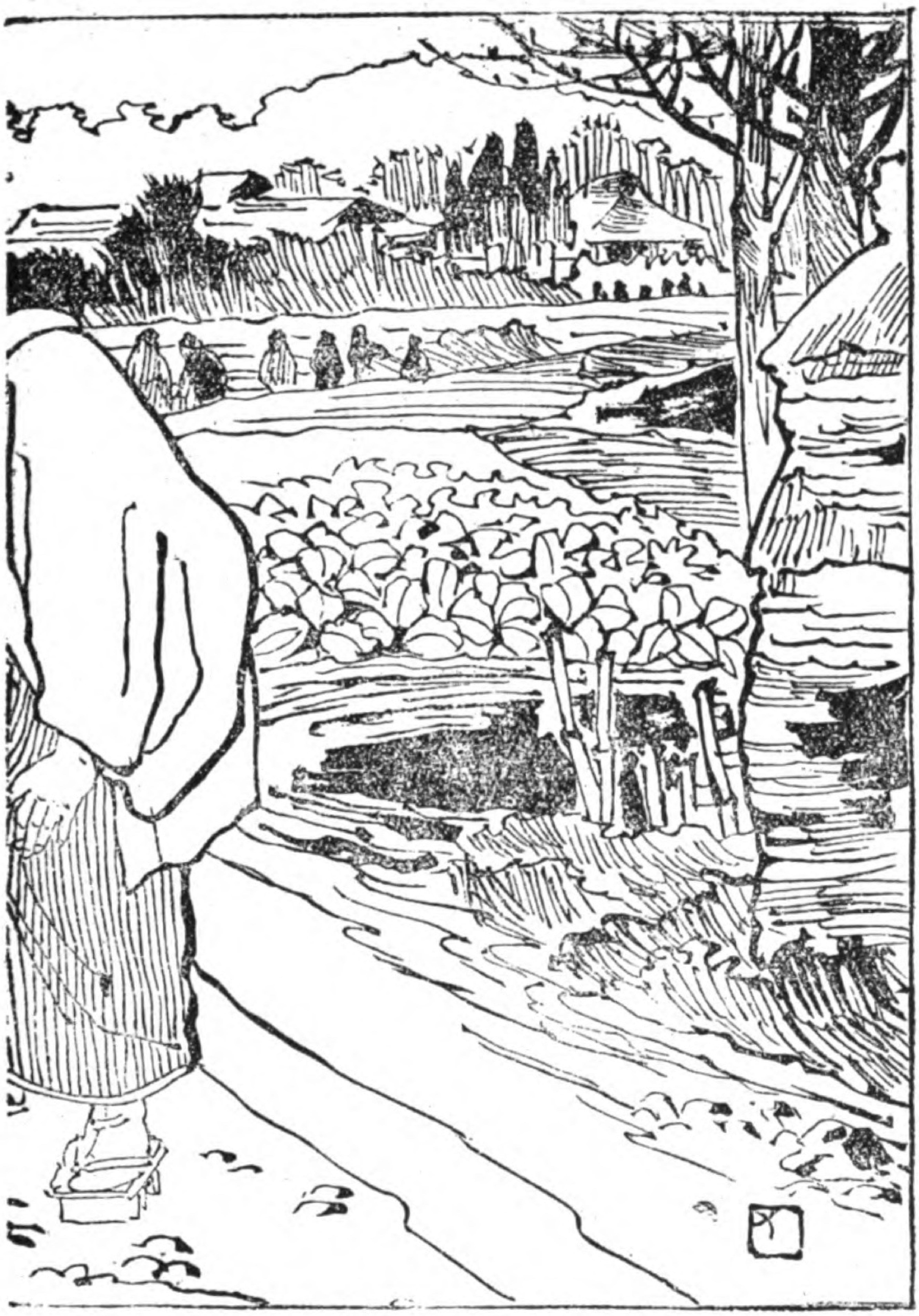
△業務　多くは財産を管理して、經濟の方針を計るばかりで、別段職業といふ程のものはない、家族は概ね無職業であるが、家婦だけは婢僕の指揮をしてる。雇人を多く置くから、多少農業をやらせてる、雇人には男にバントウ(一家の支配人)、下男(車夫を兼ね)あり、女子には飯たき女(農業を兼ね)中働庖厨をしたり座敷の掃除をしたりする)乳母、子守などがある故に、上流社會の家は、常に賑かである。

△衣服　平常はケンチウのとて天蠶もて作れる羽織にメイセン、或はフタコ位の着物である、で外へ出るときは、直きナナコの羽織に、イトオリ或はツムギの着物を用ひ、男子は徃々洋服を着ることがある。女子は洋服は勿論、まだ袴(少女を除けば)を用るものがない。

△食物　米飯を常食であるが、婢僕は素より麥飯である。田舎は都會と違ひ、縦令金錢に不自由なくとも、

品物のないことがいくらもある、故に到底東京邊の眞似は出來ない、牛乳を呑むものは殆んど無い、鷄や鯉を飼つて置いて客でも來た時の用意がしてある。平常は主に魚類を用てる。一躰食物は他の衣服や家屋程には念を入れないのである。

△住居●● 田舍の上流は頗る權勢がある、田舍の十萬圓の資產家は東京邊の、同額の資產家よりは、收入少ないが、其權勢といつたら比べものにならない、隨て家屋の構造は都會の樣に綺麗ではないが、宏大で庭宅の周圍なと、なか〳〵の構である、入口には必ず長屋か或は門があり、倉庫には米倉、道具倉、文庫倉など、少くも二三棟はある多くは離座敷もあり。何れも庭廣く木や石にて飾立て



や、立派である。

△衛生　衛生の智識に乏しい、けれども身躰を大事にして、病症の難易にかゝはらず、直ちに醫師に頼るから、安心である。食物は佳良であるけれども、運動は不足の樣である。風呂は別に湯殿といふ所があつて、毎日ではないが、能く沐浴する、それ故身躰は清潔で、且つ衣服などの洗濯は怠らない。便所は概ね家屋の一隅にあるから、悪臭を放つこと、中流の家に異らない。



△教育　先づ完全といふ方である、昔でも何うなりこうなり、詩歌文章位を作らせて居たので、今日ではズン／＼高等な學校に入らせるが嗣子だけは、早晩家産を管理するの義務があるから、一通り法律や經濟を修むれば、大概郷里に歸つてしまう。婦人は普通の讀み書きは勿論、裁縫、禮式、茶の湯、生

花、琴、三味線など一通り心得てるもの尠くないで、近年は何れも女學校に入るが、裁縫は餘り必要でないから、ほんの心得までに習つて置くばかしである。

△娯樂　上流の男子は、多く書籍書畵、骨董の類を好み、或は銃獵園藝を樂んでる。婦人は歌書を嗜むものなく、新聞雜誌小說などを讀み、生花茶の湯を樂み樂器を玩ぶものもないではないが、家政の方が忙しいから深く耽けるといふ事はない、地廻はりの芝居手踊などをば、賤しみて觀ない、唯中流以上の婦人は小兒をあいしらつて居るが最も興味ある娯樂であらう。

△品行　男子は一般に篤實温順である、往々資產を身にかけ、豪慢なるものもあるが。又稀には酒を好み酌婦などに戯むれるものもあるが　これは素より番外で、婦人は書物も讀み、正しき家庭敎育も受け、且つは富豪に生れ、物にこせつかないから、自然氣品高く中流以下の婦人の如く、人をそねみ、人をそしり、人を陷いれて、自分のみ豪らく思はれ樣とするが如き、卑劣な根情は割合に少い、小人共がごた〳〵するも、笑つて居て眼中に置かない、中流以下の婦人は、唯に財產の少ないのみでなく、心までが狹くて賤しい、上流の婦人は、心までが多くは平らで豐かである、要するに此地位の婦人には不正不道の者が尠ない、常に嚴格で猥褻なる事物に觸れない、されば身持の如きは素より言ふまでもない。

●中流社會

△業務　多くは農業を營み、殊に近年は養蠶をやる所が多い。其他小學校敎員を務むるものも少しはあるが酒や醬油の釀造を業として居る者、金貸をして居る者、質屋をしてるもの、醫を業としてるもの、或は往々無職業で暮らしてるものなどがある。で業務に勤勉な者も尠くないが、概ね下男下女を雇ひ、專ら勞力せしめてる。多くは朝早く起き、夜も早く寢るの風である。

△衣服　祝儀不祝儀の時などには、立派なものを用るが、平常は專ら木綿で、冬は羽織を着けてる。外へ

出る時は、帽子や足袋を用ゐるが、まだ手袋を用ゐるものは尠ない。下流の者は寒き時、或は雨の降る時、外出するには、能く赤毛布を用ゐるが、中流以上の者はやゝこれを愧ぢて用ない、何れも廉外套（若し品がよければ大概古物）を持つてる。教員醫師の外、洋服を用ゐるものは殆んど無いといつてよろしい、雨具は傘ばかりである、唯東京邊の女學校へ入つたものが、カツパを有つて、雨が降ると得意顔に着て出る。

△食物　多くは麥飯を食ひ、常に豆のスープ（味噌汁）を用ふる、節儉家は麥飯の中へ甘藷南瓜などを雜ぜ或はグシャ〳〵に煮て、成るたけ食はれない樣にするとのこと、食菜として用ふる大根、菜、胡蘿蔔、牛蒡、瓜、豇豆、茄子、南瓜、など各自で作るから買ふものは少ない、唯カスタード（豆腐）及び魚類（主に鰆、鰯、シタビラメ、アカエ、鮹）だけは買うのである、鶏肉豚肉はないではないが、食べるものが尠ない、鶏卵は澤山出來るけれども、病氣か客人のある時でなければ、滅多に食べない、牛乳はそれてそ大病でなければ用ゐない、鯛、鮪、鰹、章魚、鯉の如き大魚は、祭日か祝儀か來客のある時でなければ求めない、勿論東京や他の都會と違ひ、一人前二人前といつて切賣をしないで、一尾か少くも半身でなければ賣らないのである。動もすれば牡丹餅アンコロ餅をこしらへ、舌皷を打つてる調味は東京に比べ、一般に甘くない。



要するに田舎は、野菜の如き植物性のものは、手許にわるから大袈裟で、動物性のものは、價高くて新に代價を出さなければならんから、容易に食はないのであ

る。茶ウケは、ちよつとした者や、近所の者であれば、多くは砂糖、梅干、糠味噌漬、澤庵漬、漬菜、若くは廉い菓子位である。上客には上等のヒガシを用るが、蒸菓子や餅菓子は到來物でもあれば、兎に角、さもなければ、遙々宿場まで行つて求めなければならんから、滅多に用ない。果物だけは、多くは宅地内へ植えてあるから、新鮮なのが食べられる。枇杷、桃、李、杏、梨、葡萄、無花果、棗、柘榴、柿、梯、樒柑、柚、金柑などは、大抵の家にあるのである。

△住居●●　本屋の外、概ね長屋あり、又米庫、離座敷、薪小屋、馬小屋、灰置場などあり、庭宅の周圍に籬を設け、庭園には雜木や花卉を植え、築山のあるのもある。家屋はやゝ大きいが、多く衣類器物など散かり、臺所には穀類農具など轉がり、誠にしだらなくて、都會の住家の樣に、きまりのよい家は尠い。庫だけは瓦屋根なれども、他は概ね萱葺である。本屋は普通五ツ以上に區劃されてる、平生座居つてたり、また、ちよつとした人に面接する所をチヤノマといひ、食事する所を勝手といひ、寢る所を納戸といひ、それから玄關の間、奥の間、學問所などの座敷があるのである。長屋は所謂門ともいふべきもので、多くは農具や雜穀を入れる所で、往々一間を座敷にして居るのがある。まア農家では長家は頗る便利な建物としてある。

△教育●●　昔の男子は孔夫子の經典（四書五經）を讀むに止まり、重きを習字及び珠算に置き、やッと普通の用便が足せる位で、文章の如きは、極めて拙劣である。女子は自分の名前と、帳面や正札にある金數が知れる位で、受取證も書けないのが多い。其時分の教科書は百人一首女今川女大學、女庭訓、實語教などであつた。けれども餘り文字に念を入れないから、昔の婦人で、繪草紙や今の假名付小說が讀め、又帳面を記け、普通の手紙が書ければ、世間ではあの人は讀み書きが出來る、何うも豪らいもんだと賞める、自分もまた大天狗であつたのである。

近頃男子は、高等小學は勿論、中學の課程を修めしめ、更に法律學校や他の專門學校へ入らせ、或は進んで大

學を終へさせるものも尠くない、將來有爲の人物を出すは、實に中流社會の子弟にある。近頃の女子も、尋常小學より高等小學に入り、普通學を修めさせるが、普通十八九歲になると、結婚させるから、學藝の進否に係らず、十五六歲より廢學させ、裁縫や機織を習はせ、それから東京に出だし、行儀見習として、華族奉公を務めさせ、豫め嫁入の準備をするのである。が昨今は社會が急に進步したのやら、贅澤になつて嫁を貰ふ方が、無教育を顧みない樣になつたのやらで、經濟のゆるす限りは、東京に出で、職業學校や裁縫學校、或は高等女學校に入つて來た、而し女學校出身は考へものである、何んとなれば、理想ばかり高くて、實用にかけてはズブ意氣地がない、上流には適當かも知れんが、中流の者には活動する方が、身の爲め家の爲め遙に肝要である。



△衛生　先づ不注意といふ方である、これ獨り田舍に限らず何れの段級もさうである、蓋し日本人が古來科學思想に乏しかつた故であらう。病人があると、多くは醫師に依賴して、祈禱賣藥によらうとするものは尠ないけれども、まだ醫師の治療上の巧拙を觀るだけの力はない。中には醫師を賴むに、方向の吉凶をみてからするものがある。灸で治療しやうと思ふものが尠くない、これは費用を要せないからであらう。衣服夜具を不潔にして置くものが多い、風呂敷、手拭などは滅多に洗はない、驚くべきは常に齒を磨かず他へ出づる時、急いで鹽でこする位である。食物は何の爲めに要するか、殆んど知らないのである、單に喰ひたいから喰ふのであるとしてる、故にうまいものを

食ふのは、滋養分を得んとの爲めでなく、唯舌を喜ばせんが爲めである。節儉家は多少、住居衣服に注意するも、食物と來たら甚しい、彼の豚や犬と相距る遠からざるものを食つて〻、到底想像もつかない。蓋し衣服住居は直接人目に觸れ、褒められたり、貶なされたりするが、食物は腹に入つてしまうから、誰れも知ることは出來ない、糞となれば、肉も菜も米も甘藷も皆同一物である、佳いものを食ふ程馬鹿げたことはないと思つてるのであらう。

湯は四五日間毎に沸かす、湯殿は多く住居の一隅に接けて作り、バーレル（風呂桶）の中へ水を滿すのである。夏は熱いからギヤウズイとて、大盥に湯を入れ多くは毎晩浴して、汗や垢をとる。婦人に限り、これまで糠袋を使つてたが、近頃は一般に石鹼を用ゐて來た、がまだアカスリや、カルイシを使ふものは極めて尠ない。東京の樣に。好んで熱い湯に入るが、浴する時間は、頗る短かい、殊に男子は一通り全身へ手拭が當たるばかしで、僅か十分か十五分で洗ひ終るのである、往々バーレル（風呂桶）を庭などにたて、蠻風を曝らすのがある、便所は湯場と同じく、大概は住家の一隅にある。

田舍は概ね農事をするから、糞尿をば貴重な肥料としてる、故に汚なく思ひながらも、大切にしてる、

△結婚　結婚は人世の一大事であるから、互に前以て調査しなければならない、是れは田舍も都會も、同じ事であるが、調査の事項には、多少輕重があらうと思ふ。田舍にて妻を迎へるについては、第一血統（主に癩病系統）の正否、第二財産の多寡、第三妻となるべき者の容貌、氣質、才藝、第四家族の氣質ともいふべく。夫を撰ぶには、第一血統、第二財産、第三家族の數及び氣質（特に舅姑の性質）第四夫となるべき者の氣質、能力、容貌といふが普通である。全躰田舍の人は見識が低く、財産さへあれば、假令夫となるべき者が、無學であらうが、不品行であらうが、醜い容貌であらうが、餘り搆はんといふ風であるで、結婚の權力は、本人（殊に女子は）になくて身の上の者にある

が如くである、嫁とならうとする頃は、概ね若年であるから、素より利害得失を辨せない、且つ時代が時代であるから、恥らつて何とも言ふことが出來ない、身の上の者といへども、必ず善い方を願ふのであらうが父母兄姉がよいといへば、十中の九までは、それに隨はねばならない有樣である、故に理想の夫を持つことは誠に難いのである、抑も日本の弊習で、婚姻の本領に違つてるのである。田舍の人が、頻りに血統の良否に注意するは、最も贊成すべき良風である、

田舍では隨分結婚式を賑かにやる。昔は花嫁は馬に乘つて往つたのであるが、今は皆人力車に乘つて往く、中流社會では平常人力車に乘るものが極て尠い、故に生れてから結婚の時始めて乘るものもあらう。こゝに奇なるは、結婚の式に、車夫がズツト座敷に上り、上客と略ぼ同樣な待遇を受けるのである、何によつて斯の如き奇風起つたか、實に可笑しい、これも或る外飾家が車夫を客にすると、結婚によつて惡口をいはれ、世間に恥を曝らしはせぬかと慮り、殊更に車夫を叮嚀に取扱ひたる爲め、車夫は圖に乘り、若し馳走でもよくないと、やれ吝だとか賤しいとか騷ぎ廻はる所から、見識の狹い輩が、吾も吾もと車夫に媚び、遂に今日の如き、惡習に陷つたのであらうと思ふ。



結婚すると、大概一二年で姙娠する、近頃中流にて、分娩すると、嫁の生家より產見舞、初の節句が來ると、祝儀とて尠からざる米或は金を贈る習慣がある、故に嫁の生家はなか／＼大儀である、これも或は少數の者が、良い家に緣づきて嬉しまぐれやら、舅姑の機嫌をとる

のやらで、不相應に贈つたであつたのを、他の卑怯な奴が見眞似して存外多くきばり、遂には穩かな舅姑にまで慾心を出さしめ、今日では世間に對しても、多く贈らんければならん様な、塲合となつてしまつたのであらうと思ふ。

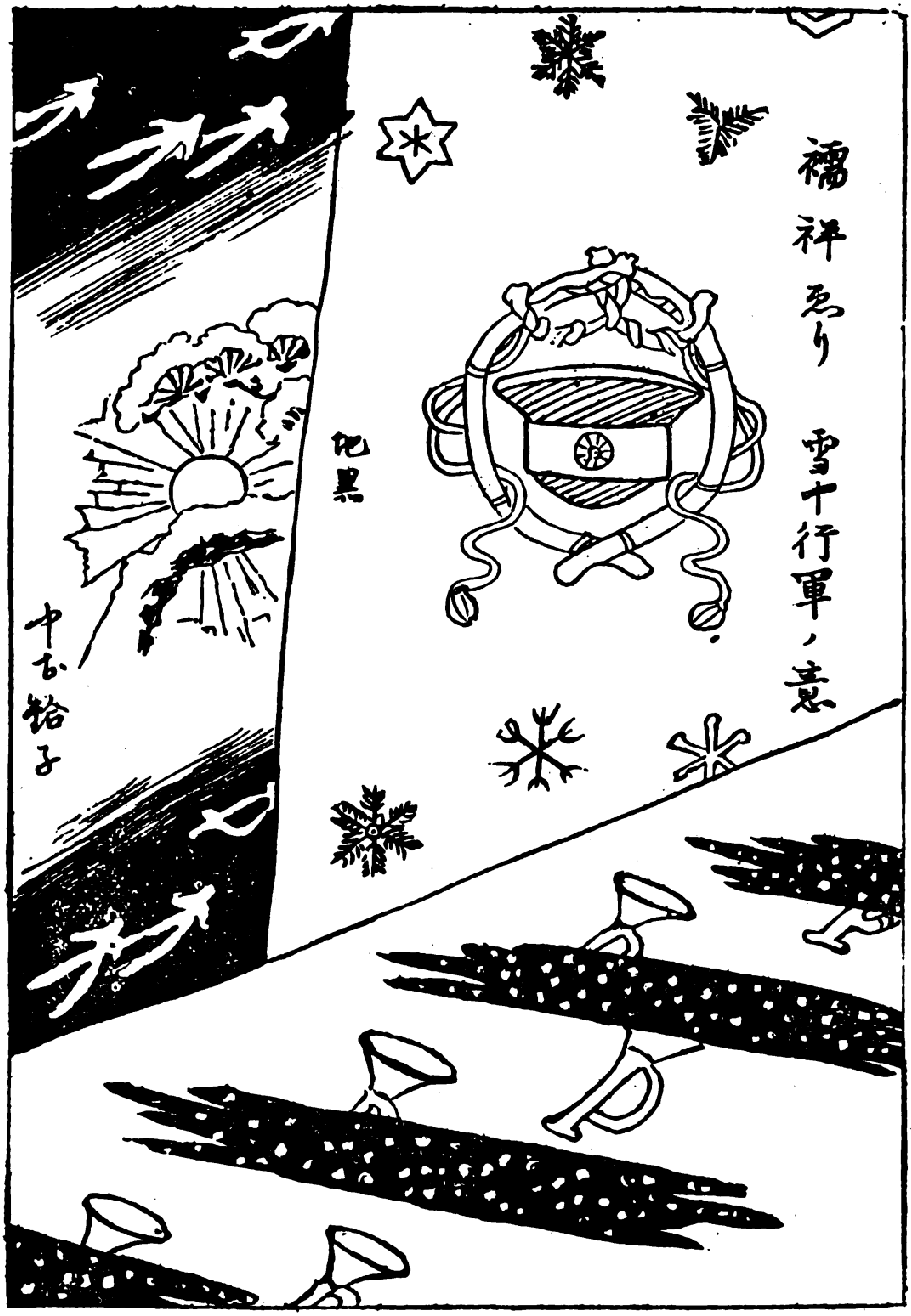
近來は人口が增殖し、猶年々殖えるばかしである、然るに相續人は依然として限りあるを以て、嫁を貰ふとする者は、多くの女子について、充分撰擇して貰はれる、そこで不標緻なものや、藝の足らないものは、多くは撰擇に漏れる。男子なら何歳になつても搆はんが女子には期節あり、大抵十七歳から二十歳、遲くも二十一二歳には嫁がんければならんから、娘子を持つた親達は迂濶りして居られない、殊に膽の小さいものは十六七から心配し、賣るものだからと、思切つておしやらくさせ、十九二十になつても貰ひてがないと、氣か氣でない、態々祭禮や見物に引連れ廻はし、口にはいはねど、嫁は如何であるか、大安賣〳〵と廣告し、近親戚友人を賴んで賣り廻はし、それでもまだ賣れないと、娘は大に愧ぢらひ、東京などへ逃げ、空しく月日を送つてる、遂には不滿足ながらも、下等の官吏か活版職工位の妻となつてしまうのである、斯の如く女子の數多くなつて、撰拔試驗をされるから、若し年頃になつて相當な家から、縁談を申込まるゝと、夫となるべきもの丶敎育や容貌や品行などに氣を入れない、殊に不見識の者は、少し位の血統の惡いのも搆はん、喜ぶが〳〵大喜びで、一も二もない。それで祝元の日には先方の夫の夜具、蒲團、蚊帳、膳椀などまで嫁の方から持參し、出產や初の節句には、不相應に物を贈つて先方の機嫌をとり、其結果今日の如き、不正極まる習慣となつたのである。嫁を貰ふ方は大威張で、出す方から意氣地がなく、恰るで河の中の鐵槌、頭の上がる瀬がない。

△品行　男子は比較的質朴で、餘り交際を結ばない、粹の通のと騒いで遊ぶものは尠ない。婦人はちよつと表面を見ると、温順で、無口で、親切である、が深く內裡を窺ふと、豫想外な感念が起る、一体從來の中流

婦人は、殆んど無教育といつて宜しい、素より教師よりの訓へなく、書物上の誡めなく、唯不完全なる家庭に生長したるまゝなれば、見識が低く、能く喜び能く怒り、能く勇み能く悲み、喜怒哀樂が直ぐ顏色に現はれ、動もすれば人を嫉み人を恨み、他人の憂を以て樂みとなすは、實に此中流社會の婦人に多いのである。寄れば觸れば人の噂さに耽り、嫉妬的の批評を下だし、人の短所を拾ひ、獨り己れのみ善い人と褒められんことを欲し、常につまらん者に諂びへつらい、巧く世辭をいはれると、夢中になつて物など與へ、下等の者に向つては藪の中の雀で、ペチョ〳〵囀づり立てるが、いざといふと啞者の如くグーのねも出ない、平常賤しい話ばかりして、敢て高尙な思想をもつて居らんから、方正な人に交はるを厭がつてる、憐むべきは實に中流社會の婦人である。一躰婦人といふものは、嫉妬、怨恨、猜忌といふ厭ふべき惡素を有つてる、田舍のみでなく、都會でも中流以下の婦人には特に多いのである、されば其人道を辨へ、博愛仁義を重んじ、超然俗情を脫し、人の喜びを見て共に樂み、人の憂を見て共に悲み、所謂婦人たる性行を具ふるものは、實に暗夜に星を數ふるが如くである。嗚呼是等の婦人には僞善者が多い、其外貌の溫愛なるに似ず、心は概ね劣等野卑で、共に語るに足らんのである、今後敎育を受けたる婦人の性行は、果して何うであらうか、宜しく研究すべき問題である。

田舍の中流婦人は、見識低く實に語るに足らんが、男にかけては最も嚴正で、妄に男子に近よらない、情夫など拵へる不貞破倫の馱物は殆んと無いのである。處女にいたつてもお轉婆者なく、殆んと純粹淸淨の處女のみである、彼の下流の女子に比べては、實に雲泥の相違がある。であるから猥褻な芝居或は小說など見ることを、不名譽と心得てるのである。

●名古屋の雜煮　極めて簡單なる調理法にして、先づ鍋に澄し汁を拵へ、其中へ雜物の菜を下敷にして、其上へ餅を並べ煮上れば椀又は茶碗に盛りて後花鰹と稱して鰹節の削りたるを掛け差出すが慣例にて、餅は二寸位の方形なり、但し村落へ行けば雜物に菜と鰹節の外に芋。小豆などを入る向もあり


襦袢ゑり
雪中行軍ノ意
地黒


巾着
押繪
縫
両用
鈴子

研究問題　職業

婦人と商賣

篠田胡蝶

（一）從來の婦人

婦人の商賣と言つたら、實に指を屈するほどしかない、從來は猶更の事で、當今はソレでも餘程開けて來たのであるが、まだ〳〵お話にならない、即ち昔からの習慣なる婦人の屈從といふものが、依然伸張されない墮落の馴らしむる所ではあるまいか、思へば昔時の婦人ほど割に合はない者はない、何事も椽の下の力持で、唯だ只だ良人の陰身に添つて、少さな圏内を動いてゐたものである、明治十六七年に至つて、女權擴張の輿論の爲め、稍く社會の一面に出て、羽叩きをする樣になつたもの丶、ソレは或一部に過ぎない、しかも到底一本立になつて、飛廻るほどの勇氣とは爲なかつたのである。

　試みに從來婦人の營んだ商賣を數へて見やうなら、眞に心細い、誠に詰らない、御耻しい位のものだ、賃仕事、洗張洗濯、三味線、踊の師匠、小間物、女髮結、藝娼妓、茶屋小屋、揚弓店、掛茶屋、阿婆さん連の商賣としては、桂庵、神佛の手洗水番、鳩の豆賣、納豆賣、のり賣、荒物駄菓子、烏金貸位であらう、されど此等の内でも、大多數の婦人が糊口を支へて、獨立獨行、相當の生活を營み得るものといつたら、殆んど無いと言つても宜い（藝娼妓は別問題だ）、女髮結の上手なのが、少しく贅澤を言へるに止つてゐる、給金取としては年期奉公の女中が、一番よいであらう、是とても嫁入の支度が出來る位が、關の山であらう、婦人が從來の商賣――其意味を擴げて、お金の取れるものをば包括した所で、以上に過ぎないではないか、何ぞ婦人の薄倖なりしぞ、昔時の婦人の憫然なりしぞ。

(二) 近來の婦人

然らば近來の婦人はといふに、商賣上一生面が開けたと言つても宜い、ソレは言ふ迄もない諸官省が、女子を採用するの一段である、印刷局が女子を採用してゐたのは、古い歴史であるさうだが、遞信省が採用し始めのたのは近い過去である、其結果は如何といふに、頗る良好であつて、爲替貯金管理所より延いて鐵道作業局に逮んだ、思慮が綿密で、給料が格安で、事務の進捗が逸い、コレを男子に比較するに蓋し三得であるとの事だ、御役所の鐵門をば海老茶袴がゾロ〳〵と潜るのを見る、大に婦人萬歳を唱ふべきであらう、一方に此の婦人占領區域が開けると同時に、他の一方にも婦人の商賣が擴げられ、岩谷商會は婦人販賣店を設置した、コレは一の失敗に葬られたけれども、コレは婦人が悪いのではなく、商會そのものが人の同情を獲なかつた、いかにも演り方が拙で、徒らに嘲弄の販賣所となつてしまつたのは遺憾の次第で、現に銀座のバン屋木村屋は、女の雇人を使つて、チャンと商賣をしてゐる、ソレに又た神田や芝區には女の理髮床といふのが出來て、一ぱし店を張つてゐる、中々面白い現象だ、髮を苅る位の事は、女の手で澤山だ、此等の現象は婦人の身に加はる所の尾嗜であらう、官省は今後増々婦人採用の旗を揮つて女官員を迎へるであろうし、諸會社も亦た婦人採用の門戸を開いてお出で〳〵を極めるであらう、かゝる時運は婦人が獨立獨行の大道をならして、將來の婦人の往來に便ならしむるものと謂つべした。

諸官省では遞信省（電報調査所、爲替貯金管理所、鐵道作業局、電話交換局）、大藏省（印刷局）、文部省（製本部）、陸軍省（砲兵工廠、火藥庫）、諸會社では活版所最も多くの女工を遣ひ、製本所、製罎所、ボール箱製造所、ビール會社、此外シャツ、ハンケチ、縫取、編物、花簪、煙草製造に至つては婦人の大占領區域といふべしで、產婆、看護婦の如きは、其區域の大なると、婦人の商賣として最高給のものである、今これらを總

稱して商賣とはいつたもの丶、區別したなら職業的商賣、内職的商賣とでも謂ふべきか、獨り純然たる商賣範圍と來たら何であるか、指を屈して數へたくも數へることが出來ない、女髪結、女理髪床、女煙草店、唐物店、下宿屋、待合、これのみだ、折角一方には職業的、内職的に發達を遂げても肝腎の商賣の方は一向に振はない、女の理髪床が出來たといつて、

婦人職業雜題(一)



婦人職業雑俎（二）

世人は眼を丸くする位だ、岩谷の婦人販賣店の如きも、御客よりは見物が多く、評判よりは嘲弄が高く、發達を遂げ得ないで、閉店してしまつた、職業的の方では、かうした勢ひである、彼の電話交換局、本年始めまでは、晝は女子夜は男子の受持であつ



たが、四月頃に至つて夜も女子の勤務となつて、男子は事實上女子軍の放逐する所となつた、コノ蔑るべか

らざる猛勢は、内職的の側にも認められる、即ち左官の土コテに出る女泥溝浚ひに出る女、勞働にも女の入込む程だから、手藝的のものは婦人の手に屬せぬもの恐らくはあるまい、ソレであるのに婦人の商賣、純然たる商賣といつたら、不振不張を極めてゐる、其原因は何であらうか、研究して見ねばなるまい。

(三) 銀座の女商店

純然たる婦人の商賣といふものが、不振不張、發達してゆかないといふ原因はなんであらう、假に銀座の街を調べて見ても、婦人が商賣をしてゐる店といつたら、一二軒しかない、其他にあつても名義のみで雇人は男子である、餘計の事だが銀座の一丁目から新橋の竹川町までに、數ある商賣店の内で、婦人名前の家といつたら、銀座一に睦屋北村まさ、銀座二に石鹼水油販賣渡邊てつ、帶商片桐ひさ、京都染半襟店林とも、銀座三に上方屋岩井たね、銀座四に馬車人力車製造業秋葉大子、尾張町に牛肉店德松かう、竹川町に唐物店國瀨たつ、西洋料理店宇都宮つる等である、かく女名前ではあつても、店員まで婦人といふのは一つもない、ホンの名義に過ぎない、持主に過ぎない。

然らば其店員たる男子は、婦人よりどれ程の能力を持つてゐるか、價値は挺んでてゐるか、勿論商賣にもよるけれど、隨分婦人でもよいのが幾干もある、寧ろ婦人が適當であらうと思はれるのが、是又た幾干もある、ソレにも拘らず婦人の商賣が發達しない、婦人の販賣店が開けないといふ原因を探究して見たい、しかも是には從來の舊慣が破れないからで、年期小僧から經上つた手代番頭を殺すに忍びないからとの説もあるが、コノ舊慣を打破しえないやうでは、婦人を用ゐる勇氣はあるまい、なれども『小僧入用』の札が、何所の店にもブラ下つてゐて、明白に小僧拂底の有態が讀まる〵今日、漸次婦人採用となるのは知れきつてゐるか、男主人の家に妙齡の女番頭、女手代の雇入れられるといふのは、家庭上から許されない情的事實があるかも知れないから、女主人の商店は奮て女雇人を使つ

て見たなら何であらう、婦人は自然の商賣氣を特有してゐる、愛嬌と柔和との二つが、商品の値を安く見せしむる事實は決して乏しくない、唐物店、菓子店、玩弄屋、雜誌店、書籍店、鞄屋から寫眞店、繪雙紙屋はいふも更なり、煙草店、紙屋、糸店、茶屋、骨董店、陶器店、藥種店、美術店、織物商、鑵詰商、帽子店等。呉服店の如き又必ず婦人に適當たることを認めずにはゐられない、現今の如き呉服店の構へには、一寸考へても、婦人がよさゝうだ、男の番頭をして朝から晩まで、表の方を向いて煙草盆を傍に、御客なき時の徒然たる態哉、吾人は彼等を見るたび毎に、『何を考へつゝありや』と問ひたい位だ、忙しき時はイザ知らず、徒然の餘りには、妄想湧き、人生と慾望と、暗黒と光明との闘ひが、時々刻々胸の舞臺に行はれはせぬか、成程コノ舞臺を經て、頭を禿らかして何十年の辛抱をなせる老番頭ありとせば、丌は恐しき辛抱强く我慢强き人間と稱美するの價ひある事を覺知せらるゝのである。

コレが女の番頭であつたなら、大した慾望も起る筈がない、恐しい企圖が行はるゝものでもない、叮嚀、綿密、愛嬌、柔和といふものは心ばかりでは不可ない、眼も口も姿も柔和でなくては眞の柔和といふことは出來ない、女は此等を天然に得てゐる、男子は多年の研究で、習ひ得たお世辭である、態とらしい輕薄な愛嬌である、比較にはならない、學問の點も婦人は男子に負けてゐない、いかに混雜の場合といへども、婦人は役に立たないとは言ふことが出來ない、別段に婦人は男子より劣りはせぬ、優つてはゐぬかと思はれるのに、婦人の商賣といふもの、少しも振はない、擴張されない、或はいふ婦人は雇ひ期限が短かい、十八九には婚姻問題が興つて、肝腎の是からといふ場合に、持つて往かれてしまう、といつて良人を持つた日には、子供が出來て働きの半分は殺がれてしまう、まさかに子供を抱いて番頭とも手代ともなつてゐられまいとの事である、是あるかな、先づ此說が婦人の商賣を發達せしめぬ原因であらう、しかし婦人は必ず十八九に良人を持ち、必ず子供を産むとも極つて居らぬ、又たソレの

みでない二十や二十二三で良人を失ひ、再縁も求めず、商賣を求めてゐる婦人も、中々多いのである、かゝる境遇の婦人が商賣に從事せんとしても、大部分は男子の占領區域となつてゐて、手出が出來ない、是非なく内職的商賣に身を入れて、糊口を過すといふ丈で、一家を建て、商賣の店で自分の暖簾を繁昌の風に吹かさうといふのはない、男子は女にも出來る商賣にかぢりついて、利益の爭ひといつても、ホンの家々の人の懷中工合を、脹らましたり凋したりして、何の事はない、一定の金の百萬遍、千金の玉が來ると難有がつて頂いてゐるが、ぢきまた出て往つてしまうのである、これであるから婦人は純然たる商賣の路に出入するのは、まだ〳〵拾年貳拾年の月日を要するかも知れぬが、早晩婦人の勢力が翼を商賣世界に伸すといふとは、疑ふべからざるものと認める、夫には又一說があるのだ。

（四）女の試驗時代

物價は駸々として上騰する、生活の程度は勢ひ高價を拂はねばならぬ、人間必須の衣食住が、せり上げて來るから仕方がない、隨つて賃金とかいふものが、より多くを請求せねばならなくなる道理だ、此時に當つて男子は處世の困難を感じるけれど、女子は左程でない、賃金も安く働きもある、調寶のものと見做され、種々の業務に使用せられ、割合に及第するであらう商賣屋は言ふ迄もなく、受付とか應接とか、腕力を除きたる業務に向つては、多くの試驗をされて合格するに違ひない、是ぞ婦人と商賣との大道開けて、一大飛躍の演せらるゝ時であらう。

或は今日が其試驗時代で、譬へば二三の商店に女が用ゐられ、新聞社の如きも女子の二三人を迎へてゐる三井呉服店には女の電話掛が置いてある、吉沼時計店には女の見張人が置いてあつた、漸次各商店が試みるに違ひない、或商店の主人はかう言つて女の採用を賛成してゐる『給金の安いのは第一で、從順といふ點から、狡猾といふものも少くない、只だ手ぬるいといふ丈だが、ソレは他の點で補ふとが出來るし、家へ雇つ

た日には、男の小僧と違ひ、一升飯を喰ふ氣支もないから、白米が高くなつても安心だ、仕事は細かいから、商賣に依つては、必ずよいに違ひない、いかにせん今日の女は、一般に遍してゐるから困る、ソレは外でもない、店に使つて見やうと思ふ學問のある女と來たら、生意氣と高慢の混性兒で、何を置いても家内の者と衝突を起してしまう、といつて無學文盲では、役に立たない、コノ中庸を得た女の子がいかにも乏しい、ソレゆゑ採用するのに躊躇します』と。

婦人の缺點は茲に其一つを發見されたものと言つて差支へはない、拾年間の將來に於て、此缺點の消滅も望ましいものだ、尤も商店の方も改良が遂行されて、時間で雇ふ歐米風となつたなら、婦人の商賣も餘程爲よいであらう、早晩用ゐられなければならない婦人――否な婦人と商賣の路が漸々開けてゆくに就ては、苟も缺點と目指さるゝものを改めて、職業的、內職的のものと、三角同勢を取つたなら、婦人の勢力の大範圍は、獨立獨行の巷ともなる、婦人必ずしも男子の屈辱を受けるに及ばない。

しかし、しかし今日は微々たるものだ、試驗時代でもあらうから、婦人は鋭意熱心、其天才を發揮して、其占領區域を開げねばならぬ、萬一聲價を失墜したなら、再試驗の時期は滅多に來はせぬ、從來の婦人はこの運命にだも遭はで、地下に去つてしまつた、近來の婦人は尠くも好運を償してゐるから、思ふに將來の婦人は幸福といはねばならぬ、換言すれば從來の婦人は、子供を生む爲めの婦人であつて、良人に別れて後の商賣であつたが、近來の婦人は罷り間違つたら獨身で生活を立つて行うといふのと、一家を持たんが爲めの下拵へ、ソノ爲めの商賣である、將來に至つては獨立獨行、女權の爲めの商賣婦人を産むに至るであらう、而して日本の婦人の血統上、決して其等の氣象に乏しくない潮流の通じてゐる事も記臆せねばならぬ。

要するに婦人と商賣とは、增々發達するが、銀座街頭主人より雅人小僧に至るまでの女商店を見るは、抑も何れの日であらうぞ、何れの日であらうぞ。

流行

新年の髪飾帯留装飾品

あら玉の年立ちかへる朝とて、賀正の禮の往來より、歌留多遊びの會合まで、交際場裡の賑しきに付け、人は何れも其身のまはりの、装飾にこそ心遣はるべければ、いさゝか其れの栞にとも、例の池の端の美術舗玉寶堂に就きて聞き得たる、櫛、笄、簪より、さては帯留、指環、紙入等の、當世最も流行なる物を記載して、大方淑女の一粲に供せむか。

●櫛、笄　遠州形（以前利休形と稱されたる者）一般に用ゐられ居りて、先づ若向きの上等品には、黒鼈甲に、山水、芳野山、古代摸様（多くは樂器、地紙）等の金蒔繪を施したるものあれど、殊に近年は、八手及び紅葉の大摸様もの賣れ口宜しく、之れより稍々下りては、芝山の花摸様とて同じく黒鼈甲臺に靑貝を切り込みたるもの行はれ、其の大さは大抵二寸三分、厚さ二分、高さ一寸位なり、又年増向きには、黒鼈甲臺に研ぎ出し摸様の秋草、月摸様を始めとして、切金入れの地紙方及び古代の大摸様、又は其昔大内にて使ゐられたる、文箱、硯、短冊等の摸様あるものは、見るからに優美なるものなれば、是れまた流行にして、大さは横二寸、厚一分五厘、高さ九分程なり、尚は四十歳以上の向きには、矢張り黒鼈甲臺にて、鞘形、靑海浪、龜甲等の極り摸様、至つてジミなる拵へにて、横は一寸五六分、厚さ一分、高さ八分位の小形物流行し、笄は例に依つて、同様の蒔繪なり。

●簪　先づ束髪差しにては、金製眞珠入花形にて、其花片には眞珠を活込み、中央の蕋にはダイヤ、ルビ、サフワイヤ等の寶石を用ゐたる至つて高尚なる者及び、結び形と稱して、足の上部を好き程に結び、其の足の中程より眞珠を活け込み、又其の結びたる眞中には矢張寶石を用ゐたるものは同店に於て意匠を凝らしたるものなりとか謂へるに、當時束髪簪としては、貴

顯紳士の令夫人中これを用ゐざる者無き勢力なりと、又此の眞珠の活け込みなしに、結びの中に寶石を入れたるものも可成捌け口宜しく、其の他銀製にて、梅、櫻を始め春の好みの種々を彫り崩したるもの及び、赤銅四分一などを交へて種々の花形を彫刻したるもの一般の需用に適し、是れまた盛むに行はれ居れり、次に

▲平打物　は近來頓に旅行の聲を高め來り、先づ銀製の丸彫物假令へば梅に鶯、または梅の丸彫等及び白金を交へて波に千鳥の透し彫或は花の丸等尤も行はれ尚また、

▲玉付物　上等は金足、並等は銀臺に消しを用ゐたる足にて、玉は例に依りて、珊瑚、瑪瑙、堆朱、七寶及蒔繪の芝山等にて、形は殆んど松葉形と定まり居れり、

●根がけ　は玉物よりは、金物の方流行にして、先づ島田髷用には四分乃至は五分ほどの巾廣物行はれ、二十歳前後より二十五歳位には三分位の幅の物にて、何れも金臺にて彫崩しの菊または秋の七草より、梅、櫻、竹などの高彫物、三十歳以上四十格好の向には、針金の如き細き結びものにて、上等は金と白金との兩種を用ゐたるもの。

●帶止め　金具は金製にて七寶入り、又は眞珠細工の物にて、菊、牡丹、露芝の透し彫り、眞珠入り波の彫、ダイヤ入り一輪菊及び眞珠も七寶を用ひたる葡萄等尤も能く行はれ、紐はつゞれ織にて花摸樣の織り出し、繻珍の綾織朱鹽瀨に縫取り等を始め、並物には緞子、風通等あり。すべて其の年輩は此の紐の色合より區別せらるゝものなれば、先づ若き年頃の者には、紫紺地、藤紫、鶸色などを貴ばるゝに、別けて金入七寶の金具に、朱鹽瀨へ縫取りの紐を用たるもの當節は大に流行なり、又年稍々長けたる者には、鐵色、黑地紺地等似合はしく、殊に露芝、波に千鳥などの金具には、黑地の花摸樣の紐は、如何にも配合宜しければ、是れまた勢力ある流行なり、

●指環　は昨年の春頃より、寶石入り細腕のもの流行を極め、ダイヤ、サフワイヤ、ルビー、オーパール、

眞珠等の寶石が、指の上に置かれたる様なるを好しとして、當時尤も賣口宜しきは、縄の如くに捻り合したる極く細き腕に寶石を用ひたる者なり。

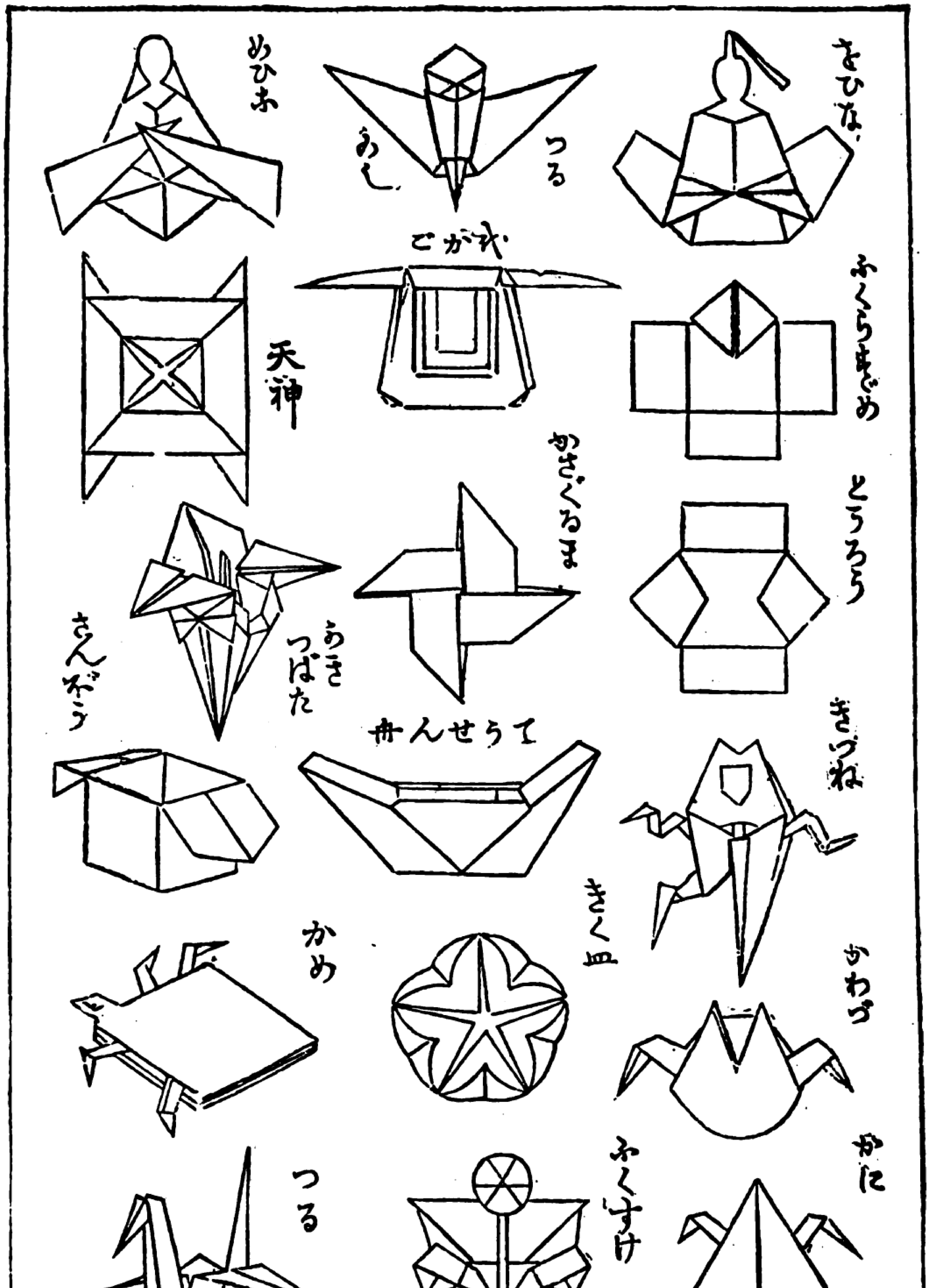
●紙入れ　は縫取、花鳥、山水、唐花等の優美なるものを始めとして、繻珍及び鹽瀬、友染、其の他朱鹽瀬に花摸様のバラ縫等流行なるに次で、繻珍又は古代切れを用ゐたる並物また能く行はれ居れるが、是れ等は概して派手なる好みなれば、裏にも朱鹽瀬、藤色、鶸色、桃色、海老色等を用ゐ居れり、又

●袱紗附紙入　は、同店の新意匠なりとて、恰かも紙入を袱紗に包みたるものゝ如く、袱紗の表は室町好みの織物を用ゐて、裏には鹽瀬織を用ゐ、其れに繻珍其の他の織物にて造りたる紙入を取り付けたるものにて、持ち主の望みに任せて、其の紋所を袱紗に縫ひ出すなど、中々工夫を凝らしたる物なれば、大に世上の人氣に叶ひ、これまた今は流行品の中に加はるに到れり、其の他千代田袋、三保袋等相變らず行はれ居れるが、茲に

●福袋　とて、古判形薄仕立にて、大さは直徑五寸五分位、手提げ用の新製品にて、まはりに通し襠を用ゐ、切地は金入繻珍、又は縫取、朱の鹽瀬に種々の摸様を畫きたるものを用ゐ、其の口金は金梨子地の高尚なる拵へなれば、去る頃畏き邊りの御買ひ上げ品となりたる程なれば、近來世に持て囃されて、評判殊に宜しといへり。

▲大和の雜煑　花の名所、大和吉野の雜煑を知らせ申上候。抑も雜煑とは種々のものを雜へ煑る故に雜煑といふ、單に菜のみを入れて雜煑と命名する國ある由なれどこれ大なる誤に候、予の家にては先づ大根、蒟蒻、豆腐の短册形に切りたるもの及びずいき芋(里芋の事)の輪切り、さゝがし牛蒡等を餅とゝもにすまし汁にて煑るものなるが、大根、蒟蒻、里芋、牛蒡は前日に茹で置くなり、(但し味噌汁を用ゆるともあり、扨食する時にはきな粉(豆の粉)を名々の小皿に入れ餅は必ずこの豆の粉に附けて喰ふが常なるが、椀の中に極上等の昆布の小片を敷き幾度お替りをするも昆布だけは殘し置きて昆布の風味の自然汁に移るを賞味すこれ他國に無き事に候

折紙十八種


めひな
おし
つる
おひな
天神
ふくらすゞめ
かざぐるま
とうろう
さんぼう
かきつばた
てうせん舟
きつね
かめ
きく皿
かわづ
つる
ふくすけ
かに

才媛詞藻

佐々木信綱先生撰

（天） 山家雪　　新潟　吉田梅子

おもはすも語りすこして隣より
　　かへる坂みち雪はつもりぬ

評　山家さいはて山家を思はせたるおもしろきいひざま

（地） 鞠　　下總　外河花子

手鞠歌うたひ遊へる少女らの
　　かへりてさひし夕暮の雨

評　可憐の体

（人） 春曙　　薫子

わさはらけ薄むらさきの中そらに
　　春なはさむき雪のふしのね

評　詩有二畫本さ。やいひつべき畫の如き趣捉へ得てよし

秀逸

鞠　　神戸　青木京子
音たゑて右近の馬場はたそかれぬ蹴鞠の遊いまはてぬらむ

鞠　　[illegible]野　小林淑子
妹がありしかたみのこのてまりつく人も無き家ぞ淋しき

山家雪　　大村　峯田ふみ子
みちのくの吹雪の中にもだゑけん兄君思ふ山里の雪

山家雪　　千葉　小出波子
ふりいでぬまたふりいでぬこの夕さむさやいかに杣人の小や

春曙　　大阪　井上貞子
かなりやに餌をかふ人のうつくしく棒かなる國に朝日てりそふ

鞠　　長門　今藤欽子
今は亡き妹の手箱開き見れば愛でしかたみの鞠一つ出てぬ

山家雪　　信濃　竹鼻はる子
兄君をみやこにやりて母とふたり学をつむぐなり雪の山里

鞠　　山城　野口ふぢ
紅の長き袂の地にひくもしらで少女のまりつきかはす

鞠　　大阪　田島匡子
いくつれば春は来ると母君にとひし昔のまりよこの鞠

鞠　　佐賀　石井やす子
鞠の手をしばし止めて少女子も耳傾けぬ鶯の音に

春曙　　佐賀　江口さく子
牛飼の姿はみえで鈴の音の霞に響く春のあけぼの

春曙　神戸　水谷須磨
立ちこむる霞のたくに小鳥なきほがら〳〵さ夜は明けむとす
まり　青森　住の江かをる
紅梅の花ちりかゝる南椽稚兒髻ふたり鞠つきてあり
まり　三河　落ねふ子
妹が置き忘れけんまり一つ日あたる椽の隅にのこれる
春曙　紀伊　郭雪子
糸櫻なびく許の風もなしおぼろ月夜のあけぼのゝ庭
春曙　甲斐　無名女
ほの〳〵さ明け行く春の月ふみて今を門出の我子幸あれ
山家雪　小石川　村岡節
榾焚いて雪の一夜を語りけり十年見ざりし乳母が山家に
鞠　牛込　山田靜枝
まりもちて遊びし頃はよの人も更にさがめぬ二人なりけり
山家雪　下總　志眞由利子
思ひくし出入る門にかへるせのまごうたさゆる雪の山道
春曙　信州　山崎はるゐ子
鶯の聲のひまより明けぬらむ籬の梅の色ぞ見えゆく
春曙　別所　二葉小糸子
佐保姫の袖引きさめて春の歌聞かばやさ思ふ櫻ちる朝
山家雪　和歌山　橋本しげ
埋れぬは煙ばかりさなり果てゝ木こりもさはぬ峰の一つ家
山家の雪　仙臺　福原菊子
里に出でし夫は歸らで雪は降りて夜半に狐の庵近く鳴く
鞠　東京　鈴木直子
門松にかゝりしまりをさらむさて爭もてさわぐをさなごのむれ
山家雪　紀伊　前山すみな
峯の寺に今日も入相のかれなりて今日もくれゆく雪の山里
鞠　佐賀　江口そで子
こその春母にもらひて樂しけにつきにしまりはかたみさなりぬ
鞠　東京　長谷川まろ子
愛らしき主はれふりて花衣のそでよりまろぶ麻のはのまり

佳調

春曙　鹿兒島　雲の嶺子
夜もすがら歌やよみけん旅僧の霞のうちに濕れて佇む
山家雪　備中　大野悦
夕されはさふ人もなき我かごの板の月たゝく花の白雪
山家雪　薩摩　宮里哲子
親も子も表座敷に打ち集ひて濁酒に醉ふ雪の夕哉
山家雪　豐前　伊東けい子
都へもさねまさるらん山里の梢にかろきけさの初雪
山家雪　河内　大矢たれ子
豆腐買ひてかへる童の見ゐぬまで吹雪するなり山里の暮
鞠　河内　大矢たれ子
しらず〳〵まりつくなかにまじりけり心はおなじ少女子にして
冬山月　佐賀　大濱藤子
さはるべき紅葉はかぜにさそはれて山あらはにも月そさゐゆく
新年海　對馬　桂匂女史

ゆふべ泣荒れにし風のかげきゐて年たつ今朝の海の静けさ

春曙　名古屋　松本峰子

目覚むれば掛樋の水の音さへていざ静かなる春の曙

新年梅　佐賀　大隈藤子

来る春の霞のころも打重れ朝日にほひて梅咲にけり

鞠　佐賀　藤崎結

三つ四つさ後先分ぬ稚子がまりつくなりの面白きかな

春曙　肥前　馬場きな

うくひすにゆめやぶられて立ちいづればいさものごけき春の曙

山家雪　肥前　馬場きな

向ひなるみ山の里の庵につむ雪こそ冬の眺めなりけれ

山家雪　牛込　富永のり子

くまかりに出でし我が背子かへりこず石狩やまの雪の夕ぐれ

鞠　埼玉　加藤貞子

憐れにもあの世たどりつ我妹は残して行きし此の手鞠哉

鞠　東京　近藤きそ

門松に追羽子をいて少女子ら春をもしろく鞠もてあそぶ

春曙　下総　白ゆり

きぶすなく聲もかすみてほのぼのさ花にあけゆく春の山里

鞠　大阪　守井章子

お土産にはかならず鞠よさ背なぜていはれし母のかへりまだるゝ

山家雪　常陸　三好たけ子

植か家の軒は木の間に見ねながらみちふみまよふ今朝の白雪

山家雪　牛込　山田静枝

積の雪うちはらひつゝ賤が家に一夜のやどをこふ夕かな

春曙　信州　市村さくよ

あし火たく煙り遙かに難波がたうらなみ霞む春のあけぼの

春曙　信濃　山崎さこん子

花に酔ふ都の人の夢の中を牛追ふて出ろ春の曙

春曙　長野　山崎りん子

ありあけの月は櫻にうつろひて馬子唄遠し追分の原

春曙　上野　三原花子

野の寺の鐘の響のさね渡り霞晴れ行く春の曙

春曙　常陸　三好たけ子

やまさきは霞をこめて昨日けふはなよりしらむ東雲の空

山家雪　秋田　笹たか子

玉ぼこの道さへ雪にうつもれて問ふ人もなし山の一つ家

鞠　廣島　小田つる子

六年ぶり乙女心に鞠つけば君笑みましぬ我手たゆたふ

山家雪　信洲　市村うない

今朝見れば野にも山にもおしなべて都に知らぬ雪の花さく

春曙　河内　辻本清子

浴をへて温泉の家を立出てつ曙匂ふ白梅をみろ

鞠　東京　まつ子

なき妹が事をにはかに思ひ出でつき居しまりは早ころひけり

鞠　東京　白菊

寝ざめにも思ひ出してはまりつくさ言ひし妹今や何處に

鞠　薫子

つきはづしまろふてまりをいち早くねしよりさきに猫のひろへろ

鞠　本郷　みね子

はけめ子等打たれ〳〵て挽ゆまさる鞠の姿なかゝみにけして

春曙　長門　梅田せい

打霞む松の林はくらくしてひさり明けゆく花の色かな

山家雪　東京　保谷いれ子

月花に訪ひ來し友の跡絶ゑて獨りなかむる峯の白雪

山家雪　弘前　平山ちい

霽あけ來ありいざやわが友よ我が住む山の雪をみにこよ

春曙　埼玉　林若葉

夜をのこす鐘に殘月かたむきて梅か香清きあけぼのゝ空

鞠　和歌山　三尾摩佐子

蝶はきに亡き妹のつきし鞠出てまたも涙に袖ぬらしけり

春曙　和歌山　三尾摩佐子

遠山の花も柳もかすみけりうすくいろどる春のあけぼの

鞠　埼玉　林若葉

今年十逝すありせは鞠つきて遊べる群に入るべきものを

春曙　越後　花野てふ子

さくらさく霞の間より見渡せばあはれも深し曙の山

山家雪　和歌山　三尾摩佐子

降るまゝに跡さてはらふ人はなしあたりましろき山里の雪

春曙　和歌山　森澤つゆ子

錦なす花もやなきもうちかすみうす紫のあけぼのゝそら

鞠　岩代　海野初子

すや〳〵と眠むる妹の枕邊に小猫手鞠に狂ふをかしさ

山家雪　神戸　中村きく子

跡さりて君訪ひましれ山里は兎が衣の白雪ぞふる

春曙　東京　飯塚いれ子

滊車は遠く霞のうちをすぎゆきて松原しらみ夜はあけんさす

鞠　和歌山　山本美子

必ずよかれての鞠を忘るなさ背子が門出に幼子のいふ

春曙　和歌山　藤田美子

鶯のねぐらはなるゝ聲すなり花のこずゑやしらみそめけん

鞠　東京　指宿滿子

煤けたる丸行燈の影闇くふくろ手鞠になさけ縫ひ込む

山家雪　紀伊　橋本はな子

いつのまに雪ふりにけむ朝ぼらけ見渡す限りしろかれの里

春曙　伊勢　岸田春子

明石がたほの〳〵霞む明方は繪によく似たり淡路島山

鞠　愛知　政子

姉君の送り給ひしまり持ちて來ん初春に友さ遊はん

春曙　尾張　つた子

にはさりの聲も長閑にきこゆなり梅の花ちる春のあけぼの

春曙　大垣　中村益子

鶯の飛ひつ歌ひつゝたひ行く梅の梢に旭さす見ゆ

春曙　肥後　森田しげ子

野も山もかはらさりけり故さとのゝさけき春の曙のそら

山家雪　赤坂　闘隆子

ほたくべてちゞが昔のものがたり雪にくれゆく山かげの里

山家雪　下谷　みき子

今朝みれば水くむ道もたえにけり昨日の雪のつもり〳〵て

鞠　淡路　横野美好子

十まてを數へかれつゝうなゐ子の手鞠つく手の美しきかな
鞠　　弘前　今ちか女
失せし子の用ゐし手鞠見いだして思出多き煤はらひかな
春曙　　小石川　村岡すゑ子
霞立つ桃の林を牛飼ひの笛の音聞ゆ春の曙
山家雪　　小石川　村岡すゑ子
神います峯の紅葉に雪ふりて瀧の小茶屋の繪の如き見ゆ
山家雪　　小石川　村岡つる子
雪の夜を語り明して情盡きぬ友温めん鉢の木もがな
鞠　　小石川　村岡つる子
乙女子の鞠に小猫の戯れて庭に小春の日のあたゝかき
鞠　　下總　石橋たか
高ごのゝあうむさゝやく日は長閑隣の庭にまりつける見ゆ
山家雪　　東京　後藤よし
妹さ鳥に餌かいて遊ばまし外出叶はぬ山里の雪
春曙　　芝　篤子
うぐひすの枝うつりする羽音さへ聞ゆる嬉し春のあけぼの
山家の雪　　佐賀　大塚つる子
雪の日や妻子諸共集び合ひて柴折りくべつ外面ながむる
山家雪　　山口　佐伯鶴子
賤か家の藁わらうつ音さへて軒端ましろに雪ふゞきする
山家雪　　東京　りう子
柴の戸はふりふむ雪に埋もれて今はきこりのうたも聞えす
山家雪　　備中　西政代子
今朝見れは掻き散らされし門の雪に凄く殘れる狼の跡

鞠　　和歌山　前山すみ子
亡き子にもさめておきし手鞠をば隣れの子にやる年の暮れかな
春曙　　和歌山　谷井清子
咲きにほふ花の梢にぬる蝶もゆめやのこせる春のあけぼの
鞠　　東京　鈴木紫雲
まりつきてあそぶを見れはそゞろにてふりわけがみの昔こひしき
春曙　　京都　今村みき子
狩人の霞がくれて吹く笛に雉子啼き寄る春の曙
春曙　　京都　村井澄江
いつこにか雲雀のこゑはきこゆれさすかたは見えぬはるのあけぼの
夕千鳥　　佐賀　大限藤子
水鳥の加茂のはら風をいたみ夕なみ千鳥うらふれてなく
春曙　　河内　金谷倭文子
いひいてん音の葉もなし咲きつゝく花よりしらむあけぼのゝ春
山家雪　　大阪　酒井美代子
兎うちてかへり來まさんわかせこの笠になちりそ春のあは雪
山家雪　　河内　金谷倭文子
たきゝをる夫は何處にさけつらんやますふりくるこの大雪を
まり　　麹町　廣瀬うの子
少女子がかへでの如き手をなして乳母におしふるまりつきのわざ
山家雪　　本郷　入江まつ
吾門のしるしにたてる杉の木も雪に見わかぬ冬の山里
春曙　　神田　杉雅子
よべ讀みし枕の草紙そのまゝに白くなりゆく春の曙
山家雪　　埼玉　大亦たか子

松風も谷の流れもうづもれて滿山白したゞ梭の音

春曙　埼玉　大赤隆子

梅か香のつまづきこぼきて鶯のなく聲ながし春のあけぼの

春の曙　香川月子

佐保姫の化粧の時間か曉きのかすみのとばりしばし開かぬ

山家雪　佐賀もみぢ

山里は浮世にまよう道たねてふかくもつもるくさの白雪

山家雪　美濃　高木庭子

山里は何所も見へずをとつ日も昨日も雪のふれゝば

春曙　なでしこ

花やあらぬ霞のにほひ春こめてそうび色なる野のあさぼらけ

春曙　河内　宮田好子

有明の月の光はをさまりて花よりしらむ春の曙

鞠　大村　大村よれ子

幼兒の背負はれながらひふみよとまはらぬ舌に鞠かぞへつゝ

山家雪　神戸　水谷須磨

こりつみし薪しめりて爐のあたり心さびしき雪の夜半かな

山家雪　つた子

芽たてとつほみはかたきうら山の峰のはやしに雪そつもれる

山家雪　河内　櫻井佐治子

濁酒に寒さ忘れて妻子呼ひて猪狩かたる雪の夜半かな

山家雪　河内　櫻岡喜志子

黄昏を又も吹雪の猪狩に入りしわか背子まさきくいませや

紅葉　津市　中島みき子

ますらをが笑みて別れし跡問へば秋風さむく紅葉散るなり

山家の雪　香川月子

滑くべて雪に迷ひし客人の語るを聞けば又涙あり

鞠　福島　小林みむ

少女子かゝなつるごとの音たねてひふみよ五つの手まり歌きこゆ

鞠　東京　みよ

黒髪もかせにまかせていぬの子と手まりとりあいふさほしのこら

山家雪　大坂

まばらなる木曾の山路の賤が家をひとつにつゝむ白たへの雪

山家雪　靜岡　宮城きん

猪狩に行きし弟を思ふかな空かきくもり又雪のふる

鞠　靜岡　宮城きん

姉君が歸り來ませりいざやとててまり持出す末の妹

山家雪　今村竹子

心ある人に見せばや雪にあけ雪にくれゆく山の景色を

鞠　神戸　荒川ゑい

あたゝかき日を背にうけて手鞠つくふしおもしろし少女子のむれ

春曙　越後　前崎照子

上野をばかすみと共にたちいでし昔こひしき春のあけぼの

山家雪　越後　前崎照子

けがれなき此山里の人心そのまゝうつす峯の白雪

鞠　伊勢　中村三重子

鞠なげて今日も暮しぬ亦あすも其また翌日も鞠に遊ばむ

山家雪　伊勢　中田傳

薪焚きてあたる爐無備鬢白し宇治の山家の雪の夕くれ

山家雪　河内　竹安眞子

女學世界懸賞和歌兼題

野梅　眺望　鬼

（〆切一月十五日）
（披露二月五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

女學世界懸賞文

▲家庭日記（二十四字詰四十行限）
▲新體詩（三十句限）
▲雜文（二十四字詰四十行限）

◎〆切　一月二十日
◎披露　二月五日
◎賞品　以上三種中より甲、乙、丙秀逸を選び十五名に呈す

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴ろべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛させらろべし▲投書原稿一切返却せず

丙賞

新年の感

冬野みゆき子

改まりたるみどりの空は匂やかに、立て渡したる門松の梢に新年は聲をあげぬ。朝より机に肱して、一卷のハイネ詩集を友とせし我、漸く書に倦みたり。更に紙のぶれ共句の興湧かず、頬と手を火鉢にかざし徐に思ふいにし十四歳の此頃は、東都に物し文藻豊かなりし師の君と、ストーブ圍みて納言が角なき肩のわたりかきなで、歌案じ給ひし昔を忍び、君があはれなる身の上語りに、噫我や幾その涙そゝぎたりけむ。翌年は一友とデヸットスワンを讀みて彼が泉の側に安眠の、短き時のまに起りし富や戀のまぼろしに、禍福はあざなへる縄の、それにも似たるよと語り合ひしが、今や二人なき其友と天涯遙に別れ住みて、互に孤獨の生を送る事の悲しさよ。一昨年の此頃は日の次第に、長からんとする如く正義の光明を伸長し、世を厭へる人、戀に惱める人、失望に沈みし人に情と涙をもて、心の慰を與へんと思ひ定めてき。こぞは理想の凡をすて、運命

の犧牲となるべき不幸に泣きて、宇宙を觀じ自然を窺ひ、人生の祕奧を辿り綺々たる詩美を愛するの身とならん事を希ひぬ〻今年の春の我やいかに。試に南窓の早梅一枝手折りて、吹く風に吉凶をトせんか

甲賞

めでたきもの

伊勢國宇治中之切町　河原芳子

あら玉の年たちかへるあしたは更なり、千代の松竹飾り渡じてみ國の榮えてとほがむ頃は、見るにつけ聞くにつけ皆喜びの色音ならぬはなく、平和の姿を粧はぬはなきめでたさ。ましてをさなきもの丶書初めにとて、畏きわたりより仰出されたる御題の文字などいとおうらかに認めたるは折にあひていとめでたしゝやむごとなききわのみとし未だ若うおはしますが、みどりの黒髮惜氣もなう剃りておちて、亡君の冥福を



祈りますと聞えはべるが、氣高う匂ひ出でたる紅梅の一枝を閼伽桶にそへて、み心清ういでたゝしたる姿何にたへむ。敷島の侯心にたぐへられたる山櫻の眩ゆき旭に匂ひてほれたる。由ありげなる家のたゝずまゐまづ美ましうおぼえらるゝに古き雛の調度何くれとなう秘め飾りて節句の儀式おごそかに仕ふまつられたる。菖蒲の時はまた一入にていみじうめでたくてそはべれ。月あかきに夜に笛の冴えたる、芒の奥ならむには昔の事共思浮ばれて袖におき添ふは露の玉のみかは。行啓のあと名殘惜しげに、峯の紅葉の夕日に榮えたる。觀兵式に大君の臨まれたる、言ひしらずめでたくなむ。あかとき近きみ神樂の音はいはずもあれ。ゆくりなく雪のつもれる、鉾杉の梢ま白に木綿かけたらむやうなるは神わざの程仰ぎまつりていとたふとし。御歌所の撰還にあづかりし人。孝悌のの譽れ天聽に達したるに、

長きみ言葉の傳へられたる。忠勇の聞えある軍人。いづれも〳〵言はむ方なくめでたきに。分捕事件など忌はしき醜聞の世にひろごりたるは、日本武士の名譽を損して口惜しとも口惜しうなむ。三夫婦揃ひたる長者。白木の辛櫃。

乙賞

我庭園

桂子

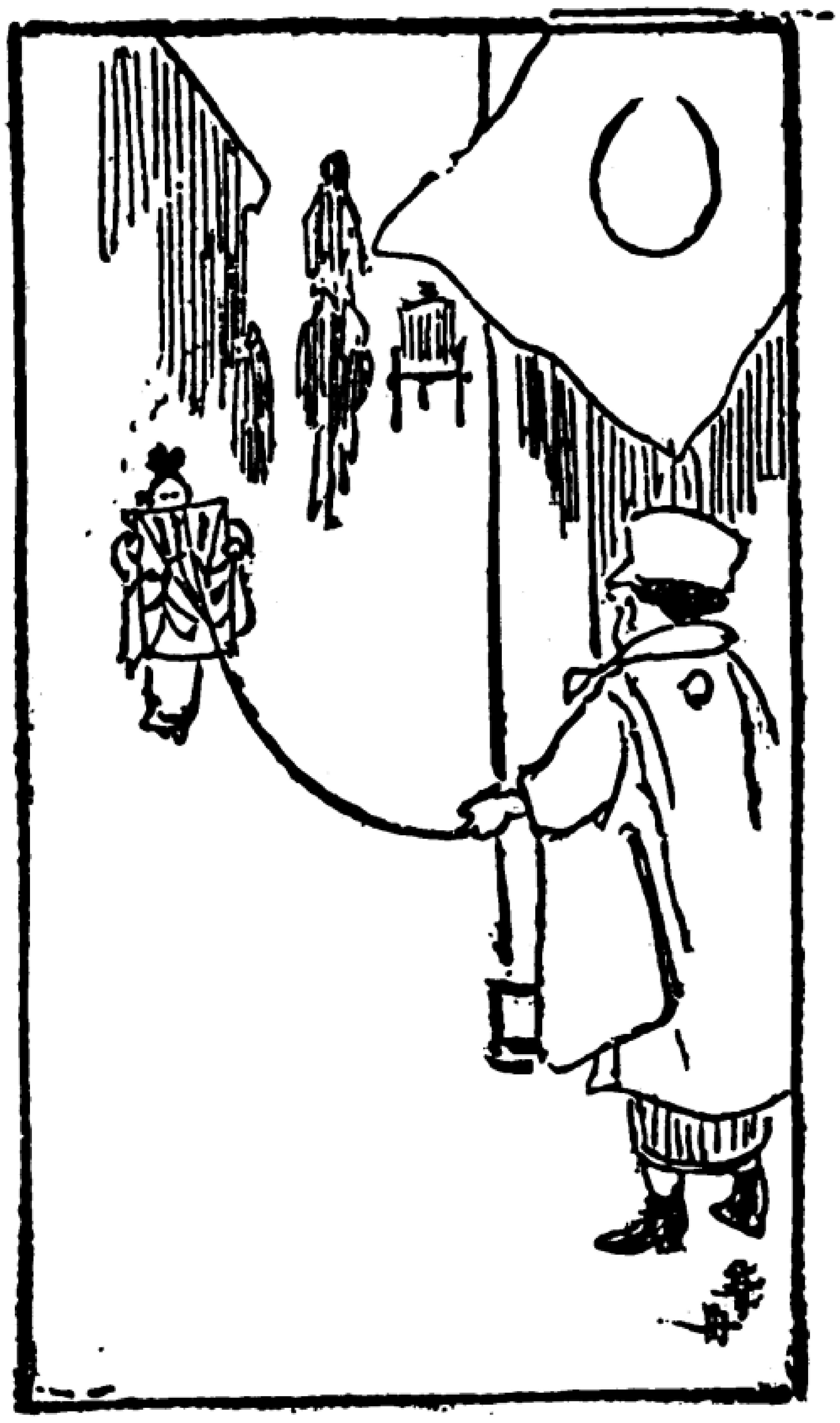
貴きをいへば三坪許り黄金をかけて移し植ゐし名木もなければ黯々はこびたる珍らしき石もなしされど父なく母なき我淋しき朝夕を世の人はかへり見もせぬ貧しき我をいつもやさしき笑顔もてなぐさめくるゝものはげにこの狭き庭のみなるよ

苔むしたる石の水鉢の傍に生ひたるもみぢ葉を夜の間の霜の染むるにやはた朝毎の霜の色づくるにや日毎に色そひて昨日けふはや美はしう紅葉夕日にてりそひたる景色ゐもいはれず殊にこは亡き父上の手づから植ゐてめで玉ひしものなれば嵐山高雄のそれにもましてなつかしけれ

ふりつむ雪かさ紛ふまで眞白に咲きたる籬の菊の艶なる姿はなけれども時にもしろき高き雪はあるものをもし時めき玉ふあて人の廣く美はしきみ園の邊に咲きいでもせばいか計りもてはやされんなかゝる賤の伏屋の庭に匂ひて清き姿たかき香を人にも知られず徒にうつろひ果つるかさ思へば中々にあはれなり

夏は蟬の住家なる太き松のをかしうくねりたる影に山茶花の三つ四つ淡紅に匂ひいでたる何さなう氣だかしあはれなつかしき庭よ我ための

無二の友よさこしへに我をすてざれいつまでも淋しき身をなぐさめてよさいひつゝ眺むる折しも吹きくる風に芭蕉の葉の二度三たび動きぬ恰も我言をきゝ分けてうなづくが如くに



秀逸

雪だるま

伊勢山田吹上町　佐久目雪江子

雪のあしたの庭のけしきやいかにさ、おき出でゝ障なかゝげ見れば、われより先に弟は起き出でゝ、築山の松の枝をふるひ、おき石の上れるをもかきさらひ、殘の雪は木履の泥に踩みにじられてけり、あはれ心なくもしてけるかなさ、つぶやく折しも弟はしたり顔に馳せ來り、姉上見給

へ窓の下に雪達摩をぞ造りゐると、手に息かけてせはしく云ふ。
弟よ窓のは近く來よ、われ汝に敎へん、げに汝の造れる大師の姿よくこそ出來たれ、温しき容して、笑はず怒らず、畏れず恨まず、喜ぶ姿もなければ、悲む色も見ゑず、身は罪障にたとひて消ゑ行くを待つか、生涯の望は只無言の業、心を靜めて道を行はんとするか、聖の數にも口は鶍のもとゝぞ云はれける、今また淋しき窓の下にありて足れりとす、其心の氣高さよ、あはれ世の口ぎたなき人々も、利に走るともがらも、この姿を學はゞ、得る所多かりなんと、弟よいしくも造りたるよな、倚姿が說く所をさとりつるか。
折しも朝日影靜かに照りそひて、大師の姿はあとなく消ゑうせぬ、あはれはかなのさまや。

美人浴後の圖に

みゆ子

春雨の雫にうるほひてこそ花も景色もひときはにゝほひこぼるれ、國をほろぼし城をかたぶけむほどの美人も浴後の姿こそまたなくあはれなれ、みどりの髮はぬれ色滴る許にていよゝつや〳〵しく髮のほつれげ二筋三筋、そよふく風に吹かれつ、眉は春の遠山をすりなしたらんごとく、まなこは淸らにゑみこぼれて愛敬よく、口つきは紅さゝれどくれなゐにほひてめでたく、色はさくらの花の露をふくみたるやうにて、姿は柳のいとのたわやかなり、涼みせんとにや襟などうちひろげたるを、浴衣のうすければ膩つきたる白き膚のいとあらはなり、帶はせで下紐かろく結びつくろるも打解けむほどにてなまめかしきかぎりなりけりあはれ鶯の初音よりゆかしくものいはゞくろがねますらをの心もうごきて國をほろぼし城をかたぶけんともあるべきに、ゑがける姿の只うつくしさ見るのみなるぞ心やすき。



初冬

東京神田仲猿樂町　佐々木和子

花やかなりし紅葉はゝや名殘なう散りはてゝ寒風すさび秋くれぬ羅綾の袂しとやかに粧ひし一むら尾花あやしうもうらがれて向ひの雜木林の梢あらはる冬のすがたものすごし枯鵙しきりに鳴きて容痩せたる山かすかに小川の流かれがれなり
日は落ちて夕映赤うたゞよへるあたりうすぐろき雲のむらがり恰も墨繪の松のごと世は次第に夜の暮黑う蔽はれて空には星かげまたゝけりやがて月雲を破りて東天に出でぬ老女の粧ふてふ冬の月のものすさまじさよ紅徽殿の細どのにておぼろ月夜にしくものぞなきとたゝへられし春の月のやさしき姿今いづこにかある劒のごときらめきて行人の襟を吹き巷にさむき影を印す、四邊寂として北斗燦たり犬の遠吠かすかに風一わたり梢を吹きて雪ならば幾度袖を拂はまし片ゝとして散る落葉月にきらめきて顧ゝ聲

あり

愛鶯

名古屋　奥島ひで子

一羽の鶯はかゝりぬ。

庭のしげみにしつらへ置きたる落し籠に、人馴れねば、籠の中を處ならばす隅より隅に、あわたゞしう飛び廻ぐる。われは蜘蛛をさりて與ふれど、啄ばんともせず。唯人の近よれるに、恐怖を抱けるが如し。夕ぐれに、生餌の少しばかりを、青菜の汁にてねり與へつ。

かくして其日も暮れぬ。家の人は、翌る朝までの命保たんは六ヶ敷かるべし、今夜の中に必ず死して居らんずなど、のゝしりあへり、幼き妹まで人まれにかくは言ひにき。

われ獨り、さならず、翌朝は必ず心地よく籠の中を飛び居るなるべし、と言へり。もとよりそは負け惜しみなりしなり。心にはいたう危ぶばまれける

翌る朝になりぬ。かの鶯やいかになしつらんと、われは早く起き出で見れば、いと壯健やなりき、餌にさへ三處四處嘴の跡を印したり。其うれしさよ！。

その日より、われだ一つの日課を加へぬ。餌飼ひすべく、籠の掃除すべく。

朝毎には狭き裏庭に出て、未だ霜白くおける、青菜を摘みて餌を與へ、



窓の暖かきには、彼處の山茶花、此處の櫻樹と日當りよきを選みて、籠をつるしやりつ。籠桶の障子戸には、つたなきながらにわれ紅梅の一枝を畫きぬ。鶯に梅の配合は、平凡なり、陳腐なり、と兄上笑ひ給ふ。

十日二十日とふり行くまゝに、鶯は能く馴れて、いつしかわが貌も見知りたらんやうなり。さ夜更くるまで燈火をかけてやりぬ。

この頃はわが室に飼ひて、こよなき友といつくしめり。

きのふ初音もらしぬ。そはまだかた言なるよ。—戀知りそめし乙女子の、うら耻かしき口つきにも似て。今日もまた、三聲……。

うらゝかなる春の日の匂はん時、春の神のみ使ひたる鶯は、吾室に此世にふさはぬけ高き、美妙なる調もて謠ひ出づべし。窓に倚りて書よむわれ、また天つ乙女の如からんか。

やなぎかげ

高知　竹村露子

吹き荒ぶ木枯は破れ戸をもれて、ほの暗く兄上の御枕元を照せし燈火を、今や呑み去らむとす。愛らしく眠れる妹の顔つく〴〵見れば、げに大人びたるものかななつかしくこひしき父上、いかなれば我等はらからを此世にのこして、黄泉には旅立ち給ひし、父上のおはさばいかでかゝるかなしき〳〵運命に泣く身ともならざりし物を。

いつも母上のくり言の如く、昨日の淵は今日の瀬とかはるは浮世の常とのたまひぬ。あゝ今かゝる身とならむとは夢にだに知る由なく、樂しき

家庭にそだち、十四の春暖かき父母の膝下をはなれて、都に教草つむ身となりぬ。一日も早く學のわざを終へて、父母の君の御恩の片端にむくひまつらむと、ひたすら勉め勵みしが、虫の音もたゆく〳〵に蕭葉雨の如き夕、いとも悲しき電報こそ來にけれ、あはれ片時もわするゝひまなきいとしの父上の、病氣おもくとの知らせ、あゝ今思ひても泉とわき出る紅涙點々として、膝に落ちぬ。

一瞬千里の汽車のあゆみも牛のあゆみのそれよりも、おそく思はれて、胸のみ打さわぎ、我家にかけ入りし時は、あゝおそかりき〳〵、はや父上は葉末の露よりもろく消え給ひしあとなりき。

いかになげかばとて、歸り來まさぬ物をと、我と我心を勵まして、のこり給へる母上にあらむ限り孝養盡さんとて、女學校を退きて家政をつとめ、今迄春風みち〳〵たりし我家も、俄にこがらしのおそひ來りて、さびしき〳〵月日を過しぬ、母上は日頃の憂のつもりてにや、頭重しとて打臥し給ひしが、日々に重りゆきて途には、愛らしき兄妹をもふりすてゝ、父上と同じ道をたどりましぬ。一人ならず二人まで歸らぬ旅にゆかせられて、松にはなれし蔦のそれにも似て。兄上は曉方より後の山に薪をこり、我はそを町に出して、わづかに細き烟をたてゐたりしに、流るゝ月日は關守なくはや二年を過しぬ。日々の御つかれかまゆの間には、憂の雲はあり〳〵とよまれて、折々はくるしげなる息さへ洩らさせ給ふはいかなる夢路かたどりておはすらむ、うすふすま一枚をこよなきたまものと喜び給ふ御心、げに御いたはしの極みなれや、爺の代に賣りはらひし物數知らず、のこりしはたゞ重先より傳はりし正宗の刀のみなるを、折しも松風の音に和して鳴くや千鳥の二聲三聲。



友の子まうけたまへる許へ

長門　植村梢子

年改まりて寒さもいやましぬ我がなつかしの君にはいと麗はしうおはし玉ふと秋子の君よりも承り常々おん噂せる折から去にし三日にはいよ〳〵玉の様なる男の御子を安らかに擧げさせたまへるよし目出度き事の限りになむ御兩親の御悦びは更にて武雄樣の御悦びは如何ばかりなりしか是こそいや榮ゆにさかゆゆくおん先と思ゆれ御子樣はいかなるお姿にてお名は何と申すにやなどさま〳〵に思ひやられ遂に御伺致し度きは山々など日々に客など多くて忙はしく心に任せれば文もて御喜び申上げぬ

此品は昨年より其折りにとて調へ置きたる產衣二着たゞ心許りのしるしとして持たせたれば納めたまへかしよし子も大悦びにて「姉さん早く上田さんとこへ行きませうね」など云ひ居れば御邪魔とは思へどよし子を連れてお伺ひ申さむまづはさりあへずおん祝ひまでに、

都の友に

桂子

四季折々にうつりかはる景色を面白しさながむるもはた淋しさかこつも皆その人々の心がらに候よ此ほど打たゆ音づれ玉はぬは又々例のやまひおこし玉ひて日れもすこもり居たまふにやあらん

都はしらず田舍は秋こそ面白く候へ四方の山々は立田姫の織りなせる紅葉の錦をきかざり小鳥は友よびかはしつゝたのしげに歌へるさま花さく春にもいかで〳〵劣り申すべき稻の香たかき野邊には君の好み玉へる野菊のはや笑かたむけて待てるものを妹樣すゝめて是非是非思ひたち玉へ去年のごと唱歌うたひつゝ落栗をや拾ひ候はん何も〳〵其折にいひのこしてかしこ

我家

和泉　井上富子

あゝ樂しきかな我家、あゝ幸多きかな我一族、何をか幸さはいふ、位高きか、あらず位高ければこれにさもなふ憂ありさきくものを、なにをか樂しさはいふ、富巨萬をかさぬるか、あらず、陶朱の富もつくるこさのなからじやは、おのれは、わざわひなき自然を樂しみ、一家すこやかにして明らけき御代の、つきぬみめぐみに浴すを、こよなき幸さは思ふなり。

我家は紅塵をさけて、上神谷の里にあり、竹のびて垣根をなし、瀰生ひておのづから門をなす、上神川前を流れて魚食ふべく、田畑うしろに打つゞきて野菜あたらし、位たかきにあられど人睦しまず家さめろにあられど錦衣をしらず、淸き空氣は先づ我等にふれ、うるはしき日光は先づ我家をてらす、しかして汽車の通ふあり、都遠きにあらず、新聞紙の報ずるあり、そのさま居ながらに知らる、これ榮ね行く御代のみめぐみにして、いかでこれにますさちあらむ。

自然のたのしみ四季折々ににつけてまた多し、春は霞をわけて、つくしよめ菜さては根せりなど摘みて來るを肴に、濁酒をかたむけつゝ父君甘露さ舌打ならしたまへば、一家打つどひて梅に詠じ櫻をめでつゝ、いさ永き日の暮れ行くを知らず、春風はおもむろに花の香を吹き送りて、鶯を誘ひ來。やがてみどり凉しき若葉の陰にまさぬして、花に恨みし風をまち、小川の水の音に心を洗ひて、うき世の夏を知らず、まして都人の夜も得れむらで侍つらんほさゝぎすの、先づおさづるゝこそうれしけれ。秋立つ風の袂を吹きかへす程心細からぬにしもあらぬものから、こゑ〳〵に寒さを告ぐる蟲の音にもよほされて、布子を綴り襤を補ふにいそがしければ、世をしもかこつ暇なし、さるは富みて用なき人の言艸にこそさて、母上笑はせたまふ。日うらゝかにてり渡りたる小春日和に、栗や拾はん茸や狩らんさ妹のそゝのかすまゝに、うしろの山に分け入れは山姫のすさびをかしくて、愚なる身も錦衣る心地こそすれ。み空高く氣澄める夜は、畑の枝豆打調じて、芝生をしされに月をめづれば、葉末の露玉さかゞやきて美しさいはんかたなし、黄金をのべし高殿に、山海の珍味を集めて開く月の宴にも、いかでおさらんさぞ覺ゆる。花野のあさやいづこさまさはるゝまで、一つ色なる霜枯れの景色を淋しさかこて



は、白雪ふり積みて野も山も時ならぬ花をかざすに、をどり狂ふ子犬千代をさへづるひな鶯も、豊けき年のしるしとたのもしきものから、ひれもす外にのみおはする兄君の、御寒やいかにと火かきおこしなどするほど、積雪ふみならす靴の音、飼犬クロンのよろこび走り出づるに急ぎ柴の戸押あけつゝ、いみじう寒きに嘸わびしくやなどいひつゝむかへまつれば、いなとよ御身こそ氷しのわざのいとつめたからめなどいたはらせ給ふ、かたじけなく涙ぞこぼるゝ。あはれ袂うるほすは、悲しさのみかは、よき子もちけりとは心の闇のひがめとは知るものから。わごの行末こそ楽しけれとは、父母の君が兄君の上かたりたまふ折の御言葉にして、子を思ふは人の情とは知るものから。なほありがたきは父母の惠みなりけりとは兄君が常の御恩なりけり。上なき位かぎりなき寶も、一家のむつまじさにはいかで及ばん、あゝ楽しきかな我家。

ほこ袋

田中しゅん子

いやなもの

わが子の自慢する人。きざな人。蛞の蛙をれらへる。雍きひげを大事げにひれくろ人。眞夜中に犬の長なき。妻よぶ猫のなき聲。理屈すきの女。病む人ある時鶏の哀れげに啼ける。酒に酔ひてくだまく人。五月雨。かみなり。何んでもなき事ををかしがる人。夜泣きする稚子。衣服をあらためて村を通るに。老も若きも皆かどに立ち出で、我が妻をぢろ／＼と眺めて何か囁ける。腋のくさき人。つまみ食する下女。蜂。みゝず。食物の中にかみの毛のはいりたる。自が才をほこる人。物かきしる音。白の金巾もて擦となし身をゆすぶりつゝ月琴ひきて門に立つ堕落書生。

うれしきもの

一時は如何にと思ひたりし母の病のおこりたる。山にわけ入り嘩よりもさきに、いと大きなる松茸を見出せし時。豊年。正月。淋しさに堪へかねし秋の夜、心あへる友の訪ひ来たる。女學世界定期増刊。悲しき夢を見てさめし時。はつ雪。よく晴れたる空。鶯の初音。いづれの道を取る可きかと打ちまどふ折。おのが成せる仕事わざ／＼やめて細々と教へくれたる。遠くはなれし友よりの玉づさ。物ほどこせし後の心。こころ淋しき旅路にて知れる人にあひたる。

はらだゝしきもの

急ぎのしたゝめ物なせる時。筆のかしらのぬけたる、すれども／＼火のともらざるマッチ。いつよりも見事に咲きし花の盛りをあすは友の誰彼まれきて樂しく眺めむと思へる時、雨降り出でて風さへ加はりたる。北風吹きすさぶ夜外より踊り踊り来り、いざや温まらむとはいりし火燵の火のきえたる。今はり給りしばかりの障子を猫のやぶりたる。



梅花に添へて

和歌山 郭 雪子

此頃はひれもすたれこめてふみよみものかく業にのみつとめたまふさ

か、うけたまはるを、日をふる雨にさぞやいぶせくながめさせたまふらむ、常もすゝやかならず渡らせ給ふをいとゞいかにとおもひやり參らせられてなん、去年の冬、さきなばとのたまひし庭の梅が枝、ゑましげに露をたよりに香をおくり侍れば、み車をうながしまづるも、渡らせたまはれば、おのれのみかは梅の花も、いかに本意なく思はんと一枝手折侍りぬ、御庭の花の目うつしには、いか許りのにほひも侍らざらめど、おましまのはしにもおかれたまひて、あはれと一度だに見そなはしたまひてよ、さあらむにはおのれの面目のみかは、花もさぞな。

お正月

大阪府　田中瑜璘子

ゆーさまおめでとうさきゝ。なれしやさしき聲に續て木履の音コロ々々……かわゆき足音に玄關にはたと止りたり。春さまなの。と妾はうれしさに、かけ出しぬ。

あれさーちやんまだ帯上を。と乳母は赤き正田の帯上持ちて妾があとを追ひかけ來れり。

春さまはつやゝかなる緑の髪をお垂髪に。紫の被布愛らしく、お扇子片手に敷石の上に立ち給ふ。妾は稚兒髷に、南天の模様ある上衣に。赤き下着を重ね。白茶の帯を今乳母に結びもろう處なりしなり。



ふたり共にけふ師の君が許を音づれん約きのふ否去年よりなしありしなり。

お叔母さまおめでとー。と春さまは叮嚀にことぶきのべ給ひぬ。

おめでとーまあ可愛いこと被布がよくにあつて。とやさしき母様の御聲。いつの間にやら黒の御紋付召したる母様はあらはれ給ひて二人が姿を眺め居給ふ。

春子さんそこはお寒いからこちらへお上り。乳母やそれではお前寒むからうが氣をつけてね。と重ねてのたまへば、紬の小袖に黒繻子の丸帯〆たる乳母は。

へイ〳〵ごー致しましてそれでは私がお供仕ります。とかしこまつてぞ答へぬ。

かあさま行て參ります。叔母さま左樣なら。

〆アーそれではおさなしくれー早くお歸りなさいよ。やさしき母君に送られつゝ二人は若楓の如き手を携へて乳母をあとに從へいかめしき門松立てる門を出でつ。愛らしき紅梅の青き松竹の間より二三輪笑みもらせるを何心なく手折りてかざしとなせば春さまもまた妾が如くなし給ひぬ。

あれまたそんなおいたを、かあさまはまだ玄關にお鑑し遊しますよ

たしなむる乳母の言葉にふりむけば猶母君には兩人が後影を餘念なくながめつゝ式臺の上にすらりと立給ふ。こは春さまが十一歳妾が十とせの春を迎へし昔なりけり。それよりは幾度の年を重ねて、

春さまは垂れたる黒髪を赤き手柄の丸髷に……
妾も高髷につかはしうなりぬ。
春さまは今年いかなる正月迎へ給ふらん。

冬休暇日記の一節

長門　植村せい子

二週間冬の休みも夢の如くに過ぎて明日までとなりぬ、冷やかなる寄宿舎の起き臥しはさても温き惠の光に滿ちたる妾が家庭に比ぶべくもあらじ、されど明日は其學校に歸らざる可からずと思へば名殘おしく一時も長かれかしと願ひぬ。

今晩は暫しの別れ故心合ひたる人々と歌かるたせむとて母上の許しを乞ひ得しゆゑ、七八軒の友の家へ誘ひ招きの文遣はし置きぬ、弟は悅び顏にて、「姉ざん今晩僕がつのをさるよ」と云へば、妹は、「だつて兄さんのような下手では取れはしないよ」と嘲り顏なるを弟は「馬鹿いへ僕が第一番さ」などいび爭へるもいと無邪氣にて妾は云ひぬ、「そんなら姉さんのを取って御覽よ」と、

燈つくる頃より隣りの下田美代子の君まづ來たまひ次で悉く集いたまひたれば最初は撒き取りにて後には二つに組をわけ互につのを出して



爭ひしが味方のつの取られし時の腹立たしさいはんかたなく又敵方のおてつつせし時などのをかしさ面白さ、弟はたゞ邪魔するのみなりしが遂には歌よみ玉へる母上の側に行きしも知らざりき、かくて母上今十一時打ちたる由告げたまいて驚きぬいつの間に早くも過ぎしかと、さらば今一度とて爭ひしが味方の勝ちとなりて終りぬ、此れより種々話などする中十二時を打ちしかば友の人々は辭して歸り行き給ひぬ、あはれか程に樂しかりし事はなかりき其はても明日は午前八時の滊車に乘るべき筈にしあれば早く臥戸に入れと母上の宣ふまゝに入りたれど、さみには眠られざりき

早梅をおくる文

岡山　小山松枝

冬の深うなりゆくまゝに草も木も枯れはてゝ、いともの寂しくたれこめてのみありしが、この兩三日のうらゝけさに、さうじおしあけながむれば、ゆくりなくもにほひそめたるこの梅の花よ、よろづおくれがちなる宿にこれのみはめづらしう、まだきに春の心地せられてなむ。かゝる山里にやがて降る雪にまがひて、とふ人もなく埋もるゝこそのいとあはれに、ひとりながめくらさむもあたらしうおもひ侍れば、色をも香をも知れる御わたりにて、一枝送りまゐらするを、書齋にかざして、御勉強につかれ給ひし御心慰にもならばい

かばかり花のめいぼくにか侍らむ。さては、その賤家に殘りたる姉のうらみがほなるに、いかで日頃御たしみの御言の葉もらさせ給ひてへや、かの鶯の初夢にもまして待たるゝになんあなかしこ

日記の一ふし

岐阜　山田桂花

十二月一日晴れたり。大垣なる友の音づれ給ふ、いと／＼うれしかたみによろこびかはして、終日かたりくらす、ほて／＼とこゝねぶとり給ひしを、母上の笑ひ給ふ、兄君のやするくすりもとめばやと笑ひ給ふもをかし、今日は何事もなくて、いとたのしく過しぬ。

二日きのふのごとし。東京の姉君より文のたよりもありたり、取る手おそしと開き見れば、薄紅色藤色のりボンいくひら又西洋花簪は小包にて送るとあり、いと／＼うれし、小夜子の君と共に琴の稽古に行くかへり路うつしねとろ、家にまろうどあり、夜ふくる迄酒のみつぶけたまひたる、げに心にくし。

三日風ひやゝかなり。幼子のなく聲に夢さめて、時計を見れば。六時なり、久々に文金島田に結ぶ、弟の「姉さんの髮はおもそうだれ」と笑ふも愛らし、兄なる友の淺田の君音づれ給ひて、桂さんはお嫁に行くとねみ給ふもはづかし、夜に入り父君のつれ／＼なるべし、そのたまふまゝに琴もちて、小夜子の君がり行けば、春枝の君よりの文あり、歌二首そへられぬて、十時をすぐる頃床につく。



四日朝の程雨少しふる。小春日和の暖かにして、風靜かなる今日と云ふに、池田氏宅よりまねかれて、お庭の紅葉を見る、うら門を入り敏子の君のしるべにみちびかれて、散しく、落葉ふみ分けつ、杜のそれならぬ、老樹の下道たどり行けば枝に飛かはす小鳥の啼く音のどかに聞こゑて池の面に群れ遊ぶ、小鳥の足搔また豐かなり、未だ芝生の露かわかで、朝日に照り渡る美しさげに一寰の仙境とや、云べき、折から誘ふ風にひら／＼と一葉二葉の散落て、細き小流れに浮ぶさまは中々筆にも及びがたし、小高き丘の上に登り見れば心おのづからひらけて、何處ともなく水音の聞こゆるも奥ゆかし、幽水閑雅てふよりも寂寞と云ひたげにて、さながら猿の道だになき山また山の奥ふかく分け入りしかと思はるゝばかり。心澄みて氣清し、お庭を出でしは、鳴り響く晩鐘の少し前なりき、夜は詠草を書きて、十時を過ぐる頃床につくよの中を思ひ渡りて夜な／＼は昔にかよう夢の浮橋。

歳暮

松山市 松前町　玉浪女史

はせゆく年におはれてや
　大路の様は修羅の庭
こゝもかしこもあらたまの
　年をむかふる餅もち
つくやかしきされの音
　手足も空に市人の
さまもいかでか白雲の
　静けくかゝる松飾
千鳥片手にはしる人
　明けゆく年を松さ様
手折て帰る素人
　いづれ幕行様ならん
まスイアスの名残にさ
　戸毎につくる十二時の
時計の音も今日のみは
　心細くもきこゑけり

多摩川の里

東京蒲田　佐々木和子

尾花ゆらめくむさし野や
北斗はあはくまたゝきて
古戦場頭つき冴へぬ
　あゝ静かなる野のさまよ
一すじ白きたまがわの
　さゝ波匂ふゆふまぐれ
水際にたちてながむれば
　胸もはれゆく風あり
十里一望くさふかく
人烟まれに寂させり
　あゝなつかしき此の里よ
　我さこしへにすみはてむ

曙の海

名古屋　奥島ひで子

磯の松原靄はれて
風吹きわたる曙や
さゝべり紅き紫の
雲の帷の彩錦
今がひらけん東に
天つ日影はのぼるなり
黄金たゞよふ千重の浪
海のながめぞはるかなる
男波女波のよる磯の
松の木蔭にわれたちて
歴にさすらふ人の子の
詩（うた）になさんもはづかしく
八百潮湧けろ和田の原
底の宮殿（みやゐ）に宮姫が
奏づる朝の祝き歌の
調よあまり高ければ

磯に立ちて

伊勢國宇治 中之切町　河原芳子

日の神しらす東の　皇み國はくもりなき
三千年のさし波を　濫ねて深き海の上。
春まだ若き紫や　金色匂ふあやくもの
彩の舞衣ふりさけて　新潮招く天の戸よ。
歓楽つたふ天使の　祝音（のり）の羽風に霜消ねて
人、新らしき色に酔ふ　年の始めの美しや。
十萬里外波なぎて　初日迎ふる朝のはね

玉藻に匂き歌聲の　神のみ胸に響くさき。
あゝ大いなる天地に　只一むらの葦原や
德の餘りを唱和する　無限の笑みやはたいかに。
早をさめ子はたのしげに、まりゝ羽子ょそもてあそぶ、
心のどけきみ空より、千代よぶ鶴の聲もして。
つれはうさきも親しきも、年のよごさをまほしつゝ、
取かはすこの文こそは、誠心ありてうれしけれ。
うれしき年の始めてふ、今日の如思へ世の中は、
希望のひかりみち／＼て、さはにたへせぬるものさ。

少女の思

伊勢國　加藤ひさ

夕風渡る高殿の、玉の小すだれゆら／＼と、
ゆらぐすきまの面影に、月も光やはぢぬらむ。
おもがくれゆく其影を、ながめ出してひさり言。
浮雲なくば冬の夜の、月の光もさやけきを。
思ひしなくば我が胸の、清き鏡もくもらじを。
親のみかげに靄ばかり、足らはぬ事はあらぬ身の。
君間の水のむせかへり、むせぶ思を如何にせむ。

新年

同山　小山松枝

よべ一夜をはまかのにて、これぞ今年の朝ぼらけ。
都もひなもやすらけく、このにひ年をむかへけり。
ふくさしもなき朝風に、靜になびく日のみはた、
のくしのなはもおほ君の、ことほかきはさ祝ひつゝ、
戸ごさにたつる門松に、初日の影のかゞやきて。
治れる御代ゆたかにも、千歳のいろの見ゆるかな。

今は昔

仙臺　櫻谷女子

むかふのをかに花みむさ、
かなたのみれに月みむさ、
あゝ春の日も秋の夜も、
松かぜきかむさかしこのもりに、
虫の音きかむさかしこの山に、
こひしき君が手をひきて、
共にあそびしあさゝへば、
亡き面影のしのばれて、
只わき出づるは涙のみ、
無情の石も今巳が、
悲歎の涙にうるほふは、
共に泣くかさみゆるなり。

彙報

○小包郵便さ通運　小包郵便の賃錢改正は舊臘十六日より實施せられたるが從來小包郵便は重量さ距離に依り賃錢に差等を設けたりしを今回は距離の遠近に依ず同一重量の小包は同一賃錢にて配達せらるゝとさなり市外は橫濱へ送も大阪乃至長崎へ送も同一の賃錢さはなれり、備て其の新賃錢は市內は目方の輕重（一貫五百目を極度さなす）に係らず一般に五錢、地方行は二百目迄十錢、四百目迄十五錢、六百目迄二十錢、九百目迄三十錢、一貫二百目迄四十錢、一貫五百目迄五十錢さなし舊貨錢の最高額六十四錢に比すれば十四錢の低廉さなれり因みに通運會社にて取扱ふ小包の賃錢は市內は廿五斤（四貫目）迄賃錢五錢にして物品に依り二錢位の增直もありさ又同社は市內に備物の取集めをなし便宜の個所に午前集めたるものを午後に配達し其他は翌日配達をなす定めなりさ

○備中雜煮餅　は圓形の餅にて大椀に二個宛入れ（以上は入れす以て餅の大さは知るべし）結び昆布さ大根の輪切さ鰤の切身さを入れすまし汁にて用ゆ、但し正月三日の間一度だけは味噌汁なり

○讃岐雜煮　直徑二寸位の小餅を作り其中に餡を入れて饅頭の如くし味噌汁にて煮たる上大根及人參を頁き程に切りて入れるなり

懸賞文募集

女學世界
定期增刊
（三月十五日發行）

花にしき

才媛詞藻
春の卷

投書〆切二月十五日限

我が女學世界は才媛文學の進步を圖るの目的を以て、來る三月十五日を期し、定期增刊『春の卷』を發行せんとす『花錦』即ち是なり、意匠の斬新なると資料の有益多趣味なるとは今更喋々を要せず、されば先づ編輯の準備として汎く作品を天下の女學界に募る、懸賞課題等は下に記す如し、時は是れ艶陽の好時節滿眸の櫻花正に研を競はんとするの時、乞ふ徐ろに錦繡の心腸を練り華麗の筆を揮はれんことを

文種

▲小說（題隨意）
二十行二十四字詰にて
紙數十枚まで

▲和歌（題 春曙 船 女學校）
端書に一題一首の事

▲新體詩（題隨意）
三十句限

▲消息文（候文 言文 隨意）
二十行二十四字詰にて
紙數一枚限り

▲普通文
（課題 女子と學問 花）
二十行二十四字詰にて
紙數三枚以內

賞品

特賞 金五拾圓 壹名
金賞 金五圓 壹名
甲賞 金三圓（圖書切符）五名
乙賞 金貳圓 仝 六名
丙賞 金壹圓 仝 拾名
秀逸 金五拾錢仝 三拾名

注意

▲特賞は小說の優等者に限る
▲和歌の高點は別に乙賞以下にて相當の賞品を呈す
▲普通文に限り一等五圓二等三圓三等一圓四等五十錢圖書切符を呈す
▲原稿二枚以上は紙捻にて綴る事
▲封筒には必らず『花錦』と附記すべし

女學世界第參卷第貳號記事豫告

(二月五日發行)

毎月五日發行

定價表

一冊(紙數二百八頁)	金二十錢
四冊(三ヶ月分)	前金七十五錢
八冊(半ヶ年分)	前金一圓四十五錢
十六冊(一ヶ年分)	前金二圓八十錢
内(定刊數……十二冊 / 增刊四回…三、六、九、十一月價格同一)	
郵税	一冊 二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁(卅二行)	一頁(六十四行)
特等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引三十三圓
一等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十七圓
二等	二十九錢	九圓二十八錢	割引二十二圓
三等			割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。

明治卅六年一月一日發行　第參卷第壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

謹賀新年

博文館主 大橋新太郎

大橋進一

博文館編輯局

主幹 坪谷善四郎

巖谷小波　石橋思案　岩田鳥山　石倉翠葉　長谷川天溪　濱田四郎　堀川利太郎　鳥谷部春汀　苫米地日東　川上齋庭　片山春帆　勝間舟人　武内桂舟　田山花袋　田村松魚　武田櫻桃　鷹野止水

根岸由太郎　中川葦舟　中村笛南　村松月舟　上村左川　大町桂月　山中古洞　松原廿三階堂　近藤賤男　國府犀東　江見水蔭　齋木菊雨　齋藤紫白　岸上質軒　木村小舟　宮川如水

（以上イロハ順）

博文館營業部

支配人 羽田福太郎

副支配人 杉山常次郎

副支配人 内山正如

元方支配人 大野金太郎

事務員

野口竹次郎　上村恭三郎　堀野賢龍　里見謙吉　田中六藏　宗像仲吉　加野十次郎　富士原秀穗　來島茂三郎　金子督太郎　小峯正一　古賀豐策　細野佐藏　枝川錠太郎　片山宇吉　有田利雄　松原濱之助　關謹平　兒玉幡太郎

永井泰　大谷濱次郎　權藤文雄　荒井芳太郎　淺沼湍次郎　佐治清吉　番場宗八　横田地巴　繁田郁造　福澤市太郎

事務員補

林彥之助　神保直藏　今井淳　長嶺幸吉　小林源三　織田保次郎　富所三郎　猿賢四郎　小瀧文治　小林久四郎

（後付の一）

恭賀新年

博進社洋紙店

専務理事 山本留次

事務員
山本九兵
富田新太郎
九里誠一
大野孫平
富谷松三郎
金原要一郎
上原董司

武藤吉次
長谷川金之助
澤田宮三
黒澤倉治
石井次郎
白井熊吉
横山幸七

大坂支店
支配人 中村孝吉

事務員
藤井英三郎
松本作藏
上村新之助
大貫丑之助
岡村九十九

山本瀧三郎
酒井直次郎
平澤兼松
密山清作
小林勝太郎

恭賀新年

博進社工場

理事 大橋光吉
支配人 太田馬太郎
副支配人 水谷景長

事務員
佐藤憲斌
高橋正信
近山喜代三
市川七作
小田内東藏
中西榮次郎
富井龍次郎

稲波寅吉
薗田三佐雄
大内德亮
浦山甫翠
小笠原廣俊
大澤勇

職長
内山長吉
深見豐次郎
田中安藏
飯塚市郎治
菅熊作
吉田平吉

西郷勝
多賀新太郎
蛭沼武守
吉岡泰五郎
中尾中

(後付の二)

理學士西松二郎君校閲
木村小舟君著

春夏秋冬

理科手引草

(新案極彩色四季動植物圖入)

(全一冊大判正價卅八錢 郵税八錢)

本書は專ら動植物界に重を置き少年諸君が日常の玩讀に供せん爲に章句を簡潔にし趣味を深からしむを期せり故に新年旅行散歩の好善友にして一本を所有するの必要あり請ふ續々御注文あらん事を

博文館發兌

本邦は古來扶桑國と稱し蠶桑を以て名あり宜なり歴朝能く斯業の奬勵に勉め人民亦孜々之れが發達を企圖す其現今に至り已に輪出物金額の大半を占むるの盛境に達したる眞に偶然にあらざるなり惟ふに我邦家の消長は蠶業の盛衰に關する大にして國家は殆ど斯業によりて其運命をトするに似たり、然りと雖も蠶糸は獨り本邦の特有物産にあらず清國の多産伊佛の精良倘は我を凌いで餘裕あり、去れば本邦の蠶業は將來益々進んで之れが勃興を圖り之れ

蠶業叢書

全部拾貳册

第壹編 蠶業通論

三谷徹池田榮太郎兩君著

●全壹册洋裝菊判

本書は蠶業の起源より論し蠶業界の既往に照して將來採るべき方針に及ぼせり卓觀特絶の論鋒人をして藹然蠶業界の活劇に遊ぶの感を與ふ實に本邦空前の良著なり凡そ斯業に從事する諸氏は其學者たると實業家たるとを問はず讀恰も一道の光明を得たるの觀あらん

第貳編 生絲檢査論

德田實也君著

●全壹册洋裝菊判

我邦に於ける生絲檢査の方法を論述し進て其情粗優劣の由て來る所を詳說したるものにして著者自ら其職に在りて日常檢査に從事し見聞調査せる事項を發表し以て全國各地生絲業を親ふの便に供す殊に昨年内外生絲業者の締結せられたる條約中水分檢査の項目の如きは具に之を解釋し製糸家及び生絲業者の參考たらしむ

第參編 栽桑新論

池田榮太郎君著

●全壹册洋裝菊判

桑葉は生絲を生産する原料となるのみならず蠶の體格及び強弱は桑葉によりて左右せらる近來世間栽桑に囂々するや世亦栽桑に關する書乏しきにあらず然れども其術概ね一方に偏するのみならず迂濶なる傳式一定の方法のみ記述し進んで改良の新術を論反せるなし本書は學理と實際に照し最新法を詳說して餘蘊なし

第四編 桑樹病害論

岩淵平介君著

●全壹册洋裝菊判

本書は專ら桑樹の病害に關して論述したる者にして菌類の寄生によりて發生するもの生理的變狀より來るもの及び桑樹の害虫により被れるもの等五十有餘種の桑病を詳論し尚附錄として野鼠の害晩霜の害を切論す其說悉く著者の實驗を經て苟も桑樹の病害と認むるものは遺漏なく網羅精論せられたり

發兌元　東京市日本橋

が改善を講せざれば彼の列強に對峙すべくもあらず然るに本邦未だ斯業に關し學識經驗共に幼稚の域を脫せず是れ本館が當代斯業界に於て錚々の聞えある農商務省蠶業講習所本科出身者數氏の新著を乞ひ蠶業叢書の名を以て逐次之を刊行し汎く當業の士に頒ち斯業改善の良友たんを期する所なり

●正價一冊金三拾錢六冊金壹圓七拾錢全部拾二冊金三圓貳拾錢 ●郵稅一冊金六錢ツヽ

第五編

蠶躰解剖論

松下憲三郎君著

●全壹冊洋裝菊判

従來蠶躰解剖に關する書なきにあらずと雖も簡にして其要を缺き繁にして解に苦む等一般當業者に適切なる者少なしとす本書は之を補はんか爲め文章平易意義明解を旨とし尚は斯學の泰斗石渡農學士の校訂を經て之を總論蠶蛾蠶卵解剖の各章に分ち附するに百有餘の圖解を以てす加ろに蠶体解剖用具論の一章を設けて諸實驗の便に供す

第六編

殺蛹乾繭論

三谷徹君著

●全壹冊洋裝菊判

現下殺蛹乾繭法は斯業上の大問題として之が改良を喚ぶの聲や大也然るに改良の實績を見る極めて遲々たり是れ蠶繭の性質を解得し器械其物の構造を辨知し而して後之を使用するにあらざるを以て也著者茲に見る處あり此弊を矯めんとし說く處は悉く實驗論する所は學理能く之が融和調節の妙を極む蓋し斯業改善に資する所の決して鮮少にあらず

第七編

蠶病論

岩淵平介君著

●全壹冊洋裝菊判

今や蠶病は年と共に萬延して猖獗を極め爲めに收益を減じ失敗を招く者益々多からんとするの傾向あり是れ主として蠶病々理の未だ詳かに闡明せられざると當業者の蠶病に關する智識の缺乏せるに因らすむば非ず著者深く之を憂ひ蠶病に關し多年其得たる所を收錄し本書を作すに至る就中膿病卒倒病黑彊病に關して最近の研究新事實を詳論せり

第八編

蠶業經濟論

徳田實也君著

●全壹冊洋裝菊判

我國蠶業の現狀は普及の過度時代より整理の新時代に入らんとするの秋也世の蠶絲業に志すの士深く思を茲に致し經濟の大旨を骨子とし以て斯業の方針を確立せざるべからず本邦古來蠶桑書多しと雖も悉く技藝の指導に竭くすに止りて未だ斯業の大方針を指示せし論述あるを見ず本書の世に出づる寧ろ時勢の必要に逼られたるものならんか請ふ一本を机上に備へて經濟的觀察に備へられよ

續刊

●製絲新論……井上隆君著

●蠶種論……岩淵平介君著

●蠶躰生理論……松尾重信君著

●多化蠶飼育論……山田島次郎君著　大森孫太郎君著

區本町三丁目　博文館

(後付の五)

英學新報社新年發賣書類

英國文豪ジヨン、ラスキン翁文粹
英學新報記者エー、シー、ハーツホーン女史編
高等師範學校教授本田增次郎君譯說並註

英文倫理思想

美裝正價全壹冊 金四拾錢 郵稅四錢

ジヨン、ラスキンはカーライル、エマルソンと共に十九世紀英文界の大思想家人類の大敎師なり。然るに其著書浩瀚にして之が全豹を窺ふは素より容易の業にあらず。本書は英文學に精通するハーツホーン女史が、博く彼が書を渉獵し滄溟に眞珠を拾ふの勞を積みて此偉人に於ける至美至高なる倫理觀の英萃を摘したるものにして、附する處の本田敎授の細密なる解說はラスキンの人物思想を說明し、また加ふるに引用語の註釋を以てす。蓋し此思想家を學ふの津梁として我邦は素より英米出版界に於けるも亦其比を見る能はざるの良書なり中學程度以上の諸學校の敎科書として之に過ぎたるは無けん。

米國ベーコン女史校閱
米國理學士齊藤清次郎君著

英和禮式會話

袖珍正價全壹冊 金貳拾錢 郵稅貳錢

外人との交際いよ〳〵頻繁に泰西禮法は益々我社會に應用せんとす、本書の出づる又故なしとせず、會話體を以て具さに禮、法を說明し加ふるに和譯を以てす禮法を韻ずると共に其用語に熟せしむるに至便なり。

◉英學新報社最新出版書◉

- 英文 名家小品 津田梅子女史編 郵稅共參拾九錢
- 英文 逸事叢譚 櫻井鷗村君撰訂 郵稅共參拾九錢
- 英文 希臘神話 津田梅子女史撰 郵稅共五拾壹錢
- 英文 御伽噺 ベーコン女史著 郵稅共四拾四錢
- 英文 對話集 村井知至君撰訂 郵稅共四拾四錢
- 英文 實業之帝國 カーチギ著撰訂 郵稅共參拾四錢
- マンチヨゼン 法螺先生 津田梅子女史著 郵稅共貳拾四錢
- 英文 頓機翁物語 畔柳文學士解說 郵稅共參拾四錢
- 英文 近江聖人 レナード氏校閱 郵稅共參拾九錢
- 英文 從軍記者 櫻井鷗村君詳註 郵稅共貳拾貳錢
- 英文 勇士の紀念 英學新報社詳註 郵稅共貳拾貳錢
- 英文 高山探險 英學新報社詳註 郵稅共貳拾貳錢
- 英文 へれわーど 英學新報社詳註 郵稅共貳拾貳錢
- 英文 白百合 英學新報社詳註 郵稅共貳拾貳錢
- 英文 學生日記 懷中持用 英學新報社編纂 郵稅共貳拾九錢

（後付の六）

THE ENGLISH STUDENT'S

DIARY.

英學新報社編纂

英文學生日記

（裝釘優美●携帶至便）

懷中用（長方形）

定價金廿五錢

郵稅四錢

凡そ、外國語に熟達するの要は常に其語と親密なるに在り。當英文學生日記は實に此の主旨に基き編纂せるものにして、日夜見聞逢遇する處の事項を記入し又た讀む處の金言名句を誦ずるは以て高遠の思想を涵養するに足り、古今の人物の肖像に接するは!!英姿を欽仰するに宜かるべし、卷首には日課時間割用箋を附し、用紙に至りては舶來厚質のペンを用ゐるに適したるを以てす、以上諸點に於て、當日記が英學生の渴望を癒するものなるや必せりとす

●新刊發賣●

三宅花圃女史序　戸川殘花君序文
本村熊二君序文　島崎藤村君序文
湯谷紫苑君序文　嚴本善治君跋
若松賤子女史稿　櫻井鷗村君編纂

わすれがたみ

（中島湘煙女史追懷書挿入）

全壹冊

洋裝美製本　正價金五拾錢　郵稅八錢

若松賤子女史異材を抱いて白玉樓中の人となりしより春風秋雨既に七星霜文界落寞の今日女史を追懷する無き能はず生前の述作今にして編纂せずんば散逸に歸せんことを憂へ即ち忘れがたみ、雛嫁、我宿の花等彼『小公子』と共に永く我文學史上の珍たるべきもの十數篇を收む、裝釘美麗◎今や版なる◎

●新刊發賣・增刷書類●

押川春浪君著　英雄小說 **武俠の日本**　全壹冊（新刊）正價金四拾錢　郵稅六錢

讀賣新聞記者關如來君著 **明治の令孃**　全壹冊（新刊）正價金參拾錢　郵稅四錢

文學博士元良勇次郎君著　現今將來 **倫理及宗教**　全壹冊（改訂增補）正價金五拾錢　郵稅六錢

元良博士評論戸澤文學士譯　小說 **愛と心**　全壹冊（訂正四版）正價金廿五錢　郵稅四錢

北村門太郎君著　四名家合編 **透谷全集**　全壹冊　正價金壹圓　郵稅拾錢

發兌元　東京日本橋區本町　**博文館**　東京神田表神保町　**東京堂**

巖本嘉志子女史遺著津田梅子女史序
エー、シー、ハッホーン女史編纂並序

英文集

袖珍 正價 全壹冊 金參拾錢 郵税四錢

故巖本夫人の英文に於けるや着想清新行文流麗、夙に我國英文界の敬重する所となる而かも亦た英米人士にして之を愛誦するもの尠からず、皆推して斯文の純乎たるものなるを稱す。今や女史が生前未見の友人ハーツホーン女史その遺編を渉獵し傳へて後世斯文の至寶となすべきものを撰して此書を成し哀悼すべき文星の遺先をして我英語界の嚮導たらしめんとす。

米國詩人 テーロア氏作日本津田梅子女史撰

英文 氷洲の少年

袖珍 正價 全壹冊 金貳拾錢 郵税貳錢

本書は米國文學界に其人ありと知られたる詩人テーロア氏が三十年前セントニコラス雜誌の爲に起草したる一佳話にして、名を聞くだに恐ろしき氷洲の一小年が人に誘はれて四時氷雪に埋れたる故郷を去り外國に出で物事に耳目を驚かしたる可憐の物語を、氏が得意の筆によりて優美に書き綴りたるもの蓋し課餘爐邊の讀み本として、其味ひ云ふべからざるものあらん。

發兌元 東京日本橋區本町 博文館　東京神田表神保町 東京堂

英文譯註 **奇々怪々** 淺野文學士譯註 郵税共參拾四錢

本編は英文「奇々怪々」及「鞄の間違」二短編を收む、前者は鬼氣凄々髪をたゝしめ、後者は滑稽百出よく人の頤を解く、共に机上の珍品たり。若しそれ其譯文は流麗明快よく原作の意と態とを傳へて遺憾なく、且つ詳細なる頭註を附したれば、好學の士にとりて絶好の侶伴たるべし。

英文譯註 **世捨人** 戸川秋骨君譯註 郵税共參拾四錢

英文譯註 **浮世の旅** 戸澤文學士譯註 郵税共參拾四錢

英文譯註 **帳中說法** 豐島定君譯註 郵税共參拾四錢

和文英譯集 高島捨太君著 (近刊)

英文 **繫思譯** 英學新報社詳註 郵税共貳拾貳錢

英文 **空中船** 英學新報社詳註 郵税共貳拾貳錢

英文 **二都譚** 津田梅子女史著 (近刊)

英文 **イリアット物語** ハーツホーン撰 (近刊)

英文 **シーザー物語** 英學新報社校訂 (近刊)

發兌元 東京日本橋區本町 博文館
發兌元 東京神田表神保町 東京堂

◎英學新報社最新出版書◎

(後付の八)

帝國百科全

文學士 速水滉君著 (第八拾九編)

心理學

智識なくして所謂精神科學を學はんと欲するは恰かも數學の智識なくして自然科學を學はんとするか如し輓近斯學に關する典籍梓に上る者決して鮮からす然かも其多くは泰西諸家の翻譯に止まり讀者其解し難きに苦まさるはなし著者之を憂ひ**歐米最近の著書**を參酌し**自家の私見**を加へて此書を著せり例證を日常の經驗に採り文字平易にして明快内容又卑近に失せす高尚に流れす其要領を叙述して殆んと剩す處なし庶幾くは斯學に志を有するもの江湖諸君の需用することを得ん

全壹冊洋裝
上製金五十錢
郵稅金拾錢
並製金卅五錢
郵稅金八錢

法學士 野口弘毅君著 (第九拾編)

行政法各論

銀行は資本の融通を圓滑にして需用供給を調和する所の機關にして經濟社會一日も之を缺くべからず然れども其由來性質組織作用及營業の方法等を知悉せざれば之を運轉利用して便益を受くる事能はざるべし而かも從來之に關する良書なきは吾人の最も遺憾とする所にして本書は則ち此缺を補はんか爲に公にせらるゝ書中收むる所銀行の定義其活用種類組織及ひ紙幣の發行及び各般銀行の業務に關する評論なり其考證の該博立論の精確なるは今更喋々の要なし讀者幸に一讀して其の眞價を知られたし

全壹冊洋裝
上製金五拾錢
郵稅金拾錢
並製金卅五錢
郵稅金八錢

(後付の十)

發兌元　東京市日本橋

書新刊廣告

法學士 小原新三君著 （第九拾壹編）

銀行新論

全壹冊洋裝
上製金五拾錢
郵稅金拾錢
並製金卅五錢
郵稅金八錢

國家行政上の活動は百端にして恰も端睨すべからざるに似たり然れども仔細に吟味し來れば此間又一定の次序ありて常規ありて存する所以なり本書は行政汎論の著に次て著者が特に稿を起されたるもの各部行政上の活動に關するあらゆる一切の法理はすべて最新行政法學上の尺地に依り縱橫に論斷し解說し以て法の精神を闡明せり著者の行政法學上に於ける學識と尺地とに關しては世既に定評あり苟も我行政の實躰と理論とを知らんと欲せらるゝの士は一本を座右に備へられたし

農學士 月田藤三郎君著 （第九拾貳編）

家禽學

全壹冊洋裝
上製金五拾錢
郵稅金拾錢
並製金卅五錢
郵稅金八錢

國運の進歩に伴ひ鷄肉鷄卵の需用日に增進するは必至の勢にして我國時勢の進歩は既に其需用は供給に超過せるの現象を呈せり玆に於てか家禽飼養の隆盛にして各地に起るに至れりこは專業として或は農家の別業として其利益の大なると世既に定論あり本書は此業務の指導者たらんことを期し學理を基礎として實地を說明すること懇切精細を極め加ふるに數多の挿畵を以て讀者に了解し易からんことを務め此業に志すもの丶爲めに實に得易からざるの良書なり有志者一本を座右に備ふるは啻に一身の爲めのみならんや

區本町三丁目　博文館

櫻所 于河岸貫一先生纂釋

女訓評釋

全壹冊

和裝菊判上製
正價金六拾錢
郵稅金拾錢

此書は古來女子の教科書として襲用せるもの十二部を纂めて註釋を加へ古訓を解するに新思想を加味したるものにて初めは簡易にして次第に文意倶に高尚に至るものなればば此の一冊にして賤の女も學ぶべき高貴の御方にも適當に尋常一年生にも讀得べく女子大學生にも研鑽に値すべき本邦唯一の女訓寶鑑なり請ふ御愛購われ

發兌元博文館

櫻所 于河岸貫一先生編纂

日本女子立志編

全貳冊

和裝菊判上製
正價一冊六拾錢
郵稅一冊拾錢

此書は中村陽齋の比賣鑑に續きて慶元以后より明治の初に至るまで我國の諸書に散見せる賢媛節婦三百有餘人の善行美事を類纂して賢淑貞烈忠烈孝烈勇烈文學才畧の七部に分ち本邦古來の良風美俗たる婦教の綱維を保持するの一端に供するものにして閨閣の寶鑑婦人立志の基礎なり且つ文章暢麗にして讀み易く記述精細にして趣味深し方今女子風敎の紀正を促すと急わり本書の上梓せらるゝ實に昭代の龜鑑といふべし

發兌元博文館

明治三十六年一月改正

博文館圖書總目錄

目錄分類

博文館定期刊行雜誌

毎月一回一日發行

太陽

●正價一册金三拾錢　郵稅三錢

本誌は既に創刊より八年の星霜を重ね其間常に時勢に伴つて改良進歩の實を擧げたり第九卷に入りては更に一大飛躍を試みて世界文明諸國の大雜誌間に異彩を放たんとす』寫眞版は總て本文中に挿入して時事と接近せしめ文字以外に社會百般の事件を傳ふ世の政治外交經濟法律文學美術教育宗教其他あらゆる問題に就て時勢に後れざらむと欲する者は本誌に依つて多大の利便を得べし

年刊十二册●定期增刊年四回（定價同一）
大判（四六版二倍）紙數三百四十頁餘
寫眞版アートペーパ四頁●本文中の六十四頁を色刷さし寫眞版百余個挿入す

●四册金壹圓拾五錢●八册金貳圓貳十錢
●十六册金四圓貳拾錢●外に要郵稅

毎月一回十日發行

實業世界　太平洋

明治三十六年創刊

●正價一册金貳拾五錢　郵稅貳錢五厘

太平洋は普く世の實業家の師友と爲り顧問となる爲に趣味と實益とを兼ね收めたる實業專門の大雜誌なり凡そ商工農の各業を通じ現代に於て最も進みたる理論と實驗とは盡く本誌に由て窺ひ知るべく、實業界に於る有益なる消息は皆な本誌の上に活動すべし太平洋は各種實業の學校たり講習所たりまた試驗場たり講談會たらんとを期す

年刊十二册　●外に臨時增刊發行
大判（四六版二倍大）紙數二百八頁
寫眞版八頁●二倍大……一頁

●三册金七十二錢●六册金壹圓三十八錢
●十二册金貳圓六拾五錢●外に要郵稅

博文館定期刊行雜誌

文藝倶樂部

毎月一日一回發行

●正價一冊貳拾五錢郵稅貳錢五厘

文藝倶樂部が文學雜誌中の牛耳を取れるは今更に喋々を要せず、然れども社會の嗜好と文藝の潮流は日に月に發達進歩するを以て、此際更に一層の改良と注意とを加へ愈々文運の皷吹を計り聖代の開明に貢献する所あらんとす、即ち本誌は當代文家の傑作を紹介すると共に社會の風潮流行より東西古今の佳話を集め諸國の風俗勝地奇談、及び相撲其他文壇諸名家の隨筆雜記、名人の講談落語或は投書家諸子の作什等總て文藝に關する事項は細大網羅し加ふるに毎號華麗なる木版摺、三色版、寫眞等の裝飾を挿み以て文藝美術の醇粹を盡す

年刊十二冊●定期增刊年四回（定價同一）
菊判紙數三百廿頁●木版摺錦繪一枚●三色版一枚
寫眞版アートペーパー四頁、普通寫眞八頁挿入

●四冊金九拾五錢●八冊金壹圓八拾錢
●十六冊金參圓五拾錢●外に要郵稅

少年世界

毎月一、回五日發行

●正價壹冊拾錢　郵稅壹錢五厘

獨逸から叔父さんが歸つて來た初めてのお正月から出た少年世界を見給へ口繪は桂舟先生が意匠を凝らした年中行事と外に澤山寫眞銅版がついて記事は面白いお伽噺や爲になる史傳や科學のお談それに卷頭の十六頁は色刷になるのですから第九卷目から產れかはつた樣に立派な雜誌になりました第一號には別附錄としてお伽噺の繪端書がついて居るのですよ

年刊十二冊●定期增刊年四回（定價同一）
菊判、紙數百二十頁●石版色刷二頁大一枚
寫眞版八頁挿入

●四冊金參拾八錢●八冊金七拾五錢
●拾六冊金壹圓四拾錢●外に要郵稅

中學世界

毎月十日一回發行

●正價壹冊貳拾錢　郵稅貳錢

中學世界は創刊より茲に第六年に入れり其間時勢に從ふて着々改良進歩し、中學程度に在る學生諸子の唯一の伴侶として青年雜誌界を濶歩し來れるは世の認むる所本年よりは又更に一大刷新を加へ愈々趣味を豐富ならしむ、本誌紙數二百四十頁欄を分つこと二十一目各欄名家の寄稿を收め學校課程外に新智識を得せしむるを期し、又毎號懸賞を以て投書を募り作文練習の機關とす

年刊十二冊●定期增刊年四回（定價同一）
菊判、紙數二百四十頁●習畫帖二頁
寫眞版アートペーパー四頁、普通八頁挿入

●四冊金七拾五錢八冊金壹圓四拾五錢
●拾六冊金貳圓八拾錢●外に要郵稅

博文館定期刊行雜誌

女學世界

毎月一回五日發行

●正價金貳拾錢　郵稅貳錢

●四冊金七拾五錢●八冊金壹圓四拾五錢
●拾六冊金貳圓八拾錢●外に要郵稅

年刊十二冊●定期增刊年四回（定價同一）
菊判、紙數二百餘頁●習字畫帖八頁寫眞版
アートペーパー四頁　普通八頁挿入

文明の徳澤四海に普くして、教育ある婦女子が漸次社會に勢位を占むべき時は來れり茲に於てか女子教育の必要は一般社會の認諾する所となれり我女學世界は此時勢の急須に應じて世に顯はれたるもの創刊日未だ淺きに拘はらず、一方に於ては健全にして清新なる家庭の讀物となり、一方に於ては學窓に於ける妙齡女子が勉學の栞となり以て日に增し江湖の歡迎を受けつゝあり、年新まると共に本誌は更に欄を增し材を撰み、記事を豐富にし務めて空論を排し實行を旨とし尚其他大に誌面を改良し世の良妻賢母の務を全ふせしめ以て獨立自營に資せしめんと期す

自治機關　公民之友

明治三十六年創刊

毎月一回十五日發行

●正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

●三冊金三拾五錢●六冊金六拾七錢●十二冊金壹圓三拾錢●外に要郵稅●外增刊一冊代四冊分

年刊十二冊●外臨時增刊一回（定價四倍）
菊判、紙數百六十頁●寫眞版……六頁

公民の友は自治制度の完全に行はるゝ機關たるを期し、市町村郡府縣の吏員及議員の爲に須らく知るを要する摸範的理論と事實とを網羅す、當代第一流諸名士の地方行政に關する意見は盡く之を請ひ、行政訴訟、訴願等の判例は具さに之を收め、行政法の講義、戸籍法、警察制度等の疑義は詳かに解釋し、何人の質疑も受けて之を解答すべし、

圖書世界

毎月一回廿五日發行

單に大橋圖書館に於ける機關雜誌たるのみならず現時我國圖書出版界の實勢を知得し得べき便利なる報告雜誌にして我讀書界に缺くべからざる要誌なり一たび之を繙けば內外圖書の新刊は掌裏を見るが如く方今の文學書經濟書政治書美術書等は如何なるものかと之を引見すること囊中のものを搜るが如し而して其定價發行所等を知るの至便あれば圖書陳列の共進會ともいふべし

年刊十二冊●菊判、紙數四十頁●寫眞版
二頁挿入●每號圖書目錄を添附す
●正價金參錢郵稅五厘●六冊金拾六錢
●拾貳冊金參拾錢●外に要郵稅

歷史書類

日本史

通史

● 大日本通史　東京帝國大學講師文學博士萩野由之君著　上卷背皮上綴　大判一〇〇〇頁　正價一圓五拾錢　小包送四百匁　全三册　中下卷近刊

● 帝國史略　法學博士有賀長雄君著　全一册背皮上綴　大判一〇三〇頁　正價一圓五十錢　小包送四百目

● 新撰日本外史　落合直文君　小中村義象君共著　繪付數名密滿挿入　全一册背皮上綴　大判一一〇二頁　正價一圓二十錢　小包送四百匁

● 日本歷史　文學博士萩野由之君著　中等教育　沿革地圖挿入　文部省檢定濟　上下二册背皮上綴　中判六七五頁　正價各五十五錢　郵稅各八錢

● 日本歷史要解　文學博士萩野由之君編述　中學教育　全一册洋布上綴　中判四二四頁　正價五十錢　郵稅六錢

● 日本歷史評林　文學博士萩野由之君編述　全一册洋布上綴　大判一九一二頁　正價一圓八十錢　小包送六百匁

● 日本歷史　文學士木寺柳次郎君著　▲特製本　洋布上綴　全一册洋紙綴　大判三七六頁　正價三十五錢　郵稅八錢　正價五十錢　郵稅十錢

● 日本文明史　文學士大町芳衛君著　▲特製本　洋布上綴　全一册洋紙綴　大判　頁　正價三十五錢　郵稅八錢　正價五十錢　郵稅十錢

● 大日本帝國史　松井柏軒君著　撰　全一册洋紙綴　大判五六四頁　正價四十錢　郵稅一二錢

● 通俗日本歷史　足立栗園君著　全一册洋紙綴　大判三三四頁　正價二十五錢　郵稅八錢

● 新撰日本小歷史　文學博士栗田寛君校閲　増田于信君著　西洋木版畫挿入　全一册洋紙綴　大判二一七頁　正價十五錢　郵稅六錢

● 日本歷史　幼年讀本　熊谷通山人著　堀田小古君寄畫　全一册洋紙綴　大判一四〇頁　正價十五錢　郵稅四錢

● 本朝通鑑　標記　學海大槻秘君著　全八十四册和綴　大判四五六二枚　正價十一圓　運送料五十錢

● 日本政記　明治新刻　全部木版　全十册和本上綴　中判一六九八頁　正價一圓六十錢　小包送四百匁

● 日本歷史問答　宮田修君著　新撰　全一册洋紙綴　小判二二八頁　正價二十錢　郵稅四錢

時代史

● 通俗明治歷史　坪谷善四郎君著　全一册洋紙綴　大判三五〇頁　正價二十五錢　郵稅八錢

● 德川太平記　南梁小宮山綏介君著　上下二册洋布上綴　大判　頁　正價各五十五錢　小包送四百匁

● 德川十五代史　前東京帝國大學教授內藤耻叟君著　全十二册洋紙綴　大判二九五二頁　正價一册廿五錢　郵稅一册六錢

● 奈良朝　文學士佐川臨風君著　寫眞挿入　全一册紙皮上綴　小判四四四頁　正價二十五錢　郵稅六錢

● 校註神皇正統記　內藤耻叟君校閲　大宮宗司君校註　全一册洋紙綴　大判二五八頁　正價二十五錢　郵稅六錢

荻野博士 小中村 落合三君校註
●太平記 全三册洋並製 中判 頁 正價各二十五錢 郵稅各三錢

文學士坂本健一君著
●日本風俗史 密畫挿入 全一册洋並製 大判 三四二頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

岸上操君編
◎通俗德川十五代史 全一册大判洋裝並製三三四頁 定價二十五錢 郵稅八錢 廉賣價金二十錢 郵稅八錢

文學士笹川臨風君著
◎元祿時勢粧 全一册小判擬皮上製二六〇頁 定價參十錢 郵稅六錢 同二十錢 郵稅六錢

外國史

通史

文學士史學專攻坂本健一君著
●世界史上卷 全二册 洋裝背皮上製 大判一〇八〇頁 正價一圓六十錢 小包送四百匁

全
●世界史下卷 洋裝背皮上製 大判 頁 正價 小包送

長谷川天溪君著
●通俗世界歷史 全一册洋並製 大判 三三四頁 正價廿五錢 郵稅八錢

澁谷遁山人著 中村不折君挿畫
●幼年讀本 世界歷史 全一册洋並製 大判 一三八頁 正價十五錢 郵稅四錢

文學士木寺柳次郎君著
●中等教育 東洋歷史 沿革地圖及密畫入 文部省檢定濟 全一册背皮上製 大判 二八七頁 正價八十錢 郵稅十二錢

文學士幸田成友君著
●東洋歷史 全一册洋並製 大判 三二四頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

松原岩五郎君著
●新撰 東洋歷史問答 全一册紙皮上製 小判 二三六頁 正價二十錢 郵稅四錢

文學士木寺柳次郎君著
●中等教育 西洋歷史 沿革地圖及密畫入 全一册背皮上製 大判 二六六頁 正價七十錢 郵稅十二錢

文學士吉國藤吉君著
●西洋歷史 全一册洋並製 大判 三四八頁 正價卅五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

長谷川誠也君著
●新撰 西洋歷史問答 全一册皮紙上製 小判 二四〇頁 正價二十錢 郵稅四錢

東京專門學校講師松平康國君著
●世界近世史 全一册洋布上製 大判 四二〇頁 正價一圓廿五錢 郵稅十二錢

米國ジャツトソン氏著 大内暢三君譯
●歐洲十九世紀史 全一册洋布上製 大判 四一八頁 正價一圓廿五錢 郵稅十二錢

文學士幸田成友君譯述
●十九世紀史 全一册洋並製 大判 四一〇頁 正價五十錢 郵稅十二錢

文學博士高山林次郎著
●世界文明史 全一册洋並製 大判 三七六頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五十錢 郵稅十錢

各國史

法學博士高田早苗君校閲 山本利喜雄君著
●露西亞史 沿革地圖挿入 全一册洋布上製 大判 四四〇頁 正價一圓廿五錢 郵稅十四錢

（六八）

露國ボリユー氏著　有賀長雄　鎌田榮吉兩君閱　林毅陸君譯
● 露西亞帝國　全一册背皮上綴　大判九〇六頁　正價二圓　郵稅二十錢

英國マッカアシー著　法學博士高田早苗外二君共譯
● 英國今代史　一名女皇之御宇　全一册上卷背皮上綴　大判一〇七六頁　正價二圓三十錢　小包送四百匁

朋友重京君閱　恒屋盛服君著　地圖挿入
● 朝鮮開化史　全一册洋布上綴　大判五六六頁　正價一圓　郵稅十四錢

文學士白河次郎　國府種德兩君共著
● 支那文明史　全一册洋並綴　大判三二六頁　正價三十五錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

法學士立作太郎君譯
● 最近之支那　全一册洋並綴　大判一六四頁　正價三十五錢　郵稅六錢

文學博士三島中洲君校閱　山名善讓君訓點
● 資治通鑑　全部木版　全七十册和上綴　大判五一二二枚　正價拾三圓　通運賃五十錢

● 標註 春秋左氏傳校本　全十五册和上綴　大判　正價二圓廿錢　小包送六百匁

● 點註 五代史　全八册和裝上綴　大判　正價一圓四十錢　郵稅十八錢

● 廿二史言行略　全六册和裝上綴　大判　正價一圓　郵稅十六錢

● 校訂 史記讀本　全六册和裝上綴　大判一三五三枚　正價三圓　小包送八百匁

城井錦庵君講述
● 史記列傳講義　全三册洋並綴　中判一七四三頁　正價各二十五錢　郵稅各八錢

● 箋國史標 十八史略評註　全七册和裝上綴　大判　正價一圓二十錢　郵稅二十錢

太田淳軒君講述
● 十八史略講義　全二册洋並綴　中判八八六頁　正價各廿五錢　郵稅各八錢

平井參堂君講述
● 戰國策講義　全二册洋並綴　中判八〇〇頁　正價各廿五錢　郵稅各八錢

增田貫君校閱　藤田久道君著
● 中等教育 支那史　全七册和裝上綴　中判四〇七頁　正價一圓　郵稅十錢

河上清君著
◎ 通俗獨逸歷史　全一册大判洋裝並製三三四頁　正價三十錢　郵稅八錢　廉價二十錢　郵稅八錢

戰史

紫山 川崎三郎君著　寫眞版畫數十葉挿入
● 日清戰史　全七册洋並綴　大判　頁　正價一册三十錢　郵稅一册八錢

陸軍大將野津道貫君序　藤野房次郎君著　寫眞版畫挿入
● 平壤包圍攻擊　全一册洋布上綴　大判七八二頁　正價七十錢　郵稅十八錢　▲分本製　洋並綴二册　一册正價三十錢　郵稅十八錢

海軍大將伊東祐亨君題辭　平田勝馬君著　寫眞銅版畫挿入
● 黃海大海戰　全一册洋布下綴　大判八三八頁　正價九十錢　郵稅二十錢　▲分本製洋並綴二册　一册正價四十錢　郵稅八錢

北京籠城者文學士服部宇之吉君著　寫眞銅版畫挿入
● 北京籠城日記　全一册洋並綴　大判一四一頁　正價十錢　郵稅四錢

比律賓 マリアノポンセ著　法學士宮本平九郎君譯述
● 南洋之風雲　全一册洋並綴　大判二一六頁　正價四十錢　郵稅六錢

川崎紫山君著
◎ 增補 西南戰史　全一册大判總クロース上製一三五〇頁　正價一圓七十錢　小包目方六百匁　廉價八十七錢　小包目方六百匁

澁江保君著 ◎普澳戰史 全一冊中判洋裝並製三二二頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

越山平三郎君著 ◎ナイル海戰史 全一冊中判並製二九六頁 正價十八錢 郵稅六錢 同十錢 郵稅六錢

澁江保君著 ◎波蘭衰亡戰史 全一冊中判洋裝並製三二六頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

仝上 ◎印度蠶食戰史 全一冊中判洋裝並製三五二頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

越山平三郎君譯述 ◎英米海戰史 全一冊中判洋裝並製三〇〇頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

柏軒 松井廣吉君著 ◎伊太利獨立戰史 全一冊中版洋裝並製三三〇頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

柳井録太郎君著 ◎希臘獨立戰史 全一冊中判洋裝並製二九七頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

澁江保君著 ◎フレデリック大王七年戰史 全一冊中判洋裝並製三四七頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

岸上操君譯述 ◎羅馬戰史 全一冊洋裝並製三二五頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

澁江保君著 ◎ピューニック戰史 全一冊中判洋裝並製三二八頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

澁江保君著 ◎歴山大王一統戰史 中判洋裝並製三一六頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

仝上 ◎希臘波斯戰史 全一冊中判洋裝並製三一六頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價七錢 郵稅六錢

傳記

日本

戸川殘花君著 ●三百諸侯 全一冊洋布上綴 大判 正價一圓二十錢 小包送六百匁

栗原亮一君 宇田友猪君共著 ●板垣退助君傳 全一冊洋布上綴 大判三八一頁 正價一圓 郵稅十二錢

太陽評論記者 鳥谷部春汀君著 ●明治人物評論 全一冊紙皮上綴 小判四二三頁 正價二十五錢 郵稅六錢

同 ●續明治人物評論 全一冊紙皮上綴 小判四四八頁 正價三十錢 郵稅六錢

鳥谷部春汀君著 ●明治人物小觀 全一冊紙皮上綴 中判四五二頁 正價 郵稅

勢多章之君編 ●明治名家古人評論（近衛公外諸名士が古今偉人を評論せし珍書） 全一冊紙皮上綴 小判二三四頁 正價二十五錢 郵稅四錢

中央新聞社編纂 ●名士の嗜好 全一冊紙皮上綴 小判三四六頁 正價二十五錢 郵稅四錢

無何有道人編 ●名士の平生 第三版 全一冊紙皮上綴 小判二四五頁 正價二十五錢 郵稅四錢

松井柏軒君著 ●上杉謙信 全一冊紙皮上綴 小判一三四頁 正價二十錢 郵稅四錢

幸德傳次郎君著 ●兆民先生 寫眞銅版挿入 全一冊洋並綴 大判一二五頁 正價二十錢 郵稅四錢

●明治豪傑譚　鈴木光次郎君編　全一册紙皮上製　小判三八五頁　正價三十錢　郵稅六錢

●明治閨秀美譚　鈴木光次郎君編　全一册洋並製　小判一七二頁　正價十二錢　郵稅二錢

●明治才媛美譚　熊田宗次郎君著　寫眞版十二葉挿入　全一册紙皮上製　中判六〇六頁　正價五十錢　郵稅八錢

●明治の令孃　讀賣新聞記者　關如來君著　全一册洋並製　中判　頁　正價二十五錢　郵稅四錢

●南木誌　中山利貞君著　全五册和並製　大判　正價七十五錢　郵稅八錢

●菅公談　伯爵大隈重信君講演　木版肖像入　全一册洋並製　大判一三〇頁　正價三十錢　郵稅四錢

●家庭教育歷史讀本 花の白雲　落合直文 小中村義象 兩君著　舊伯爵名家密藏入　全一册洋並製　大判一九二頁　正價十八錢　郵稅四錢
目次　●日本武尊の事蹟　●曾我兄弟の復讐　●神功皇后の事蹟　●護良親王の事蹟　●和氣清麿の事蹟　●菅原道眞の事蹟

●家庭教育歷史讀本 朧花月夜　落合直文 小中村義象 兩君著　舊伯爵名家密藏入　全一册洋並製　大判二一四頁　正價十八錢　郵稅四錢
目次　●源義家の事蹟　●佐々木高綱事蹟　●那須與一の事蹟　●平重盛の事蹟　●俊寛僧都の事蹟　●袈裟御前の事蹟　●靜御前の事蹟　●忠與夫人の事蹟

●家庭教育歷史讀本 紅葉の錦　落合直文 小中村義象 兩君著　舊伯爵名家密藏入　全一册洋並製　大判二一〇頁　正價十八錢　郵稅四錢
目次　●平敦盛の事蹟　●阿新丸の事蹟　●森蘭丸の事蹟　●藤原師賢の事蹟　●兒島高德の事蹟　●楠正成の事蹟　●加藤清正の事蹟

●家庭教育歷史讀本 枯野の雪　落合直文 小中村義象 兩君著　舊伯爵名家密藏入　全一册洋並製　大判二三六頁　正價十八錢　郵稅四錢
目次　●北畠親房の事蹟　●新田義貞の事蹟　●楠正行の事蹟　●赤穗義士の事蹟　●林子平の事蹟　●高山彦九郎事蹟

●三條實美公　依田學海君著　寺崎廣業君畫　全一册洋並製　大判一一四頁　正價十三錢　郵稅四錢

●島津齊彬公　春山鶴峯君著　中澤弘光君畫　全一册洋並製　大判一九四頁　正價十三錢　郵稅四錢

●近衛忠熙公　勢多章之君著　中村不折君畫　全一册洋並製　大判一三〇頁　正價十三錢　郵稅四錢

●水戶烈公　野口勝一君著　横山大觀君畫　全一册洋並製　大判一五六頁　正價十三錢　郵稅四錢

●白河樂翁公　中都秋香君著　富岡永洗君畫　全一册洋並製　大判一三四頁　正價十三錢　郵稅四錢

●井伊掃部頭　巖谷小波山人著　小島沖舟君畫　全一册洋並製　大判一二二頁　正價十三錢　郵稅四錢

●水野越州　中村二葉君著　小林永興君畫　全一册洋並製　大判一三〇頁　正價十三錢　郵稅四錢

●松平伊豆　法學士森山吐虹君　鈴木華邨君畫　全一册洋並製　大判一二〇頁　正價十三錢　郵稅四錢

●春日局　岸上質軒君著　菱田春草君畫　全一册洋並製　大判一五〇頁　正價十三錢　郵稅四錢

●佐久間象山　塚原澁柿君著　宮川春汀君畫　全一册洋並製　大判一一〇頁　正價十三錢　郵稅四錢

●藤田東湖　大和田建樹君著　中村不折君畫　全一册洋並製　大判一四八頁　正價十三錢　郵稅四錢

●西鄉隆盛　川崎紫山君著　水野年方君畫　全一册洋並製　大判一四八頁　正價十三錢　郵稅四錢

桐野利秋　春山育次郎君著　小坂象堂君畫　全一冊洋装大判　一八四頁　正價十三錢　郵税四錢

橋本左内　法學士桐生悠々君著　中川蘆舟君畫　全一冊洋装大判　一七〇頁　正價十三錢　郵税四錢

坂本龍馬　坂崎紫瀾君著　水野年方君畫　全一冊洋装大判　一九六頁　正價十三錢　郵税四錢

横井小楠　大野洒竹君著　中村不折君畫　全一冊洋装大判　一二二頁　正價十三錢　郵税四錢

高野長英　千河岸貫一君著　宮川春汀君畫　全一冊洋装大判　一三〇頁　正價十三錢　郵税四錢

渡邊華山　渡邊霞亭君著　筒井年峯君畫　全一冊洋装大判　一八二頁　正價十三錢　郵税四錢

釋月性　千河岸櫻所君著　宮川春汀君畫　全一冊洋装大判　一三四頁　正價十三錢　郵税四錢

平野國臣　文學士白河鯉洋君著　山中古洞君畫　全一冊洋装大判　一一六頁　正價十三錢　郵税四錢

周布政之助　堺枯川君著　高橋松亭君畫　全一冊洋装大判　一二四頁　正價十三錢　郵税四錢

河井繼之助　戸川殘花君著　梶田半古君畫　全一冊洋装大判　一三四頁　正價十三錢　郵税四錢

雲井龍雄　玉木懋園君著　齋藤栄白君畫　全一冊洋装大判　一五四頁　正價十三錢　郵税四錢

大鹽平八郎　堺紫山君著　中川蘆舟君畫　全一冊洋装大判　一五六頁　正價十三錢　郵税四錢

池大雅　田山花袋君著　下村觀山君畫　全一冊洋装大判　一四六頁　正價十三錢　郵税四錢

曲亭馬琴　饗庭篁村君著　下村觀山君畫　全一冊洋装大判　一一四頁　正價十三錢　郵税四錢

新井白石　文學士武島羽衣君著　山田敬中君畫　全一冊洋装大判　一三六頁　正價十三錢　郵税四錢

荻生徂徠　内田不知庵君著　中川蘆舟君畫　全一冊洋装大判　一三〇頁　正價十三錢　郵税四錢

貝原益軒　[illegible]著　宮川春汀君畫　全一冊洋装大判　一四六頁　正價十三錢　郵税四錢

中江藤樹　[illegible]君著　山中古洞君畫　全一冊洋装大判　一一四頁　正價十三錢　郵税四錢

熊澤蕃山　文學士幸田成友君著　水野年方君畫　全一冊洋装大判　一三六頁　正價十三錢　郵税四錢

野中兼山　北村香陽君著　遠藤耕溪君畫　全一冊洋装大判　一四八頁　正價十三錢　郵税四錢

小栗上野介　[illegible]之君著　山中古洞君畫　全一冊洋装大判　一三八頁　正價十三錢　郵税四錢

高島秋帆　[illegible]　福地源一郎君著　水野年方君畫　全一冊洋装大判　一七八頁　正價十三錢　郵税四錢

伊能忠敬　幸田[illegible]君著　富岡永洗君畫　全一冊洋装大判　一九四頁　正價十三錢　郵税四錢

間宮倫宗　文學士笹川臨風君著　山中古洞君畫　全一冊洋装大判　一二八頁　正價十三錢　郵税四錢

中濱萬次郎　石井研堂君著　遠藤耕溪君畫　全一冊洋装大判　一二八頁　正價十三錢　郵税四錢

錢屋五兵衛　法學士桐生悠々君著　富岡永洗君畫　第三版　全一冊洋装大判　一二八頁　正價十三錢　郵税四錢

書名	著者	體裁	正價	郵稅
山田長政	遲塚麗水君著 [illegible]君畫	全一冊 洋装 大判 一二八頁	十三錢	四錢
阿部伊勢守	熊田葦城君著	全一冊 洋装 大判 一二四頁	十三錢	四錢
松尾芭蕉	[illegible]君著	全一冊 洋装 大判 一一八頁	十三錢	四錢
木內宗吾	松原二十三階堂君著 宮川春汀君畫 彩色密畫挿入	全一冊 洋装 大判 一二八頁	十三錢	四錢
二宮尊德翁	幸田露伴君著 彩色密畫挿入	全一冊 和装 中判 一四〇頁	十二錢	四錢
近江聖人	村井弦齋君著 彩色密畫挿入	全一冊 和装 中判 一四三頁	十二錢	四錢
維新三傑	川崎紫山君著	全一冊 和装 中判 一三〇頁	十二錢	四錢
河村瑞賢	高橋太華君著	全一冊 和装 中判 一三五頁	十二錢	四錢
太閤秀吉	高橋太華君著	全一冊 和装 中判 一四〇頁	十二錢	四錢
德川家康	矢部五洲君著	全一冊 和装 中判 一五〇頁	十二錢	四錢
新太郎少將	高橋太華君著	全一冊 和装 中判 一八〇頁	十二錢	四錢
賴山陽	三宅青軒君著	全一冊 和装 中判 一一五頁	十二錢	四錢
上杉鷹山公	大橋乙羽君著 寺崎廣業君畫	全一冊 和装 中判 一五〇頁	十二錢	四錢

書名	著者	體裁	正價	郵稅
菅丞相	遲塚麗水君著	全一冊 和装 中判 一五〇頁	十二錢	四錢
日蓮上人	[illegible]君著	全一冊 和装 中判 一三二頁	十二錢	四錢
平賀源內	[illegible]君著	全一冊 和装 中判 一一八頁	十二錢	四錢
高山彥九郎	村上浪六君著	全一冊 和装 中判 一二六頁	十二錢	四錢
加藤清正	江見水蔭君著	全一冊 和装 中判 一二三頁	十二錢	四錢
德川吉宗	[illegible]君著	全一冊 洋装 大判 一二八頁	十三錢	四錢
石川丈山	田岡嶺雲君著	全一冊 洋装 大判 一一〇頁	十三錢	四錢
烈女お藤	藤本藤蔭君著	全一冊 洋装 大判 一二四頁	十三錢	四錢
林子平	松居眞玄君著	全一冊 洋装 大判 一三二頁	十三錢	四錢
塙檢校	長谷川天溪君著	全一冊 洋装 大判 一三八頁	十三錢	四錢
本居宣長	落合直文君著	全一冊 洋装 大判 一一四頁	十三錢	四錢
高田屋嘉兵衛	中村[illegible]君著	全一冊 洋装 大判 一四二頁	十三錢	四錢
大槻磐水	大槻如電君著	全一冊 洋装 大判 一五〇頁	十三錢	四錢

● 文學博士高山林次郎君著 少年史譚 **平相國** 全一册洋裝並綴 大判一四二頁 正價十五錢 郵稅四錢

● 文學士大町桂月君著 少年史譚 **鬼吉川** 全一册洋裝並綴 大判一四四頁 正價十五錢 郵稅四錢

● 文學士中内蝶二君著 少年史譚 **旭將軍** 全一册洋裝並綴 大判一三六頁 正價十五錢 郵稅四錢

● 國府犀東君著 少年史譚 **鎭西八郎** 全一册並洋綴 大判一三五頁 正價十五錢 郵稅四錢

● 村井弦齋君著 **紀文大盡** 彩色密畫挿入 全一册洋並綴 中判一五六頁 正價十二錢 郵稅四錢

● 原抱一庵主人君著 **大石良雄** 彩色密畫挿入 全一册和並綴 中判一二〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

● 宇田川文海君著 **契冲阿闍梨** 彩色密畫挿入 全一册和並綴 中判一一五頁 正價十二錢 郵稅四錢

◎ 法學博士阪谷芳郎君著 **青淵先生六十年史** 全二册大判總クロース上製二二一九頁 正價五圓 金壹圓五拾錢 小包日方一貫目 小包日方二貫目

◎ 千河岸貫一君編 **近世百傑傳** 小判摸皮上製五六七頁 正價五拾錢 郵稅六錢 廉價三十錢 郵稅六錢

◎ 坂崎紫瀾君著 **陸奥宗光** 大判總クロース上製三五六頁 正價五拾錢 郵稅八錢 廉價二十五錢 郵稅六錢

◎ 千河岸貫一君編 **續近世百傑傳** 小判摸皮上製四八八頁 正價四拾錢 郵稅六錢 廉價二十五錢 郵稅六錢

◎ 大橋乙羽君著 **藤侯實歷** 小判總クロース上製二四六頁 正價參拾錢 郵稅六錢 廉價十錢 郵稅六錢

◎ 伊藤侯、井上伯、山縣侯直話 **元勳談** 大判洋裝並製二〇二頁肖像入 正價三拾五錢 郵稅六錢 廉價二十錢 郵稅六錢

◎ 文學士笹川臨風君著 **遊俠傳** 小判摸皮上製二八八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢 廉價十錢 郵稅六錢

◎ 内藤燦聚君著 **近世大儒列傳** 上下二册 中判洋裝並製四〇二頁 正價一册拾貳錢 郵稅六錢 廉價一册五錢 郵稅六錢

海外

● 文學博士高山林次郎君著 下村觀山君畫 **釋迦** 全一册洋並綴 大判一二八頁 正價十三錢 郵稅四錢

● 文學士上田敏君著 中村不折君畫 **耶蘇** 全一册洋並綴 大判一四二頁 正價十三錢 郵稅四錢

● 文學士坂本蠡舟君著 北蓮藏君畫 **マホメット** 全一册洋並綴 大判一四八頁 正價十三錢 郵稅四錢

● 文學士吉國藤吉君著 横山大觀君畫 **孔子** 全一册洋並綴 大判一四〇頁 正價十三錢 郵稅四錢

● 文學士白河鯉洋君著 宮川春汀君畫 **王陽明** 全一册洋並綴 大判一五二頁 正價十三錢 郵稅四錢

● 法學士永井惟直君著 宮川春汀君畫 **孟子** 全一册洋並綴 大判一四〇頁 正價十三錢 郵稅四錢

● 文學士三浦菊太郎君著 北蓮藏君畫 **漢高祖** 全一册洋並綴 大判一四〇頁 正價十三錢 郵稅四錢

● 文學士笹川種郎君著 渡邊金秋君畫 **岳飛** 全一册洋並綴 大判一三二頁 正價十三錢 郵稅四錢

● 法學士安東俊明君著 高橋松亭君畫 **孔明** 全一册洋並綴 大判一九四頁 正價十三錢 郵稅四錢

●成吉思汗　法學士太田菅濱君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一四四頁　正價十三錢　郵税四錢

●彼得大帝　法學士佐藤信安君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一三六頁　正價十三錢　郵税四錢

●歷山大王　文學士幸田成友君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一三六頁　正價十三錢　郵税四錢

●那破翁　文學士土井晩翠君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一三四頁　正價十三錢　郵税四錢

●華聖頓　文學士福山義春君著　山中古洞君畫　全一冊洋並製　大頁一六八頁　正價十三錢　郵税四錢

●虞蘭得將軍　法學士布施謙太郎君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一八八頁　正價十三錢　郵税四錢

●ゴルドン將軍　法學士赤松紫川君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一三二頁　正價十三錢　郵税四錢

●ハンニバル　文學士大町桂月君著　渡邊審也君畫　全一冊洋並製　大判一三二頁　正價十三錢　郵税四錢

●子ルソン　法學士島田文之助君著　北蓮藏君畫　全一冊洋並製　大判一五二頁　正價十三錢　郵税四錢

●ガリバルヂー　法學士序崎昌君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一三六頁　正價十三錢　郵税四錢

●ガーフ井ールド　文學士酒井小太郎君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一六六頁　正價十三錢　郵税四錢

●クロンウエル　法學士松岡國男君著　遠藤耕溪君畫　全一冊洋並製　大判一四六頁　正價十三錢　郵税四錢

●グラッドストン　法學士近松宇太郎君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一八二頁　正價十三錢　郵税四錢

●ソクラテス　文學士久保天隨君著　中村不折君畫　全一冊洋並製　大判一五四頁　正價十三錢　郵税四錢

●ウエーリントン　文學士高木得介君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一六六頁　正價十三錢　郵税四錢

●クリスピー　法學士名尾良辰君著　遠藤耕溪君畫　全一冊洋並製　大判一七〇頁　正價十三錢　郵税四錢

●メッテルニッヒ　法學士森山守次君著　宮川春汀君畫　全一冊洋並製　大判一八五頁　正價十三錢　郵税四錢

●カピテンクック　法學士谷野格君著　佐藤紫水君畫　全一冊洋並製　大判一四八頁　正價十三錢　郵税四錢

●ビスマーク　法學士笹川潔君著　小坂象堂君畫　全一冊洋並製　大判一五三頁　正價十三錢　郵税四錢

●シエクスピーア　法學士中村可雄君著　高橋松亭君畫　全一冊洋並製　大判一三四頁　正價十三錢　郵税四錢

●デモスセ子ス　文學士十時彌君著　山中古洞君畫　全一冊洋並製　大判一三八頁　正價十三錢　郵税四錢

●コロンブス　法學士桐生政次君著　白瀧幾之助君畫　全一冊洋並製　大判一四〇頁　正價十三錢　郵税四錢

●ジヤンダーク　文學士中内蝶二君著　全一冊洋並製　大判一三〇頁　正價十三錢　郵税四錢

●シーザー　文學士柿山清君著　全一冊洋並製　大判一三六頁　正價十三錢　郵税四錢

●チヤーレス大王　法學士中大路春江君著　全一冊洋並製　大判一六〇頁　正價十三錢　郵税四錢

●フランクリン　文學士熊谷五郎君著　全一冊洋並製　大判一三四頁　正價十三錢　郵税四錢

●ニユートン　文學士三好物外君著　全一册洋並綴　大判一六九頁　正價十三錢　郵稅四錢

●カーギー　慶應義塾教授菅綠陰君著　合一册紙皮上綴　中判一五四頁　正價三十五錢　郵稅四錢

●近世世界十偉人　著名文學政治大家合著　全一册紙皮上綴　小判八八二頁　正價五十錢　郵稅八錢

●東西二十四傑　著名文學政治大家合著　全一册紙皮上綴　大判五六二頁　正價三十五錢　郵稅六錢

●開國先登提督彼理　從二位伯爵勝安芳君題辭　米山梅吉君著　全一册洋並綴　大判一九一頁　正價三十錢　郵稅六錢

◎菩提達磨　國府犀東君著　大判洋裝並製一六二頁　正價三十錢　郵稅六錢　廉價十五錢　郵稅六錢

◎英米文人傳　大和田建樹君著　中判洋裝並製一九二頁　正價十二錢　郵稅六錢　廉價六錢　郵稅六錢

◎三大革命人巨人パーク　德富蘇峯君、志賀重昂君序文、雲山迎兵衛君譯述　小判裝並製二四四頁　正價十錢　郵稅四錢　廉價五錢　郵稅六錢

◎洋學大家列傳　南梁小宮山綏介君編　正價十錢　郵稅四錢　廉價五錢　郵稅六錢

◎六大家列傳　鐵山人、霧山人共撰　小判洋裝並製一八六頁　正價十錢　郵稅四錢　廉價五錢　郵稅六錢

◎英傑の典型　萩原消遲君譯述　小判洋裝並製一七九頁　正價十錢　郵稅四錢　廉價五錢　郵稅六錢

地理書類

日本

●中等教育地理學教科書　理學士佐藤傳藏君著　全二册背皮洋綴　大判四二四頁　正價五十錢　郵稅各十錢

●日本新地理　理學士佐藤傳藏君著　全一册洋並綴　大判三一三頁　正價三十五錢　郵稅十八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

●通俗日本地理　大和田建樹君著　全一册洋並綴　大判二九六頁　正價三十錢　郵稅八錢

●幼年讀本日本地理　巖谷小波君著　全一册洋並綴　大判一一八頁　正價十五錢　郵稅四錢

●新選日本地理問答　上村左川君著　全一册紙皮上綴　小判二三八頁　正價二十錢　郵稅四錢

●太陽紀念增刊海の日本　全一册洋並製　大判太陽皆紙數　正價六十錢　郵稅六錢
▲特製本　紙皮上綴　正價八十錢　郵稅七錢

海外

理學士佐藤傳藏君著
萬國新地理
全一册洋並綴 大判三三七頁 正價三十五錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵税十錢

澁江保君著
通俗世界地理
全一册洋並綴 大判三四〇頁 正價三十錢 郵税八錢

武田櫻桃四郎君著
新選 **世界地理問答**
全一册紙皮上綴 大判二八二頁 正價二十錢 郵税四錢

巖谷小波君著
◎**世界地理**
大判洋裝並製二二〇頁 正價拾五錢 郵税四錢 廉賣價十錢

地學

農學士志賀重昂君著
地理學講義 統計表挿入
全一册洋並綴 中版一六二頁 正價三十五錢 郵税四錢

農學士志賀重昂君著
日本風景論 密畫挿入
全一册洋並綴 大判二九八頁 正價五十錢 郵税十錢

農學士志賀重昂君著
河及湖澤 密畫挿入
全一册洋並綴 大判二二八頁 正價四十錢 郵税六錢

學習院敎授峯是三郎君著
中等敎育 **新編地文學**
全一册洋並綴 中判四〇〇頁 正價五十錢 郵税八錢

理學士佐藤傳藏君著
地質學
全一册洋並綴 大判三三五頁 正價三十五錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵税十錢

理學博士横山又次郎君著
地學概論
全一册洋布上綴 大判二六九頁 正價九十錢 郵税六錢

地圖

理學士佐藤傳藏君著
中等敎育 **日本地圖** 寫眞版三十二葉挿入
全一册洋上綴 大判七〇頁 正價四十五錢 郵税八錢

理學士佐藤傳藏君著
中等敎育 **萬國地圖** 寫眞版四十葉挿入
全一册洋上綴 大判七九頁 正價六十錢 郵税八錢

小宮寛制君編
日本詳密全圖（統計表付）
全一册洋上綴 中判三五二頁 正價壹圓二錢 郵税十錢

日本紀行

●増補 千山萬水　大橋乙羽君著　寫眞版二十八葉挿入　全一冊 洋布上製 小判 七〇二頁　正價五十錢 郵税十錢

●續千山萬水　大橋乙羽君著　寫眞版二十八葉挿入　全一冊 洋布上製 小判 六五〇頁　正價五十錢 郵税十錢

●耶馬溪　大橋乙羽君著　彩色美麗寫眞版五十葉挿入　全一冊 洋布上製 小判 一五五頁　正價四十錢 郵税四錢

●一簑一笠　大町桂月君著　寫眞版八葉挿入　全一冊 紙皮上製 小判 三七六頁　正價三十錢 郵税六錢

●南船北馬　田山花袋君著　寫眞銅版十六葉挿入　全一冊 紙皮上製 小判 五〇〇頁　正價四十錢 郵税六錢

●枕頭山水　幸田露伴君著　全一冊 洋並製 中判 二二四頁　正價十五錢 郵税四錢

●紀行文集　大橋乙羽君編　密畫二十葉挿入　全一冊 背皮上製 中判 一〇〇六頁　正價六十錢 郵税十六錢

●續紀行文集　岸上質軒君編　全一冊 背皮上製 中判 一〇三四頁　正價六十錢 郵税十六錢

●續々紀行文集　岸上質軒君編　全一冊 背皮上製 中判 一〇〇六頁　正價六十錢 郵税十六錢

●紀行文選　大和田建樹君著　全一冊 洋並製 大判 一六〇頁　正價十五錢 郵税六錢

◎續南船北馬　田山花袋君著　小判 模皮上製 五一六頁　正價四十錢 郵税六錢　廉價二十五錢 郵税六錢

◎檜木笠　文學士久保天隨君著　小判 模皮上製 五〇〇頁　正價四十錢 郵税六錢　廉價廿五錢 郵税六錢

海外紀行

●歐山米水　大橋乙羽君著　彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入　全一冊 特別上製 大判 一七〇頁　正價一圓五十錢 郵税八錢

●歐米小觀　大橋乙羽君著　寫眞版　全一冊 洋布上製 小判 二六二頁　正價四十錢 郵税四錢

●歐米漫遊雜記　濱田米吉君著　全一冊 紙皮上製 中判 四二四頁　正價四十五錢 郵税六錢

●大英國漫遊實記　水田榮雄君著　寫眞版挿入　全一冊 皮紙上製 中判 七〇〇頁　正價七十錢 郵税十錢

●米國漫遊雜記　松井廣吉君著　寫眞版十六枚挿入　全一冊 紙皮上製 中判 二八六頁　正價三十八錢 郵税六錢

●米國渡航案內　飯島榮太郎君著　寫眞版挿入　全一冊 紙皮上製 中判 三七二頁　正價四十錢 郵税六錢

●清俗紀聞　中川忠君輯　木版密畫挿入　全六冊 和上製 大判 五六二頁　正價壹圓 郵税十四錢

◎支那漫遊 燕山楚水　内藤湖南君著　中判 模皮上製 三三八頁　正價四十五錢 郵税六錢　廉價廿七錢 郵税六錢

◎西伯利亞漫遊 白山黑水　文學士石澤發身君著　中判 模皮上製 三二六頁　正價四十五錢 郵税六錢　廉價廿七錢 郵税六錢

◎**淸國一班** 四島真爾君著
小判總クロース上製二五〇頁 正價二十五錢 郵稅六錢 廉賣價十五錢 郵稅六錢

◎**歐洲巡遊通信** 羽化仙人譯述
小判洋裝並製四〇〇頁 上 正價一册十錢 下 郵稅一册四錢 廉賣價一册五錢 郵稅一册四錢

名所案內

●**日本名勝地誌** 野崎左文君著 寫眞版三十二枚挿入
全十二册洋並綴 中判五一〇〇頁 正價一册三十錢 郵稅一册八錢

●**改正漫遊案內** 野崎左文君著 寫眞版三十二枚挿入
全一册洋布上綴 小判四八五頁 正價四十錢 郵稅八錢

●**旅行案內** 大橋乙羽君著 彩色木版寫眞版挿入
全一册洋並綴 大判二五五頁 正價二十五錢 郵稅六錢

●**增訂日本鐵道線路案內記** 日本鐵道會社編纂
全一册紙紙皮綴 中判五七六頁 正價四十五錢 郵稅十四錢

●**本派本願寺名所圖會** 石倉重繼君著 寫眞銅版三十四枚入
全一册並綴正價六十錢 大判三九四頁郵稅十錢

●**大谷派本願寺名所圖會** 石倉重繼君著 寫眞銅版數十葉挿入
洋並製大判二二八頁全一册 正價四十錢 郵稅六錢

●**佛光寺名所圖會** 石倉翠葉君著 寫眞銅版十六葉挿入
全一册洋並綴 大判一〇八頁 正價二十五錢 郵稅四錢

●**日光名所圖會** 石倉翠葉君著 寫眞銅版二十四葉挿入
全一册洋並綴 大判五一〇頁 正價六十五錢 郵稅十二錢

●**江戶名所圖繪** 長谷川雪旦君畵
全廿册和上綴 大判 正價五圓 小包一貫三百匁

●**江戶名所花曆** 長谷川雪旦君畵
全四册和上綴 大判一五六頁 正價四十錢 郵稅六錢

●**東都歲事記** 長谷川雪旦君畵
全五册和上綴 大判 正價六十五錢 郵稅六錢

●**木曾街道圖繪** 長谷川雪旦君畵
全二册和上綴 大判 正價三十錢 郵稅四錢

●**東京** 博文館編輯局編 彩色木版及寫眞版挿入
全一册洋並綴 大判三二〇頁 正價二十五錢 郵稅二錢五厘

●**京都と奈良** 博文館編輯局編 彩色木版及寫眞版挿入
全一册洋並綴 大判三二〇頁 正價二十五錢 郵稅二錢五厘

●**大阪と神戶** 全 木版刷綿繪及寫眞銅版挿入
全一册洋並綴 大判三二〇頁 正價二十五錢 郵稅二錢五厘

●**名古屋と伊勢** 全 木版刷綿繪及寫眞銅版挿入
全一册洋並綴 大判三二〇頁 正價二十五錢 郵稅二錢五厘

◎**東北西南探涼案內** 萬朝報探涼軍記者合著
中判模皮上製七〇九頁 正價六十錢 郵稅十錢 廉賣價三十錢 郵稅十錢

農業書類

農業

著者	書名	體裁	頁數	定價・郵稅
農學博士横井時敬君外七農學士合著	●農學大全	全一冊背皮上綴	大判一五八六頁	正價二圓五十錢 小包送六百匁
農學博士稻垣乙丙君著	●增訂農學入門 合本	全一冊和並綴	大判三七二頁	正價三十五錢 郵稅八錢
	●仝（分本）卷一	全一冊和並綴	大判一一〇頁	正價十一錢 郵稅四錢
	●仝（分本）卷二	全一冊和並綴	大判一二一頁	正價十二錢 郵稅四錢
	●仝（分本）卷三	全一冊和並綴	大判一四二頁	正價十五錢 郵稅四錢
農學博士横井時敬君著	●農業讀本	上下二冊和並綴	大判二五〇頁	正價各十四錢 郵稅各四錢
農學博士稻垣乙丙君著	●初等作物通論	全一冊洋布上綴	大判一八四頁	正價五十錢 郵稅八錢
農學博士稻垣乙丙君著	●農學階梯	全一冊背皮上綴	大判三九三頁	正價七十五錢 郵稅十錢
農學士伊藤悌藏君著	●農學講習全書	全一冊洋並綴	大判三三四頁	正價四十五錢 郵稅八錢
農學士大内建君著	●中等敎育農學通論	全一冊背皮上綴	中判六二四頁	正價九十錢 郵稅十錢
農學博士横井時敬君校閲 農學士井上正賀君著	●農學初步	全一冊洋並綴	大判一七〇頁	正價二十錢 郵稅六錢
農學士恩田鐵彌君著	●農學汎論	全一冊洋並綴	大判三五二頁	正價三十五錢 郵稅八錢
	▲特製本	洋布上綴		正價五十錢 郵稅十錢
農學博士横井時敬君著	●農業汎論	全一冊洋並綴	大判二〇四頁	正價十五錢 郵稅六錢
農學士池田昇三君著	●農業須知	全一冊洋並綴	大判三〇六頁	正價十五錢 郵稅六錢
茅原茂君著 寫眞版及彩色寫畵挿入	●農業大意	全一冊洋並綴	大判二四二頁	正價廿五錢 郵稅六錢
農學博士横井時敬君 農學士澤村眞君合著	●農業經濟學	全一冊洋並綴	大判三五四頁	正價卅五錢 郵稅八錢
	▲特製本	洋布上綴		正價五十錢 郵稅十錢
農學士今關常次郎君著	●農業經濟篇	全一冊洋並綴	大判二二五頁	正價十五錢 郵稅六錢
農學士西村榮十郎君著	●農用器具學	全一冊洋並綴	大判三二二頁	正價卅五錢 郵稅八錢
	▲特製本	洋布上綴		正價五十錢 郵稅十錢
農學博士稻垣乙丙君著	●植物營養論	全一冊洋並綴	大判三四六頁	正價卅五錢 郵稅八錢
	▲特製本	洋布上綴		正價五十錢 郵稅十錢
農學士佐々木祐太郎君著	●氣候及土壤論	全一冊洋並綴	大判三四六頁	正價卅五錢 郵稅八錢
	▲特製本	洋布上綴		正價五十錢 郵稅十錢
農學士中村鼎君著	●土壤改良篇	全一冊洋並綴	大判二〇〇頁	正價十五錢 郵稅六錢

栽培及園藝

農學士上野英三郎同有働良夫君著
●土地改良論　全一冊洋裝上製　大判三一二頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

佐賀縣農學校長農學士木下義直君著
●肥料學　全一冊洋裝上製　大判三三〇頁　正價卅五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

農學士原熙君著
●肥料篇　全一冊洋裝上製　大判二三一頁　正價十五錢　郵稅六錢

農學士井上正賀君著
●黴菌學　全一冊洋裝上製　大判三四〇頁　正價卅五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

坪谷善四郎君著
●農工書簡文　寫眞版及彩色木版畫挿入　全一冊洋裝上製　大判二五五頁　正價廿五錢　郵稅六錢

農學博士稻垣乙丙君著
村落學校補習科用
●農業算術　全一冊洋裝上製　中判一五〇頁　正價八錢　郵稅二錢

農學士石阪橘樹君著
●農政學　全一冊洋裝上製　大判三二〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

農學士井上正賀君著
●農藝化學　全一冊洋裝上製　大判三一五頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

農科大學教授農學博士橫井時敬君著
●栽培汎論　全一冊洋裝上製　大判三五八頁　正價卅五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

農學士田中節三郎君著
●栽培各論　全一冊洋裝上製　大判四〇〇頁　正價卅五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

農學士堀尾鉄作君著
●栽培篇　全二冊洋裝上製　大判四五〇頁　正價各十五錢　郵稅各六錢

農學士高田鑑三君著
●作物篇　全一冊洋裝上製　大判二一一頁　正價十五錢　郵稅六錢

農學士恩田鐵彌君著
●稻作改良法　石版細圖挿入　全一冊洋裝上製　大判二四〇頁　正價三十五錢　郵稅六錢

農學士楠原正三君著
●米麥栽培書　全一冊洋裝上製　大判一六〇頁　正價二十錢　郵稅四錢

農學士楠原正三君著
●米麥篇　全一冊洋裝上製　大判一九五頁　正價十五錢　郵稅六錢

福羽逸人君著
●蔬菜栽培法　全一冊洋裝上製　大判五四〇頁　正價七十錢　郵稅十二錢

福羽逸人君著
●果樹栽培全書　全四冊洋裝上製　大判六七四頁　正價一圓五錢　郵稅各六錢
▲正價　卷ノ一　三十錢　卷ノ二、三、四各二十五錢

農學士恩田鐵彌君著
安藤廉吉君著
●實用苹果栽培書　寫眞版挿入　全一冊洋裝上製　大判一三二頁　正價二十錢　郵稅四錢

●果樹と蔬菜　全一冊洋裝上製　大判二五八頁　正價二十五錢　郵稅六錢

大橋又太郎君著
●住居と園藝　全一冊洋裝上製　大判二五八頁　正價二十五錢　郵稅六錢

農學士高橋久三郎君著
園藝通論
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢
全一冊洋並綴 大判 頁 正價三十五錢 郵稅八錢

東京農學園主江原春夢君著
果樹草花盆栽庭造 **園藝全書**
石版色摺密畫十三葉挿入
全一冊洋並綴 大判 四五二頁 正價六十錢 郵稅八錢

中島信義君著
草木實驗 **盆栽仕立秘法**
全一冊洋並綴 大判 一八一頁 正價二十五錢 郵稅六錢

農學士小島銀吉君著
作物病害篇
全一冊洋並綴 大判 二四二頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學博士玉利喜造君校閲
川上善兵衛君著
葡萄栽培書
大判寫眞版入洋裝並製二三五頁
正價六十錢 廉賣價金廿五錢
郵稅八錢 郵稅八錢

農産製造

農學士樋巖君著
農産製造學
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢
全一冊洋並綴 大判 三四五頁 正價三十五錢 郵稅八錢

農學士今關常次郎君著
農産製造篇
全一冊洋並綴 大判 二五三頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士井上正賀君著
日用化學
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢
全一冊洋並綴 大判 三二四頁 正價三十五錢 郵稅八錢

農學士石阪橘樹君著
製茶篇
全一冊洋並綴 中判 三五八頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士奥村順四郎君編
烟草篇
全一冊洋並綴 中判 三〇〇頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士石井淳二郎君編
砂糖篇
全一冊洋並綴 中判 三六一頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士西村榮十郎君編
味噌醬油篇
全一冊洋並綴 中判 三三〇頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士矢本久太郎君編
日本酒釀造法
全一冊洋並綴 中判 三〇八頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士矢部規矩治君編
西洋酒釀造法
全一冊洋並綴 中判 三五一頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士石阪橘樹君著
日用品製造篇
全一冊洋並綴 中判 二八二頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士石阪橘樹君著
廢物利用篇
全一冊洋並綴 中判 三三七頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士大工原銀太郎君著
菜食篇
全一冊洋並綴 中判 二八二頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士辻暢太郎君著
肉食篇
全一冊洋並綴 中判 三八二頁 正價十六錢 郵稅六錢

農學士塚本〻喜君著
飲料篇
全一冊洋並綴 中判 三三六頁 正價十五錢 郵稅六錢

農學士山下脇人君著
實用分析術
全一冊洋並綴 中判 三〇二頁 正價十五錢 郵稅六錢

畜産及水産

● 畜産汎論　農學士高[illegible]捷恒君著　全一册洋並製　大判三二〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

● 畜産各論　農學士田口晋吉君著　全一册洋並製　大判三五〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

● 養畜篇　農學士原熙君著　全一册洋並製　大判二二一頁　正價十五錢　郵稅六錢

● 獸醫篇　獸醫學士内村兵藏君著　全二册洋並製　大判三八五頁　正價各十五錢　郵稅各六錢

● 狩獵と養鷄　田村松魚君著　寫眞版挿入　全一册洋並製　大判二三〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

● 家禽新書　農學士淵尾鍋吉校閲　廣谷　高橋安亮譯述　全一册洋並製　中判二五五頁　正價十八錢　郵稅四錢

● 家禽學　農學士月田藤三郎君著　全一册洋並製　大判三二二頁　正價三十五錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

● 水産學大意　關澤明清君校閲　竹中邦香君著　全一册洋並製　大判二五五頁　正價十五錢　郵稅六錢

蠶業

● 蠶業通論　農學士本多岩次郎君校閲　三谷徹君　池田榮太郎君共著　全一册洋並製　大判二五二頁　正價三十錢　郵稅六錢

● 養蠶手引草　佐々木滕太郎君著　全一册洋並製　大判一八六頁　正價三十錢　郵稅六錢

● 蠶業篇　農學士高田鑑三君著　全一册洋並製　大判二一三頁　正價十五錢　郵稅六錢

● 養蠶と製絲　横山源之助君著　寫眞版挿入　全一册洋並製　大判二四〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

● 蠶業汎論　農學博士横井時敬君校閲　吉池慶正君著　全一册洋並製　中判二二四頁　正價十五錢　郵稅四錢

● 栽桑篇　農學博士横井時敬君校閲　吉池慶正君著　全一册洋並製　中判二八〇頁　正價十五錢　郵稅四錢

● 栽桑新論　池田榮太郎君著　全一册洋並製　大判二五〇頁　正價三十錢　郵稅七錢

● 桑樹病害論　岩淵今介君著　全一册洋並製　大判二四五頁　正價三十錢　郵稅六錢

● 桑樹栽培全書　農學士石渡繁胤君校閲　池田榮太郎君著　全一册洋布上製　大判凡五百頁　正價一圓廿五錢　郵稅十八錢

● 養蠶篇　農學博士横井時敬君校閲　吉池慶正君著　全二册洋並製　中判四五〇頁　正價各十五錢　郵稅四錢

● 製絲篇　農學士横井時敬君校閲　吉池慶正君著　上下二册洋並製　中判五六〇頁　正價各十五錢　郵稅各四錢

鎌田實也君著
●**生絲檢查論** 全一冊洋裝綴 大判二五〇頁 正價三十錢 郵稅六錢

松下憲三郎君著木版細圖數十個挿入
●**蠶躰解剖論** 全一冊洋裝綴 大判二三二頁 正價三十錢 郵稅六錢

三谷徹君著
●**殺蛹乾繭論** 全一冊洋裝綴 大判二五〇頁 正價三十錢 郵稅六錢

農學士井上正賀君著
●**養蠶及製絲論** 全一冊洋裝綴 大判三三八頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

岩瀬平介君著
●**蠶病論** 全一冊洋裝綴 大判二四六頁 正價三十錢 郵稅六錢

鎌田實也君著
●**蠶業經濟論** 全一冊洋裝綴 大判二九二頁 正價三十錢 郵稅六錢

農商務省蠶業講習所技師 留月勘爲君著
◎**育蠶要錄** 小判總クロース上製三三八頁 正價三十五錢 郵稅四錢 廉價二十錢 郵稅四錢

林業

林學士奥田貞衛君著
●**森林學** 全一冊洋裝綴 大判三二四頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

林學士鈴木審三君著
●**林業篇** 全一冊洋裝綴 大判二〇六頁 正價十五錢 郵稅六錢

林學博士本多靜六君著
●**提要造林學** 全一冊洋裝綴 大判三五三頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

林學士白杵永次郎君著
●**造林學** 全一冊洋裝綴 大判二五二頁 正價十五錢 郵稅六錢

林學士新島善直君著
●**森林保護學** 全一冊洋裝綴 大判三八二頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

林學士白杵永次郎君著
●**林産物製造法** 全二冊洋裝綴 大判四〇二頁 正價各十五錢 郵稅各六錢

林學士柴田榮吉君著 寫眞版挿入
●**日本山林一斑** 全一冊洋裝綴 大判一三二頁 正價二十五錢 郵稅四錢

法學士田中次郎君閲 市原虎松君著
◎**國有林野法要義** 大判洋裝並綴製二一七頁 正價三十五錢 郵稅六錢 廉賣價十五錢 郵稅六錢

商業書類

商業

- ●商業實踐法　高等商業學校教授瓶山錠三君著　全一册紙皮上綴　大判　六八〇頁　正價七十五錢　郵稅十四錢
- ●商業經濟學　法學士淸水泰吉君著　▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅八錢　全一册洋並綴　大判　三二五頁　正價三十五錢　郵稅八錢
- ●商業大意　松本重太郎君序文　森一兵君著　寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判　二四〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- ●商業教科書　天城安政君著　全一册洋並綴　中判　六七〇頁　正價四十五錢　郵稅十錢
- ●商業讀本　安田安政君書　全三册洋並綴　大判　六〇〇頁　正價各十三錢　郵稅各六錢
- ●中等教育世界商業史　公爵近衞篤麿公題辭　六條隆吉君　近藤千吉君合著　全一册洋並綴　中判　五〇五頁　正價三十錢　郵稅八錢
- ●商工地理學　法學士永井惟直君著　▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢　全一册洋並綴　大判　三六二頁　正價三十五錢　郵稅八錢
- ●新式商業簿記全書　高等商業學校卒業山本邦之助君　田村八二合著　全一册洋並綴　大判　三四〇頁　正價四十錢　郵稅八錢
- ●通俗商業簿記　高橋邦二郎君著　全一册洋並綴　大判　三三〇頁　正價二十五錢　郵稅八錢
- ●速記術　若林玵藏君著　全一册洋紙皮上綴　中判　一三二頁　正價四十錢　郵稅四錢
- ●商家書翰文　大倉喜八郎君題辭　森一兵君著　彩色木版寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判　二四五頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- ●外國貿易案內　高等商業學校卒業佐藤適君著　寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判　二六〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- ●南淸貿易　小山松溪君著　彩色地圖挿入　全一册洋並綴　大判　二六〇頁　正價五十五錢　郵稅六錢
- ●米商寶函　平田純一郎君著　全一册洋並綴　小判　二九〇頁　正價三十錢　郵稅六錢
- ●致富要訣　若尾逸平君題字　森一兵君著　寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判　二三六頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- ●金融機關金銭能散聚（合本）　法學博士天野爲之君序　坂牧勇助君譯述　全一册洋並綴　中判　五〇〇頁　正價十八錢　郵稅六錢
- ●銀行法規書式判決例　大山五郎君　加藤武勇君共編　全一册洋並綴大判三二三頁　正價五十錢　郵稅八錢　▲特製本　洋布上綴　正價六十五錢　郵稅十錢
- ●銀行實踐法　增井增次郎君著　全一册洋並綴　大判　五一二頁　正價六十錢　郵稅十錢
- ●銀行政策　ドクトル岡崎遠光君著　全一册洋布上綴　大判　四一八一頁　正價一圓　郵稅十二錢
- ●會社銀行實務案內　森一兵君著　彩色木版寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判　二六一頁　正價二十五錢　郵稅六錢

高等商業學校卒業生 瀧川淑澄君著
●通俗銀行簿記
第三版 全一冊洋並製 正價二十五錢
大判 三四六頁 郵稅八錢

高等商業學校卒業生 高橋邦次郎君著
●通俗會社簿記
全一冊洋並製 正價二十五錢
大判 三六八頁 郵稅八錢

法學士 勝部國臣君著
●實用手形法釋義
▲特製本 洋布上製
全一冊洋並製 正價三十錢
大判 二〇五頁 郵稅六錢
正價四十錢 郵稅六錢

法學士 桐生政次君著
●世界商工業史
▲特製本 洋布上製
全一冊洋並製 正價四十五錢
大判 二九二頁 郵稅八錢
正價六十錢 郵稅十錢

白耳義商業學士 飯田旗郎君著
●商業汎論
▲特製本 洋布上製
全一冊洋並製 正價五十錢
大判 三六〇頁 郵稅八錢
正價六十五錢 郵稅十錢

法學士 樋野禮助君著
●國際貿易論
▲特製本 洋布上製
全一冊洋並製 正價四十五錢
大判 二八八頁 郵稅六錢
正價六十錢 郵稅十錢

法學士 勝部國臣君著
●實用商業會話
全一冊洋布上製 正價三十五錢
小判 頁 郵稅六錢

法學士 森山守次君著
●歐米商業實勢
▲特製本 洋布上製
全一冊洋並製 正價四十五錢
大判 三六〇頁 郵稅六錢
正價六十錢 郵稅八錢

寒澤振作君著
●商業文範
全一冊和裝並製 正價二十五錢
大判 一八二頁 郵稅六錢

高等商業學校教授 水島鐵也君校閱
濱田四郎君著
●補習教育 商業入門 卷ノ一
全一冊和裝並製 正價十八錢
大判 一四八頁 郵稅四錢

濱田四郎君著
●實用廣告法
全一冊紙皮上製 正價二十五錢
小判 一六〇頁 郵稅四錢

米國前大藏次官フランク・エー・ヴァンダーリック君著 齋藤修一郎君譯
●米國商工大勢論
全一冊洋並製 正價二十五錢
大判 一六四頁 郵稅六錢

法學士 野口弘毅君著
●銀行新論 附外國爲替
▲特製本 洋布上製
全一冊洋並製 正價三十五錢
大判 三三二頁 郵稅八錢
正價五十錢 郵稅十錢

天淵安政君著
●增訂 商業讀本 卷の一
全四冊和並製 正價十五錢
大判 一四〇頁 郵稅四錢

●同 卷の二
和並製 正價十五錢
大判 一五六頁 郵稅四錢

米國富豪アンドリウカーネギー氏原著 吉田、栗原兩法學士共譯
●文邦 實業の帝國(英文實業之帝國は外國欄に在り)
全一冊洋並製 正價二十五錢
中判 二四二頁 郵稅四錢

福地源一郎君著
●長崎三百年間
全一冊洋並製 正價四十五錢
大判 二二一頁 郵稅六錢

金子男爵題辭 戶田翠香君編
◎實業實典
中判背皮上製紙數二一一八頁 正價二圓五十錢 小包目方六百匁 廉價一圓五十錢 小包目方六百匁

戶田翠香君編
◎新撰 銀行法典大全
大判洋裝總クロース上製一〇二〇頁 正價一圓五十錢 小包目方四百匁 廉價七十錢 小包目方四百匁

農商務省特許局御編纂
◎商標審決錄
大判總クロース上製三二〇頁 正價一圓 郵稅十錢 廉價六十錢 郵稅六錢

檜垣淳三九君著
◎會社設立案內
中判總クロース上製二八〇頁 正價五十錢 郵稅六錢 廉價三十錢 郵稅六錢

法學士 篠田治策君著
◎會社法釋義
大判洋裝並製二〇四頁 正價三十五錢 郵稅六錢 廉價二十錢 郵稅六錢

經濟

法學士池袋秀太郎君著
●經濟汎論
全一冊洋並綴　大判二八四頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

雞峯　春山育次郎君著
●通俗經濟汎論
全一冊洋並綴　大判三二六頁　正價二十五錢　郵稅八錢

法學士井上辰九郎君著
●經濟原論
全一冊脊皮上綴　大判七〇七頁　正價一圓二十錢　郵稅十八錢

伊國法學博士ルイギー、コッサ氏著　法學士永井直好君譯述
●社會經濟原論
全一冊洋布上綴　大判三〇七頁　正價一圓　郵稅十二錢

法學博士田島錦治君　文學士土子金四郎君共譯
●經濟政策
全一冊脊皮上綴　大判五八四頁　正價一圓四十錢　郵稅十四錢

法學博士天野爲之君譯述
●經濟學研究法
全一冊脊皮上綴　大判四四四頁　正價一圓　郵稅十錢

法學博士天野爲之君閱　柏原文太郎君譯述
●國民銀行論
全一冊脊皮上綴　大判五六四頁　正價一圓　郵稅十六錢

ドクトル高木正義君譯述
●トラスト
全一冊洋並綴　大判一三〇頁　正價卅錢　郵稅四錢

米國文學博士松本君平君著
●金貨本位論
全一冊洋並綴　大判一六八頁　正價廿五錢　郵稅六錢

米國文學博士小手川豐次郎君譯述
●恐慌論
全一冊洋並綴　大判二一五頁　正價卅錢　郵稅六錢

法學士後藤勇君著
●シンヂケート及トラスト
全一冊洋並綴　大判三六六頁　正價五十錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價六十五錢　郵稅十錢

法學士二宮基成君著
●經濟學通論
全一冊洋並綴　大判四四〇頁　正價六十錢　郵稅十錢
▲特製本　洋布上綴　正價七十五錢　郵稅十二錢

メーヨー、スミス氏原著　吳文聰君譯述
●經濟統計學
全一冊洋布上綴　大判三六三頁　正價一圓　郵稅十錢

濱口吉右衛門君著
◎歐米日本商工政策
大判洋裝並製一八六頁　正價三十錢　郵稅六錢
廉價拾五錢　郵稅六錢

交通

法學士菅原大太郎君著
●運送法
全一冊洋並綴　大判三一〇頁　正價卅五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

法學士赤松㟢吉君著
●船舶論
全一冊洋並綴　大判三〇〇頁　正價卅五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

法學士岸崎昌君著
●稅關及倉庫論
全一冊洋並綴　大判三〇六頁　正價卅五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

博文館編輯局編纂
●郵便電信規則全書
全一冊洋並綴　小判三五〇頁　正價廿五錢　郵稅四錢

●非鐵道國有論　尾崎行雄君序　横山正脩君著
全一册洋並綴　大判一〇〇頁　正價廿五錢　郵稅四錢

●鐵道事務案内　小園恒次郎君著　實地
全一册洋布上綴　中判　頁　正價七十錢　郵稅十錢

◎共同海損法　法學士甲野莊平君著
中判總クローズ上製六四二頁　正價一圓二十錢　郵稅十錢　廉價六拾錢

◎通信法釋義　遞信省總務長官田健次郎君、同通信局長小松謙次郎君序　東京郵便電信學校敎授遞信書記官法學士田中次郎君著
大判總クロース上製七四六頁　正價一圓二十八錢　郵稅十錢　廉價五拾錢　郵稅六錢

◎航海術　高橋宏太郎君著
小判總クロース上製三〇〇頁　正價六十錢　郵稅四錢　廉價四拾錢　郵稅六錢

◎將來の海軍と商業　海軍少將肝付兼行君譯
大判洋裝並製二二六頁　正價三十五錢　郵稅六錢　廉價貳拾錢　郵稅六錢

工業書類

●工業叢書　水及油　海軍機關學校敎授工學士市川俊雄君著
全一册洋布上綴　中判二二二頁　正價五十錢　郵稅八錢

●應用化學　工學士蜂屋貞興君著
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢
全一册洋並綴　大判三三五頁　正價卅五錢　郵稅八錢

●分析化學　工學士内藤游君　工學士藤井光藏君合著
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢
全一册洋並綴　大判三四二頁　正價卅五錢　郵稅八錢

●應用機械學　工學士重見道之君著
全一册洋並綴　大判三〇〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢

●蒸氣機關使用法　遠藤甬作君著
全一册洋並綴　大判一四六　正價三十錢　郵稅六錢

●造家と築庭　竹貫直次君著
全一册洋並綴　大判二五〇頁　正價六十五錢　郵稅六錢

●實用建築便覽　竹貫直次君著
全一册洋布上綴　小判三二八頁　正價七十錢　郵稅四錢

●實用土木便覽　龜井重麿君著
全一册洋布上綴　小判三二六頁　正價七十錢　郵稅四錢

●實用續土木便覽　龜井重麿君著
全一册洋布上綴　小判三二〇頁　正價七十錢　郵稅四錢

●應用土木工學　竹貫直次君著
全一册洋並綴　大判三八〇頁　正價七十錢　郵稅八錢

●製圖用文字　第六高等學校敎授松尾哲太郎君著
全一册洋布上綴　大判長形新裝　正價四十錢　郵稅四錢

●器械設計製圖學初步　第六高等學校敎授松尾哲太郎君著
全一册洋布上綴　中判　頁　正價六十錢　郵稅四錢

●合成金製造法　附電氣鑄術　橋本奇策君著
全一册洋並綴　中判三五八頁　正價四十錢　郵稅六錢

● 工學士鴨居武君著　電氣鍍金術　全一册洋裝　中判三六〇頁　正價二十五錢　郵税四錢

● 四日市商業學校教諭 馬詰次男君著　通俗工業官廳簿記　全一册洋裝　大判二八〇頁　正價二十五錢　郵税八錢

● 工學士松永新之助君著　工業大意　全一册洋裝　大判二五〇頁　正價二十五錢　郵税六錢

● 別府丑太郎君著　特許法釋義　全一册洋裝　大判一三八頁　正價三十錢　郵税四錢

● 工學士松永新之助君著　化粧品製造法　彩色木版寫眞版挿入　全一册洋裝　大判二五〇頁　正價二十五錢　郵税六錢

● 黑田政憲君著　工業叢書　陶器製造化學　全一册洋布上製　中判三〇二頁　正價六十錢　郵税八錢

● 工學士原山孝吉君著　工業叢書　機關車　全一册洋布上製　中判二九三頁　正價六十錢　郵税八錢

● 工學士村瀬英一君著　工業叢書　構造强弱學　全一册洋布上製　中判二五八頁　正價六十錢　郵税八錢

● 工學士種宗彦熊君著　工業叢書　工場管理法　全一册洋布上製　中判四五七頁　正價八十錢　郵税十錢

● 工學士大島辰之助君著　工業叢書　電氣工學一斑　全一册洋布上製　中判三一八頁　正價六十五錢　郵税八錢

● 工學士君島八郎君著　工業叢書　道路學一斑　全一册洋布上製　中判二三三頁　正價六十錢　郵税八錢

● 工學士町原駒君著　工業叢書　動力發生及分配　全一册洋布上製　中判　頁　正價壹圓　郵税十二錢

● 工學士根岸政一君著　工業叢書　瓦斯及石油機關　全一册洋布上製　中判　頁　正價　錢　郵税　錢

● 工學士矢野通也君著　工業叢書　油類工業分析　全一册洋布上製　中判二一四頁　正價五十錢　郵税六錢

● 農學士井上正賀君著　工業叢書　釀造法一斑　全一册洋布上製　中判　頁　正價　錢　郵税　錢

● 石井研堂君著　少年工藝文庫　鐵道の卷　寫眞版四葉挿入　全一册洋裝　大判一〇〇頁　正價十五錢　郵税四錢

● 石井研堂君著　少年工藝文庫　水道の卷　寫眞版四葉挿入　全一册洋裝　大判一二六頁　正價十五錢　郵税四錢

● 石井研堂君著　少年工藝文庫　瓦斯の卷　寫眞版四葉挿入　全一册洋裝　大判一二二頁　正價十五錢　郵税四錢

● 石井研堂君著　少年工藝文庫　寫眞の卷　寫眞版四葉挿入　全一册洋裝　大判一二二頁　正價十五錢　郵税四錢

● 石井研堂君著　少年工藝文庫　電話の卷　寫眞版四葉挿入　全一册洋裝　大判一一四頁　正價十五錢　郵税四錢

● 石井研堂君著　少年工藝文庫　硝子の卷　寫眞版四葉挿入　全一册洋裝　大判一一四頁　正價十五錢　郵税四錢

● 石井研堂君著　少年工藝文庫　紡績の卷　寫眞版四葉挿入　全一册洋裝　大判一一八頁　正價十五錢　郵税四錢

● 石井研堂君著　田代曉舟君畫　少年工藝文庫　活版の卷　寫眞銅版四葉挿入　全一册洋裝　大判一四〇頁　正價十五錢　郵税四錢

● 諸井恒平君著　煉瓦要説　全一册洋裝　大判一一六頁　正價四十錢　郵税六錢

◎ 農商務省特許局御編纂　特許意匠審決録　大判總クロース上製五七二頁　正價一圓　郵税十四錢　廉賣價五拾錢　郵税六錢

農商務省特許局御編纂
◎特許發明分類表　大判洋裝並製二三〇頁　正價八十錢　郵稅八錢　廉賣價四拾錢　郵稅六錢

坪谷善四郎君著
◎鑛業法令註釋　中判總クロース上製三〇〇頁　正價七十錢　郵稅六錢　廉賣價卅五錢　郵稅六錢

松方伯題字、市川義方君著
◎水理眞寶　半紙和裝和綴二五四枚　正價八十五錢　郵稅八錢　廉賣價三拾錢　郵稅八錢

坪谷善四郎君編
◎工業進化論　大判洋製並製三五七頁　正價四十錢　郵稅八錢　廉賣價拾五錢　郵稅八錢

マターチヴアーフツ、片山潜君編
◎鐵道新論　大判洋裝並製一〇〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢　廉賣價拾錢　郵稅八錢

理科書類

理學士眞島利行君　理學士岡田武松君共著
●中等教育理化示教　全一冊洋布上綴　大判　頁　正價四十錢　郵稅八錢

藤井修吉君　花井七三郎君　草野堅藏君共著
●通俗理化一斑　全一冊洋並綴　大判三三〇頁　正價三十錢　郵稅八錢

理學士眞島利行君著
●無機化學　全一冊洋並綴　大判三五四頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

理學士龜高德平君著
●有機化學　全一冊洋並綴　大判四〇〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

工學士鳥居休夫君著
●中等教育有機化學　全一冊背皮上綴　中判四二〇頁　正價四十錢　郵稅八錢

理學士飯塚啓君著
●植物學新論　全一冊洋並綴　大判三一四頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

理學士安田篤君著
●植物學汎論　全一冊背皮上綴　大判一〇〇〇頁　正價一圓五十錢　郵稅十六錢

理學博士橫山又次郎君著
●天文講話　木版挿畫九十九個　全一冊洋布上綴　大判二八三頁　正價一圓十錢　郵稅八錢

理學士須藤傳治郎君著
●星學　全一冊洋並綴　大判三三二頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

理學士岡田武松君著
●近世氣象學　全一冊洋並綴　大判三三八頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

理學士會田龍雄君著
●動物學　全一冊洋並綴　大判　頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

永島長五郎君著
●通俗昆蟲學　全一冊洋並綴　大判二八〇頁　正價三十錢　郵稅八錢

池上泰次郎君著
●受驗必携物理學演習　全一冊洋並綴　小判一五〇頁　正價十五錢　郵稅四錢

木村小舟君著
●春夏秋冬理科手引草　石版彩畫四葉挿入　全一冊洋並綴　大判三二四頁　正價三十八錢　郵稅八錢

- 木村小舟君著　**理科春秋**　全一册洋並綴 大判一八六頁　正價二十錢 郵稅四錢
- 高橋章臣君著　**中等教育博物階梯**　全一册洋布上綴 大判七六頁　正價二十五錢 郵稅六錢
- 理學博士坪井正五郎君 關澄藏君共譯　**人類及人種**　全一册洋布上綴 大判五五八頁　正價一圓 郵稅十四錢
- 藥學得業士金澤巖君著　**寫眞及幻燈**　寫眞版挿入　全一册洋並綴 大判二四〇頁　正價二十五錢 郵稅六錢
- 橋本奇策君著　**實驗應用寫眞術**　全一册洋並綴 小判一八〇頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**新風船**　密畫全入　全一册洋並綴 大判九〇頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**雪達磨**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判九五頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**花の錦**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判九〇頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**汐干狩**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判八五頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**植物園**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判九〇頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**蜻蛉祭**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判九〇頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**游泳臺**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判八五頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**富士詣**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判九四頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**暴風雨**　密挿畫入　全一册洋並綴 大判八二頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**銃獵者**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判八四頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**幻燈會**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判七八頁　正價十錢 郵稅四錢
- 石井研堂君著　**歸省錄**　密畫挿入　全一册洋並綴 大判八〇頁　正價十錢 郵稅四錢
- 川村守義君著　◎**通俗動物學**　大判洋裝並製三〇〇頁　正價三十錢 郵稅八錢　廉賣價二十錢 郵稅八錢

數學書類

高等數學

- 理學士高木貞治君著　**新撰算術**　全一册洋並綴 大判三〇五頁　正價三十五錢 郵稅八錢
  ▲特製本 洋布上綴　正價五十錢 郵稅十錢

理學士高木貞治君著 ●新撰代數學 ▲特製本 洋布上製 全一冊洋 並製 大判三〇四頁 正價三十五錢 郵稅八錢 正價五十錢 郵稅十錢

京都帝國大學教授理學士林鶴一君著 ●新撰幾何學 ▲特製本 洋布上製 全一冊洋 並製 大判三〇四頁 正價三十五錢 郵稅八錢 正價五十錢 郵稅十錢

理學士松村定次郎君著 ●新撰三角法 ▲特製本 洋布上製 全一冊洋 並製 大判二八二頁 正價三十五錢 郵稅八錢 正價五十錢 郵稅十錢

理學士林鶴一君著 ●初等平面三角法教科書 文部省檢定濟 全一冊洋布上製 中判一二〇頁 正價四十錢 郵稅四錢

理學士松村定次郎君著 ●新撰微分積分學 ▲特製本 洋布上製 全一冊洋 並製 大判三五五頁 正價三十五錢 郵稅八錢 正價五十錢 郵稅十錢

理學士松村定次郎君著 ●新撰解析幾何學 ▲特製本 洋布上製 全一冊洋 並製 大判三〇〇頁 正價三十五錢 郵稅八錢 正價五十錢 郵稅十錢

理學士谷田部梅吉君著 ●中等教育平面幾何學 全一冊洋 上製 中判 正價二十五錢 郵稅四錢

普通算術

竹貫登代太君著 ●新撰算術問答 全一冊紙皮上製 小判二四九頁 正價二十錢 郵稅四錢

竹貫登文君著 ●算術手引草 全一冊紙皮上製 中判四七五頁 正價五十錢 郵稅六錢

理學士鮫島晋著 ●普通教育算術教科書 全二冊洋 並製 中判 正價各二十五錢 郵稅各六錢

片山濟誠君 三田暉信君合著 ●理論適用普通算術 全一冊洋 並製 中判 正價三十錢 郵稅六錢

三田暉作君著 ●實用數學一萬題 全一冊洋 並製 中判五一〇頁 正價四十錢 郵稅八錢

岡村增太郎君著 ●高等小學筆算教科書 全一冊背皮上製 中判四八〇頁 正價五十錢 郵稅八錢

岡村增太郎君著 ●尋常小學筆算教科書 文部省檢定濟 全一冊背皮上製 中判四六〇頁 正價四十錢 郵稅八錢

米是三郎君著 ●地理歷史教育兵水理科實業新題算術 全一冊洋 並製 中判二六〇頁 正價十八錢 郵稅四錢

竹貫直人君著 ●數學遊戯 全一冊紙皮上製 小判二五〇頁 正價二十五錢 郵稅四錢

吉田正雄君著 ◎女子算術書 中判洋裝並製一六五頁 正價十二錢 郵稅六錢 廉賣價五錢 郵稅六錢

政治書類

政治

● 一年有半　故兆民中江篤介先生著　全一冊洋並綴　大判二八八頁　正價三十五錢　郵税八錢

● 政治汎論　法學博士高田早苗君譯述　全一冊脊皮上綴　大判一二七四頁　正價一圓五十錢　小包送四百匁

● 政治汎論　法學士永井惟直君著　▲特製本洋布上綴　正價五十錢　全一冊洋並綴　大判三一二頁　正價三十五錢　郵税八錢　郵税十錢

● 政治史　法學士森山守次君著　▲特製本洋布上綴　正價五十錢　全一冊洋並綴　大判三一二頁　正價三十五錢　郵税八錢　郵税十錢

● 財政學　法學士井上辰九郎君　高野岩三郎君共譯　全一冊脊皮上綴　大判一〇八八頁　正價二圓二十錢　郵税送四百匁

● 財政學　法學士䈎川潔君著　▲特製本洋布上綴　正價五十錢　全一冊洋並綴　大判三一〇頁　正價三十五錢　郵税八錢　郵税十錢

● 最新統計學　法學士夏秋龜一君著　▲特製本洋布上綴　正價五十錢　全一冊洋並綴　大判三三二頁　正價三十五錢　郵税八錢　郵税十錢

● 社會統計學　呉文聰君譯述　全一冊洋布上綴　大判六〇〇頁　正價一圓五十錢　郵税四錢

● 萬國國力比較　英國マルホール氏原著　大石熊吉君　前川九萬人君共譯　全一冊脊皮上綴　大判一〇〇〇頁　正價二圓五十錢　郵税十八錢

● 日本帝國憲法論　法學士田中次郎君著　▲特製本洋布上綴　正價五十錢　全一冊洋並綴　大判三七一頁　正價三十五錢　郵税八錢　郵税十錢

● 英國憲法論　法學博士高田早苗君　梅若誠太郎君共譯　全一冊脊皮上綴　大判八七二頁　正價一圓七十五錢　郵税二十錢

● 英國憲法史　松平康國君著　全一冊洋布上綴　大判五〇〇頁　正價一圓廿五錢　郵税十四錢

● 英國國會史　法學博士高田早苗君譯述　全一冊脊皮上綴　大判七四〇頁　正價一圓三十錢　郵税十四錢

● 十九世紀歐洲政治史論　文學士酒井雄三郎君著　全一冊洋並綴　大判一一六頁　正價三十錢　郵税四錢

● 政治學及比較憲法論　法學博士高田早苗君　吉田巳之助君共譯　上卷脊皮上綴　大判五九四頁　正價一圓五十錢　郵税十四錢

● 仝　下卷脊皮上綴　大判五六二頁　正價一圓五十錢　郵税十四錢

● 仝　合本　全一冊脊皮上綴　大判一一五六頁　正價二圓七十錢　小包送四百匁

● 政治罪惡論　松平康國君譯　全一冊脊皮上綴　大判三六二頁　正價一圓　郵税十錢

● 政治道德學　文學士澤柳政太郎君譯　上卷脊皮上綴　大判五二八頁　正價一圓三十錢　郵税十四錢

● 仝　文學士澤柳政太郎君譯　下卷脊皮上綴　大判四二〇頁　正價一圓二十錢　郵税十二錢

● 無政府主義　煙山專太郎君著　全一冊脊皮上綴　大判四三〇頁　正價一圓　郵税十二錢

●政治書類(政治)

(三二)

● **帝國主義論**　法學博士高田早苗君抄譯　全一冊洋並製　大判二一四頁　正價四十錢　郵税六錢

● **社會問題解釋法**　安部磯雄君著　全一冊背皮上製　大判四七〇頁　正價一圓二十錢　郵税十二錢

● **議會及政黨論**　法學士菊地學而君著　全一冊洋並製　大判二九四頁　正價三十五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

● **衆議院議員選擧法論**　法學士島田俊雄君著　全一冊洋並製　大判二五六頁　正價四十錢　郵税六錢

● **歐洲貨幣史**　英國ザアリユー、エーシヨウ君著　信夫淳平君譯　全一冊洋布上製　大判四八四頁　正價一圓四錢　郵税十錢

● **世界國勢要覽**　博文館編輯局編纂　全一冊洋並製　特大判二六七頁　正價三十錢　郵税三錢

◎ **通俗政治汎論**　鳥谷部銑太郎君編　大判洋裝並製三一六頁　正價二十五錢　郵税八錢　廉價二十錢　郵税八錢

◎ **警世評論**　ドクトル岡崎遠光君著　小判擬皮上製四二五頁　正價三十五錢　郵税六錢　廉價二十錢　郵税八錢

◎ **藩閥の將來**　文學博士外山正一君著　大判洋裝並裝一五〇頁　正價二十五錢　郵税四錢　廉價十五錢　郵税八錢

◎ **新建國**　日南福本誠君著　大判洋裝並製一二四頁　正價二十錢　郵税四錢　廉價十錢　郵税八錢

◎ **癈娼之急務**　島田三郎君　木下尙江君共著　大判洋裝並製一一四頁　正價十五錢　郵税四錢　廉價五錢　郵税八錢

行政

● **國法學**　法學博士有賀長雄君著　上卷背皮上製　大判七一二頁　正價一圓七十五錢　郵税十八錢

● **國法學**　法學博士有賀長雄君著　下卷背皮上製　大判五五三頁　正價一圓廿五錢　郵税十四錢

● **比較國法學**　法學博士末岡精一君著　全一冊背皮上製　大判八五二頁　正價一圓五十錢　郵税十八錢

● **國法學**　法學士岸崎昌君　中村孝君共著　全一冊洋並製　大判三〇〇頁　正價卅五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

● **比較行政法**　浮田和民君譯述　全一冊背皮上製　大判七八五頁　正價二圓　郵税十八錢

● **行政裁判法論**　法學士小林魁郎君著　全一冊洋並製　大判頁　正價三十五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上製　五十錢　郵税十錢

● **行政法汎論**　法學士小原新三君著　全一冊洋並製　大判四一四頁　正價三十五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

● **行政法各論**　法學士小原新三君著　全一冊洋並製　大判四一四頁　正價三十五錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵税十錢

● **市制論**　安部磯雄君解説　早稻田小集　全一冊洋並製　大判一五九頁　正價四十錢　郵税四錢

杉山重義君解説 早稻田小篇 ●都市發達論 全一册洋並綴 大判一五七頁 正價四十錢 郵稅四錢

京都市助役法學士大槻龍治君報告（京都市參事會藏版）
●伯林市行政ノ既往及現在 外寫眞二十四枚 ◎七製本洋布上綴 ◎正價八十錢 正價一圓 全一册洋並綴 大判二二四頁 郵稅六錢 郵稅八錢

衆議院書記官長法學士林田龜太郎君著 衆議院議員
●選學法釋義 全一册洋並綴 大判四六一頁 正價八十錢 郵稅四錢

法學士島田俊雄君著
●自治制大意 全一册洋並綴 大判四七六頁 正價七十五錢 郵稅十二錢

京都府警察部通譯稻垣襄之助君 同藤川東太郎君共著 警官必携
●實用警察會話 全一册洋布上綴 小判二五八頁 正價四十錢 郵稅四錢

法學士谷野格君著
◎監獄學 大判洋裝並製三一二頁 正價四十錢 郵稅八錢 廉賣價三十錢 郵稅八錢

法學士中大路正雄君著
◎司法警察手續法 大判洋裝並製三〇〇頁 正價四十錢 郵稅八錢 廉賣價三十錢 郵稅八錢

法學士宮國忠吉君著
◎警察學 大判洋裝並製三〇四頁 正價四十錢 郵稅八錢 廉賣價三十錢 郵稅八錢

法學士廣中佐兵衛君著
◎衛生法 大判洋裝並製三一八頁 正價四十錢 郵稅八錢 廉賣價三十錢 郵稅八錢

法學士佐藤信安君著
◎日本監獄法 大判洋裝並製三一八頁 正價四十錢 郵稅八錢 廉賣價三十錢 郵稅八錢

法學士中大路正雄君著
◎行政警察法 大判洋裝並製三一七頁 正價四十錢 郵稅八錢 廉賣價三十錢 郵稅八錢

市岡正一君編
◎戸籍事務取扱全書 大判洋裝並製九一〇頁 正價一圓二十錢 郵稅十六錢 廉賣價三十錢 郵稅十六錢

外交

酒井雄三郎君譯述
◎歐洲外交史 上巻 背皮上綴 大判七三二頁 正價一圓五十錢 郵稅十二錢
◎全 下巻 背皮上綴 大判九〇二頁 正價二圓 郵稅十六錢

法學博士有賀長雄君著
◎近時外交史 全一册背皮上綴 大判七〇七頁 正價一圓五十錢 郵稅十六錢

野矢交郎君著
◎日清戰役外交史 全一册背皮上綴 大判一二九八頁（發賣禁止）

法學博士中村進午君著
◎新條約論 全一册背皮上綴 大判五八六頁 正價一圓三十錢 郵稅十四錢

鳥谷部春汀君著 彩色木版寫眞銅版挿入
◎內地雜居改正條約案內 全一册洋並綴 大判二五二頁 正價廿五錢 郵稅六錢

法律書類

法學

●法律汎論　法學士熊谷直太君著
全一册洋並綴　大判三四四頁　正價三十五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●通俗法學汎論　法學士桐生政次君著
全一册洋並綴　大判三二三頁　正價二十五錢　郵税八錢

●法理學　法學士丸山長渡君著
全一册洋並綴　大判三〇〇頁　正價三十五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●日本法制史　文學士三浦菊太郎君著
全一册洋並綴　大判三三六頁　正價三十五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●國際法　法學博士中村進午君著
上卷　洋裝脊皮上綴　大判七四三頁　正價一圓八十錢　郵税十六錢
下卷　洋裝脊皮上綴　大判八二二頁　正價二圓二十錢　郵税十八錢

●仝

●國際公法　法學士北條元篤君　法學士熊谷直太君共譯
全一册洋並綴　大判三二六頁　正價三十五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●國際私法　法學士中村太郎君著
全一册洋並綴　大判三〇五頁　正價三十五錢　郵税八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵税十錢

●國際私法論　野澤武之助君　山口弘一君共著
全一册脊皮上綴　大判六二八頁　正價一圓四十錢　郵税十六錢

●國際法論　蜷川新君譯述
全一册洋並綴　大判一一〇頁　正價三十五錢　郵税四錢

●犯罪學　法學士三木猪太郎君抄譯
全一册洋並綴　大判二一二頁　正價四十錢　郵税六錢

●國際公法　法學博士中村進午君解説
全一册洋並綴　大判一八〇頁　正價六十錢　郵税八錢

●法律教科書　民法總則　法學士小山温君著
全一册洋並綴　大判一六〇頁　正價四十錢　郵税四錢

●法律教科書　民事訴訟法　今村信行君著
全一册洋並綴　大判一三八頁　正價四十錢　郵税四錢

●法律教科書　保險法　法學士和仁貞吉君著
第一編洋並綴　大判一四四頁　正價四十錢　郵税四錢

●法律教科書　親族法　法學士牧野菊三郎君著
全一册洋並綴　大判一九六頁　正價四十五錢　郵税六錢

●法律教科書　物權法　法學士鈴木喜三郎君著
全一册洋並綴　大判二二八頁　正價五十五錢　郵税六錢

●法律教科書　商法總則　法學士青山衆司君著
全一册洋並綴　大判二七六頁　正價六十錢　郵税六錢

●法律教科書　債權法總則　法學士平沼騏一郎君著
全一册洋並綴　大判二六〇頁　正價六十錢　郵税六錢

●法律教科書　商行爲　法學士青山衆司君著
全一册洋並綴　大判三七八頁　正價七十五錢　郵税八錢

●法律教科書　平時國際公法　法學博士中村進午君著
全一册洋並綴　大判二四〇頁　正價八十錢　郵税六錢

副島義一君　山口弘一君　中村進午君合譯
獨逸民法論　第一卷　大判　八四四頁　背皮上綴　正價一圓七十五錢　郵稅二十錢

法學博士岡田朝太郎君校閲　山口慶一君編纂
新舊對照 刑法蒐論　全一册　大判　六六頁　洋並綴　正價八十錢　郵稅六錢

法學博士岡田朝太郎君贊評　判事藤澤茂十郎君著
改正草案 刑法評論　全一册　大判　二八六頁　洋並綴　正價五十錢　郵稅六錢

山田富太郎君編纂
文官高等官 判檢事登用 辯護士試驗 及第者答案集　全一册　大判　二五二頁　洋並綴　正價卅五錢　郵稅六錢

法令註釋

法學士丸尾昌雄君著
民法 總則編 物權編 釋義　▲特製本　洋布上綴　全一册　大判　三一〇頁　洋並綴　正價三十五錢　郵稅八錢　正價五十錢　郵稅十錢

法學士上田豐君著
民法 親族編 相續編 釋義　▲特製本　洋布上綴　全一册　大判　三〇一頁　洋並綴　正價三十五錢　郵稅八錢　正價五十錢　郵稅十錢

法學士丸尾昌雄君著
民法債權編釋義　▲特製本　洋布上綴　全一册　大判　三三六頁　洋並綴　正價三十五錢　郵稅八錢　正價五十錢　郵稅十錢

法學士添田敬一郎君著
商法汎論　▲特製本　洋布上綴　全一册　大判　三三〇頁　洋並綴　正價三十五錢　郵稅八錢　正價五十錢　郵稅十錢

法學士粟本勇之助君著
帝國商法釋義　全一册　中判　一三三五頁　背皮上綴　正價一圓八十錢　郵稅二十錢

法學士梶原仲治君著
民事訴訟法釋義　▲特製本　洋布上綴　全一册　大判　三二二頁　洋並綴　正價三十五錢　郵稅八錢　正價五十錢　郵稅十錢

坪谷善四郎君著
市制町村制釋義　全一册　大判　三七七頁　洋並綴　正價四十錢　郵稅八錢

坪谷善四郎君著
府縣制郡制釋義　全一册　大判　二八六頁　洋並綴　正價三十錢　郵稅六錢

神津頼二郎君著
民法 戸主必携　全一册　小判　四八五頁　洋並綴　正價三十五錢　郵稅六錢

寶川大發君註解
理由 詳說 改正戸籍法典　全一册　中判　四二六頁　洋並綴　正價三十錢　郵稅八錢

法學士中山文次郎君著
不動產 登記法 正解　全一册　大判　二五〇頁　洋並綴　正價三十錢　郵稅六錢

乾政一君著
不動產 登記 申請 實用　全一册　大判　二一〇頁　洋並綴　正價二十錢　郵稅四錢

法學士上野貞正君著
法律辭典　第一卷　大判　三〇二頁　洋並綴　正價六十錢　郵稅八錢

博文館編輯局編
◎**民法修正案理由書**　大判洋裝並製六六六頁　正價六十錢　郵稅十錢　廉價十五錢　郵稅十錢

市岡正一君著
◎**戸籍事務實行問答**　大判洋裝並製一九〇頁　正價二十五錢　郵稅四錢　廉價十五錢　郵稅四錢

法令

● 博文館編輯局編 現行日本法令大全 全二冊洋皮上綴 大判八一一〇頁 正價五圓 小包送一貫二百五十匁

● 法學士富塚玖馬君著 土地法令大全 全一冊洋並綴 中判五〇〇頁 正價五十錢 郵稅八錢

● 博文館編輯局編纂 現行警察法典 全一冊洋布上綴 大判六四八頁 正價四十錢 郵稅六錢

● 博文館編輯局編纂 帝國六法全書 全一冊洋布上綴 小判一五〇〇頁 正價九十錢 郵稅十四錢

● 博文館編輯局編纂 增訂新撰帝國法典 全一冊洋布上綴 小判 頁 正價七十五錢 郵稅十四錢

● 鷲見金三郎編纂 府縣制郡制關係法規 全一冊洋並綴 大判五二二頁 正價五十錢 郵稅十錢

● 正市一岡君編纂 市町村事務取扱全書 全一冊並洋綴 大判 頁 正價八十錢 郵稅二十錢

● 加野十次郎君編纂 新撰民事刑事訴訟手續 全一冊洋布上綴 小判二七一頁 正價二十五錢 郵稅四錢

● 寒木一郎君 判例見小三郎君編纂 大審院判決例摘要類纂 寫眞版十七葉挿入 全一冊洋布上綴 大判八三〇頁 正價一圓五十錢 郵稅十八錢

● 博文館編輯局纂 卅五年五月編 新法令 全一冊洋並綴 大判二五一頁 正價三十錢 郵稅三錢

◎ 大藏省主稅局御編纂 租稅法規纂要 大判洋裝並製五三八頁 正價七十五錢 郵稅十錢 廉價二十錢 郵稅十錢

◎ 東京控訴院御編纂 東京控訴院裁判錄 大判洋裝並製二六〇頁 正價[illegible]十五錢 郵稅六錢 廉價二十錢 郵稅十錢

◎ 博文館編輯局編纂 改正官制全書 大判洋裝並綴七三九頁 正價八十錢 郵稅十四錢 廉價二十錢 郵稅十錢

◎ [illegible]君編纂 恩給扶助法大全 中判洋裝並製二一六頁 正價二十錢 郵稅四錢 廉價二十錢 郵稅十錢

◎ 博文館編輯局編纂 四大法典草案 大判洋裝並製三二八頁 正價三十錢 郵稅六錢 廉價二十錢 郵稅十錢

◎ 博文館編輯局編纂 改正商法 小判洋裝並製一七六頁 正價二十錢 郵稅二錢 廉價二十錢 郵稅十錢

教育書類

教育學

●教育學 文學士熊谷五郎君編
全一册洋並綴 大判三八一頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

●埵氏實踐教育學 文學士藤代禎輔君譯註
全一册脊皮上綴 中判三七〇頁 正價七十五錢 郵稅十錢

●東洋西洋教育史 文學士中野禮四郎君著
全一册洋並綴 大判三一〇頁 正價三十五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵稅十錢

◎通俗教育學 永持徳一君著
大判裝並洋製三一二頁 正價三十錢 郵稅八錢 廉賣價二十五錢 郵稅八錢

◎新編教育學 高等師範學校教授高橋章臣君著
中判洋裝並製三一四頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價十錢 郵稅六錢

◎教育指針 英國ダビットケー原著 日本峯是三郎君譯補
小判總クロース上製三〇三頁 正價三十五錢 郵稅四錢 廉賣價十錢 郵稅四錢

◎教育史 高等師範學校教授高橋章臣君著
大判洋裝並製二四八頁 正價十五錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎教育學 今泉祐善君著
大判洋裝並製一七二頁 正價十五錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎教育古典 本庄太一郎君著
大判洋裝並製二三三頁 正價十五錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎女子教育論 永江正直君著
大判洋裝並製一七五頁 正價十五錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎普通教育學 仝上
中判洋裝並製二〇〇頁 正價十二錢 郵稅六錢 廉賣價五錢 郵稅六錢

◎教育新論 法學士高槻純之助君著
中判洋裝並製一五八頁 正價十二錢 郵稅六錢 廉賣價五錢 郵稅六錢

教授及管理法

◎通俗學校管理法 安田安清君著
大判洋裝並製三三八頁 正價三十錢 郵稅八錢 廉賣價十錢 郵稅八錢

◎新編學校管理法 高橋章臣君著
中判洋裝並製三〇〇頁 正價十八錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎德美教育及修身教授法 矢島錦藏君著
大判洋裝製二二二頁 正價十五錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎歷史教授法 本庄太一郎君著
大判洋裝並製二一八頁 正價十五錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎學校管理法 一條龜次郎君著
大判洋裝並製二五七頁 正價拾五錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎理科教授法 今泉祐善君著
大判洋裝並製二一六頁 正價十五錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎習字圖畫教授法 一條龜次郎君著
大判洋裝並製一五四頁 正價十五錢 郵稅六錢 廉賣價八錢 郵稅六錢

◎學校家庭連絡の方法 多田房之助君著
中判洋裝並製一〇三頁 正價十二錢 郵稅六錢 廉賣價五錢 郵稅六錢

◎歷史研究法 ヘーゲル氏原著 澁江保譯述
上下 中判洋裝並製三八六頁 正價一册十二錢 郵稅一册六錢 廉賣價一册五錢 郵稅一册六錢

清水直義君著 ◎**單級教授法** 中判洋裝並製一五四頁 正價十二錢 郵稅六錢 廉賣價五錢 郵稅六錢

李山正毅君著 ◎**實驗學校管理法** 中判洋裝並製二一〇頁 正價十二錢 郵稅六錢 廉賣價五錢 郵稅六錢

逸江保君著 ◎**簡易体操法** 中判洋裝並製一六三頁 正價十二錢 郵稅六錢 廉賣價五錢 郵稅六錢

修身及立志

文學博士中村正直君譯述 ●**改正西國立志編** 全一册洋並綴 中判六〇八頁 正價二十七錢 郵稅八錢

東京女學館教授西田敬止君編 ●**益軒十訓** 全一册脊紙上綴 中判一一〇二頁 正價一圓六錢 郵稅十錢

文學士大町桂月君著 ●**學生訓** 全一册紙皮上綴 小判二四八頁 正價二十錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著 ●**續學生訓** 全一册洋並綴 小判二五六頁 正價二十五錢 郵稅四錢

文學士田中次郎君譯述 ●**學生立身策** 全一册洋並綴 小判一六法頁 正價十二錢 郵稅四錢

慶應義塾教師菅學應君著 ●**成功要錄** 全一册紙皮上綴 中判二二〇頁 正價二十八錢 郵稅四錢

法學士丸尾昌雄君著 彩色木版密畫寫眞版挿入 ●**日常行爲法則** 全一册洋並綴 大判二五六頁 正價二十五錢 郵稅六錢

法學士桐生政次君著 彩色木版密畫寫眞版挿入 ●**勤學と處世** 全一册洋並綴 大判二四〇頁 正價二十五錢 郵稅六錢

高等師範學校教諭本田增次郎君著 ●**處世要訓** 全一册洋並綴 中判二四〇頁 正價三十錢 郵稅六錢

尾野久成君著 ●**讀書法** 全一册洋並綴 小判二二二頁 正價十錢 郵稅四錢

于河岸貫一君編 木版彩色口繪挿入 ●**日本女子立志編** 全二册和並綴 大判七三六頁 正價一册六十錢 郵稅一册八錢

峄間禮助君著 ●**偉人修養錄** 全一册洋並綴 中判四〇八頁 正價四十錢 郵稅八錢

慶應義塾教授菅綠陸君著 ●**言行要錄** 全一册紙皮上綴 中判二六八頁 正價三十錢 郵稅六錢

下田歌子女史著 ●**內國少女鑑** 全一册和並綴 大判二二八頁 正價三十五錢 郵稅六錢

下田歌子女史著 ●**外國少女鑑** 全一册和並綴 大判二三八頁 正價三十五錢 郵稅六錢

下田歌子女史著 ●**學校の心得** 全一册和並綴 大判頁 正價三十五錢 郵稅六錢

飯泉規矩三君著 ●**學術自修法** 全一册洋並綴 小判二四五頁 正價十二錢 郵稅四錢

博文館編輯局編纂 寫眞版挿入 ●**官私立諸學校就學案內** 全一册洋並綴 大判二四〇頁 正價二十五錢 郵稅六錢

北一龜君編纂 ●**現行試驗規則大全** 全一册脊皮上綴 小判六八七頁 正價四十五錢 郵稅六錢

哲學書類

逵江保君著
●世界格言大全　全一冊洋布上綴 小判 五〇〇頁　正價四十錢 郵税四錢

千河岸櫻所君評釋
●女訓評釋　全一冊和上綴 大判　正價六十錢 郵税十錢

マーデン原著、羽化仙史譯述
◎出世之栞　小判摸皮上製三〇六頁　正價二十五錢 郵税四錢　廉價十五錢 郵税四錢

東京女學館講師西田敬止君著
◎帝國女子修身鑑　大判和裝製綴和紙四二四頁　正價一冊十四錢 郵税一冊二錢　廉價一冊十錢 郵税一冊二錢

文學士荻原雄之助君著
◎帝國修身軌範　大判和裝綴和紙七三八頁　正價一冊廿五錢 郵税一冊四錢　廉價一冊十錢 郵税一冊四錢

巖谷小波君著
◎世界立志談　大判洋裝並製一二〇頁　正價十五錢 郵税四錢　廉價十錢 郵税六錢

逵江保君編纂
◎泰西婦女龜鑑　大判洋裝並製一八四頁　正價十五錢 郵税四錢　廉價十五錢 郵税四錢

哲學及倫理

文學士藤井健二郎君著
●哲學汎論　全一冊洋並綴 大判 三三〇頁　正價三十五錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵税十錢

文學博士桑木嚴翼君著
●哲學概論　全一冊背皮上綴 大判 五二四頁　正價一圓四十錢 郵税十四錢

獨逸ヰンデンバンド氏原著文學博士桑木嚴翼君抄譯
●哲學史要　全一冊洋布上 大判 五九六頁　正價一圓四十錢 郵税十四錢

浮田和民君解説
●國家哲學　全一冊洋並綴 大判 二〇〇頁　正價六十錢 郵税八錢

文學士蟹江義丸君著
●西洋哲學史　全一冊製並綴 大判 三三二頁　正價三十五錢 郵税八錢
▲特裝製本 洋布上綴 正價五十錢 郵税十錢

故中江兆民君著
●續一年有半　一名無神無靈魂　全一冊洋並綴 大判 三六六頁　正價三十八錢 郵税八錢

文學士十時彌君著
●進化論　全一冊洋並綴 大判 頁　正價三十五錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵税十錢

文學博士加藤弘之君著
●道德法律進化の理　全一冊洋並綴 大判 二二五頁　正價三十錢 郵税六錢

文學博士高山林次郎君著
●近世美學　全一冊洋並綴 大判 三二八頁　正價三十五錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五十錢 郵税十錢

●論理學　文學博士高山林次郎君著
全一冊洋並製　大判三一四頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

●早稻田小篇 論理學綱要　文學博士桑木嚴翼君　關山富君共譯
全一冊洋並製　大判二八一頁　正價四十錢　郵稅六錢

●倫理學　文學士蟹江義丸君著
全一冊洋並製　大判三三〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

●通俗倫理學　足立栗園君著
全一冊洋並製　大判三三七頁　正價二十五錢　郵稅八錢

●東洋西洋倫理學史　文學士木村鷹太郎君著
全一冊洋並製　大判三五八頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

●西洋倫理學史　綱島榮一郎君著
全一冊背皮上製　大判五六四頁　正價一圓三十錢　郵稅十四錢

●快樂派倫理　綱島榮一郎君補譯
全一冊洋並製　大判二四八頁　正價五十錢　郵稅六錢

●道德實踐法　文學士大町桂月君著
全一冊洋並製　大判一一六頁　正價二十錢　郵稅四錢

●心理學　文學士速見滉君著
全一冊洋並製　大判　頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

●中等教育 應用心理學　岸邊三郎君著
全一冊背皮上製　中判四四二頁　正價五十錢　郵稅八錢

●現今將來 倫理及宗教　文學博士元良勇次郎君著
正價五十錢　郵稅六錢

宗教

●宗教學概論　文學博士姉崎正治君著
全一冊背皮上製　大判六〇〇頁　正價一圓五十錢　郵稅十六錢

●世界宗教一斑　內山正如君　瑜伽理圓君共著　寫眞版挿入
全一冊洋並製　大判二六〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

●宗教哲學　文學博士姉崎正治君著
全一冊洋並製　大判四〇〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

●世界宗教史　文學士加藤弘之君著
全一冊洋並製　大判三一六頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五十錢　郵稅十錢

●佛教大原理　釋雲照律師著　雲照律師肖像挿入
全一冊洋並製　中判九〇頁　正價十錢　郵稅二錢

●國民教育之方針　釋雲照律師著
全一冊洋並製　大判五〇〇頁　正價七十五錢　郵稅十二錢

●大日本教　無明居士著
全一冊洋並製　大判二六〇頁　正價三十錢　郵稅六錢

◎宗教新論　文學士加藤玄智君著
大判總クロース上製四八四頁　正價一圓　郵稅十錢　廉價七十錢

◎上世印度宗教史　文學博士姉崎正治君著
大判總クロース上製三〇四頁　正價七十錢　郵稅八錢　廉價五十錢　郵稅八錢

社會

文學士十時彌君著
●社會學　全一册洋並綴　大判四〇六頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五十錢　郵稅十錢

ギッヂングス氏原著　文學士遠藤●吉君譯述
●社會學　全一册背皮上綴　大判五五二頁　正價一圓卅五錢　郵稅十四錢

安部磯雄君著
●社會問題解釋法　全一册背皮上綴　大判四七五頁　正價一圓二十錢　郵稅十二錢

文學博士加藤弘之君著
●天則百話　全一册洋並綴　大判三〇八頁　正價三十錢　郵稅六錢

男爵福羽美靜君著
●人事百話　全一册洋並綴　大判二四〇頁　正價二十錢　郵稅四錢

男爵石黑忠悳君著
●況翁閑話　附況翁談片　全一册洋並綴　大判三〇〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

山田美妙君著
●萬國人名辭書　全二册洋布上綴　中判一二三八頁　正價一册八十五錢　小包送一册四百匁

米國文學博士松本君平君著
◎新聞學　大判總クロース上製三五八頁　正價一圓　郵稅十錢　廉價五十錢　郵稅十錢

金井啓一君著
◎權謀學　小判横皮上製一五四頁　正價二十錢　郵稅四錢　廉價十五錢　郵稅四錢

兵事書類

久留島武彦君著
●國民必讀陸軍一斑　寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判二九〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

海軍大尉長尾耕作君著
●國民必讀海軍一斑　寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判二八〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

海軍大尉長尾耕作君著
●海軍出身案内　全一册洋並綴　中判四三〇頁　正價四十錢　郵稅六錢

三宅青軒君著
●陸海軍人書翰文　寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判二五〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

上野義八郎君著
●海軍兵器說明　寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判一四五頁　正價十八錢　郵稅四錢

海軍中尉多賀宗之君著
◎家庭軍事談　小判皮上製三六〇頁　正價三十錢　郵稅六錢　廉價十五錢　郵稅六錢

醫學書類

- ●醫科大學教室勤務醫學士石原弘君著　藥學新刊　**藥物學**　全一册背皮上製　大判一〇六〇頁　正價二圓　小包送六百匁
- ●王子精神病院長門脇眞枝君著　醫學新書　**精神病學**　全一册洋布上製　大判一一〇〇頁　正價二圓　小包送六百匁
- ●醫科大學教室勤務門脇眞枝君著　**精神病看護學**　全一册洋布上製　大判二四六頁　正價五十錢　郵稅八錢
- ●王子精神病院長門脇眞枝君著　**狐憑病新論**　全一册洋布上製　大判一七六頁　正價五十錢　郵稅八錢
- ●醫學士小川劍三郎君著　通俗衛生　**眼のはなし**　全一册洋並製　中判一一四頁　正價十八錢　郵稅二錢
- ●醫學士守矢親國君譯述　**生殖器新書**　全一册洋布上製　中判四五六頁　正價九十錢　郵稅十二錢
- ●醫科大學藥學得業士金澤駿君著　**通俗治療救急法**　全一册紙皮上製　小判三一〇頁　正價三十錢　郵稅四錢
- ●西川政憲君著　育兒體育　**健康要訣**　全一册紙皮上製　小判二二〇頁　正價三十錢　郵稅四錢
- ●破竹居士著　**健康と遠足**　全一册紙皮上製　中判二三二頁　正價三十錢　郵稅四錢
- ●醫學士高橋金一郎君著　**通俗看病法**　全一册洋並製　大判一五三頁　正價十五錢　郵稅六錢
- ●平野龍君著　**看病の心得**　全一册洋並製　中判一七〇頁　正價二十錢　郵稅四錢
- ●陸軍藥劑監石塚左玄君著　通俗　**食物養生法**　全一册洋布上製　大判二五〇頁　正價七十錢　郵稅六錢
- ●醫學博士三島通良君著　**學校衛生學**　全一册洋布上製　中判三六〇頁　正價七十五錢　郵稅八錢
- ●醫學得業士首藤環君編　醫術開業　**試驗問答叢書**
  - （前期）全一册紙皮上製　中判四九二頁　正價六十錢　郵稅八錢
  - （後期）全一册紙皮上製　中判八〇四頁　正價九十錢　郵稅十二錢
- ●全

遊戲書類

遊戲

- ●華族女學校學監下田歌子君著　**女子遊戲の栞**　全一册和並製　大判二二九頁　正價三十五錢　郵稅八錢
- ●上村左川君編纂　**內外遊戲法**　彩色木版密畫挿入　全一册洋並製　大判二五〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢
- ●農科大學志岐守二君著　**室內遊戲法**　全一册洋並製　小判二三二頁　正價十二錢　郵稅四錢

●福引集　安藤森吉君編纂　全一冊洋裝並製　小判一四四頁　正價十二錢　郵稅四錢

●玉突術　三宅鐵骨君著　全一冊洋裝並製　小判一六〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

●蹴鞠と自轉車　法科大學三井末彥君著　全一冊洋裝並製　小判一二五頁　正價十二錢　郵稅四錢

●馬術　法科大學遠山熙君著　全一冊洋裝並製　小判一三二頁　正價十二錢　郵稅四錢

●新遊泳術　法科大學稻田實君著　全一冊洋裝並製　小判一三六頁　正價十二錢　郵稅四錢

●ボート競漕　法科大學遠山熙君著　全一冊洋裝並製　小判一四〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

●ベースボール　クリツケツト　法科大學津田秦彥君著　全一冊洋裝並製　小判一八〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

●西洋秘傳魔術　澁江保君著　全一冊洋裝並製　大判三五〇頁　正價三十錢　郵稅八錢

●易占及骨相法　博文館編輯局編纂　寫眞挿入　全一冊洋裝並製　大判二六〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

●夢判斷　附夢占法　血達磨鶴飼貞君編　全一冊洋裝並製　中判一一四頁　正價二十錢　郵稅四錢

●諸藝指南　大田才次郎君著　寫眞版挿入　全一冊洋裝並製　大判二八三頁　正價二十五錢　郵稅六錢

●秘術傳法　博文館編輯局編纂　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋裝並製　大判二六〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

●銃獵案內　佐野信三郎君・內健行君合著　全一冊洋裝並製　小判一九六頁　正價十二錢　郵稅四錢

●昆虫採集　農科大學安藤森吉君著　全一冊洋裝並製　小判一五〇頁　正價十二錢　郵稅四錢

●狩獵と養鷄　田村松魚君著　寫眞銅版挿入　全一冊洋裝並製　大判二三〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

●劍舞術教範　神刀流劍舞附祕　日比野正吉君著　全一冊洋裝並製　中判一九四頁　正價十八錢　郵稅四錢

●相撲大觀　三木愛花君　山田春塘君共編　全一冊洋裝並製　中判三二四頁　正價二十八錢　郵稅六錢

●相撲新書　上司子介君著　寫眞銅版挿入　全一冊紙皮上製　小判三二三頁　正價二十五錢　郵稅四錢

●相撲と芝居　上司子介君山岸荷葉君合著　寫眞銅版挿入　全一冊洋裝並製　大判三六頁　正價二十五錢　郵稅六錢

◎全國兒童遊戲法　太田才次郎君著　大判洋裝並製一冊一五〇頁　正價一冊十五錢　郵稅一冊六錢　廉價一冊十錢　郵稅一冊四錢

◎射的術及弓術　法科大學津田秦彥君著　小判洋裝並製一二〇頁　正價十二錢　郵稅四錢　廉價八錢　郵稅四錢

◎庭球術　工科大學野田圭圖君著　小判洋裝並製一五〇頁　正價十二錢　郵稅四錢　廉價八錢　郵稅四錢

◎陸上競爭　農科大學志岐守二君著　小判洋裝並製一五二頁　正價十二錢　郵稅四錢　廉價八錢　郵稅四錢

◎鳥獸狩獵法　仝上　小判洋裝並製一四八頁　正價十二錢　郵稅四錢　廉價八錢　郵稅四錢

◎漁魚術　[illegible]太郎君著　小判洋裝並製一二〇頁　正價十二錢　郵稅四錢　廉價八錢　郵稅四錢

大槻如電君校訂、原田芳五郎君著　小判洋綴並製一八九頁
◎**遊藝起原**　正價十錢　郵稅四錢　廉賣價八錢　郵稅四錢

圍碁

十七世本因坊土屋秀榮君校訂　山田権平君著
●**新撰圍碁錦囊**　全三冊　小判　和上綴　三一八頁　正價五十錢　郵稅四錢

中川龜三郎君　小林鐵次郎君　巖崎健造君合著
●**圍碁大鑑**　全二冊　大判　和上綴　二〇〇頁　正價五十錢　郵稅六錢

平田純一郎君編述　彩色木版寫眞銅版挿入
●**圍碁と將棊**　全一冊　大判　洋並綴　二三八頁　正價二十五錢　郵稅六錢

小林鍵太郎君編述
●**圍碁入門**　全一冊　大判　和並綴　八六頁　正價二十五錢　郵稅二錢

小林鍵太郎君編述
●**圍碁初步**　全一冊　大判　和並綴　八〇頁　正價二十五錢　郵稅二錢

小林鍵太郎君編述
●**圍碁定石**　全一冊　中判　和並綴　八二頁　正價二十五錢　郵稅二錢

小林鍵太郎君編述
●**圍碁詰方**　全一冊　中判　和並綴　八八頁　正價二十五錢　郵稅二錢

小林鍵太郎君編述
●**圍碁布石法**　全一冊　中判　和並綴　八四頁　正價二十五錢　郵稅二錢

小林鍵太郎君編述
●評釋**古今名家打碁集**　全一冊　中判　和並綴　八五頁　正價二十五錢　郵稅二錢

小林鍵太郎君編述
●**互先定石集**　全三冊　中判　和並綴　二九六頁　正價一冊十五錢　郵稅二錢

小林鍵太郎君編述
●**古今名人打碁集**　全一冊　中判　和並綴　八六頁　正價二十五錢　郵稅二錢

小林鍵太郎君編述
●**近世名人打碁集**　全一冊　中判　和並綴　八八頁　正價二十五錢　郵稅二錢

小林鍵太郎君著
●**今代名人打碁集**　全一冊　中判　和並綴　八八頁　正價四十五錢　郵稅四錢

將棊

大橋宗英君著
●新編**將棊步式**（駒迎）　全二冊　小判　和並綴　正價四十二錢　郵稅四錢

大橋宗英君著
●**將棊早指南**（駒組）　全二冊　小判　和並綴　正價四十二錢　郵稅四錢

大橋宗桂君著
●**將棊早學**（駒組）　全二冊　小判　和並綴　正價四十二錢　郵稅四錢

伊藤宗印君著
●**將棊精妙**（詰手）　全二冊　小判　和並綴　正價四十二錢　郵稅四錢

大橋宗眠君著　福泉勝吉君合著
●**將棊新撰圖式**（詰手）　全二冊　小判　和並綴　正價四十二錢　郵稅四錢

桑原名仲君著 ●將棊極妙(詰手)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

伊藤看壽君著 ●將棊圖巧(話手)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

伊藤看壽君著 ●將棊玉圖(話手)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

天野宗步君著 ●將棊精選(定石) 近刊　全三冊 小判和 並製　正價十六錢 郵稅四錢

伊藤宗印君著 天野宗步手合 ●將棊手鑑(手合)　全三冊 小判和 並製　正價十六錢 郵稅四錢

新古人之手合 ●將棊玉手箱(手合)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

大橋宗英君著 ●將棊輝光(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

福島順纂君著 ●將棊絹篩(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

福島順纂君著 ●將棊獨稽古(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

大橋宗桂君著 ●將棊妙手(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

大橋宗桂君著 ●將棊明玉(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

大橋宗英君著 ●將棊粹金(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

大橋宗英君著 ●將棊奇戰(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

伊藤宗看君著 ●將棊絕妙(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

大橋英俊君著 ●將棊軌範(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

大橋宗[illegible]君著 ●將棊圖式(指方)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

大橋宗與君著 ●將棊養眞圖式(話手)　全二冊 小判和 並製　正價十二錢 郵稅四錢

家庭書類

家政

華族女學校學監下田歌子君著 ●家政學　全二冊 大判和 四二九頁 並製　正價一冊三十錢 郵稅一冊六錢

華族女學校學監下田歌子君著 ●家事要訣　全一冊 大判和 二八二頁 並製　正價三十五錢 郵稅八錢

●家政案内　岸上操君著　彩色木版寫眞銅版挿入
全一册洋並綴　大判二五六頁　正價二十五錢　郵税六錢

●實用家事經濟學　三浦智之君著
全一册紙皮上綴　小判一八四頁　正價二十錢　郵税四錢

●婦女家庭訓　華族女學校學監下田歌子君著
全一册和並綴　大判三六一頁　正價三十五錢　郵税八錢

●泰西所見家庭教育　華族女學校學監下田歌子君著
全一册和並綴　大判二五一頁　正價三十五錢　郵税八錢

●家庭の心得　華族女學校學監　下田歌子女史著
全一册和並綴　大判二六七頁　正價三十五錢　郵税六錢

●母親の心得　華族女學校學監下田歌子君著　彩色木版寫眞銅版挿入
全一册和並綴　大判二六七頁　正價三十五錢　郵税八錢

●育兒と衛生　西田敬止君著
全一册洋並綴　大判二四四頁　正價二十五錢　郵税六錢

●はゝのつとめ　醫學博士三島通良君著
全一册洋布上綴　大判三一二頁　正價七十五錢　郵税十錢

●女子手藝要訣　華族女學校學監下田歌子君著
全一册和並綴　大判二六二頁　正價三十五錢　郵税八錢

●裁縫と編物　吉田調子君著　彩色寫眞銅版挿入
全一册洋並綴　大判二六二頁　正價二十五錢　郵税六錢

●衣服と流行　博文館編輯局編纂　彩色木版寫眞銅版挿入
全一册洋並綴　大判二三六頁　正價二十五錢　郵税六錢

●婦女教育明治姫鏡　濱本[illegible]顯君著　彩色木版密畫挿入
全一册和並綴　大判三一四頁　正價五十錢　郵税六錢

●家政の栞　寒澤振作君著
全一册洋並綴　大判二〇〇頁　正價二十錢　郵税六錢

●明治三十六年懐中日記　博文館編輯局編纂
全一册洋布上製　小判二九八頁　正價十二錢　郵税四錢

●明治三十六年懐中日記
全一册洋布特製　小判二九八頁　正價十八錢　郵税四錢

●明治三十六年當用日記
全一册洋布上製　菊半裁五二二頁　正價三十錢　郵税八錢

●明治三十六年當用日記
全一册洋布上製　中判五五六頁　正正三十五錢　郵税十錢

●明治三十六年當用日記
全一册脊皮特製　中判五五六頁　正價五十錢　郵税十錢

●明治三十六年當用日記
全一册洋布上製　大判五五六頁　正價五十錢　郵税十四錢

●明治三十六年當用日記
全一册脊皮特製　大判五五六頁　正價六十五錢　郵税十四錢

●學生日記及通信用紙　慶應義塾教授菅綠陰君撰
全一册洋並綴　大判二頁開キ　正價廿二錢　郵税八錢

●英文學生日記　英學新報社編纂
全一册紙皮上綴　袖珍縦長形　正價二十五錢　郵税四錢

禮式及料理法

●日本女禮式大全　坪谷善四郎君著　彩色木版寫眞銅版挿入
全一册洋上綴　大判五五六頁　正價七十五錢　郵税十六錢
△蒔繪函入特製　和上綴　正價一圓　小包送四百匁

●普通禮式　下田歌子女史著
全一册洋並綴　大判二六二頁　正價三十五錢　郵税八錢

大橋乙羽君著
●和洋禮式　彩色木版寫眞銅版挿入
全一册洋並綴　大判二四八頁　正價二十五錢　郵稅六錢

中島義式君著
●新撰小學女禮式　密畫挿入
全一册洋並綴　大判二二〇頁　正價廿五錢　郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子君著
●料理手引草
全一册洋並綴　大判三三〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢

藤本藤陰君著
●實用料理法　彩色木版寫眞銅版挿入
全一册洋並綴　大判二八四頁　正價二十五錢　郵稅六錢

佐々木孝君著
●西洋料理法　彩色木版寫眞版挿入
全一册洋並綴　大判二五四頁　正價二十五錢　郵稅六錢

茶の湯及生花

岡崎淵沖君著
●各傳比較點茶活法
全四册和上綴　大判七〇〇頁　正價二圓五十錢　小包送六百匁

博文館編輯局編纂
●茶の湯と生花　彩色木版寫眞銅版挿入
全一册洋並綴　大判二五七頁　正價二十五錢　郵稅六錢

吐月齋惠一烏君編纂
●挿花盆石四時の詠
全三册和上綴　大判一四〇枚　正價五十錢　郵稅六錢

秀賞齋月一樹君編纂
●挿花盆石正風花鏡
全三册和上綴　大判二〇二枚　正價五十錢　郵稅六錢

江刺家協一君著
◎茶の湯大全
中判總クロース上製五〇八頁　全一　正價一圓　郵稅八錢　廉賣價六拾錢　郵稅八錢

習字書類

書學

三宅耷軒君著
●書法自在　彩色木版寫眞版挿入
全一册洋並綴　大判二二〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

石川鴻齋君著
●書法詳論
全二册和上製　大判二〇〇頁　正價四十錢　郵稅六錢

市河米庵君著
●略可法
全二册和上綴　大判三〇〇頁　正價四十八錢　郵稅六錢

秦　白巖甫氏校
●六書通
全三册和上綴　大判三〇〇頁　正價七十錢　郵稅六錢

市河米庵君著
●墨場必携
全六册和上綴　大判三〇五頁　正價七十錢　郵稅八錢

●(茶の湯及生花)　●習字書類、書學

(四七)

- 關濱南君書 **行書類纂** 全十二冊和上綴 大判一二〇〇頁 正價二圓十錢 小包送四百匁
- 市河米菴君書 **楷行薈編** 全十五冊和上綴 大判一二五〇頁 正價三圓 小包送六百匁
- 河思邈齋君編纂 **草叢** 全十二冊和上綴 大判一四〇〇頁 正價三圓五十錢 小包送六百匁
- 佐久間謙海君書 ◎**支那歷代名畫論評** 大判和裝和綴二三二頁 正價四十錢 郵稅八錢 特價二十五錢 郵稅八錢

習字手本

- 下田歌子女史編 坂正臣君書 **女子用文習字帖** 全二冊和並綴 大判百四十四枚 正價八十錢 郵稅八錢
- 大和田建樹君著 小野鵞堂君書 **明治女子書簡文** 全一冊和並製 大判二〇〇頁 正價四十錢 郵稅四錢
- 大和田建樹君著 巌谷一六居士書 **明治書簡文** 全一冊和並綴 大判二〇〇頁 正價三十錢 郵稅四錢
- 依田學海君著 巌谷一六居士書 **新撰應用書翰** 全一冊和並綴 大判一七〇頁 正價三十五錢 郵稅四錢
- 河村吉之輔君書 **初學手紙の文** 全二冊和並綴 大判二〇〇頁 正價三十五錢 郵稅六錢

- 橘千蔭君書 **烏丸帖** 全一冊和並綴 大判二四枚 正價三十五錢 郵稅四錢
- 橘千蔭君書 **新百人一首** 全一冊和並綴 大判五一枚 正價三十錢 郵稅四錢
- 巌谷一六先生書 **一六蘭亭帖** 全一冊和並綴 大判五〇頁 正價二十錢 郵稅二錢
- 日下部鳴鶴君書 **鳴鶴蘭亭帖** 全一冊和並綴 大判五〇頁 正價二十錢 郵稅二錢
- 新岡久頼君書 **短冊習字帖** 全一冊和上綴 大判 頁 正價一圓 郵稅六錢
- 新岡久頼君書 **いろは三體帖** 全一冊折本 大判 頁 正價四十錢 郵稅二錢
- 巻菱湖君書 **消息往來** 全二冊和並綴 大判 正價九十錢 郵稅十錢
- 柳澤小陽君書 **三體千字文** 全一冊和並綴 大判一五〇頁 正價四十錢 郵稅四錢
- 河村鷗稼君書 **十體千字文** 全一冊和並綴 中判 正價二十錢 郵稅四錢
- 巻菱湖君書 **眞書千字文** 全一冊折本 大判 正價七十錢 郵稅十錢
- 佐瀬得所君書 **眞書千字文** 全一冊折本 大判 正價六十五錢 郵稅十錢
- 歐陽詢君書 **眞書千字文** 全一冊折本 大判 正價四十五錢 郵稅六錢
- 市河米菴君書 **楷書千字文** 全一冊折本 大判 正價四十五錢 郵稅八錢

書者	書名	體裁	價
錢泳君書	●隷書千字文	全一冊 大判 折本	正價四十五錢 郵稅六錢
孫過庭君書	●行書千字文	全一冊 大判 折本	正價四十五錢 郵稅八錢
文徵明君書	●行書千字文	全一冊 大判 折本	正價四十五錢 郵稅六錢
市河米庵君書	●行書千字文	全一冊 大判 折本	正價四十五錢 郵稅八錢
佐瀨得所君書	●行書千字文	全一冊 大判 和並綴	正價三十錢 郵稅四錢
孫過庭君書	●草書千字文	全一冊 大判 折本	正價四十五錢 郵稅八錢
卷菱湖君書	●書法千字文	全一冊 大判 和並綴	正價三十錢 郵稅四錢
柳澤小陽君書	●隷書歸去來帖	全一冊 大判 折本	正價四十五錢 郵稅四錢
柳澤小陽君書	●楷書丞民帖	全一冊 大判 折本	正價二十五錢 郵稅四錢
趙子昂君書	●行書蘭亭帖	全一冊 大判 折本	正價三十五錢 郵稅六錢
王羲之君書	●天朗帖	全一冊 大判 折本	正價四十五錢 郵稅六錢
懷素君書	●聖母帖	全一冊 大判 折本	正價三十五錢 郵稅六錢
蘇東坡君書	●落花詩	全一冊 大判 折本	正價四十五錢 郵稅六錢

書者	書名	體裁	價
佐瀨得所君書	●前出師表	全一冊 大判 和並綴	正價二十五錢 郵稅四錢
董其昌君書	●赤壁賦	全一冊 大判 折本	正價四十五錢 郵稅六錢
文徵明君書	●赤壁賦	全一冊 大判 折本	正價三十五錢 郵稅六錢
吉田晩稼先生書	◎吉田晩稼 楷書千字文	大判長方形和裝和紙三十五枚	正價三十八錢 郵稅四錢 廉賣價廿五錢 郵稅四錢

遺墨

書者	書名	體裁	價
勝海舟君書	●流芳遺墨 附追賛逸話	全二冊 大判 和上綴	正價一圓五十錢 郵稅十四錢
勝海舟君編	●亡友帖	全一冊 大判 和上綴	正價一圓三十錢 郵稅十一錢
勝海舟君編	●山陽眞蹟 上樂翁公書	全一冊 大判 和並綴	正價二十錢 郵稅二錢
長尾景次郎君編	○山陽先生眞蹟 詩文帖	全二冊 大判 和並綴	正價三十錢 郵稅六錢

繪畫書類

畫學

野口珂北君著　野口小蘋女史畫　木版密畫口頁挿入
●畫法自在　全一册洋装　大判　一五〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

久保田米僊君著　木版密畫挿入
●畫法大意　全一册洋装　大判　二二一頁　正價十五錢　郵稅六錢

石川鴻齋君著
○畫法詳論　全三册和装　大判　三〇〇頁　正價五十錢　郵稅六錢

畫譜

審美協會編纂
●美術大觀　全四册和装　大判　一〇〇枚　正價十四圓　小包送六百匁

狩野鹿信君編　狩野探幽縮圖
●聚珍畫譜　全三册和装　大判　正價一圓四十錢　郵稅十四錢

池和亭筆畫
●花鳥畫譜　全一册和装　大判　正價三圓　郵稅十四錢

小林永濯君畫
●子供遊び畫帖　全一册和装　大判　錦繪　正價三圓五十錢　郵稅二十錢

谷文晁君畫　文晁　河井抱一上人縮
●本朝畫纂大全　全四册和装　大判　正價一圓　郵稅十二錢

○光琳百圖　全二册和装　大判　正價五十錢　郵稅六錢

西川祐信君畫
●祐信畫鑑　全三册和装　大判　正價四十五錢　郵稅十錢

中島亨齋君畫
●亨齋畫譜　全二册和装　大判　正價三十錢　郵稅六錢

立齋廣重君畫
●廣重畫譜　全三册和装　大判　正價七十錢　郵稅六錢

諸名家合作
●新雛形千歳袖　全一册和装　大判　三一枚　正價二十八錢　郵稅四錢

諸名家合作
●地口畫譜　全一册和装　大判　正價十五錢　郵稅二錢

貞園五岳君畫
○俳諧畫譜集　全二册和装　小判　正價二十錢　郵稅四錢

文學書類

書學手本

● 古今對照 習畫帖　伊藤直藏君岡村增太郎君合著
全二冊和 綴 大判　正價七十五錢 郵税四錢

● 幾何畫法
全一冊洋 綴 中判 一五四頁　正價十二錢 郵税四錢

文法

● 日本大文典　落合直文君著
文部省檢定濟
全一冊背皮上製 大判 八三四頁　正價一圓七十五錢 郵税十八錢

● 中等教育 日本文典　落合直文君著
全一冊背皮上製 中判 四八八頁　正價六十錢 郵税十錢

● 解說批評 日本文典　文學士岡田正美君著
全二冊洋 綴 大判 頁　正價一冊卅五錢 郵税一冊八錢
▲特製本 洋布上製　正價一冊五十錢 郵税一冊十錢

● 中等教育 文法教科書　落合直文君著
全一冊背皮上製 大判 一二六君　正價四十五錢 郵税八錢

● 女子普通文典　華族女學校學監下田歌子君著
全一冊和 綴 大判 二四六頁　正價三十五錢 郵税八錢

● 新撰假名遣活法　大和田建樹君著
全一冊洋 綴 小判 一七〇頁　正價十五錢 郵税二錢

文學史

● 日本大文學史　大和田建樹君著
全五冊洋 綴 大判 一四七〇頁　正價一冊四十錢 郵税一冊八錢

● 中等教育 日本文學史　小中村義象君 增田于信君共著
全一冊洋 綴 中判 頁　正價二十五錢 郵税六錢

● 和文學史　大和田建樹君著
全一冊洋 綴 中判 六四九頁　正價四十五錢 郵税八錢

● 英文學史　文學博士坪内雄藏君著
全一冊洋布上製 大判 九五〇頁　正價二圓 小包送四百匁

● 全分本
全三冊洋 綴 大判　正價一冊六十錢 郵税一冊六錢

● 支那文學史　文學士笹川種郎君著
全一冊洋 綴 大判 三二二頁　正價三十五錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製　正價五十錢 郵税十錢

◎ 通俗文學汎論　奥村信太郎編
大判洋裝並製三二五頁　正價二十五錢 郵税八錢
一　廉價二十錢 郵税八錢

◎**支那學術史綱**　國府犀東君　文學士白河次郎君共著
大判洋裝並製二三八頁　一　正價三十錢　郵稅四錢　廉賣價十五錢　郵稅四錢

◎**名家戲文集**　岸上操君編
中判洋裝並製三一四頁　下卷　正價二十錢　郵稅六錢　廉賣價十錢　郵稅六錢

◎**希臘羅馬文學史**　澁江保君著
中判洋裝並製二七〇頁　一　正價十二錢　郵稅六錢　廉賣價五錢　郵稅六錢

◎**獨佛文學史**　仝上
中判洋裝並製二五〇頁　一　正價十二錢　郵稅六錢　廉賣價五錢

◎**英國文學史**　仝上
中判洋裝並製二七〇頁　一　正價十二錢　郵稅六錢　廉賣價五錢　郵稅六錢

國文

●**國文軌範**　第五版　落合直文君著　中等教育
全一冊洋裝並綴　中判三八〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

●**名文評釋**　國學院編纂
全一冊洋裝並綴　大判四五二頁　正價五十錢　郵稅十錢

●**標註枕草子**　文學博士萩野由之君校註
全二冊洋裝並綴　大判　頁　正價一冊三十錢　郵稅一冊六錢

●**吉野拾遺詳解**　中村秋香君校訂
全一冊洋裝並綴　大判一五一頁　正價二十五錢　郵稅四錢

●**巣林子撰註**　饗庭篁村君著
全一冊洋裝並綴　大判四四一頁　正價八十錢　郵稅十錢
▲特製本　洋布上綴　正價一圓　郵稅十二錢

●**校註土佐日記**　佐々木信綱君校註
全一冊洋裝並綴　大判五〇頁　正價十錢　郵稅二錢

●**校註竹取物語**　佐々木信綱君校註
全一冊洋裝並綴　大判七六頁　正價十二錢　郵稅二錢

●**校註伊勢物語**　佐々木信綱君校訂註
全一冊洋裝並綴　大判一〇六頁　正價十二錢　郵稅四錢

●**刪定徒然草**　大和田建樹刪定　中等教育　文部省檢定濟
全一冊洋裝並綴　大判一二一頁　正價十八錢　郵稅四錢

●**古文讀本**　大和田建樹君選
全六冊和裝並綴　大判七五六頁　正價一圓六十錢　郵稅各四錢
▲正價一卷ヨリ五卷迄各二十五錢六卷三十五錢

●**枕草紙春曙抄**　北村季吟君著
全七冊和裝並綴　大判　正價一圓五十錢　郵稅二十錢

●**校註徒然草**　佐々木信綱君校註
全一冊洋裝並綴　大判　正價二十五錢　郵稅四錢

●**校註更科日記**　佐々木信綱君校註
全一冊洋裝並綴　大判　正價十二錢　郵稅四錢

●**校註方丈記**　佐々木信綱君校註
全一冊洋裝並綴　大判六〇頁　正價八錢　郵稅二錢

●**竹取物語　伊勢物語　徒然草　紫式部日記　住吉物語**　文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝並綴　中判四三〇頁　正價二十五錢　郵稅三錢

●**土佐日記　枕草紙　更科日記　方丈記**　文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝並綴　中判四四〇頁　正價二十五錢　郵稅三錢

十六夜日記　落窪物語　辨内侍日記
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判四五〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

とりかへばや物語　堤中納言物語　四季物語
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判四三〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

中務内侍日記　和泉式部日記　讃岐典侍日記　蜻蛉日記
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判四三二頁　正價二十五錢　郵税三錢

濱松中納言物語　大和物語　唐物語
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判四五〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

宇治拾遺物語　多武峯少將物語
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判五二〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

源氏物語
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全五冊洋裝　中判二五七七頁　正價一冊廿五錢　郵税一冊三錢

榮花物語
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全三冊洋裝　中判一五六〇頁　正價一冊廿五錢　郵税一冊三錢

太平記
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全三冊洋裝　中判一七一〇頁　正價一冊廿五錢　郵税一冊三錢

保元物語　平治物語　秋の夜長物語　鴉鷺合戰物語
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判四三〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

平家物語
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判六六〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

古今著聞集
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判四七〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

十訓抄　公事根源
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判四二〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

水鏡　大鏡
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判四八〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

増鏡
文學博士萩野由之君　落合直文君　小中村義象君校註
全一冊洋裝　中判四二〇頁　正價二十五錢　郵税三錢

新撰 國文問答
惣野勇雄君著
全一冊紙皮上綴　小判二六六頁　正價二十錢　郵税四錢

和歌書類

和歌

歌まなび
大和田建樹君著
全一冊洋布上綴　中判一〇三八頁　正價一圓五十錢　郵税十六錢

歌の栞
佐々木信綱君著
全一冊洋布上綴　中判一三九六頁　正價一圓二十錢　小包四百匁

補訂 詠歌自在
佐々木信綱君著
全一冊洋布上綴　中判七八〇頁　正價一圓　郵税十二錢

詠歌辭典
佐々木信綱君著
全一冊洋布上綴　小判一三七六頁　正價七十五錢　郵税八錢

華族女學校學監下田歌子君著	詠歌の栞	全一冊和装 大判 三一〇頁	正價三十五錢 郵税八錢
落合直文君著	新撰歌典	全一冊洋装 中判 六一〇頁	正價四十錢 郵税八錢
宮澤春文君著	作歌自在 彩色木版寫眞版挿入	全一冊洋装 大判 二四〇頁	正價二十五錢 郵税六錢
文學博士有賀長雄君著	和歌八重垣	全七冊和装 小判	正價五十五錢 郵税四錢
長井金升君著	狂歌の栞	全一冊紙皮上綴 小判 二九六頁	正價二十錢 郵税四錢
文學士武島羽衣君著	◎霓裳歌話	小判摸皮上製三四〇頁	正價三十錢 廉價二十錢 郵税六錢

歌集

佐々木信綱君校註	古今和歌集 貫之家集 躬恒家集 有則家集 忠岑家集	全一冊洋装 中判 四一八頁	正價二十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	後撰和歌集 元輔家集 能宣家集 順家集 天德歌合	全一冊洋装 中判 四〇六頁	正價二十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	拾遺和歌集 公任家集 紫式部家集 淸少納言家集	全一冊洋装 中判 三八八頁	正價二十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	後拾遺和歌集 相模家集 經信卿母集 高陽院歌合	全一冊洋装 中判 三九二頁	正價二十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	金葉和歌集 詞花和歌集 堀川百首	全一冊洋装 中判 三八八頁	正價二十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	千載和歌集 永久百首 忠度忠臣集 後京極自歌合	全一冊洋装 中判 四〇六頁	正價二十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	新古今和歌集 自讃歌 鴨長明集	全一冊洋装 中判 四〇八頁	正價二十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	林下集 源三位賴政集 山家集 金槐集	全一冊洋装 中判 四九四頁	正價二十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	萬葉集	全三冊洋装 中判 一二二〇頁	正價一冊廿五錢 郵税一冊六錢
木村正辭君著	萬葉集代匠記（全部十二冊自第一輯至第十二輯）	第一輯洋装 大判 三〇四頁	正價七十五錢 郵税八錢
仝	仝	第二輯洋装 大判 三九六頁	正價七十五錢 郵税八錢
仝	仝	第三輯洋装 大判 二七六頁	正價七十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	悦目抄 無名抄 歌たかり にひまなび 新學異見 外二書	全一冊洋装 中判 四二八頁	正價二十五錢 郵税六錢
佐々木信綱君校註	加茂眞淵翁全集	全二冊洋装 中判 一〇〇〇頁	正價一冊卅五錢 郵税一冊八錢
佐々木信綱君校註	本居宣長翁全集	全一冊洋装 中判 五四二頁	正價三十五錢 郵税八錢
佐々木信綱君校註	香川景樹翁全集	全二冊洋装 中判 一〇一二頁	正價一冊卅五錢 郵税一冊八錢

● 小澤蘆庵翁全集　佐々木信綱君校註　全一冊洋並綴 中判五二一頁　正價三十五錢 郵税八錢

● 近世名家家集　佐々木信綱君校註　全二冊洋並綴 中判一〇七二頁　正價一册卅五錢 郵税一册八錢

● 近世長歌今樣歌集　佐木々信綱君校註　全一冊洋並綴 中判五七〇頁　正價三十五錢 郵税八錢

● 桂園門下家集　佐々木信綱君校註　全一冊洋並綴 中判七〇〇頁　正價三十五錢 郵税八錢

● 明治名家家集　佐々木信綱君校註　全二冊洋並綴 中判一〇五四頁　正價一册卅五錢 郵税一册六錢

● 校註明倫歌集　佐々木信綱君校註　全一冊洋並綴 大判　正價二十五錢 郵税四錢

● 校註古今和歌集　佐々木信綱君校註　全一冊洋並綴 中判　正價十五錢 郵税六錢

● 竹柏園集 第一編　佐々木信綱君編纂　洋裝紙皮上綴 小判五一六頁　正價三十五錢 郵税六錢

● 竹柏園集 第二編　佐々木信綱君編纂　洋裝紙皮上綴 小判五五八頁　正價三十五錢 郵税六錢

● 百人一首講義　佐々木信綱君校註　全一冊洋並綴 中判三〇〇頁　正價二十錢 郵税四錢

● 明治英名百首　小林永濯君編纂　全一冊和並綴 中判　正價十八錢 郵税二錢

● 庭の摘草 附歌稔記　子爵黒田清綱君 税所敦子君共撰 村松今朝太郎君編　和裝上綴 中判二五八頁　正價 郵税

◎ 冠詞例歌集　從五位朿松房秦君著　小判漢皮上製二一〇頁　正價二十錢 郵税四錢 廉價十五錢 郵税四錢

新體詩

● 新體詩歌自在　中郁秋香君著　全一冊洋布上綴 中判八三四頁　正價一圓 郵税十二錢

● 新體詩學　大和田建樹君著　全一冊洋並綴 小判二二四頁　正價十五錢 郵税四錢

● 歐米名家詩集　大和田建樹君著　全一冊洋並綴 中判六〇二頁　正價三十錢 郵税四錢

● 散文韻文 深山櫻　大和田建樹君著　全一冊紙皮上綴 小判七〇二頁　正價四十錢 郵税六錢

● 散文韻文 雪月花　大和田建樹君著　全一冊紙皮上綴 小判六二五頁　正價三十五錢 郵税六錢

○ 散文韻文 花紅葉　鹽井雨江君 武島羽衣君 大町桂月君合著　全一冊洋布上綴 小判四二一頁　正價三十錢 郵税六錢

● 美文韻文 黄菊白菊　文學士大町桂月君著　全一冊紙皮上綴 小判四〇二頁　正價二十五錢 郵税六錢

● 美文韻文 暗香疎影　文學士鹽井雨江君著　全一冊紙皮上綴 小判三五四頁　正價二十五錢 郵税六錢

● 天地有情　文學士土井晩翠君著　全一冊洋布上綴 小判二三〇頁　正價二十五錢 郵税四錢

◎ 散文韻文 藻鹽木　大和田建樹君著　小判漢皮上製五八九頁　正價四十五錢 郵税六錢 廉價二十五錢 郵税六錢

◎岡府県東君著 新体詩歌 **花ざくろ** 小判摸皮上製二五六頁 正價二十五錢 郵税四錢 販賣價二十五錢 郵税四錢

唱歌

●入江好次郎君著 **1 2 3 唱歌** 全一册洋並製 大判六〇頁 正價十八錢 郵税四錢

●大和田建樹君著 尋常小學 **帝國唱歌** 全二册和並製 大判頁 正價十四錢 郵税四錢

●大和田建樹君著 高等小學 **帝國唱歌** 全二册和並製 大判頁 正價二十五錢 郵税四錢

●納所辨次郎君著 **日本軍歌** 全一册洋並製 大判五〇頁 正價十二錢 郵税二錢

●納所辨次郎君著 **明治軍歌** 全一册洋並製 大判 正價十二錢 郵税二錢

●海軍大主計竹内十郎君著 征清 **海軍々歌** 全一册洋並製 小判四五頁 正價三錢 郵税二錢

俳諧書類

俳諧作法

●老鼠堂永機君著 **俳諧自在** 全一册洋布上製 小判 正價一圓 郵税十二錢

●三宅青軒君著 **俳諧獨學** 彩色木版寫眞銅版挿入 全一册洋並製 大判二五五頁 正價二十五錢 郵税六錢

●伊藤松宇君校訂 **付合作法全集** 名家手蹟寫眞銅版挿入 全一册洋並製 大判三三五頁・正價三十錢 郵税八錢

●松永撫松庵君著 **俳諧麓の栞** 全一册洋並製 中判 正價二十錢 郵税六錢

●廣田楊知君著 **和歌俳諧節用集** 全二册和並製 小判五八四頁 正價三十五錢 郵税四錢

●高井蘭山君著 **俳字節用集** 全二册和並製 小判 正價二十錢 郵税二錢

俳諧史傳

角田竹冷君校閲・星野麥人君・牧野望東君合著
● 俳諧年表　全一冊和上製　大判二八六頁　正價六十錢　郵税八錢

赤澤四丁君校訂　名家眞蹟挿入
● 俳諧逸話全集　全一冊洋並製　大判三三二頁　正價三十錢　郵税八錢

俳諧及俳文

巖谷小波君校訂　名家手蹟挿入
● 俳諧論集　全一冊洋並製　大判三三〇頁　正價三十錢　郵税八錢

巖谷小波君校訂　名家手蹟挿入
● 續俳諧論集　全一冊洋並製　大判三〇六頁　正價三十錢　郵税八錢

巖谷小波君校訂　名家手蹟挿入
● 俳諧文集　全一冊洋並製　大判三二八頁　正價三十錢　郵税八錢

佐藤飯人君校訂
◎ 俳諧紀行全集　大判古俳人手蹟寫眞入洋裝並製四〇〇頁　正價二十錢　郵税八錢　特價二十錢　郵税八錢

俳諧句集

老鼠堂永機君　阿心庵雪人君校訂　寫眞版挿入
● 芭蕉全集　全一冊洋並製　大判三〇四頁　正價三十錢　郵税八錢

大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
● 芭蕉以前俳諧集　全二冊洋並製　大判六三〇頁　正價一册三十錢　郵税一册八錢

老鼠堂永機君　阿心庵雪人君校訂
● 其角全集　全一冊洋並製　大判二八〇頁　正價三十錢　郵税八錢

老鼠堂永機君　晋雪庵柳遲君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
● 蕉門十哲集　全一冊洋並製　大判三〇二頁　正價三十錢　郵税八錢

大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
● 元祿名家句集　全一冊洋並製　大判二八六頁　正價三十錢　郵税八錢

大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
● 素堂鬼貫全集　全一冊洋並製　大判二八七頁　正價三十錢　郵税八錢

不白軒梅年君　雪中庵雀志君　雪蓑人宇貫君校訂　寫眞版挿入
● 蓼太全集　全一冊洋並製　大判三二一頁　正價三十錢　郵税八錢

大野洒竹君校訂
● 蕪村曉臺全集　全一冊洋並製　大判三〇〇頁　正價三十錢　郵税八錢

大野洒竹君校訂
● 一茶大江丸全集　全一冊洋並製　大判三二〇頁　正價三十錢　郵税八錢

大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
● 俳諧珍本集　全一冊洋並製　大判三一七頁　正價三十錢　郵税八錢

角田竹冷君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
● 俳諧句合全集　全一冊洋並製　大判二九七頁　正價三十錢　郵税八錢

尾崎紅葉君校訂
●俳諧類題句集　全二册洋 並綴 大判 七二〇頁　正價一册二十錢　郵稅一册八錢

竹村秋竹君編
●明治俳句　全一册紙皮上綴 小判 五〇〇頁　正價三十五錢　郵稅六錢

雄齋圖譜君案
●俳人百家撰　木版密畫挿入　全一册和 並綴 中版 一〇〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

鶯亭金升君著
●狂句の栞　全一册紙皮上綴 小判 三〇〇頁　正價二十錢　郵稅四錢

長井金升君著
●狂躰句の栞　全一册紙皮上綴 小判 二五二頁　正價二十錢　郵稅四錢

長井金升君著
●雜俳の栞　全一册紙皮上綴 小判 二七四頁　正價二十錢　郵稅四錢

大野酒竹君校訂
◎許六全集　大判名家手蹟寫眞版入洋裝並製三〇〇頁　正價三十錢　郵稅八錢　廉賣價二十錢　郵稅八錢

岡野知十君校訂
◎也有全集　大判名家手蹟寫眞版入洋裝並製二八四頁　正價三十錢　郵稅八錢　廉賣價二十錢　郵稅八錢

雪中庵雀志君校訂
◎嵐雪全集　大判名家手蹟寫眞版入洋裝並製二七〇頁　正價三十錢　郵稅八錢　廉賣價二十錢　郵稅八錢

老鼠堂永機君 其角堂機一君校訂
◎支考全集　大判名家手蹟寫眞版入洋裝並製三四〇頁　正價三十錢　郵稅八錢　廉賣價二十錢　郵稅八錢

萊窓無角君著
◎俳家成美全集　小判洋裝並製五二〇頁　正價四十錢　郵稅六錢　廉賣價二十錢　郵稅八錢

聲曲書類

謠曲

大和田建樹君著
●謠曲通解　全一册背皮上綴 大判 一七八六頁　正價一圓八十錢　小包送六百匁

大和田建樹君著
●謠曲文粹　全一册洋 並綴 小判 五三〇頁　正價三十五錢　郵稅六錢

大和田建樹君著
●謠と能　彩色木版寫眞銅版挿入　全一册洋 並綴 大判 二七六頁　正價二十五錢　郵稅六錢

大和田建樹君著
●日本歌謠類聚　全二册背皮上綴 中判 二〇四八頁　正價一册六十錢　郵稅一册十六錢

淨瑠璃

饗庭篁村君校訂
●近松時代淨瑠璃　全一册背皮上綴 中判 一〇〇八頁　正價六十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ●近松世話淨瑠璃 全一冊背皮上製 中判一〇四四頁 正價六十錢 郵稅十六錢

水谷不倒君校訂 ●續近松淨瑠璃集 全一冊背皮上製 中判六六八頁 正價六十錢 郵稅十六錢

水谷不倒君校訂 ●近松（二十四）淨瑠璃集 全一冊背皮上製 中判一〇九〇頁 正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ●淨瑠璃名作集 全一冊背皮上製 中判一〇〇〇頁 正價六十錢 郵稅十六錢

幸堂得知君校訂 ●忠臣藏淨瑠璃集 全一冊背皮上製 中判一〇八〇頁 正價六十錢 郵稅十六錢

水谷不倒君校訂 ●竹田（出雲）淨瑠璃集 全一冊背皮上製 中判一〇四六頁 正價六十錢 郵稅十六錢

水谷不倒君校訂 ●江戶（作者）淨瑠璃集 全一冊背皮上製 中判一〇六〇頁 正價六十錢 郵稅十六錢

水谷不倒君校訂 ●紀海音淨瑠璃集 全一冊背皮上製 中判一〇一〇頁 正價六十錢 郵稅十六錢

水谷不倒君校訂 ●文耕堂淨瑠璃集 全一冊背皮上製 中判一〇一〇頁 正價六十錢 郵稅十六錢

水谷不倒君校訂 ●並木（宗輔）淨瑠璃集 全一冊背皮上製 中判一一四〇頁 正價六十錢 郵稅十六錢

●義太夫百番 全一冊洋布上製 小判六七六頁 正價一圓 郵稅十二錢

音曲

博文館編輯局編纂 ●琴曲獨稽古 彩色木版寫眞銅版挿入 全一冊洋裝上製 大判二四八頁 正價二十五錢 郵稅六錢

百足登君著 ●胡弓の栞 全一冊和裝上製 中判一〇二頁 正價十錢 郵稅四錢

雜曲

鈕井金升君校訂 ●俗曲大全 全一冊背皮上製 中判一〇九四頁 正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局編纂 ●聲曲自在 彩色木版寫眞版挿入 全一冊洋裝上製 大判二三八頁 正價二十五錢 郵稅六錢

笑亭金升君著 ●都々逸の栞 全一冊紙皮上製 小判二九〇頁 正價二十錢 郵稅四錢

笑亭金升君著 ●冠句の栞 全一冊紙皮上製 小判三三四頁 正價二十錢 郵稅四錢

笑亭金升君著 ●都々逸一千題 全一冊紙皮上製 小判五六〇頁 正價三十五錢 郵稅六錢

大宮宗司君編 ◎日本雅曲集 中判洋裝上製三二八頁 正價二十錢 郵稅六錢 [illegible]價十錢 郵稅六錢

漢詩書類

詩學

巖谷修 三島毅 岡千仞 栗本鋤雲 石川鴻齋 諸先生校訂
●佩文韻府 全百册和上綴七帖入 大布六〇二〇枚 正價四十圓 小包送三貫六〇匁

石川鴻齋君校訂
●圓機活法 全三册和上綴 中判美帙入 正價三圓 小包送六百匁

湯文路君著
●詩韻合璧 全五册和上綴 中判 正價一圓 郵稅六錢

石川鴻齋君著
●詩法詳論 全二册和並綴 大判二二〇頁 正價四十錢 郵稅六錢

大槻東陽君著
●詩文良材 全二册和並綴 大判 正價五十五錢 郵稅六錢

笹川臨風君著
◎新選詩語活用 全三册和並綴 中判 正價三十錢 郵稅四錢

柳井絅齋君著
●作詩自在 彩色木版寫眞版挿入 全一册洋並綴 大判二四六頁 正價二十五錢 郵稅六錢

松本紀山君著
●作詩詩訣 全一册洋並綴 中判二〇〇頁 正價十二錢 郵稅四錢

藤壇君著
●梧窓詩話 全二册和並綴 中判三八〇頁 正價十五錢 郵稅四錢

滿洲旗士紹古英繼君校訂 自邇集平仄編
●四聲聯珠 陸軍少將福島安正君著 全一册洋布上綴 大判八三六頁 正價二圓五十錢 郵稅二十錢

詩集

小宮山綏介君講述
●詩經講義 全一册洋並綴 中判四八〇頁 正價二十五錢 郵稅八錢

太田淳軒君講述
●唐詩選三體詩講義 全一册洋並綴 中判四六四頁 正價廿五錢 郵稅八錢

岸上質軒君編
●明治二百五十絶句 全一册紙皮上製 中判六四四頁 正價六十錢 郵稅八錢

青山四洲君撰
◎朝鮮名家詩集 小判洋裝並製二〇〇頁 正價十錢 郵稅四錢 廉價五錢 郵稅四錢

漢文書類

經史

●四書　後藤點　全十册 和 並綴 大判 四一〇頁　正價一圓六十錢 小包送六百匁

●五經　後藤點　全十一册 和並綴 大判 六八〇頁　正價二圓二十錢 小包送八百匁

●四書新釋大學　文學士久保天隨君著　全一册 和 並綴 大判 一三〇頁　正價十五錢 郵稅四錢

●四書新釋中庸　文學士久保天隨君著　全一册 和 並綴 大判 二〇〇頁　正價廿錢 郵稅四錢

●四書新釋論語　文學士久保天隨君著　全二册 和 並綴 大判 七二六頁　正價一册四十錢 郵稅一册八錢

●四書新釋孟子　文學士久保天隨君著　全二册 和 並綴 大判 一〇九八頁　正價一册六十錢 郵稅一册十錢

●新註四書補註備旨　林退菴君著　全五册 和 上綴 小判 二四四枚　正價一圓 郵稅六錢

●四書讀本　中島筑山君訓點　全一册 洋 並綴 大判 二六〇頁　正價三十錢 郵稅六錢

●四書講義　內藤耻叟君講義　全二册 洋 並綴 中判 九〇〇頁　正價一册廿五錢 郵稅一册八錢

●小學孝經忠經講義　內藤耻叟君講義　全一册 洋 並綴 中判 四七〇頁　正價廿五錢 郵稅八錢

●近思錄講義　內藤耻叟君講義　全一册 洋 並綴 中判 頁　正價廿五錢 郵稅六錢

諸子

●老子講義　文學博士根本通明君講述　全一册 和 上綴 大判 三九六頁　正價五十錢 郵稅八錢

●增評荀子箋釋　村岡良弼君訓點　全二册 洋 並綴 大判 四五〇頁　正價七十錢 郵稅十錢

●荀子講義　桃井梅菴君講義　全二册 洋 並綴 中判 九八八頁　正價一册廿五錢 郵稅一册八錢

●莊子講義　太田淳軒君講義　全二册 洋 並綴 中判 九〇九頁　正價一册 [illegible] 郵稅一 [illegible] 八 [illegible]

●韓非子講義　小宮山綏介君講義　全二册 洋 並綴 中判 九〇〇頁 [illegible] 八 [illegible]

小宮山綏介君講述 ●老子・列子・孫子・吳子講義 全一冊洋並綴 中判 四三〇頁 正價廿五錢 郵稅八錢

内藤耻叟君講述 ●墨子文中子講義 全一冊洋並綴 中判 五八〇頁 正價廿五錢 郵稅八錢

文集

文學士大町桂月君・文學士白河鯉洋君編纂 ●帝國漢文讀本 全五冊洋並綴 大判 一〇八〇頁 正價一圓七十錢 郵稅一冊六錢 ▲第一卷正價三十錢第二編以下各三十五錢

石川鴻齋君編纂 ●中等教育漢文軌範 全一冊洋並綴 中判 二九〇頁 正價二十錢 郵稅四錢

大竹政正君編 ●增評文章軌範 全六冊和並綴 大判 正價一圓四錢 郵稅十錢

安原健堂君箋註 ●正續文章軌範讀本 全一冊洋布上綴 大判 五五〇頁 正價七十五錢 郵稅十四錢

安原健堂君箋註 ●正文章軌範讀本 全一冊洋並綴 大判 二五〇頁 正價三十錢 郵稅六錢

安原健堂君箋註 ●續文章軌範讀本 全一冊洋並綴 大判 二八〇頁 正價三十錢 郵稅六錢

文學士（漢文學專攻）久保天隨君著 ●文章軌範精義 正編上 和裝上綴 大判 三七四頁 正價四十錢 郵稅八錢

文學士（漢文學專攻）久保得二君著 ●文章軌範精義 正編中 和裝上綴 大判 頁 正價四十錢 郵稅八錢

石川鴻齋君編 ●和漢合璧文章軌範 全四冊和並綴 大判 正價七十錢 郵稅八錢

川島象二君編 ●日本文章軌範評林 全三冊和並綴 大判 一七六頁 正價三十八錢 郵稅六錢

石川鴻齋君講義 ●正文章軌範講義 全一冊洋並綴 中判 四七〇頁 正價廿五錢 郵稅六錢

石川鴻齋君講義 ●續文章軌範講義 全一冊洋並綴 中判 四〇五頁 正價二十五錢 郵稅八錢

榧本寬則君編 ●唐宋八大家文讀本 全八冊和並綴 大判 正價一圓八十錢 郵稅二十錢

村瀨栲君編 ●續唐宋八大家文讀本 全十冊和並綴 大判 正價二圓 郵稅二十錢

沖冠嶺君編 ●皇朝百家論文鈔 全四冊和並綴 大判 正價、十五錢 郵稅八錢

沖冠嶺君編 ●續皇朝百家論文鈔 全四冊和並綴 大判 正價六十九錢 郵稅八錢

宍戶逸郎君編 ●唐宋四大家文選 全五冊和並綴 大判 二七六頁 正價八十錢 郵稅十錢

大槻東陽君編 ●箋註歐蘇手簡 全一冊和並綴 大判 正價二十五錢 郵稅四錢

佐田白茅君著 ●枕上一覽 全一冊和並綴 中判 正價十錢 郵稅二錢

菅丞相撰 ●博覽古言 全五冊和並綴 大判 正價九十錢 郵稅十錢

漢文學

隨筆書類

●わすれ貝　齋藤緑雨君著　全一冊紙皮上製 小判四四六頁　正價三十錢 郵稅六錢

●現代女氣質　櫻井鷗村君著　美麗彩色寫眞版挿入　全一冊紙皮上製 小判三八〇頁　正價三十五錢 郵稅四錢

●名流談海　大橋乙羽君著　全一冊洋布上製 小判二九〇頁　正價三十錢 郵稅四錢

●當代名流五十家訪問錄　松谷蓉四郎君編　全一冊紙皮上製 小判四八〇頁　正價四十錢 郵稅六錢

●月の光　谷信次君編　全一冊洋並製 小判二八〇頁　正價十八錢 郵稅四錢

●透谷全集　北村門太郎君遺稿　星野島崎平田戶川四君共編　▲特製本洋布上製　全一冊洋並製 中判八六〇頁　正價一圓六錢 郵稅十八錢　正價一圓三十五錢 郵稅十八錢

●近古文藝溫知叢書　內藤耻叟君 小宮山綏介君標註　全十二冊洋並製 中判（完成全書欄內ニアリ）

●少年必讀日本文庫　內藤耻叟君校訂　全十二冊洋並製 中判（完成全書欄內ニアリ）

◎文藝小品　內田不知庵君著　小判摸皮上製六一〇頁　正價三十五錢 郵稅六錢　廉價廿五錢 郵稅六錢

◎雅三俗四　石井研堂君著　小判總クロース上製二〇〇頁　正價二十五錢 郵稅六錢　廉價拾五錢 郵稅六錢

◎龍吹鶴語　國府犀東君著　小判摸皮上製二六四頁　正價二十五錢 郵稅四錢　廉價拾五錢 郵稅四錢

◎古人今人孰是孰非 風露月露大珠小珠 小文章　案山川崎三郎君著　小判摸皮上製三〇三頁　正價二十五錢 郵稅四錢　廉價拾錢 郵稅四錢

◎日南子　福本誠君著　大判洋裝並製一一二頁　正價二十五錢 郵稅四錢　廉價拾錢 郵稅四錢

◎淡韻松聲　呦鹿庵主人著　小判摸皮上製二八〇頁　正價二十五錢 郵稅四錢　廉價拾錢 郵稅四錢

◎下獄記　田岡嶺雲君著　中判洋裝並製一五〇頁　正價二拾五錢 郵稅四錢　廉價十錢 郵稅四錢

作文書類

作文法

●作文寶典　大和田建樹君著　全一冊總皮上製 中判一七二〇頁　正價二圓二十錢 小包送四百匁

●袖珍實用作文寶典　大和田建樹君著　全一冊洋布上製 小判一〇二〇頁　正價六十五錢 郵稅六錢

●百東持中君編纂 **作文熟語字典** 全一册洋布上綴 中判九八〇頁 正價八十錢 郵稅十錢

●西村眞次君編 作文眞材 **美辭寶典** 全一册洋並綴 中判四一二頁 正價三十五錢 郵稅六錢

●文學博士萩野由之君著 中等教育 **作文法** 全一册洋並綴 中判五〇〇頁 正價三十錢 郵稅六錢

●岸上操君編 **作文自在** 彩色木版寫眞銅版挿入 全一册洋並綴 大判二七四頁 正價二十五錢 郵稅六錢

●大和田建樹君著 **作文組立法** 全一册洋並綴 大判一六九頁 正價十五錢 郵稅六錢

●華族女學校學監下田歌子女史著 女子 **作文の栞** 全一册和並綴 大判二三六頁 正價三十五錢 郵稅八錢

●堀江秀雄君著 學生必携 **作文資料** 全一册洋並綴 小判二一五頁 正價十五錢 郵稅四錢

●井上敏夫君著 國語漢語類語 **作文錦囊** 全一册紙皮上綴 小判四三〇頁 正價三十五錢 郵稅六錢

●宮川鐵次郎君著 **通俗文章學** 全一册洋並綴 大判三〇〇頁 正價三十錢 郵稅八錢

●上村左川君編 **記事論說文範** 美麗寫眞版挿入 全一册洋並綴 大判二四四頁 正價二十五錢 郵稅六錢

●池田一到君著 今體 **作文六大秘訣** 全一册紙皮上綴 小判三三〇頁 正價二十五錢 郵稅四錢

●石川鴻齋君著 初等 **文法詳解** 全一册洋並綴 中判 正價二十錢 郵稅四錢

●大典禪師著 **初學文範** 全二册和並綴 大判一二四頁 正價三十八錢 郵稅四錢

●大和田建樹君著 **新文林** 全一册洋並綴 中判四三一頁 正價三十八錢 郵稅六錢

◎西村醉夢君著 美文韻文 **創作要訣** 中判洋裝並製二〇五頁 正價二十五錢 郵稅六錢 廉價十二錢 郵稅六錢

書翰文

●中村秋香君著 **書翰文大成** ▲和裝上製箱入 正價一圓 全一册洋布上綴 大判三四七頁 郵稅十六錢 正價一六圓 郵稅十錢

●内山幻堂君著 **明治書翰文大全** 寫眞版八葉挿入 全一册洋並綴 大判四六〇頁 正價五十錢 郵稅十錢

●樋口一葉君著 **通俗書翰文** 彩色木版寫眞銅版挿入 全一册洋並綴 大判二四六頁 正價二十五錢 郵稅六錢

●華族女學校學監下田歌子女史著 **女子書翰文** 石版書翰挿入 全一册和並綴 大判二二八頁 正價三十五錢 郵稅八錢

●須永金三郎君著 **日本學生用文** 全一册洋並綴 中判五〇〇頁 正價二十錢 郵稅六錢

●佐々木信綱君著 **日本婦女用文** 全一册洋並綴 中判三三四頁 正價十八錢 郵稅四錢

大和田建樹君著
●書翰組立法　全一册洋裝並綴　大判一五二頁　正價十五錢　郵稅六錢

修辭及演說

文學士武島又次郎君著
●修辭學　全一册洋裝並綴　大判三〇六頁　正價三十五錢　郵稅八錢
▲特製本洋布上綴　彩色木版寫眞版挿入　正價五十錢　郵稅十錢

博文館編輯局編纂
●祝辭演說法　全一册洋裝並綴　大判二五〇頁　正價二十五錢　郵稅六錢

坪谷善四郎君著
●演說討論軌範　全一册洋裝並綴　中判二〇〇頁　正價三十五錢　郵稅八錢

早稻田大學講師島村瀧太郎君著
●新美辭學　全一册脊皮上綴　大判五四四頁　正價一圓三十錢　郵稅十四錢

文集

博文館編輯局編纂
●花香鳥韻　全一册洋裝並綴　大判二四〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●山光海色　全一册洋裝並綴　大判二四〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●若草　全一册洋裝並綴　大判二〇八頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●ほとゝぎす　全一册洋裝並綴　大判二〇八頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●はつもみぢ　全一册洋裝並綴　大判二〇八頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●冬木立　全一册洋裝並綴　大判二〇八頁　正價二十錢　郵稅二錢

博文館編輯局編纂
●珠星璧月　全一册洋裝並綴　大判二四〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

外國語書類

文典

- ● 邦語英文典　文學士畔柳郁太郎君著　▲特製本 洋布上綴　全一册洋並綴 大判三三三頁 正價五十錢 郵稅十錢　正價三十五錢 郵稅八錢
- ● 英文典語句慣用法　文學士畔柳郁太郎君譯述　全一册洋布上綴 中判二六〇頁　正價六十錢 郵稅六錢
- ● 邦語獨逸文典　文學士靑木昌吉君編　▲特製本 洋布上綴　全一册洋並綴 大判二三二頁 正價五十錢 郵稅十錢　正價三十五錢 郵稅八錢
- ● 邦語獨逸文章論　文學士靑木昌吉君編　▲特製本 洋布上綴　全一册洋並綴 大判二七八頁 正價五十錢 郵稅十錢　正價三十五錢 郵稅八錢
- ● 獨乙前置詞使用法　文學士杉谷泰山君編述　全一册洋布上綴 大判一四六頁　正價五十錢 郵稅八錢
- ● 邦語佛蘭西文典　文學士松井知時君著　▲特製本 洋布上綴　上下二册洋並綴 大判五九五頁 正價一册五十錢 郵稅一册十錢　正價一册三十五錢 郵稅一册八錢
- ● 對詳應用佛蘭西文法　今村有隣君著　全一册洋布上綴 中判二七一頁　正價一圓二十錢 郵稅十錢
- ● 佛蘭西文法簡約要規　文部大臣裁決　全一册洋並綴 大判一〇頁　正價十錢 郵稅二錢
- ● 通俗言語學　宮田修君著　全一册洋並綴 大判三五〇頁　正價二十五錢 郵稅八錢
- ◎ 佛蘭西文典　福田富治君著　中判總クロース五五三頁　正價七十錢 郵稅十錢　廉賣價四十錢 郵稅十錢
- ◎ 初等英文典教科書　石川辰之助君著　中判總クロース上製一五〇頁　正價四十錢 郵稅四錢　廉賣價二十五錢 郵稅四錢

會話

- ● 通俗英語案內　石川辰之助君著　全一册洋並綴 大判三一二頁　正價二十五錢 郵稅八錢
- ● 英和應用會話指針　島田豐君 島田弟丸君合著　全一册洋布上綴 小判二三一頁　正價三十錢 郵稅四錢
- ● 實用英和商業會話　齋藤忠三郎君著　全一册厚表紙上綴 小判八六頁　正價二十錢 郵稅四錢
- ● 英和袖珍商人會話必携　博士エーストレーキ君著　全一册洋布綴 小判二三八頁　正價三十五錢 郵稅四錢
- ● 實用商業會話　法學士勝部國臣君著　全一册洋布上綴 小判二二八頁　正價三十五錢 郵稅四錢
- ● 實用露和會話　露國神學士西海枝靜君著　全一册洋布上綴 小判二六八頁　正價五十錢 郵稅四錢
- ● 英和禮式會話　米國理學士齋藤淸次郎君著　全一册洋並綴 小判　正價二十錢 郵稅四錢
- ◎ 初等英語會話教科書　石川辰之助君著　中判總クロース上製一八〇頁　正價四十錢 郵稅六錢　廉賣價廿五錢 郵稅四錢

作文

● 石川辰之助君著　文部省檢定濟
初等英語作文教科書　全一册洋布上綴　中判　一八〇頁　正價四十錢　郵稅六錢

● 島田豐君　島田弟丸君合著
實用英和作文　全一册洋布上綴　小判　二四〇頁　正價三十錢　郵稅四錢

● 龜山鐘三君　大田黑重五郎君編纂
英和商業作文辭彙　全一册背皮上綴　大判　二八三頁　正價一圓卅錢　郵稅十錢

● 文學博士坪內雄藏君著
英詩文評釋　上下二册洋布綴大判六五八頁　上卷正價七十錢　郵稅八錢　下卷正價六十錢　郵稅六錢
▲特製合本　洋布上綴　正價一圓六十錢　郵稅十六錢

讀本

● 津田梅子君著　文部省檢定濟
イングリッシユ　ストーリーズ　全一册洋布上綴　大判　一六〇頁　正價三十五錢　郵稅四錢

● 櫻井彥一郎君著　文部省檢定濟
フエーマス　ストーリーズ　全一册洋布上綴　中判　一五〇頁　正價三十五錢　郵稅四錢

● エー、エム、ベーコン君著
フェリー、テールス　全一册洋布上綴　中判　一八八頁　正價四十錢　郵稅四錢

● 津田梅子女史著
グリーキ、ストリーズ　全一册洋布上綴　中判　二〇八頁　正價四十五錢　郵稅四錢

● 增田藤之助君著
英語文章軌範　全一册洋布上綴　中判　一九六頁　正價五十錢　郵稅四錢

● 高等商業學校雇教師ハワード、スワン君著
英文極東の光　全一册洋布上綴　中判　一九四頁　正價五十五錢　郵稅四錢

● 高等商業學校雇教師ハワード、スワン君著
ジャパニッス、シンス　全一册洋並綴　中判　六〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

● 高等商業學校雇教師ハワード、スワン君著
イングリッシ、シンス　全三册洋並綴　大判　正價一册二十錢　郵稅一册二錢

● 村井知至君著
ドラマス、エンド、ダイヤログス　全一册紙皮洋綴　中判　一九六頁　正價卅錢　郵稅四錢
▲特製本　洋布上綴　正價四十錢　郵稅六錢

● 藤生金六君編
英文高山探險　全一册洋並綴　小判　一〇二頁　正價二十錢　郵稅二錢

● 津田梅子女史編
英文法螺先生　全一册洋並綴　小判　八六頁　正價二十錢　郵稅二錢

● 藤生金六君編
英文勇士の紀念　全一册洋並綴　小判　一〇三頁　正價二十錢　郵稅二錢

● 高須龍吉君編
英文近江聖人　全一册洋並綴　小判　一三八頁　正價二十五錢　郵稅四錢

● 村山敏雄君編
英文ヘレワード　全一册洋並綴　小判　一〇〇頁　正價二十錢　郵稅二錢

● 津田梅子女史編
英文頓機翁物語　全一册洋並綴　中判　二〇六頁　正價三十錢　郵稅四錢

● 櫻井彥一郎君編 英文 **從軍記者** 全一冊洋並製 小判一〇〇頁 正價二十錢 郵税二錢

● 米國アンドリユー、カーチギー氏著 英文 **實業之帝國** 和譯セシモノハ商業部ニアリ 全一冊洋並製 小判一七二頁 正價三十錢 郵税四錢
▲特製本 洋布上製 正價四十五錢 郵税四錢

● 英學新報社校訂詳註 英文 **百合** 全一冊洋並製 中判 頁 正價二十錢 郵税二錢

● 山口造酒君 關貫米君詳註 英文 **噫無情** 全一冊洋布上製 小判三二〇頁 正價四十錢 郵税六錢

● 文學士淺野和三郎君譯註 英文 **奇々怪々** 全一冊洋並製 中判八九頁 正價二十五錢 郵税四錢

● 校訂飜刻ナショナル **第一讀本** 全一冊洋上製 中判一〇二頁 正價十五錢 郵税四錢
▲特製本 正價十八錢 郵税四錢

● 校訂飜刻ナショナル **第二讀本** 全一冊洋上製 中判一七一頁 正價二十四錢 郵税六錢
▲特製本 正價三十錢 郵税六錢

● 校訂飜刻ナショナル **第三讀本** 全一冊洋上製 中判二五六頁 正價三十錢 郵税六錢
▲特製本 正價三十五錢 郵税八錢

● 校訂飜刻ロングマンス **第一讀本** 全一冊洋布上製 中判一二八頁 正價二十五錢 郵税四錢

● 校訂飜刻ロングマンス **第二讀本** 全一冊洋布上製 中判一三二頁 正價三十五錢 郵税六錢

● 校訂飜刻ロングマンス **第三讀本** 全一冊洋布上製 中判一八〇頁 正價四十錢 郵税六錢

● 澁江保君註釋 ロングマンス **第一讀本註釋** 全一冊洋並製 中判三二八頁 正價三十錢 郵税六錢

● 澁江保君註釋 ロングマンス **第二讀本註釋** 全一冊洋並製 中判三八六頁 正價三十五錢 郵税六錢

● 澁江保君註釋 ロングマンス **第三讀本註釋** 全一冊洋並製 中判三四〇頁 正價四十錢 郵税六錢

● 澁江保君註釋 ロングマンス **第四讀本註釋** 全一冊洋並製 中判五三六頁 正價四十五錢 郵税八錢

● 杉山重義君著 **レツセントスピーチス、ナスイングリツシステーツメーン** 全一冊洋並製 中判一三三頁 正價四十錢 郵税四錢

● 安藤忠義君編 **佛語文選** 全一冊洋布上製 中判一四四頁 正價五十錢 郵税六錢

辭典書類

漢語字典

● 石川鴻齋君校訂 高井思明君校訂 鼇頭音釋 **康熙字典** 全六冊和上製 中判美帙入 正價四圓五十錢 小包送八百匁
▲函入上製 正價四圓八十錢 小包一貫目

● 市河清流君 三音四聲 **字貫** 全五冊和上製美帙入 中判一六〇〇枚 正價三圓卅錢 小包送八百匁
▲函入上製 正價六圓 小包壹貫目

●石川鴻齋君校訂　篆文詳註 日本大玉篇　全三冊和上綴美帙入 正價二圓六十錢　中判 七二八枚 小包送四百匁

●石川鴻齋君著　新撰日本字典　全二冊和上綴美帙入 正價一圓　中判 一〇二〇枚 郵稅八錢

●戸田翠香君著　文章字典　全一冊和上綴 正價七十錢　中判 五八二枚 郵稅六錢

●太田淳軒君著　新撰歷史字典　全一冊和上綴 正價六十錢　中判 四九五枚 郵稅八錢

●太田淳軒君著　新撰明治字典　全一冊和上綴 正價三十五錢　小判 四七〇枚 郵稅四錢

●棚橋廣君著　新撰漢語字引　全一冊和並綴 正價二十五錢　小判 二一六枚 郵稅二錢

●長岡道謙君著　新刻正字通　全一冊和並綴 正價三十五錢　小判 二五七枚 郵稅四錢

●齋木寬直君著　明治文撰字引　全一冊和並綴 正價二十五錢　小判 二一六枚 郵稅四錢

●棚橋廣君著　日本いろは新字典　全一冊和並綴 正價三十錢　小判 四〇〇頁 郵稅四錢

◎寒澤振作君著　新撰五千字典　小判洋裝並製二七〇頁　正價二十錢 郵稅六錢　廉賣價十錢 郵稅六錢

國語字典

●大和田建樹君著　日本大辭典　全一冊總皮上綴 正價二圓廿五錢　大判 一八〇〇頁 小包四百匁

●大和田建樹君著　日本小辭典　全一冊洋布上綴 正價七十五錢　小判 一八八〇頁 郵稅八錢

●大宮宗司君編纂　日本辭林　全一冊洋並綴 正價三十錢　小判 七二〇頁 郵稅六錢　▲特製本 洋布上綴 正價四十錢 郵稅六錢

●佐々木弘綱君 岡野伊平君著　假名遣枕詞字典　全一冊洋並綴 正價三十錢　中判 郵稅六錢

英和辭典

●島田豐君著　學生用英和字典　全一冊總皮上製 正價一圓三十錢　小判 一三四八頁 郵稅十錢

◎島田豐君著 島田弟丸君著　學生用英和字典　小判總皮上綴一三二四頁　正價一圓八十錢 郵稅十錢　廉賣價壹圓 郵稅十錢

◎全袖珍 學生用英和辭典　小判總皮上綴二〇五六頁　正價一圓五十錢 郵稅八錢　廉賣價八十錢 郵稅八

節用

●傳文館編輯局編纂 彩色美麗木版畫挿入
傳家寶典 **明治節用大全**
全一册總皮上綴 大判一二三二頁 正價一圓六十錢 小包送六百匁

●內山正如君著
新撰日本節用
全一册和上綴 中判五二〇頁 正價一圓 郵税十錢

小說書類

新作小說

●幸田露伴君著
露伴叢書
全一册洋布上綴 大判一八八九頁 正價二圓五十錢 小包送六百目

●內田不知庵君著
社會百面相
全一册洋上綴 大判五五四頁 正價五十五錢 郵税十二錢

●大橋乙羽君著 彩色木版密畫挿入
花鳥集
全一册洋布上綴 大判一二〇八頁 正價一圓 郵税十八錢

●大橋乙羽君著 彩色木版密畫挿入
初子集
全一册洋布上綴 小判五九五頁 正價四十錢 郵税六錢

●大橋乙羽君著 彩色木版密畫挿入
風月集
全一册洋布上綴 小判四二二頁 正製三十五錢 郵税六錢

●大橋乙羽君著 彩色木版密畫挿入
若榮籠
全一册洋並綴 小判三二〇頁 正價二十八錢 郵税四錢

●大橋乙羽君著
政治小說 **累卵の東洋**
全一册洋並綴 小判二〇六頁 正價十八錢 郵税四錢

●樋口一葉君著
一葉全集
全一册洋並綴 大判四八六頁 正價四十錢 郵税十錢

●川上眉山君著 彩色木版密畫挿入
奧さま
全一册洋並綴 大判二六〇頁 正價二十五錢 郵税四錢

●江見水蔭君著
戀
全一册洋並綴 小判三八二頁 正價三十錢 郵税四錢

●巖谷小波山人著 寫眞銅版挿入
笑
全一册紙皮上綴 小判五三八頁 正價三十錢 郵税六錢

●巖谷小波山人著 寫眞銅版挿入
女波男波
全一册紙皮上綴 小判六二一頁 正價四十錢 郵税八錢

●江見水蔭君著 寫眞版挿入
月こ梅
全一册紙皮上綴 小判三六二頁 正價二十五錢 郵税四錢

●福地櫻痴君著 寫眞版挿入
山陰麒麟
全一册紙皮上綴 小判四六〇頁 正價二十五錢 郵税四錢

●福地櫻痴居士新作脚本 美麗石版挿入
芳哉義士の譽
全一册洋並綴 小判一五二頁 正價三十錢 郵税六錢

●福地櫻痴居士著
山中平九郎
全一册洋並綴 大判一六八頁 正價三十錢 郵税六錢

◯ひげ男　幸田露伴君著
全一冊洋裝並製　大判二四七頁　正價三十錢　郵稅六錢

●汽車の友　江見水蔭君著　鐵道小說　寫眞版十六葉挿入
全一冊紙皮上製　小判四六一頁　正價三十錢　製稅六錢

◯避暑の友　江見水蔭君著　短篇小說
全一冊紙皮上製　小判三八七頁　正價三十五錢　郵稅六錢

◯突貫　江見水蔭君著　小說　寫眞銅版挿入
全一冊紙皮上製　小判三八七頁　正價三十錢　郵稅六錢

●戰塵　伊上新兵衛君著　軍事小說　着色寫眞銅版挿入
全一冊紙皮上製　小判三六九頁　正價三十錢　郵稅六錢

●櫻痴滑稽談　福地櫻痴君著
全一冊洋裝並製　大判　正價二十五錢　郵稅六錢

●幸堂滑稽談　幸堂得知君著
全一冊洋裝並製　大判　正價二十五錢　郵稅六錢

●武俠の日本　押川春浪君著　英雄小說
全一冊洋裝並製　小判四八二頁　正價四十錢　郵稅六錢

◎聚寳盆　饗庭篁村君著
小判摸皮上製四九二頁　正價三十五錢　郵稅六錢　廉價二十五錢　郵稅六錢

◎星　江見水蔭君著
小判摸皮上製六八四頁　正價五十錢　郵稅八錢　廉價二十五錢　郵稅八錢

◎彫像師　内田不知庵君著　小說
小判洋裝並製一四二頁　正價八錢　郵稅二錢　廉價五錢　郵稅二錢

◎天製糸瓜の水　幸堂得知君著
小判洋裝並製一四九頁　正價八錢　郵稅二錢　廉價五錢　郵稅二錢

◎小御門　田學海君著
小判洋裝並製一八一頁　正價八錢　郵稅二錢　廉價五錢　郵稅二錢

◎江戸自慢男一疋　須藤南翠君著
小判洋裝並製一七七頁　正價八錢　郵稅二錢　廉價五錢　郵稅二錢

◎あま蛙　齋藤緑雨君著
小判洋裝並製一五九頁　正價八錢　郵稅二錢　廉價五錢　郵稅二錢

◎密告　塚原蓼州君著
小判洋裝並製一五〇頁　正價八錢　郵稅二錢　廉價五錢　郵稅二錢

◎腕だめし　山田美妙君著
小判洋裝並製一五六頁　正價八錢　郵稅二錢　廉價五錢　郵稅二錢

◎杜鵑一聲　遅塚麗水君著
小判洋裝並製一五六頁　正價八錢　郵稅二錢　廉價五錢　郵稅二錢

◎新年狂言春駒　巖谷漣山人著
中判和裝一二七頁　正價十錢　郵稅四錢　廉價五錢　郵稅四錢

◎紀元節　大川秋水君著
中判和裝一二九頁　正價十錢　郵稅四錢　廉價五錢　郵稅四錢

飜譯小說

●小公子　若松賤子女史譯述
全一冊洋裝並製　大判三七三頁　正價三十五錢　郵稅八錢

●十五少年　森田思軒君譯述　全一册洋並綴 大判 二九六頁　正價三十五錢 郵稅八錢

●絶島漂流記　高橋光威君譯述 ロビンソン　全一册洋並綴 大判　正價四十錢 郵稅八錢

●日露戰爭未來記　文學士大町桂月君譯述　全一册洋並綴 大判 一五八頁　正價十八錢 郵稅四錢

●海底軍艦　押川春浪君譯述　全一册紙皮上綴 小判 三九八頁　正價三十錢 郵稅六錢

●塔中の怪　押川春浪君譯述 海島探險　全一册紙皮上綴 小判 三三二頁　正價二十五錢 郵稅四錢

●初航海　櫻井鷗村君譯述 勇少年冒險譚　全一册紙皮上綴 小判 三一八頁　正價二十五錢 郵稅四錢

●金堀少年　櫻井鷗村君譯述 中村不折君畫　全一册洋並綴 中判 二四二頁　正價三十錢 郵稅六錢

●遠征奇談　櫻井鷗村君譯述 中村不折君畫　全一册洋並綴 中判 二四八頁　正價三十錢 郵稅六錢

●二勇少年　櫻井鷗村君譯述 中村不折君畫　全一册洋並綴 中判 二八〇頁　正價三十錢 郵稅六錢

●續遠征奇談　櫻井鷗村君譯述 中村不折君畫　全一册洋並綴 中判 二四八頁　正價三十錢 郵稅六錢

●決志少年　櫻井鷗村君譯述 中村不折君畫　全一册洋並綴 中判 二七六頁　正價三十錢 郵稅六錢

●漂流少年　櫻井鷗村君譯述 中村不折君畫　全一册洋並綴 中判 二四二頁　正價三十錢 郵稅六錢

●殖民少年　櫻井鷗村君譯 中村不君畫　全一册洋並綴 中判 二四四頁　正價三十錢 郵稅六錢

●航海少年　櫻井鷗村君譯述 中村不折君編　全一册洋並綴 中判 二四四頁　正價三十錢 郵稅六錢

●不撓少年　櫻井鷗村君譯述 中村不折君畫　全一册洋並綴 中判 二六四頁　正價三十錢 郵稅六錢

●朽木の舟　櫻井鷗村君譯述 中村不折君畫　全一册洋並綴 中判 二六四頁　正價三十錢 郵稅六錢

●俠勇少年　櫻井鷗村君譯述　全一册洋並綴 中判 二四四頁　正價三十錢 郵稅六錢

●絶島奇談　櫻井鷗村君譯述　全一册洋並綴 中判 二四六頁　正價三十錢 郵稅六錢

●少看護婦　櫻井鷗村君譯 西洋木版密畫挿入　全一册洋並綴 大判 一三二頁　正價十五錢 郵稅四錢

●愛と心　文學博士元良勇次郎君評論 文學士戸津姑射君譯述　全一册洋並製 大判 一一七頁　正價三十五錢 郵稅六錢

●社會劇　高安月郊君譯述 イプセン作　全一册背皮上綴 大判 四〇〇頁　正價一圓二十錢 郵稅十二錢
▲並製本 洋並綴 正價八十錢 郵稅十錢

◎魔法醫者　水田南陽外史譯述　小判摸皮上製三二〇頁 口繪入　正價二十五錢 郵稅四錢　廉賣價十二錢 郵稅四錢

講談落語

石橋思案君校訂
●落語全集　全一册紙皮上綴 中判一〇九二頁　正價六十錢 郵稅十四錢

鶯亭金升君著
新撰落語●福　全一册背皮上綴 小判三一二頁　正價三十錢 郵稅六錢

松林伯圓翁講演
御前講談●中山大納言　寫眞銅版挿入　全一册紙皮上綴 小判三七四頁　正價二十五錢 郵稅四錢

放牛舍桃林翁講演
●天下之糸平　三島蕉窓君寄書　全一册洋並綴 大判二三九頁　正價二十五錢 郵稅六錢

桃川燕林翁講演
●佐倉宗五郎　全一册洋並綴 大判　正價二十五錢 郵稅六錢

依田學海君閲校 伯圓講演
●菅公　全一册洋並綴 大判二五三頁　正價三十五錢 郵稅六錢

稗史實錄

博文館編輯局校訂
●眞書太閤記　全四册背皮上綴 中判四〇六九頁　正價一册六十錢 郵稅一册十六錢

博文館編輯局校訂
●通俗三國志　全二册背皮上綴 中判二二〇〇頁　正價一册六十錢 郵稅一册十四錢

博文館編輯局校訂
●源平盛衰記　全一册背皮上綴 中判一三一〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂
●楠廷尉秘鑑　全一册背皮上綴 中判一〇四〇頁　正價六十錢 郵稅十四錢

博文館編輯局校訂
●甲越軍記　全一册背皮上綴 中判九八二頁　正價六十錢 郵稅十四錢

博文館編輯局校訂
●星月夜鎌倉顯晦錄 北條九代記　全一册背皮上綴 中判　正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂
●眞田三代記　全一册背皮上綴 中判九五八頁　正價六十錢 郵稅十四錢

博文館編輯局校訂
●通俗吳越軍談 通俗漢楚軍談　全一册背皮上綴 中判一〇〇〇頁　正價六十錢 郵稅十四錢

博文館編輯局校訂
●通俗十二朝軍談 通俗武王軍談 通俗明清軍談　全一册背皮上綴 中判一〇二一頁　正價六十錢 郵稅十四錢

博文館編輯局校訂
●前々太平記　全一册背皮上綴 中判一一〇一頁　正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂
●太平記　全一册背皮上綴 中判一一九〇頁　正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂
●後太平記　全一册背皮上綴 中判一二〇一頁　正價六十錢 郵稅十六錢

江見水蔭君校訂
●常山紀談　全一册背皮上綴 中判一〇五三頁　正價六十錢 郵稅十四錢

博文館編輯局校訂
●朝夷巡島記　全一册背皮上綴 中判一一七二頁　正價六十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂
●白縫譚　全二册背皮上綴 中判二〇四二頁　正價一册六十錢 郵稅一册十四錢

●修紫田舍源氏　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇六八頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●兒雷也豪傑譚　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇四〇頁　正價六十錢　郵稅十四錢

●北雪美譚時代鏡　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇五八頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●大岡政談　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇〇〇頁　正價六十錢　郵稅十四錢

●柳澤、黑田、越後、加賀、伊達騷動實記　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇〇〇頁　正價六十錢　郵稅十四錢

●佛教各宗高僧實傳　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇五〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●赤穗復讐全集　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇一〇頁　正價六十錢　郵稅十四錢

●仇討小說集　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇八〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●續仇討小說集　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇〇〇頁　正價六十錢　郵稅十四錢

●俠客傳全集　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一一〇八頁　正價六十錢　郵稅十六錢

飜刻小說

●南總里見八犬傳（函入）　曲亭馬琴翁著　全[illegible]十册和並綴　大判三〇五一枚　正價八圓五十錢　運賃五十錢

●南總里見八犬傳　曲亭馬琴翁著　全三册背皮上綴　中判三六〇〇頁　正價一册六十錢　郵稅一册十六錢

●東海奥羽木曾[illegible]島道中膝栗毛　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一一九〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●梅暦春告鳥　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一二八〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●近世說美少年錄　曲亭馬琴翁著　全一册背皮上綴　中判一二〇〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●三馬傑作集　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一〇九〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●京傳傑作集　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一一五〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●種彥傑作集　博文館編輯局校訂　全一册背皮上綴　中判一一六〇頁　正價六十錢　郵稅十六錢

●馬琴傑作集　博文館編輯局校訂　全一[illegible]　中判一[illegible]綴　正價六十錢　郵稅十六錢

●風來山人傑作集　博文館編輯局校訂　全一[illegible]　中判一[illegible]　[illegible]六十錢　[illegible]十四錢

●其磧自笑傑作集　大橋乙羽校訂　全二册背皮上綴　中判二[illegible]　正價一册六十錢　郵稅一册十四錢

校訂	書名	冊數・裝釘	判型・頁數	正價	郵稅
博文館編輯局校訂	京山全集	全一冊背皮上綴	中判一一三二頁	六十錢	十六錢
博文館編輯局校訂	一九全集	全一冊背皮上綴	中判一〇〇四頁	六十錢	十四錢
博文館編輯局校訂	續一九全集	全一冊背皮上綴	中判九七六頁	六十錢	十四錢
博文館編輯局校訂	人情本傑作集	全一冊背皮上綴	中判一一二三頁	六十錢	十六錢
博文館編輯局校訂	滑稽名作集	全二冊背皮上綴	中判二一三〇頁	一冊六十錢	一冊十六錢
博文館編輯局校訂	俳優全集	全一冊背皮上綴	中判一〇〇〇頁	六十錢	十四錢
博文館編輯局校訂	四大奇書	全二冊背皮上綴	中判二一一一頁	一冊六十錢	一冊十四錢
博文館編輯局校訂	珍本全集	全三冊背皮上綴	中判三一〇〇頁	一冊六十錢	一冊十四錢
博文館編輯局校訂	氣質全集	全一冊背皮上綴	中判一〇五二頁	六十錢	十六錢
博文館編輯局校訂	續氣質全集	全一冊背皮上綴	中判一二五〇頁	六十錢	十六錢
博文館編輯局校訂	脚本傑作集 上卷	洋裝背皮上綴	中判一〇八〇頁	（發賣禁止）	
博文館編輯局校訂	仝 下卷	洋裝背皮上綴	中判一一一六頁	六十錢	十六錢
石井研堂君校訂	漂流奇談全集	全一冊背皮上綴	中判一〇一四頁	六十錢	十四錢

校訂	書名	冊數・裝釘	判型・頁數	正價	郵稅
博文館編輯局校訂	邯鄲諸國物語	全一冊背皮上綴	中判一〇三四頁	六十錢	十四錢
石井研堂君校訂	萬物滑稽合戰記	全一冊背皮上綴	中判一〇一八頁	六十錢	十四錢
幸堂得知君校訂	黃表紙百種	全一冊背皮上綴	中判一〇九二頁	六十錢	十六錢
博文館編輯局校訂	續馬琴傑作集	全一冊背皮上綴	中判一〇八〇頁	六十錢	十四錢
博文館編輯局校訂	續京傳三馬傑作集	全一冊背皮上綴	中判九三四頁	六十錢	十四錢
幸堂得知君校訂	種彥短篇傑作集	全一冊背皮上綴	中判一〇〇〇頁	六十錢	十四錢
博文館編輯局校訂	釋迦八相倭文庫	全二冊背皮上綴	中判一八九八頁	一冊六十錢	一冊十四錢
博文館編輯局校訂	水滸傳	全二冊背皮上綴	中判二〇八五頁	一冊六十錢	一冊十六錢
田中從吾軒君 三木愛花君校訂	續水滸傳	全一冊背皮上綴	中判一一三四頁	六十錢	十六錢
博文館編輯局校訂	傾城水滸傳	全一冊背皮上綴	中判一〇〇〇頁	六十錢	十六錢
博文館編輯局校訂	俊傑神稻水滸傳	上卷背皮上綴	中判一〇〇四頁	六十錢	十四錢
博文館編輯局校訂	俊傑神稻水滸傳	中卷背皮上綴	中判　頁	六十錢	十四錢
博文館編輯局校訂	俊傑神稻水滸傳	下卷背皮上綴	中判　頁	六十錢	十四錢

少年書類

●田山花袋君・柳田國男君校訂
近世奇談全集
全一册背皮上製 中判 頁 正價六十錢 郵税十四

お伽噺

●巖谷小波君著
日本お伽噺
全廿四册洋並製 大判一册六四頁 正價一册六錢 郵税一册二錢

(全部目次)

第一編 八咫烏 久保田米仙畫
第二編 田村將軍 水野年方畫
第三編 玉取 梶田半古畫
第四編 源三位 尾形月耕畫
第五編 八幡太郎 筒井年峯畫
第六編 武藏坊 右田年英畫
第七編 一休和尚 鈴木華邨畫
第八編 東照宮 小堀鞆音畫
第九編 姨捨山 梶田半古畫
第十編 川中島 山中古洞畫
第十一編 玄武門 久保田金仙畫
第十二編 白虎隊 橋本周延畫
第十三編 鐵門八郎 尾形月耕畫
第十四編 最明寺 鈴木華邨畫
第十五編 朝夷奈 筒井年峯畫
第十六編 櫻井驛 水野年方畫
第十七編 草薙劍 小林永興畫
第十八編 日吉丸 小峯苔石畫
第十九編 文覺上人 梶田半古畫
第二十編 和唐内 高橋松亭畫
第廿一編 高千穗 鈴木華邨畫
第廿二編 熊本城 水野年方畫
第廿三編 鬼童丸 富岡永洗畫
第廿四編 宇治川 武内桂舟畫

●巖谷小波君著
世界お伽噺
全百册洋並製 大判一册七八頁 正價一册七錢 郵税一册二錢

(既刊目次)

第一編 世界の始(太古)
第二編 五色の石(支那)
第三編 珊瑚島(南洋)
第四編 魔法博士(獨逸)
第五編 無人島大王(英國)
第六編 鬼婆と少女(獨逸)
第七編 法螺先生(獨乙)
第八編 二人王子(露國)
第九編 小人島(英國)
第十編 孫悟空(支那)
第十一編 驢馬姫(佛國)
第十二編 大人國(英國)
第十三編 猿吉書(印度)
第十四編 王城乘取(土耳古)
第十五編 續法螺先生(獨逸)
第十六編 猿智惠小僧(アフリカ)
第十七編 酋長征伐(多島洋)
第十八編 夢の三郎(南洋)
第十九編 燬の踊(伊太利)
第二十編 光明姫(印度)
第廿一編 鶴の使(アフリカ)
第廿二編 日の車(南亞細亞)
第廿三編 三人片輪(小亞細亞)
第廿四編 白い鳥(蝦夷)
第廿五編 消炭太郎(コサック)
第廿六編 十二王妃(カンボチャ)
第廿七編 狐の裁判上(獨逸)
第廿八編 狐の裁判下(獨逸)
第廿九編 奇鉢の洋盃(亞剌比亞)
第三十編 獵師大盜(希臘)
第卅一編 九重の塔(西藏)
第卅二編 虹の橋(亞米利加)
第卅三編 魔法の卵(露西亞)
第卅四編 岩の船(アイスランド)
第卅五編 鐵の王子(ハンガリー)
第卅六編 燬の猿(コサック)
第卅七編 浮かれ胡弓(瑞典)
第卅八編 豆の王(瑞典)
第卅九編 三ツの難題(米國)
第四十編 德利長者(愛蘭)

●大和田建樹君著
日本歷史譚
全廿四册洋並製 大判一册八二頁 正價一册八錢 郵税一册四錢

(全部目次)

第一編 日本開闢 山田敬中畫
第二編 畝傍山 村田丹陵畫

第三編 三韓征伐 寺崎廣業畫
第四編 聖德太子 水野年方畫
第五編 菅公 梶田半古畫
第六編 九郎判官 筒井年峯畫
第七編 曾我兄弟 尾形月耕畫
第八編 惡七兵衛 水野年方畫
第九編 相模太郎 山中古洞畫
第十編 楠公 小林永興畫
第十一編 日蓮 武内桂舟畫
第十二編 大塔宮 歌川國松畫
第十三編 豐太閤 小堀鞆音畫
第十四編 七本槍 筒井年峯畫
第十五編 關ヶ原 高橋松亭畫
第十六編 水戸黄門 水野年方畫
第十七編 四十七士 中川蘆舟畫
第十八編 平田篤胤 邊[illegible]耕溪畫
第十九編 櫻田門外 小峰大羽畫
第二十編 七卿落 池田輝方畫
第廿一編 彰義隊 小山光方畫
第廿二編 城山 宮川春汀畫
第廿三編 平壤 永井寸易畫
第廿四編 威海衛 小山光方畫

巖谷小波君著
●日本昔噺
▲帙入 全四冊 一冊三十五錢
全廿四冊洋綴 正價一冊五錢 大判一冊五　頁 郵稅一冊二錢

（全部目次）
第一編 桃太郎 岡富水洗畫
第二編 玉の井 小林永興畫
第三編 猿蟹合戰 村田丹陵畫
第四編 松山鏡 武内桂舟畫
第五編 花咲爺 水野年方畫
第六編 大江山 歌川國松畫
第七編 舌切雀 三島蕉窓畫
第八編 俵藤太 藤島華僊畫
第九編 かちかち山 寺崎廣業畫
第十編 瘤取 山田敬中畫
第十一編 物臭太郎 梶田半古畫
第十二編 文福茶釜 鈴木華邨畫
第十三編 八頭の大蛇 尾形月耕畫
第十四編 兎と鰐 高橋松亭畫
第十五編 羅生門 筒井年峯畫
第十六編 猿と海月 久保田金僊畫
第十七編 安達ヶ原 小堀鞆音畫
第十八編 浦島太郎 永峯秀湖畫
第十九編 一寸法師 小林清親畫
第二十編 金太郎 右田年英畫
第廿一編 雲雀山 玉樵女史畫
第廿二編 猫の草紙 淺井忠畫
第廿三編 牛若丸 橋本周延畫
第廿四編 鼠の嫁入 川端玉章畫

巖谷小波君著
●幼年讀本
全六冊洋綴 正價一冊十五錢 大判一冊二〇頁 郵稅一冊四錢

（全部目次）
第一編 日本歷史　第二編 日本地理

第三編 世界歷史　第五編 日本立志談（減價）
第四編 世界地理　第六編 世界立志談（減價）

木村小舟君著 田中虎雄君作曲
●家庭唱歌
全十二冊洋綴 正價一冊六錢 小判一冊四〇頁 郵稅一冊二錢
（臨時減價）

（全部目次）
第一編 桃太郎　第七編 勝々山
第二編 舌切雀　第八編 羅生門
第三編 松山鏡　第九編 一寸法師
第四編 花咲爺　第十編 猿蟹合戰
第五編 浦島太郎　第十一編 俵藤太
第六編 文福茶釜　第十二編 瘤取り

華族女學校學監下田歌子女史著
●お伽教艸
全一冊和綴 正價卅五錢 大判二四二頁 郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●庭訓お伽噺
全一冊和綴 正價卅五錢 大判二三四頁 郵稅六錢

少年讀本

石井研堂君著
●理科十二ヶ月
全十二冊洋綴 正價一冊十錢 大判一二〇頁 郵稅一冊四錢

（全部目次）
第一編 新風船　第三編 花の鍋
第二編 雪達磨　第四編 汐干狩

第五編 植物園　第九編 暴風雨
第六編 蜻蛉祭　第十編 銃獵者
第七編 游泳會　第十一編 幻燈會
第八編 富士詣　第十二編 歸省錄

巖谷小波君著
●こがね丸　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

尾崎紅葉君著
●二人むく助　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

江見水蔭君著
●今辨慶　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

山田美妙君著
●雨の日ぐらし　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

川上眉山君著
●寶の山　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

嵯峨の舍主人著
●姉と弟　全一冊和裝並製 中判　正價十三錢 郵稅四錢

巖谷小波君著
●當世少年氣質　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

宮崎三昧君著
●親の恩　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

巖谷小波君著
●暑中休暇　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

南新二君著
●甲子待　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

尾崎紅葉君著
●俠黑兒　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

幸堂得知君著
●陸奥の長者　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

[illegible]花[illegible]君著
●五少年　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

武田仰天君著
●二代忠孝　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

石橋思案君著
●寧馨兒　全一冊和裝並製 中判　正價十二錢 郵稅四錢

博文館編輯局編
●日章旗　全一冊洋裝並製 大判 一三六頁　正價十錢 郵稅一錢五厘

全
●動物園　全一冊洋裝並製 大判 一三六頁　正價十錢 郵稅一錢五厘

全
●植物園　全一冊洋裝並製 大判 一三六頁　正價十錢 郵稅一錢五厘

圖書雜誌御註文之規定

●博文館の販賣

圖書雜誌は本目錄に記載せる自版數千種にして他所發行品は一切取次販賣せず

●一般の御註文

は前金御送附の外一切送本せず市内は特に現品引換に代金請求の便を計るべし但相當の手數料を申受くべし

●御送金の方法

郵便爲替は請取人を東京日本橋區本町三丁目博文館と明記の事●郵券代用は必ず一割增に御送附の事

●御發信の注意

御註文の書簡は書名、編次、册數、住所姓名を文字明瞭にし宛名を博文館小賣係とし事故の御照會には御送金の年月日金額書名册數等併せて新舊の御住所詳細御申越ありたし尚は御照會の際は必ず返信用郵券添付或は往復端書の事●未納稅、不足稅の信書は一切受理せず

●注文品の事故

御註文品、品切等の際は出來期日を豫報し又は品替を請求す●返金は總て謝絶す

●金額の受領

金壹圓以上の御註文には受領證を發す一圓以下は送本限り辨用す

●館友の待遇

一時に金五圓以上御註文の方へは博文館館友證を呈し爾後三年間御註文品につき書籍は正價の一割引又雜誌、全書割引あるもの及び豫約減價のものも特に五分の割引をなすべし

改正郵便規則摘要一覽

●郵便稅

○郵便物の大さ制限（長さ一尺三寸幅八寸五分厚五寸）

第三種 ｛定期刊行の新聞雜誌 一號一個（貳拾匁毎に）……五厘 二號又は二個以上（右同）一錢

第四種 書籍及各商品見本三十匁又は其端數毎に……二錢

●外國郵稅

○清國韓國中本邦郵便局所在地に限り内地同一とす以外の諸外國は圖書、雜誌共拾三匁參分毎に郵稅二錢宛、郵送極量五百三十三匁迄の制限あり

●小包郵便

○小包郵便料は郵便物の量目及配達地の區別に從ひ左表の賃金を納むること（卅五年十二月改正）

量目 ＼ 差立地區別	内地	内地臺灣間	内地清國間韓國
二百匁迄	一、〇錢	三、〇錢	三、〇錢
四百匁迄	一、五	三、五	三、五
六百匁迄	二、〇	四、〇	四、〇
九百匁迄	三、〇	五、〇	五、〇
一貫二百匁迄	四、〇	六、〇	六、〇
一貫五百匁迄	五、〇	七、〇	七、〇

●内地に於ける同一郵便區内は一貫五百匁迄……五錢

小包郵便物の目方寸法の制限は左の如し
目方は一個一貫五百匁迄　長さ曲尺二尺迄　幅曲尺二尺迄　厚さ曲尺二尺迄
但し巾及厚各五寸以内のものは長三尺を限り差出すことを得

○代金引換小包は謝絶す

博文館發行圖書雜誌特約大賣捌所

東京 **東京堂**　　大阪 **盛文館**

東京 北隆館 合資會社
大阪 吉岡平助
名古屋 川瀨代助
東京 東海堂
京都 東枝律書房
同 飯田信文堂
博多 積善館支店
熊本 長崎次郎
久留米 菊竹〃書店
長野 西澤喜太郎
東京 良明堂
名古屋 永東書店
長崎 虎與號商店
金澤 宇都宮書店
鹿兒島 吉田幸兵衛
廣島 積善館支店
神戸 吉岡支店
同 日東館

長岡 覺張治平
水原 西村六平
名古屋 新聞合資會社
松本 水琴堂
横濱 第一第二有隣堂
博多 博文社
岡山 武内彌三郎
同 週營堂
神戸 船井新聞商店
同 熊谷久榮堂
大津 太田支店
秋田 成兒清兵衛
上諏訪 宮坂日新堂
京都 便利堂
高岡 學海堂
松江 川岡清助
福岡 眞海書店
長崎 渡邊重吉

松山 向井藏次郎
德島 井關新聞舖
甲府 柳正堂
同 内藤傳右衛門
弘前 今泉道次郎
同 近松書店
札幌 進振堂
同 富貴堂
函館 魁文舍
同 一二堂
臺南 小出書店
宇都宮 内田濱吉
仙臺 木村文助
高松 龜友堂
濱松 谷島屋書店
千葉 多田屋支店
静岡 吉見書店
新潟 北光社

山口 超世館
小樽 川南重祐
鹿兒島 金光堂
大分 甲斐治平
盛岡 佐藤庄兵衛
富山 中田書店
前橋 煥乎堂
名古屋 耐成堂
増田 東海林書店
東京 栗原書店
同 盛春堂
同 松邑三松堂
同 加島至誠堂
同 盛文堂
同 勉强堂
同 聚星堂
同 福島書店
同 服部書店

博文館發行圖書雜誌特約賣捌所

東京 林平次郎
同 目黒支店
同 春祥堂
同 有斐閣
同 青木嵩山堂
同 新橋堂
同 小林仙鶴堂
同 中西屋
同 水野慶次郎
同 田中書店
同 大倉書店
同 青野書店
同 丸善書籍會社
同 神戸國太郎
同 榊原友吉
同 日本堂
同 松川堂
同 榮松堂
大阪 柳原喜兵衛
同 岡島新聞舗
同 梅原龜七
京都 寶文館
同 大黑屋書舗
神戸 高梨東神堂
四日市 伊藤善太郎
山田 古川小三郎

山田 有文堂
岡崎 岡崎活版所
同 伊藤小文司
豐橋 富田安一
見附 中遠日進社
掛川 叢文堂
沼津 蘭契社
橫濱 丸屋書店
同 弘集堂
鴻ノ巣 長島盛化堂
八王子 小林祐之
同 熊澤兼太郎
東金 多田屋本店
福岡 多田屋支店
水戸 川又銀藏
長濱 文泉堂
大津 文泉堂支店
岐阜 郁文堂
關 松野書店
松本 松榮堂
同 高美書店
長野 荻原朝陽館
同 北辰堂
上諏訪 堀田盛文堂
同 三光堂
上田 西澤支店

飯田 皆川半四郎
飯田 西澤支店
宇都宮 臨雲堂
栃木 宮川庸三郎
同 城山堂
足利 三泉堂
平 濟光堂
白河 奥村書店
三春 橋本悌輔
郡山 虎屋忠左衛門
須賀川 橋本太平
若松 荒井陽文堂
喜多方 瀨野屋書店
仙臺 有千閣
同 藤崎祐之助
同 佐勘書店
佐沼 近源商店
盛岡 鶴鳴閣
同 便益堂
一ノ關 廣文館
青森 今泉支店
八ノ戸 伊吉商店
同 浦山政吉
山形 八文字屋書店
同 牧野德太郎
米澤 盛文堂書店

米澤 素月晨平
鶴岡 日向源吉
寒河江 柿本書店
酒田 鈴木喜八
本庄 吉田政五郎
橫手 大澤鮮進堂
大曲 榊田繁治
秋田 大島開成堂
大館 藤島常三郎
小濱 吉岡昌太郎
敦賀 山上宗兵衛
福井 品川太右衛門
同 日新館
同 中村六三郎
武生 西村伊八
鯖江 大谷幸藏
金澤 近田書店
富山 小林清重堂
長岡 目黒十郎
高田 高橋書店
直江津 柿村書店
三條 原山商店
河原田 中山萬平
同 浦本令一
柏原 中井正吉
篠山 小山富之助

舞鶴 坂根善藏
豐岡 石田松造
米子 今井郁文堂
松江 大蘆庄次郎
同 園山文會堂
金田 入江甚一
濱田 安達共榮堂
龍野 竹內伊八郎
姬路 木村次作
津山 仁科照文堂
岡山 吉原弘文館
尾道 兒玉芸香堂
同 北辰社
山口 一二三堂
同 桂山陽堂
岩國 米谷判藏
同 白銀日新堂
廣島 東西堂
赤間關 上山松造
同 重野集文堂
和歌山 三宅書店
洲本 成錦堂
西條 金川支店
松山 土肥書店
高知 澤本駒吉
久留米 田中幸次郎

中津 野依曆三
大分 安東平太郎
杵築 莊野儀三郎
佐賀 河內壯助
同 大坪萬六
唐津 牧川德次郎
佐世保 五郎川書店
長崎 集榮堂
熊本 長崎支店
同 中山知新堂
宮崎 修進堂
同 阪田蹈泉堂
同 津野融貫堂
鹿兒島 谷村藤吉
函館 小島大盛堂
小樽 白鳥書店
江差 西堀商店
岩內 池田大盛堂
札幌 小鹽自治堂
旭川 三澤庄作
室蘭 最上谷治吉
釧路 田中作次郎
根室 山本利輔
釜山 尾縣哲太郎
同 吉見フジ
桑港 波多野商會
シヤトル 古屋政次郎

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

●東京市內

東京 杉本七百丸
同 小林新兵衛
同 上原佐一郎
同 淺見文林堂
同 庭花堂
同 柏屋松榮堂
同 五十嵐文明林
同 積文堂
同 廣集堂
同 萬文堂
同 靜雲閣
同 森江佐七
同 鴻盟舍
同 田沼代理店
同 有朋堂
同 清弘堂
同 大黑屋平吉
同 大塚太洋堂
同 佐野旭堂
同 三宅半四郎
同 河內屋
同 清水泰五郎
同 播摩屋
同 吉村卯太郎
同 塚原書店
同 松成堂
同 方圓閣
同 辻岡文助
河 吉川半七
同 見珍堂
同 若林善吉
同 金榮堂
同 武藏屋
同 時々堂
同 松崎永古堂

東京 有隣堂
同 東文館
同 圖光書房
同 三省堂
同 越後屋
同 一心堂
同 岡島捨次郎
同 敬文館
同 內田芳兵衛
同 明々堂
同 鮮泉堂
同 瑞穗屋
同 金櫻堂
同 洗心堂
同 丸山舍
同 河合書店
同 櫻井書店
同 池田書店
同 永田書店
同 弘文館
同 淺久書店
同 松江堂
同 長井庄吉
同 金盛堂
同 南江堂
同 永岡書店
同 大川屋錠吉
同 飯田書店
同 山陽堂
同 青山堂
同 岸田雜誌店
同 京屋
同 巨故堂
同 日成堂
同 北原總吉
同 赤心社
同 得篤堂

東京 高知堂
同 文會堂
同 杉庭堂

●畿內

山城 田中治兵衛
同 田中種玉堂
同 松田庄助
同 東枝出張店
同 藤森改進堂
同 吉村勉強堂
同 藤井孫兵衛
同 笹田彌兵衛
同 小川柳枝軒
同 便利堂支店
同 河合卯助
大和 辻本藻文堂
同 阪田勝文堂
同 木原保吉
同 堀德太郎
同 小川辰次郎
河內 西條長榮堂
同 阪口自助社
同 安井共進社
同 一成舍
和泉 慶雲堂
同 集廣舍
同 船野六平
攝津 三田新聞舖
同 川瀨日進堂
同 松村九兵衛
同 青木嵩山堂
同 三輪源兵衛
同 中川勘助
同 恒川文華堂
同 福音館
同 吉原書店
同 井上開運堂

攝津 郁文堂
同 前川文華堂
同 魚住悅五郎
同 沙川郁文堂
同 寺倉光照館
同 大垣久太郎
同 玄々舍書店

●東海道

伊賀 安屋勝次郎
同 柴高書店
同 藤堂三書
同 文粹堂
同 岡村常三郎
同 保田書店
伊勢 渡邊東吉
同 新家德次郎
同 清玉堂
同 岩田與吉
同 木村溫史堂
同 別所藤四郎
同 瀨古書店
同 加藤五百記
同 松田新聞舖
同 豐租護次郎
同 松田鉀三郎
同 小津原書店
志摩 松井文四
同 山下三折堂
同 伊藤信次郎
同 結城重助
尾張 三輪伊六
同 三輪文次郎
同 耕芳園
同 淺見鉦太郎
同 平松作兵衛
三河 愛友舍

三河 高須廣治
同 西尾新聞會社
同 鐵讀堂
同 世賜堂
同 永田茂富
遠江 古澤眞作
同 三原屋甚藏
同 近江屋茂吉
同 大石謙三
同 東清堂
同 明治舍書店
同 田中松太郎
同 精々堂
同 文魁堂
同 林新聞舖
同 好文堂
駿河 靜陵館
同 新聞堂
同 瀧治三郎
同 西駿新聞店
同 古澤安太郎
同 實業社
同 渡邊八重吉
同 廣瀨市藏
同 勝見義助
同 太陽堂
同 杉山書店
甲斐 林儀三郎
同 微古堂
同 正榮堂
同 平山錦米館
同 依田久太郎
同 小坂藤作
同 萩原岩吉
伊豆 山梨啓次郎
同 甘晴堂
同 村上書店

伊豆 內田桂兵衛
同 成玉堂
同 秋田米次郎
同 芹澤政吉
同 堺屋書店
相模 川上書籍店
同 鈴八書店
同 石村重造
同 竹川啓次郎
同 飯尾外次郎
同 平井清八
同 林初三郎
同 山本佐兵衛
同 小川堂
同 向山正章
武藏 古屋支店
同 鈴山商會
同 金海堂
同 大矢尙文堂
同 青木百太郎
同 川島平左衛門
同 金子彌吉
同 小出磯助
同 近榮堂
同 紅屋
同 文華堂
同 博榮堂
同 脩文堂
同 高遠館
同 山田滿次郎
同 細持錄平
同 稻田利右衛門
同 協立舍
同 奈良市太郎
同 弘聞堂
同 清水書店
同 日の出屋

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

武藏 共和堂
同 紅雲堂
安房 岩城書店
同 竹田書店
同 島海書店
同 遠藤金太郎
同 宮地平太郎
同 福原彌助
同 長峰和兵衛
上總 播磨屋常吉
同 至誠堂
同 勉精堂
同 郁文堂
同 藤平四郎七
同 鈴木啓次郎
同 國松書店
同 根本爲三郎
同 立澤吉兵衛
下總 新々堂
同 明文堂
同 堤安五郎
同 高寺清兵衛
同 中村善吉
同 知新堂
同 木内嘉兵衛
同 新聞雜誌同盟店
同 立汎舍
同 北田雜誌店
同 田中屋太平
同 中島拾三
同 井上勇次
同 米瀨書店
同 飯塚孝助
同 春風舍
常陸 宮田梧七
同 大塚屋彌平
同 山口好之助

常陸 太田屋常七
同 内田清太郎
同 田所午次郎
同 橋本光文堂
同 寺井十次郎
同 柳旦堂
同 高梨卯吉
同 伊沼彌助
同 太平堂
同 資文堂
同 日進堂
同 東洋堂

●東山道

近江 澤一商店
同 加藤梅吉
同 廣田七次郎
同 山田嘉右衛門
同 東枝支店
同 渡邊東吉
同 淡海堂
美濃 玉成堂
同 安藤茂太郎
同 平野利兵衛
同 岡安慶助
同 上田源藏
同 森井彥十郎
同 圓部共盛舍
同 順風舍
同 日弘堂
飛驒 桝屋重兵衛
同 打保雜誌店
同 荒垣明治堂
同 丸川玉泉堂
同 棚下書店
同 平田書店
同 中川金治

信濃 寺澤汲古館
同 中七商店
同 小山廣文堂
同 鶴林堂
同 明倫堂
同 今村書房
同 金華堂
同 福澤文星堂
同 芳潤堂
同 氣賀澤庄五郎
同 宮坂文弘堂
同 長田忠之助
同 高見澤利市
同 桝屋久次郎
同 都築文明堂
同 遠山商店
同 小林佐平治
同 小野澤千代松
同 共和堂
同 文友堂
同 山下條三郎
同 岩下袈裟吉
同 矢島民也
同 刈間甚八郎
同 神村律
上野 山田屋金兵衛
同 竹内藤吉
同 中村孫四郎
同 木田橋三郎
同 文心堂
同 煥乎堂支店
同 新靈堂
同 山田貞吉
同 中田頼次郎
同 正林堂綱吉
同 荻原太一郎
同 柳風舍

同 中島受次郎
下野 永樂屋
同 内山港三郎
同 紙屋五郎平
同 青木卯一
同 片山平太郎
同 松塚領平
同 塚田都文堂
同 大鹽泰雄
同 金子銀四郎
同 笹島愛司
同 文魁堂
同 中島儀兵衛
磐城 磐岳堂
同 谷津屋
同 丁字屋興七
同 高木大榮
同 吉成謙四郎
同 郡豐太郎
同 八島平兵衛
同 安藤屋榮藏
同 笹森書店
同 小黑儀兵衛
同 鯨井喜平
同 鶴屋新作
同 森藏作
同 上野屋彥太郎
同 鈴木萬助
同 吉井啓次郎
同 齋藤松柏堂
同 鈴木富造
同 高橋重雄
同 吉田榮進堂
同 宗形彌兵衛
同 漸進堂
同 小原橋三郎
同 田中善平

同 柳沼靖一
陸前 松榮堂書店
同 伊澤榮書店
同 高藤書店
同 佐政商店
同 鈴木榮三郎
同 松榮堂支店
同 佐藤達治
同 山口德之助
同 朝野堂
同 小杉彥次郎
同 伊東德三郎
同 菊地重造
同 伊勢德之助
同 宮崎日新館
同 大泉福治
同 武川正助
同 鈴木圭三
同 佐々木忠五郎
陸中 木津屋七太郎
同 文港堂
同 關忠治
同 龜梨商店
同 淺利佐太郎
同 伊藤豐吉
同 東北堂
同 大里榮次郎
同 八重樫廣治
同 岡田書店
同 北村千藏
同 野田裕
同 奈良商舖
同 白野忠吉
同 三ヶ田忠治
同 岩手興農商會
陸奥 佐藤尙文堂
同 成田泰

同 鳴海才助
同 松山植村堂
同 中澤俊太郎
同 柳田要太郎
同 藤田商店
同 佐々木忠藏
同 文林堂
同 岩館商店
同 苫米地商店
同 文華堂
同 川島準次郎
同 小池藤次郎
同 大山分店
羽前 風間五右衛門
同 相原太吉
同 大泉善助
同 舟山彥兵衛
同 高橋富五郎
同 工藤八郎兵衛
同 上村平五郎
同 田宮眞右衛門
同 青木彥兵衛
同 氣早伊勢治
同 田宮政藏
同 菅間兵左衛門
同 佐藤倉吉
同 遠藤純平
同 地主文藏
同 鈴木仙五郎
同 伊藤書店
同 金子幸太
同 鈴木庄五郎
同 金子京吉
同 巴屋辰藏
同 竹蜀善助
同 荒井太四郎
同 西田芳松

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

羽前 細井商店
同 倉川角次
羽後 板谷商店
同 秋田株式會社
同 東海林支店
同 伊藤彌七
同 荒川保太郎
同 成田市五郎
同 本間金之助
同 白崎藝助
同 青山堂
同 越後屋虎五郎
同 和田清助
同 西野六左衛門
同 中島貞治
同 高田吉之助
同 川村孫四郎
同 高山謙助
同 平澤清左衛門
同 岩川和吉
同 鎌田貞助
同 北村豐治
同 小原金治
同 伊藤龍太
同 富田三次郎
同 藤田雅五郎
同 糸井書店

●北陸道

若狹 吹田資新堂
越前 平澤潤助
同 小泉文榮堂
同 南部平兵衛
同 不[illegible]清七
同 山崎書店
同 井田書店
同 酒井文榮堂
越前 廣川才吉
同 堂森書店
同 谷口伊太郎
加賀 近田丈吉
同 醉香堂
同 須貝康太郎
同 佐久間善作
同 紺藤治三郎
同 森井紀陽堂
能登 小栗北陸館
同 白尾屋
同 河內勇作
同 富光堂
同 光林五七
同 川崎龜次郎
同 山上堅一郎
同 國田書店
同 昇進館
同 千田末松
越中 大橋甚吾
同 毛利研精堂
同 舟崎楠二
同 守川吉兵衛
同 車吉兵衛
同 長谷川喜一郎
同 高橋直基
同 清水雄吉
同 島田幸助
同 石原八太郎
同 櫻田與作
同 北一屋書店
同 篠原書店
同 水野儀三郎
越後 時事堂
同 原貞治
同 島道義光
同 伊丹屋藤吉
越後 堀澤清造
同 大竹新平
同 長谷川傳一郎
同 櫻井產作
同 金子書籍店
同 登田久作
同 野島書店
同 笹木又平
同 室直支店
同 高橋郁文館
同 高桑義作
同 桑野庫之助
同 長谷川要三
同 櫻井支店
同 宮島新聞舖
同 酒井嘉四郎
同 古島九八
同 齋藤治吉
同 阪川宇三郎
同 樋口小左衛門
同 伊倉長三
同 川口藤作
同 清水書店
同 宣布書院
同 交信舍
同 小林尚文館
同 岡村利平
同 潤身堂
同 早川朔平
同 吉田俊人
同 中村勝信
同 盤城學勇
同 番場吉次郎
同 田中榮[illegible]
同 早津鐵三郎
佐渡 中野長[illegible]
同 藤井新太郎
佐渡 荒井忠平
同 生田金司
同 島野幹多
同 吉崎如雲堂
同 幅野長藏
同 近藤結藏
同 曾我商店

●山陰道

丹波 足立攻成館
同 北川至寶堂
同 柏原九郎兵衛
同 堀重助
同 立志堂商店
同 大西好文堂
同 入江辰之助
丹後 鵜飼文英堂
同 南波庄兵衛
同 青柳久海[illegible]
同 中村三代三
但馬 坂本書肆
同 山本綿英堂
同 久代俊平
同 柳田直藏
同 石田支店
同 中村歡之助
因幡 金居堂
同 横山敬次郎
同 久松堂書店
同 旭日堂書房
同 原豐吉
同 靜觀堂
同 島田[illegible]藏
同 山[illegible]郎
同 [illegible]
伯耆 [illegible]
伯耆 三好治兵衛
同 八木楢[illegible]信堂
同 加島惠太郎
同 坂田精華堂
同 有田傳助
出雲 光谷梅五郎
同 遠藤和助
同 直良齊次郎
同 倫新堂
同 米澤米次郎
同 堀又之助
同 狩野廣助
同 山本喜右衛門
石見 古井廣吉
同 齋藤書店
同 中村眞吉
同 河田商店
隱岐 佐々木熊吉

●山陽道

播磨 博文堂
同 圓尾白堂
同 朝榮社
同 近藤喜保
同 井上喜代太郎
同 清水與吉
同 澤田安藏
同 松野米々堂
美作 木村新聞舖
同 鶴山舍
同 石田吉太郎
同 英進社
同 龜井精々堂
備前 細[illegible]舍
同 本鄉安次郎
同 森[illegible]文堂
同 奥田金正堂
備前 西澤新聞舖
同 大國文友堂
備中 備陽舍
同 篠井思正堂
同 龜山新助
同 渡邊春次郎
同 鄉木路文堂
同 楢野梅松堂
備後 藤木文暉堂
同 森盛文堂
同 宮地玉文堂
同 吳愛次郎
同 鈴岡新聞舖
同 前川大成堂
同 長商店
同 安田斯文堂
同 阪井得一
安藝 友田新聞舖
同 瀨野進步堂
同 井上龜吉
同 三木文明堂
同 平山啓進堂
同 神代[illegible]身
同 松村藝助
同 田上商店
同 博文堂
同 片山商店
周防 長谷川作次郎
同 牧野精昌堂
同 片山新聞舖
同 野上瀧三郎
同 宮川臣吉
同 柳原辨八
同 西村[illegible]之助
同 弘中惣吉
同 三奈木青陽堂
同 朝木明夕堂

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

周防 吾妻作右衛門
同 精華堂書店
長門 山名曲江堂
同 村田梅龍堂
同 田中北濱館
同 藤川東輔
同 岡實一
同 櫻井商店
同 西村勝之助
同 中原書店
同 山田明倫堂
同 岩本彌左衛門

●南海道

紀伊 津田源兵衛
同 生駒任天堂
同 前田新聞舗
同 宮井書店
同 清水丹鶴堂
同 今川正文堂
同 木村書店
同 山田保久
淡路 英馨館
同 前川文化堂
同 嶋滑文藏
阿波 井關粂吉
同 黑[illegible]梢二
同 坂井萬吉
同 藤井是平
同 四宮德太郎
同 內田悅三郎
同 田岡民次郎
讃岐 松浦次郎吉
同 開文舍
同 宮脇仲次郎
讃岐 筒井兵林館
同 龜友堂支店

同 駒崎書店
伊豫 中野光
同 石崎本店
同 宮內書店
同 本山伍郎
同 近本啓太
同 秋山丈太郎
同 阿部利三郎
同 西村商店
土佐 開成舍本店
同 小川代治
同 村岡書店
同 山中書店
同 野町義助
同 明倫堂
同 三宮利太郎
同 岡村書店
同 田內運平
同 池內實行
同 山崎書店
同 堂川龜吉

●西海道

筑前 石松圖吉
同 山村正平
同 文林堂書店
同 木村松太郎
同 中尾寛
同 飯野數吉
同 相川書店
同 林辨介
同 伊藤書店
同 大野伊三郎
筑後 跡部萬藏
同 廣重常太郎
筑後 豐田純平
同 吉祥館

同 宮本宗四郎
同 相浦書店
同 田邊書店
同 永東末次郎
豐前 中村近古堂
同 加生勝二郎
同 梅津書店
同 垣內書店
同 中島卯助
同 佐野長七
同 中園角兵衛
同 林有斐
同 身深正則
同 喜多川義節
豐後 甲斐文七
同 矢館文林堂
同 明文堂
同 稲光園夫
同 伏見屋書肆
同 高野菊三郎
同 今泉熊太郎
同 虎與號支店
肥前 鶴野書店
同 平井平治
同 中村千代松
同 西村勝平
同 坂井與一郎
同 山本廣太
同 宮本茂三郎
同 久米康七
同 寺山玄眞
同 重松紫榮堂
同 嬉野鹿吉
肥後 時昌堂
同 乾萬吉
肥後 梶原好文堂
同 浦田開明堂

同 金子民輔
同 岡部萬四郎
同 岩本書店
同 園田政太郎
同 瓦崎向陽堂
同 中村治三郎
日向 小玉修右衛門
同 谷仲吉
同 高野書肆
同 圖師萬四郎
同 三村起一
大隅 松田市藏
同 山之內龍之助
同 德永書店
薩摩 石原直次郎
同 折田金次郎
同 福留書店
同 篠原直太郎
同 原田橋造
壹岐 北原藏六
同 西村書店
對馬 倉成惣次郎
同 齋藤文港堂
同 吉田元次郎

●北海道

渡島 辻二八堂
同 稲光松太郎
同 井上日進堂
同 近江屋書店
同 小島書店
後志 其水堂
同 伊藤秸愛
同 池田秸五郎
同 松田源吉
石狩 江藤恭太郎
同 中川捨次郎

同 三澤書店
同 鈴木規矩男
同 河原九兵衛
同 並川榮三郎
同 村上商店
同 中垣商店
同 井本書店
同 大原久次郎
同 林卯吉郎
天鹽 小野寺喜兵衛
同 阿部商店
北見 酒井榮吉
同 [illegible]杏林堂
膽振 掛川勉強堂
日高 奥田惣兵衛
十勝 久富書店
釧路 池田逐治
同 小原常吉
同 川上隆司
根室 伊藤喜武
同 清水常吉

●琉球

那覇 村田淵三郎
同 有馬三笑堂
同 豐盛書林

●臺灣

臺北 博文堂
同 山口太兵衛
同 白鵠堂
同 村崎長起
同 佐藤芳太郎
基隆 開進堂
同 高杉市之丞
臺中 棚邊久吉
臺南 岡田書店
同 松川金太郎

臺南 小出支店
宜蘭 青原堂支店
新竹 篠原新三
淡水 橋本商店
澎湖島 石丸有明館
同 大武澎湖堂
同 井口元吉

●海外

北京 高[illegible]
同 西海洋行
杭洲府 立花鑑信
上海 泰東局
釜山 岸田秀平
京城 山口太兵衛
同 公報社
仁川 山岡書店
桑港 中央堂
同 美蓉堂
同 大坂屋商會
同 井出商會
同 龜屋商會
同 平田商會
同 堂本書店
ワトソンビル 保田常吉
シヤトル 平出商會
オークランド 增田虎三郎
ロスアンジエル 金井商會
同 佐藤商店
タコマ 古屋支店
フレスノ 中澤商會
同 東洋商會
紐育 富士商會
同 星一
西濠州 吉田市五郎
木曜島 田中音松
ホノルヽ 大重眞壽堂
同 田中音松
ヒーロ 町田商會
コサツク 村松支店

女學世界

每月壹回五日發行

(明治參拾六年一月一日發行) 第參卷第壹號 (明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可)



(定價金貳拾錢)(本號に限り郵稅貳錢五厘)

(東京市小石川區久堅町百八番地 博進社工場印行)